

筑波大学博士（国際日本研究）学位請求論文

現代日本語授受補助動詞における
発話機能と共起ネットワークの研究

朱 炫 姝

2017 年度

目 次

| | |
|------------------------------|-----|
| 目 次 | i |
| 表 目 次 | v |
| 図 目 次 | vii |
| 記号・略語等の表記について | x |
| | |
| 第 I 章 序論：授受補助動詞文と語用論研究 | 1 |
| 1.1 研究背景および研究目的 | 1 |
| 1.2 授受表現に関する研究動向 | 4 |
| 1.2.1 授受表現研究史 | 5 |
| 1.2.2 授受補助動詞文の形成と変化について | 9 |
| 1.2.3 他言語との比較・対照分析の観点から | 10 |
| 1.2.4 日本語教育の観点から | 16 |
| 1.2.5 授受補助動詞文の構造および意味・機能について | 17 |
| 1.2.6 授受表現研究における鳥瞰図 | 21 |
| 1.3 理論的な枠組み：語用論の考え方 | 22 |
| 1.3.1 語用論と発話機能論 | 22 |
| 1.3.2 ポライトネスの原理 | 24 |
| 1.3.3 構文化と共起ネットワーク | 30 |
| 1.4 本研究の構成と各章の概要 | 35 |

| | |
|--|-----|
| 第 II 章 問題の所在および本研究のアプローチ | 38 |
| 2.1 授受補助動詞文の構造と要素 | 38 |
| 2.1.1 授受補助動詞文における視点制約と共感度 | 40 |
| 2.1.2 前項動詞の語彙的な意味について | 44 |
| 2.2 意味論レベルから語用論レベルまでの授受補助動詞文 | 45 |
| 2.2.1 利益・恩恵を表す授受補助動詞文 | 45 |
| 2.2.2 不利益・迷惑を表す授受補助動詞文 | 48 |
| 2.2.3 利益・恩恵と不利益・迷惑の概念で解釈しにくい授受補助動詞文 | 51 |
| 2.3 授受補助動詞における構文と意味の結合と使用様相 | 53 |
| 2.4 本研究のアプローチ | 56 |
| 2.4.1 語用論研究で解決できると考えられる課題 | 57 |
| 2.4.2 用例収集対象とするコーパスについて | 58 |
| 2.4.3 コーパスによる用例調査方法 | 61 |
| 2.5 本章のまとめ | 64 |
| | |
| 第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向 | 65 |
| 3.1 収集データの概要 | 65 |
| 3.2 授受補助動詞文における構文的な特徴について | 67 |
| 3.3 格情報の傾向 | 78 |
| 3.3.1 格情報の明示と非明示 | 79 |
| 3.3.2 格情報の特徴：有情物から非情物まで | 81 |
| 3.3.3 格情報の視点制約と共感度関係 | 94 |
| 3.4 前項動詞句の語彙的な意味と制約 | 104 |
| 3.4.1 仁田・村木・柴谷・矢澤（2000）による記述分析 | 104 |
| 3.4.2 コーパス分析から得られた前項動詞句の特徴 | 107 |
| 3.5 前項動詞句により格表示が変化するケース | 111 |
| 3.6 本章のまとめ | 112 |

| | |
|---------------------------------------|-----|
| 第 IV 章 授受補助動詞文をめぐる発話機能 | 114 |
| 4.1 談話の発話機能と授受補助動詞文 | 114 |
| 4.2 主観性・間主観性に基づく発話機能の類 | 120 |
| 4.3 <対者性>を持つ発話機能の特徴 | 126 |
| 4.3.1 聞き手への直接的な働きかけを持つ発話機能 | 126 |
| 4.3.2 聞き手への間接的な働きかけを持つ発話機能 | 129 |
| 4.4 <没対者性>を持つ発話機能の特徴：《情報提供》 | 134 |
| 4.5 本章のまとめ | 135 |
| 第 V 章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能 | 138 |
| 5.1 KH Coder を用いた共起ネットワーク分析の概観 | 138 |
| 5.2 授受補助動詞文と構文化 | 143 |
| 5.3 「～てあげる」系の共起ネットワーク分析 | 144 |
| 5.3.1 「～てやる」文における共起ネットワーク分析 | 144 |
| 5.3.2 「～てあげる」文における共起ネットワーク分析 | 147 |
| 5.3.3 「～てさしあげる」文における共起ネットワーク分析 | 149 |
| 5.3.4 「～てあげる」系の使い分けに関する考察 | 151 |
| 5.4 「～てくれる」系の共起ネットワーク分析 | 155 |
| 5.4.1 「～てくれる」文における共起ネットワーク分析 | 155 |
| 5.4.2 「～てくださる」文における共起ネットワーク分析 | 158 |
| 5.5 「～てもらおう」系の共起ネットワーク分析 | 160 |
| 5.5.1 「～てもらおう」文における共起ネットワーク分析 | 160 |
| 5.5.2 「～ていただく」文における共起ネットワーク分析 | 161 |
| 5.6 「～てくれる」「～てもらおう」文の互換可能性に関する考察 | 163 |
| 5.6.1 問題の所在および互換可能性の判断基準 | 163 |
| 5.6.2 格情報および前項動詞の分析 | 168 |
| 5.6.3 「～てくれる」「～てもらおう」系における形式と発話機能の関わり | 171 |
| 5.6.4 「～てくれる」「～てもらおう」系の共起ネットワークの比較 | 180 |
| 5.7 本章のまとめ | 182 |

| | |
|--------------------------------|-----|
| 第 VI 章 結論：まとめと今後の課題 | 184 |
| 6.1 結論 | 184 |
| 6.2 授受補助動詞文研究のこれから：課題と展望 | 187 |
| 博士論文に関わる研究発表活動（関連章） | 196 |
| 参 考 文 献 | 200 |
| 参照したインターネット・サイト | 220 |
| 謝 辞 | 222 |
| 参 考 資 料 | 225 |

表 目 次

| | |
|---|-----|
| 表 I.1 本研究で扱う授受補助動詞文の種類と体系 | 3 |
| 表 I.2 視点のルールと授受補助動詞文の関係 (森山 2006 : 31) | 11 |
| 表 I.3 授受本動詞における日本語と英語の対応 (大江 1975 : 31) | 12 |
| 表 I.4 授受本動詞における日本語と英語の対応 (奥津 1979 : 16) | 12 |
| 表 I.5 山岡・牧原・小野 (2010) によるポライトネスの原則 | 30 |
| 表 II.1 文化庁 (1995 : 22) による「やる・あげる」の設問 | 53 |
| 表 II.2 『BCCWJ』の収録テキストの種類と語数 (前川編 2013 : 123) | 59 |
| 表 II.3 『BCCWJ』における談話分類 | 60 |
| 表 III.1 『BCCWJ』における授受補助動詞の出現用例の数 (総数) | 66 |
| 表 III.2 『BCCWJ』における「～てあげる」系の出現数 | 67 |
| 表 III.3 『BCCWJ』における「～てくれる」系の出現数 | 67 |
| 表 III.4 『BCCWJ』における「～てもらう」系の出現数 | 67 |
| 表 III.5 「～てあげる」系に現れる格情報について | 79 |
| 表 III.6 「～てくれる」系に現れる格情報について | 80 |
| 表 III.7 「～てもらう」系に現れる格情報について | 80 |
| 表 III.8 『BCCWJ』に現れた「～てあげる」系・「～てくれる」系の格情報と 共感のハイアラーキー | 95 |
| 表 III.9 『BCCWJ』に現れた「～てもらう」系の格情報と共感ハイアラーキー | 101 |
| 表 III.10 『BCCWJ』に現れた授受補助動詞の前項動詞の種類 (頻度順・総数) | 108 |
| 表 IV.1 国立国語研究所編 (1987 : 153-158) による発話機能のカテゴリー | 114 |
| 表 IV.2 ザトラウスキー (1993 : 67-68) の発話機能と定義 | 116 |
| 表 IV.3 山岡・牧原・小野 (2010 : 109-135) による発話機能の各範疇 | 117 |
| 表 IV.4 授受補助動詞文における発話機能の分類 | 136 |
| 表 V.1 「～てくれる」「～てもらう」文における格情報の明示と種類 | 169 |

表 目 次

| | |
|---|-----|
| 表 V.2 「～てくれる」「～てもらう」文の動詞句の種類（頻度順） | 169 |
| 表 V.3 『BCCWJ』における「～てくれる」「～てもらう」文の形式上の特徴 （単文および複文の主節） | 172 |
| 表 V.4 『BCCWJ』における「～てくれる」「～てもらう」文の形式上の特徴 （複文の従属節） | 173 |
| 表 V.5 『BCCWJ』における「～てくれる」「～てもらう」文の発話機能 | 173 |
| 表 V.6 「～てくれる」「～てもらう」文における発話機能の傾向 | 174 |
| 表 V.7 《情報提供》の発話機能に現れた「～てくれる」「～てもらう」系 | 175 |
| 表 V.8 《行為要求》の発話機能に現れた「～てくれる」「～てもらう」系 | 175 |
| 表 V.9 Google における定型表現（形態一致検索条件）の検索結果 | 176 |
| 表 V.10 《意思表示》の発話機能に現れた「～てくれる」「～てもらう」系 | 176 |
| 表 V.11 《情報要求》の発話機能に現れた「～てくれる」「～てもらう」系 | 176 |
| 表 V.12 様々な発話機能に現れた「～てくれる」「～てもらう」系 | 177 |
| 表 VI.1 日本語授受補助動詞文とその韓国語の表現について | 189 |
| 表 VI.2 日本語教科書および筑波ウェブ・コーパスにおける授受補助動詞文の 格情報 | 191 |
| 表 VI.3 「～てあげる」系に現れる格情報について | 192 |
| 表 VI.4 『BCCWJ』における授受補助動詞の出現用例の数（総数） | 193 |

目 次

| | |
|--|----|
| 図 I.1 授受表現に関する研究動向のまとめ | 4 |
| 図 I.2 奥津 (1984b : 13) による授受本動詞の体系化 | 6 |
| 図 I.3 授受補助動詞の成立時期 (宮地 1981 : 18) | 9 |
| 図 I.4 授受表現研究における鳥瞰図 | 21 |
| 図 I.5 共起強度の計算式 (石川 2012 : 126-128) | 33 |
| 図 I.6 ネットワーク・モデル (Langacker 1999) | 34 |
| 図 I.7 ネットワークにおける精緻化と拡張 (尾谷・二枝 2011 : 80 を修正) | 34 |
| 図 I.8 本研究の構成 | 35 |
| 図 II.1 カメラ・アングル (高原・林宅男・林礼子 2002 : 19) | 40 |
| 図 II.2 「うちの子におもちゃを買って{やりたい・あげたい}」の選択における 変化 | 54 |
| 図 II.3 『BCCWJ』における「書き言葉」の意味 | 60 |
| 図 II.4 『BCCWJ』データの談話性格 | 60 |
| 図 II.5 「中納言」を利用した「～てあげる」文の収集設定画面 | 62 |
| 図 II.6 「NINJAL-LWP for BCCWJ」のツールを利用した前項動詞とのコロケー ションの確認画面 | 63 |
| 図 II.7 「秀丸エディタ」を利用した「～てもらう」文の調査画面 | 63 |
| 図 II.8 収集用例の整理画面 | 64 |
| 図 III.1 カメラ・アングル (=図 II.1 を再掲) | 74 |
| 図 III.2 「～てあげる」系・「～てもらう系」の視点 | 76 |
| 図 III.3 「～てくれる」系の視点 | 76 |
| 図 III.4 「～てあげる」系の視点と話し手 | 77 |
| 図 III.5 「～てくれる」系の視点と話し手 | 77 |
| 図 III.6 「～てもらう」系の視点と話し手 | 77 |
| 図 III.7 非情・有情の軸を基準とした授受補助動詞文の格情報 | 83 |
| 図 III.8 「～てあげる」系における主格名詞句の情報 | 84 |

| | |
|--|-----|
| 図 III.9 「～てくれる」系における主格名詞句の情報 | 84 |
| 図 III.10 「～てもらう」系における与格名詞句の情報 | 85 |
| 図 III.11 「～てあげる」系における与格名詞句の情報 | 88 |
| 図 III.12 「～てくれる」系における与格名詞句の情報 | 89 |
| 図 III.13 「～てもらう」系における主格名詞句の情報 | 89 |
| 図 III.14 「～てあげる」系と「～てくれる」系の主格・与格情報と共感のハイ アラキー (%) | 96 |
| 図 III.15 「～てもらう」系の主格・与格情報と共感のハイアラキー (%) | 101 |
| 図 III.16 話し手視点と共感度の矛盾 | 102 |
| 図 III.17 「～てあげる」系と共起関係である前項動詞の割合 (%) | 109 |
| 図 III.18 「～てくれる」系と共起関係である前項動詞の割合 (%) | 110 |
| 図 III.19 「～てもらう」系と共起関係である前項動詞の割合 (%) | 110 |
| 図 IV.1 日本選手応援団のポスター (2008年 北京オリンピック) | 121 |
| 図 IV.2 本研究における発話機能の分類図 | 125 |
| 図 IV.3 授受補助動詞文における発話機能の強化 | 136 |
| 図 IV.4 授受補助動詞文の構造および発話機能との関係 | 137 |
| 図 V.1 KH Coder の概要 | 139 |
| 図 V.2 KH Coder における共起ネットワーク設定画面 | 139 |
| 図 V.3 共起ネットワーク (中心性) | 140 |
| 図 V.4 共起ネットワーク (サブグラフ) | 140 |
| 図 V.5 夏目漱石『こころ』に現れたテキストの共起ネットワーク分析 | 141 |
| 図 V.6 SCREEN (株) によるテキストマイニングの例 | 142 |
| 図 V.7 共起ネットワーク図から構文フレームの抽出過程 | 142 |
| 図 V.8 「～てやる」文における抽出語・共起ネットワーク | 144 |
| 図 V.9 「～てやる」文における共起ネットワーク | 146 |
| 図 V.10 「～てあげる」文における抽出語・共起ネットワーク | 147 |
| 図 V.11 「～てあげる」文における共起ネットワーク | 149 |
| 図 V.12 「～てさしあげる」文における抽出語・共起ネットワーク | 149 |
| 図 V.13 「～てさしあげる」文における共起ネットワーク | 150 |
| 図 V.14 「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の共起ネットワー | |

| | |
|--|-----|
| クの比較 | 154 |
| 図 V.15 「～てくれる」文における抽出語・共起ネットワーク | 156 |
| 図 V.16 「～てくれる」文における共起ネットワーク | 157 |
| 図 V.17 「～てくださる」文における抽出語・共起ネットワーク | 158 |
| 図 V.18 「～てくださる」文における共起ネットワーク | 159 |
| 図 V.19 「～てもらおう」文における抽出語・共起ネットワーク | 160 |
| 図 V.20 「～てもらおう」文における共起ネットワーク | 161 |
| 図 V.21 「～ていただく」文における抽出語・共起ネットワーク | 162 |
| 図 V.22 「～ていただく」文における共起ネットワーク | 163 |
| 図 V.23 宮地（1965：28）による授受補助動詞の視点の置き方 | 165 |
| 図 V.24 (5.74)の適格度分析 | 166 |
| 図 V.25 (5.75)の適格度分析 | 166 |
| 図 V.26 「～てくれる」系と「～てもらおう」系における前項動詞の使用割合 | 170 |
| 図 V.27 「～てくれる」「～てもらおう」文のネットワーク構造 | 172 |
| 図 V.28 「～てくれる」「～てもらおう」系の共起ネットワークの比較 | 181 |
| 図 VI.1 日本語授受補助動詞文と韓国語授受補助動詞文の対照分析モデル | 190 |
| 図 VI.2 「～てやる」文における共起ネットワーク | 193 |
| 図 VI.3 「～てくれる」「～てもらおう」系の共起ネットワークの比較 | 194 |

記号・略語等の表記について

例文等の文法的・語用論的判断により、記号を以下のようにつける。出典の無表記においては筆者による作例を意味するが、当該用例における適格性判断は、日本語母語話者3名（男性1名、女性2名）により判定してもらった。適格性の判断基準および表示については以下のようにする。

1. * 文法的に非文と判断し、あらゆる条件のもとにおいても文が成立しないことを意味する。
(例) *彼はうれしい。
2. ?? かなりの不自然さを感じ、文脈的制約の前提の場合のみ適格文とみなす場合であり、日本語母語話者の2名以上が不自然と判断した場合である。
(例) ??花子は座られた。
3. ? やや不自然さを感じ、発話の文脈で対人的機能として不適切である場合である。
(例) ?先生、昨夜メールを差し上げましたが。
4. # 文法的に非文ではないが、比較する文との語用論的意味が異なることを示す。
(例) 「～てもらおう」を含む文と含まない文を比較する際、aは聞き手に直接依頼する場面となるが、bは話し手が聞き手に許可を得る場面となるため、語用論的意味が異なると判断する。
a. (前にいる人に申し込み用紙に名前を書くように依頼する場面)
記入してもらって大丈夫ですか。
b. # 記入して大丈夫ですか。

次に、本研究の表記等について以下のように示す。

5. 先行研究やコーパスなどから引用した用例の中で、考察の対象となる表現には下線を引く。

6. 先行研究の示し方として、基本的に著者の苗字のみを記述するが、著者が韓国人である場合には、フルネームで表記し、以下のように読み方を示す。原出典の表記が、漢字名表記であれば初出のところのみ、ハングル名表記であれば全てのところに読み方を記す。

(例) 林八龍 (イム・パルリョン、1980)

(例) 권승림 (クォン・スンリム、2006)

7. 先行研究の著者が3人以上である場合、論文の本文には3人まで示し「ほか」とつける。「参考文献」「博士論文に関わる研究発表活動(関連章)」のリストには全員の著者名を示す。
8. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の用例における詳細情報について次のように記す。出典が書籍の場合、「著者『書籍名』出版社」の情報を加える。

(コーパス名 Sample ID : 出典 : 年度)

(例) (BCCWJ OC09_05642 : Yahoo!智恵袋 : 2005)

(例) (BCCWJ PB33_00003 : 坂田次男『子どもたちの人間宣言』明治図書出版 : 2003)

9. 韓国語や中国語等の日本語訳を提示する場合、原文を提示し、[]の中にローマ字を表記し、lit.の以下は日本語の直訳を示す。韓国語のローマ字表記は、韓国国立国語院による「語文規定・ローマ字表記法規定」に従うが、その際、釜山大学と(株)ナラ・インポテックが共同開発した「ローマ字変換機」を利用し、「学術応用」の変換結果を採用する。中国語の表記について、読み方(ピンイン)を、「ピンイン(pinyin)変換サービス」のウェブ・ページを利用し、加える。

(例) 선생님, 가방을 들어 드릴게요.

[seonsaengnim, gabangeul deuleo deulilgeyo]

(lit.先生、カバンを持って さしあげます)

(例) 他送我一本书。

[ta1song4wo3yi1ben3shu1]

(lit.彼は私に本をプレゼントした)

第I章 序論：授受補助動詞文と語用論研究

本研究は、現代日本語¹授受補助動詞文における語用論的メカニズムの解明のため、授受補助動詞文の構造とその使用様相を語用論的観点から模索したものである。日本語には、様々な授受表現²の形式があるが、本研究では、授受補助動詞である「～てやる・あげる・さしあげる」「～てくれる・くださる」「～てもらう・いただく」文をその代表的な表現として扱う。これらの授受補助動詞形式は、日本語学の文法研究のみならず、言語習得や日本語教育研究においても主要なテーマとなっており、数多くの研究がなされているものの、いまだ未解決のまま残されている課題が多い。その要因には、授受補助動詞文が複雑な構文構造を持っている点が挙げられる。授受本動詞構文の構文構造は、「～が～に～をあげる・くれる・もらう」という3項動詞であるが、授受補助動詞文の構文構造については未だ明らかになっていない。また、文レベルでは簡単に説明できそうな文も、文脈状況の影響によって説明できないケースもある。したがって、本研究では、語用論的アプローチを用いて、文脈状況の把握を考慮に入れ、分析する。授受本動詞構文と授受補助動詞文に関する研究は、話し手の発話意図や事態認識の解明のため、日本語学の研究上、欠かせない研究分野であり、日本語教育研究や他言語との対照研究のうえでも詳細な解釈が待たれている領域である。

1.1 研究背景および研究目的

言語研究において、授受補助動詞の研究はどの言語にも見られるもので、人が他者と交流しながら言語生活を送る中で、「やりもらい」をどのような表現形式で表しているかは注目に値する。誰かに物を贈ったり、手助けを得たりする相互行為は誰にで

¹ 日本語史の時代区分の中、6分法（宮地 1965、高山・青木編 2010：iv）によると、現代語は昭和後期・平成に当たり、おおむね 1945 年以降の日本語がその対象となる。本研究における現代日本語とは、1945 年以降の日本語とする。

² 授受表現には本動詞用法としての授受本動詞文と補助動詞用法としての授受補助動詞文があるとし、用語を統一して記述する。

もある経験であるが、その経験を語ったり、他者にある行為を要求したりする際、その言語特有の「やりもらい」の言語形式が存在する。

日本語における従来の授受補助動詞の研究では、主に視点の制約³と恩恵性⁴の意味、授受補助動詞間の丁寧さの差異についての考察が論点であった。例えば、宮地(1965)、久野(1987[1978])、奥津(1979)では授受補助動詞文の構造論的な特徴について視点の制約を中心として述べており、益岡(2001)、山田(2004)では恩恵を中心とした意味に関する記述が見られる。一方、井島(1999)、滝浦(2001)では待遇表現として聞き手中心の言語形式の発達について論じられている。このように授受補助動詞文に関する研究は、多くの研究がなされているにもかかわらず、いまだ継続して研究されている理由は、近年の研究動向として、授受補助動詞文の構造や意味のみならず、それが談話において「聴者に対して果たす対人的機能(山岡 2008: 50)」という発話機能への研究が求められてきているためである。

授受補助動詞文の恩恵性における研究の問題点として、「利益・恩恵」の授与のみに論点が傾いている点が指摘できる。例えば、「(相手の行動を非難する口調で)よくもやってくれたね」という文は、「利益・恩恵」の意で考えられないであろう。また、料理番組などの調理法を説明しながら、「ここで具材にケチャップをかけてあげます」や、スピーチの冒頭で、「発表させていただきます」という表現では誰が「利益・恩恵」を受けるのか明確に判断しかねる。つまり、「利益・恩恵」は授受補助動詞文の一部の意味に過ぎず、より広い範囲での働きについて考察する必要がある。

この「やりもらい」において日本語学の分野には「授受表現」という文法項目があり、この授受表現には授受本動詞と、授受補助動詞という二つの用法がある。その中で、本研究では接続助詞「て」で前項動詞⁵と授受動詞を繋ぐ働きを持つ授受補助動詞に注目する。代表的には「～てやる」文、「～てあげる」文、「～てさしあげる」文

³ 視点の問題について、久野(1987[1978])によれば、「カメラ・アングルの違い、即ち、話し手が何処にカメラを置いて、この出来事を描写しているかの問題にある(久野 *ibid.* : 129)」と述べている。このカメラ・アングルは、単一の文の中では単一のカメラ・アングルしか持ち得ないと、その制約を加えている。

⁴ 益岡(2001)では「好ましいと思われる」ことを意味すると述べており、伊藤(2010: 149)では受益と恩恵の意味を区別して述べている。本研究では伊藤(2010)による分類・定義を援用し、その妥当性を探っていく。詳細については、2.2節で述べる。

⁵ 研究によって、主動詞、前項動詞、本動詞などと呼ばれるが、本研究では「前項動詞」と用語を統一する。

(以下、「～てあげる」系)、「～てくれる」文、「～てくださる」文(以下、「～てくれる」系)、「～てもらう」文、「～ていただく」文(以下、「～てもらう」系)といった七つの表現がある⁶。次の表 I.1 は、本研究で考察対象とする授受補助動詞文の体系を示すものである。

表 I.1 本研究で扱う授受補助動詞文の種類と体系

| 常・敬体 構文体系 | 常 体 | 敬 体 |
|--------------|------------------|------------|
| 「～てあげる」系 | 「～てやる」文・「～てあげる」文 | 「～てさしあげる」文 |
| 「～てくれる」系 | 「～てくれる」文 | 「～てくださる」文 |
| 「～てもらう」系 | 「～てもらう」文 | 「～ていただく」文 |

考察対象とする授受補助動詞文の範囲は、「～てやる・あげる・さしあげる」文、「～てくれる・くださる」文、「～てもらう・いただく」文である。この七つの授受補助動詞には、授受本動詞の持つ視点の制約と行為の方向性の特徴がそのまま引き継がれている。「～てあげる」系は話し手・話し手と親しい関係である人物を主格とし、相対的に話し手と疎の関係にある人物を与格としておき、主格の動作を表し、話し手が主格側の視点に立つ。「～てくれる」系は話し手から見て話し手と疎の関係にある人物を主格とし、話し手・話し手と親しい関係である人物を与格としてとり、話し手が与格側の視点に立つ。「～てもらう」系は話し手・話し手と親しい関係にある人物を主格とし、話し手と疎の関係にある与格の動作を表し、話し手は主格側に立つ。本研究では以上のような視点の制約を持つ授受補助動詞の表現形式を対象として分析を進める。

本研究は現代日本語の授受補助動詞文がどのような状況のもとでどのように使われ

⁶ 授受表現について「受給動詞」「授与動詞」「やりもらい表現」「受惠表現」など様々な用語で研究がなされている。また、本動詞用法の「あげる」系「くれる」系のように与え手主語の動詞を「授与動詞」、「もらう」系のように受け手主語の動詞を「受納動詞」と区分して述べる研究もある(日高 2007:6)。これに対して補助動詞用法の「～てくれる」系「～てもらう」系を求心性動詞の「受益表現」とし、遠心性動詞の「～てあげる」系を「与益表現」と分けることもできる。本研究では「前項動詞+接続助詞『て』+授受動詞『やる・あげる・さしあげる、くれる・くださる、もらう・いただく』」の表現形式を持つ授受表現に限る。今回の調査では、「ご教示(を)いただく」のような「動作性名詞+(を)+授受動詞」の形式は研究の対象外とする。

ているのかを考察することで、授受補助動詞文の構造と発話機能を把握し、各構文の特徴について共起ネットワークを手掛かりにその関連性を明らかにすることを目的とする。様々な発話場面を扱うことにより、従来の授受補助動詞文の構文のみを考察対象とした研究では明らかにできなかった、授受補助動詞文の発話機能の多様性について新たなアプローチを主張する。

1.2 授受表現に関する研究動向

本節では授受表現研究史における概要を述べる。授受表現に関する研究は、これまで様々な立場から、様々なテーマについて研究がなされてきた。古くは、国語の研究として国文法を含む記述的な立場から、他言語との共通点・相違点を扱う比較・対照研究、母語としての習得研究、第二言語としての日本語教育研究があり、通時的観点からの研究や、方言学など、様々である。図 I.1 に研究動向のまとめを示す。

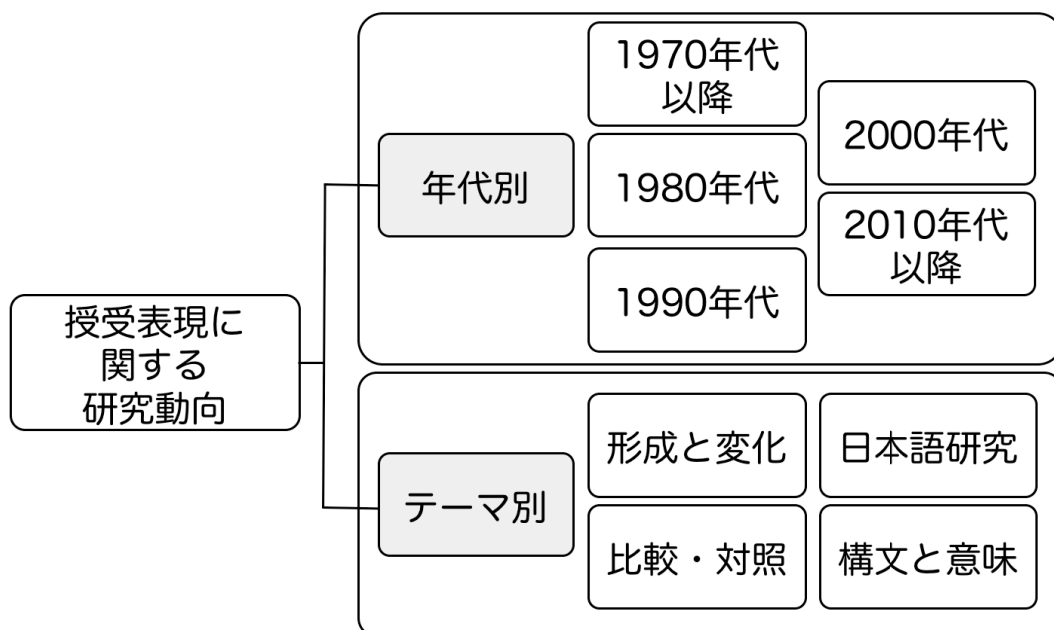


図 I.1 授受表現に関する研究動向のまとめ

これらの先行研究の流れを年代別、研究分野別に概観する。1.2.1 節では年代別に研究の推移を確認し、1.2.2 節から 1.2.5 節までは研究テーマ別授受補助動詞文の研究についてまとめる。具体的に述べると、1.2.2 節では授受表現の形成と変化について通時的観点から捉えた研究について、1.2.3 節では英語・中国語・韓国語などの他言語との比較対照分析の観点から捉えた研究について概観する。また、1.2.4 節では第二言語習得としての日本語教育の観点から、1.2.5 節では、授受補助動詞文の構造と意味・機能についての研究をまとめる。最後に 1.2.6 節では、時間を軸とした授受表現研究史の鳥瞰図を示す。

1.2.1 授受表現研究史

1970 年代以前の授受表現に関する研究は本動詞用法としての研究が主であり、補助動詞用法については「て」を受ける助動詞として分類され、動詞の一部としての研究がなされた（松下 1927・1930）。授受表現が持つ視点という観点から体系的に扱った初期の研究では、教科研東京国語部会・言語教育研究サークル（1963）、宮地（1965）、Kuno（1973）を中心に研究がなされている。また、大江（1975）は日本語の授受本動詞構文と英語を比較し、奥津（1979）は、日本語と英語に加えて朝鮮語をも考察対象とし、視点の制約について他言語との相違点を分析した。特に、奥津（1979・1984b）は、授受表現の体系化を行ったことで、その後の研究にも大きな影響を与えている。奥津（1984b）は、「与え手」「受け手」「目上」「目下」「身内」「ヨソモノ」「主語」「非主語」の概念を用い、授受表現を体系化している。授受本動詞の体系化を図 1.2 に示す。

また、与え手と受け手の格について、与え手は「起点」と「動作主」、受け手は「目標」と「動作主」の役割を持っていると述べている。受け手側の役割について、「物」が移動した着点としての「目標」のみならず、「動作主」として認識している点が特記できる点である。これは、授受表現間の体系を比べる際に有用な示唆を与える捉え方である。

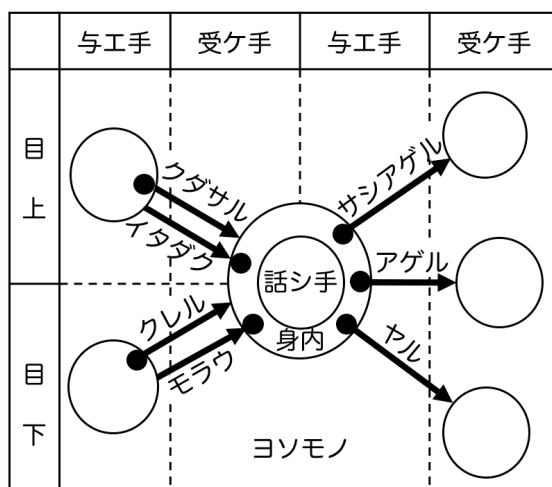


図 I.2 奥津（1984b：13）による授受本動詞の体系化⁷

1980年代には、林八龍（イム・パルリョン、1980）による朝鮮語との対照分析をはじめ、中川（1989）による日本語・英語・フランス語との比較など、比較・対照研究が行われている。また、横山（1981）と石黒（1985）による日本語母語話者の幼児の習得に注目した研究がある。さらに、「視点」という観点から共感度⁸の概念を提唱した久野（1987[1978]）や、奥津（1984a・1984b・1986）、高橋（1985）、堀口（1987a・1987b）の研究では、補助動詞用法としての授受表現にまで研究が進み、ヴォイスの観点から授受表現を捉えている。日本語教育の分野においては、学習者の誤用に着目した堀口（1983）や、第二言語習得の観点からの新美・山浦・宇津野（1987）などの研究が挙げられる。

特に視点の置き方について、久野（1987[1978]）では以下を視点の概念として捉えている。

- (1.1) カメラ・アングルの違い、即ち、話し手が何処にカメラを置いて、この出来事を描写しているかの問題にある。

（久野 *ibid.*：129 =注3 を再掲）

この視点の問題は、話し手がある事柄においてどちら寄りのカメラ・アングルで見

⁷ 図の中の「●」は主語を示す。原文通りに書き直したものである。

⁸ 「共感度」の概念については2.1.1節で詳細に述べる。

ているかが反映されるものである。ヴォイス表現として、授受表現は特有の視点の置き方を持つとされる。

1990年代の研究は、山岡（1990）による依頼行為としての授受補助動詞文の分析や金久保（1993）による待遇表現としての授受補助動詞文の研究が挙げられる。日高（1994）は授受補助動詞文の体系における地域別差異に注目しており、米澤（1996）では史的変遷について述べている。また、授受補助動詞文の全般を扱った研究には、城田（1996）、牧野（1996）、三宅（1996）、藤井（1998）、沼田（1999）がある。また、英語との比較研究では、加賀（1997）があり、中国語との比較研究としては王婉莹（1998）、韓国語との対照研究では金昌男（キム・チャンナム、1999）がある。構文と意味の面から「～てくれる」文に注目した研究には、山橋（1999a・1999b）があり、「～てもらおう」文を分析している研究としては、中野（1991）、田中・館岡（1992）、竹林（1998）がある。「～させていただく」や「～してあげます」などの比較的新しく出ている表現形式に注目した研究では、陣内（1998）、井島（1999）があり配慮表現として捉えている点が特記に値する。

2000年代の研究の特徴は、構文上の特徴として、岡田（2000）、澤田（2007b・2009）の研究成果から、主語の立て方や授受補助動詞文の格表示について注目されてきた点や益岡（2001）による恩恵性の概念が提唱された点、そして倉持（2002）、小池・細川・小林編（2002）、彭飛（ポン・フェイ、2005）、原田（2007）等によって授受補助動詞文を待遇表現の一つの形式として取り扱われるようになってきた点が興味深い。

また、授受補助動詞文の個々の表現に注目した研究が盛んに行われた。「～てあげる」については山橋（2003a・2003b）、山本（2003a）によって述べられており、「～てくれる」の機能については山本（2002b）、原田（2006）で扱っている。「～てくれる」と「～てもらおう」文を比較し、待遇意識から捉えている研究として熊田（2000・2001）、山本（2002a）、石山（2008）、山田（2009）があり、「～させていただく」表現について米澤（2001）、茜（2002）、仁科・鄭企娟（ジョン・ギョン、2009）は待遇表現の視点から捉えている。砂川（2006）では「～てもらっていいですか」が指示や依頼のみならず許可求めの言語行為として使われるようになった現象について述べている。

高見（2000）、山橋（2000）は「～てもらおう」文と受身文の比較について分析し、李仙花（2001）、山本（2002a）、中崎（2006）は「～てもらおう」文の意味に着目して

いる。また、山本（2003b）、澤田（2004a・2004b）は、視点の置き方や様々な構文が持つ意味について明らかにしており、山田（2004）はベネファクティブを表す表現として授受補助動詞文を眺め、様々な使い方について詳細に述べている。

金昌男（2002）、牟恩英（モ・ウンヨン、2002）では、日本語と韓国語の授受補助動詞文における分析を行い、守屋（2002）では中国語との比較分析を行っている。松浦（2003）は、「～てもらう」文に絞り、中国語との比較を行い、日本語学習者に及ぼす母語の影響について述べている。第二言語習得に注目している研究には坂本（2000）、蒲谷（2001）、稲熊（2004・2005・2006a）、尹喜貞（ユン・ヒジョン、2004）、萩原（2007）がある。前田（2001）は、「あげる」と「くれる」の成立について敬語の概念を用いて通時的に考察している。また、高見・加藤（2003a・2003b・2003c・2003d）では、2003年『月刊言語』の特別企画として、四回にわたって、授受補助動詞文における視点と意味について論じ、まとめている。

2010年代以降の研究動向としては、2011年『月刊言語』第30巻11号において「やりもらいの日本語学」特集が組まれていることが特記できる。その中で、授受補助動詞文の発達や他言語とのタイポロジー、そして日本語教育から見た授受補助動詞文の研究の方向性が示されている。

近年の研究では、実例を用いて分析を行う研究が多く、米澤（2012）ではシナリオを分析対象とした研究が行われている。また、配慮表現の概念をポライトネス理論で検証した横倉（2011）、事態把握に焦点をおいた守屋（2011）の研究がある。さらに、「～ていただく」や「～させていただく」表現における自然度を検証する研究には伊藤（2011）、犬飼（2011）がある。

そして、堀江・金延珉（キム・ジョンミン、2011）では、韓国語との対照分析を通じ、語用論的意味の変化に注目している。日本語教育への貢献を目的とした研究には、朴錦女（2012）、宮岸（2012）、山田（2012）等が挙げられる。吉田（2010）、古賀（2012）、豊田（2013）、森（2014）では、授受表現の運用の歴史的変遷が述べられている。

次節以降は、授受補助動詞文をめぐる研究において先行研究の知見を研究分野別に概観し、授受補助動詞文の研究を俯瞰する。

1.2.2 授受補助動詞文の形成と変化について

(1.2) 歴史言語学の観点から捉えた主な授受補助動詞文の研究

宮地 (1981)、米澤 (1996)、前田 (2001)、鈴木 (2004)、日高 (2007)、森 (2010・2014・2016)、吉田 (2010)、豊田 (2013)

宮地 (1981) では、授受補助動詞文の成立について図 I.3 のように示している。宮地 (ibid.) によれば、常体の形式の後に、敬体が成立し、19 世紀後半までに六つの形式に定着したという。

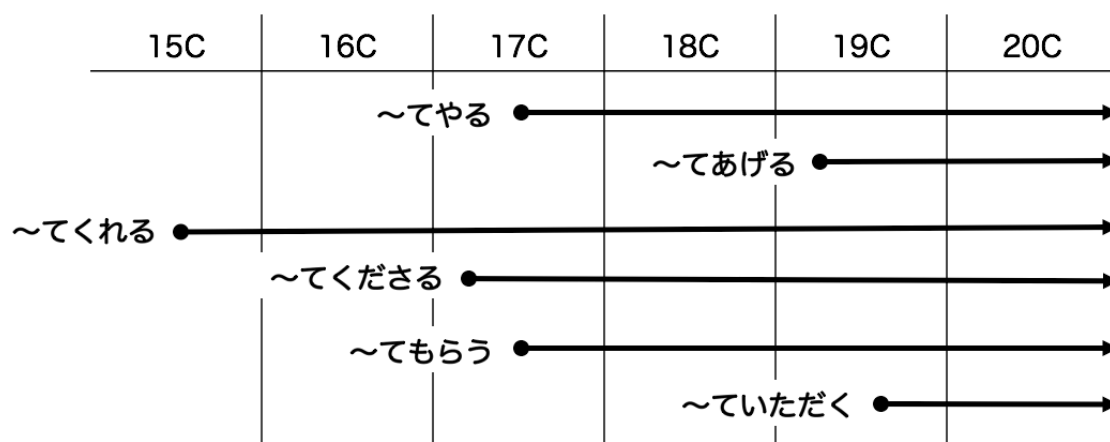


図 I.3 授受補助動詞の成立時期 (宮地 1981 : 18)

授受本動詞としての構文を概観すると、「やる」文は上代から人に物を渡す表現として使用された (前田 2001)。「あげる (あぐ)」は中世後期に一般化されたが、発生当時には物を上に上げるという意味で使われた。ここで「上」というのは、空間的な意味のみならず、身分において上位層に該当する人物に物を捧げるという意味を指す。このような使い方は、成立当時から形成されており、「やる」は話し手よりも身分の低い人物に、「あげる」は話し手よりも身分の高い人物に対しての使用で使い分けされている。また、このような過程を経て「あげる (あぐ)」は、中世後期に一般化されたと述べている。そして、「~てさしあげる」文は近世以降に登場し、定着した表現であり、近世後期になって「~てやる」「~てあげる」「~てさしあげる」の

3 形式が全て使用され、敬意の面でその区別が明らかになった (ibid. : 36)⁹。次に、「～てくれる」文は、中世以降に入って、話し手自身のために相手が行動するように依頼する表現として使用されはじめた。そのため、動作主である相手への恩恵の気持ちが表現されるようになった。「～てくださる」文において記述はなされていない¹⁰。また、「～てもらおう」文と「～ていただく」文は、近世以降に一般化した表現として使用されている (ibid. : 40)。

森 (2014) では、「～てください」の表現を受益表現命令形の用法とし、近世以前の用法と近世以降の用法を分けて分析を行っている。その結果、授受補助動詞文の命令形は、近世までは「依頼」「勧め」の用法で用いることができたが、近世以降は地位の上位者に対して用いることができなくなるなどの制限が生じたと述べている。

また、森 (2016) では、授受補助動詞文に起きた変化について体系的な特徴の変化のみならず運用や語用論的制約が通時的な変化をもたらしていると指摘している。その中で、授受補助動詞の用法に常体と敬体の敬語カテゴリーとして区別が生まれたのは、都市化の進行や家族単位の変化、上下関係の流動性の増加、社会の流動性の増加と敬語の変化都市化の進行や家族単位の変化、上下関係の流動性の増加、社会の流動性の増加と敬語の変化といった社会的変化にその要因があると分析している。

1.2.3 他言語との比較・対照分析の観点から

(1.3) 他言語比較・対照分析の観点から捉えた主な授受補助動詞文の研究

大江 (1975)、奥津 (1979)、林八龍 (1980)、金昌男 (1999・2002)、守屋 (2002)、門和 (ムンケ、2006)、森山 (2006)、長谷川 (2007)、澤田 (2008・2014)、三宅 (2011)、佐々木 (2013)

日本語の授受補助動詞文と他言語を比較・対照分析を行っている研究には、上記の(1.3)のような研究があるが、言語別にみると、英語、中国語、韓国語の分析研究が多

⁹ 辻村編 (1971 : 363-402) にも、「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」の成立について考察しており、敬語変遷一覧表として示されている。

¹⁰ 「～てくださる」文の成立については、辻村編 (1971 : 363-402) を見ると、中世後期に現れていると述べている。成立初期から上位主体語、つまり動作主が話し手より目上の人である場合に使用された。

くなされていることが分かる。森山（2006）では、日本語を中心とし、英語、中国語、韓国語における視点の原則と授受補助動詞文の種類についてまとめている。

そして、「ルール①」「ルール②」の内容を示し、言語別に記している。「ルール③」は視点の主観性を表している。表 I.2 は、森山（2006）で示された「ルール」をまとめたものである。

表 I.2 視点のルールと授受補助動詞文の関係（森山 2006 : 31）¹¹

| 言語 ルール | 日本語 | 英語 | 中国語 | 韓国語 |
|-----------|-------------------|-----------------|----------|-------------------------|
| 視点の主観性 | 主観的 | 客観的 | 客観的 | 客観的 |
| ルール① | ○ | ○ | × | ○ |
| ルール② | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 動詞の種類 | あげる くれる もらう | give receive | 給 [gei3] | 주다 [juda] 받다 [batta] |

(1.4) 森山（2006 : 30-32）による授受補助動詞文の視点についてのルール

「ルール①」 参与者に話し手が含まれる場合には、話し手に視点が置かれやすい。

「ルール②」 被動作主より動作主のほうに視点が置かれやすい。

「ルール③」 やりもらいの事態において、客観的把握をとるか、主観的把握をとるかは、言語により異なる。

「ルール④」 視点はできるだけ固定させ、移動させない。

森山（2006）では、授受補助動詞文の視点のルールについて、「ルール②」および「ルール④」は4言語における共通点であり、「ルール①」の視点の置き方と「ルール③」の事態把握の客観性と主観性は相違点であると述べている。

英語との比較研究では、本動詞用法としての分析が主であるが、大江（1975）と奥津（1979）が代表的研究である。大江（1975 : 29）では「やる」「くれる」「もらう」に対応する英語について以下のように設定している。

¹¹ 下線を引いたローマ字のところは筆者によるものである。

表 I.3 授受本動詞における日本語と英語の対応（大江 1975 : 31）

| | | |
|------|---------|-----|
| やる | くれる | もらう |
| give | receive | |

しかし、「もらう」に対して「receive」は完全に対応する動詞ではない。以下に例を挙げて説明する。

- (1.5) ?I will receive 5,000 yen from John.
 (1.6) ジョンに 5,000 円もらおう。
 (1.7) ?I tried to receive 5,000 yen from John.
 (1.8) 私はジョンに 5,000 円もらおうとした。

((1.5)~(1.8)は、大江 1975 : 30-31)

大江（1975）は、上記の(1.5)~(1.8)を挙げ、日本語の「もらう」は「～よう・う」の意志形で動作主による受け手側の意志が積極的に反映するが、英語の「receive」では意志を表すことはできないと指摘している。一方、奥津（1979 : 16）では、英語の授受動詞は「give」と「receive」の2語で、「与え手主語」の素性で+ならば「give」、-ならば「receive」であるとし、日本語の授受補助動詞文での身内・他人の区別や待遇素性は不要である点を指摘した。奥津（1979）による授受本動詞構文における日英語の対応を以下の表 I.4 にまとめ、大江（1975）による表 I.3 と比較する。

表 I.4 授受本動詞における日本語と英語の対応（奥津 1979 : 16）

| | |
|----------------|-------------|
| 「+与え手主語」やる くれる | 「-与え手主語」もらう |
| give | receive |

両者の研究において考察結果の相違が現れたのは、日本語の授受補助動詞文を英語の一つの表現と比較することに限界があったためと考えられる。つまり、言語形式を比較分析するだけでは一般化することができないのである。さらに、授受補助動詞文を比較できる英語表現を考察するには、授受補助動詞文が使用される用法の理解が不可欠である。したがって、本研究では、その土台となる授受補助動詞文の意味・機能

に注目して分析を行う。

また、中国語における比較研究の主な内容については、門和（2006）によれば、日本語の授受動詞「やる・あげる・くれる」に対する中国語表現には「给〔gei3〕¹²」があり、「もらう」に対する表現は「给〔gei3〕・请〔qing3〕・让〔rang4〕・得到〔de2dao4〕」などがあるが、対応する形式が合致しないという。二言語の差異として、日本語の授受動詞は「利益・恩恵と見なして表現する文化（ibid. : 63）」であるのに対し、中国語では話し手の主観を交えず、客観的に表現することが一般的であると説明を加えた。

また、佐々木（2013）では、以下の例を挙げて、日本語では授受補助動詞文が必要となる状況において中国語ではそのような制約がないことを指摘している。

(1.9) 他送我一本书。

[ta1song4wo3yi1ben3shu1]

(lit. 彼は私に本をプレゼントした)

(佐々木 2013 : 62)

(1.10) 彼は私に本をプレゼントしてくれた。

(1.11) 私は彼に本をプレゼントしてもらった。

(1.9)を逐語訳した日本語の文「lit.彼は私に本をプレゼントした」は、不適格である。その理由は「彼が本をプレゼントする」行為が、話し手である「私」に向けられているためである。このような時、日本語では授受補助動詞文の使用が必要となるが、ここでは視点の制約により(1.10)の「～てくれる」文と(1.11)の「～てもらう」文が選択可能である。そして、「本をプレゼントする」という動作には、使役性が低く自発的な動作を表すことが多いため、「彼」の自らの動作であれば、「～てくれる」文が選択される。ただし、話し手である「私」が強引にプレゼントを買わせたという意味合いが加わると使用される可能性もあるが、(1.9)の中国語にはそのような意味は一般的に含まれていない。

日本語と韓国語の授受補助動詞文における研究について、林八龍（1980 : 119–120）

¹² 中国語の表記については、漢字の読み方（ピンイン）は、「ピンイン（pinyin）変換サービス」のウェブ・ページ（詳細は「参照したインターネット・サイト」に記した）を利用し、加えた。

では、日本語の「やる・くれる・もらう」と韓国語の表現との違いについて「韓国語ではあまり考慮に入れなくてもいい、『話手の立つ側』の配慮あるいは、『話手の関与』という点が大きな意味を持ち（以下、省略）」(ibid) と述べている。奥津(1979: 23)では、「朝鮮語には〔身内へ〕素性のないことが、大きなちがいである。これが日本と韓国社会構造や社会意識の反映なのかどうか、興味ある問題である」(ibid: 23)と研究の意義について述べている。また、林八龍(1980)と奥津(1979)では、「～てもらう」文が韓国語にはないことを指摘し、韓国語のほうがより制約があるとみている。しかし、「～てもらう」文の体系がないことを指摘することに留まっており、実際に学習者がどのように習得しているかというところまでの研究はなされていない。

金昌男(1999)では、「やる・あげる・さしあげる」の「あげる文」と韓国語の「주다(juda) / 드리다(deurida)」について分析しており、授受本動詞構文の話し手と聞き手との人間関係で、「やる・あげる・さしあげる」が使い分けられているが、その人間関係という基準に日本語と韓国語の相違点が見られると述べている。この研究で述べられている「やる・あげる・さしあげる」の使い分けの要因となった人間関係の基準が、「くれる・くださる」と「もらう・いただく」の表現においても有効であるかについて探る必要がある。

また、韓国語の授与動詞は幅広い範疇で研究がなされているが、류시정(リュウ・シジョン、1995)と황봉희(ファン・ボンヒ、2008)がその代表的研究として挙げられる。류시정(リュウ・シジョン、1995: 103)では、補助用言「어/아 주다[eo/a juda] (lit.～てあげる・くれる)」に二つの意味用法があり、行動の受け手に向けての行動と行動の受け手のための行動の二つ意味があると分析している。

(1.12) (住民と犯人との関係が明確でない場合)

주민들은 범인들에게 돌을 던져 주었다.¹³

[juminduel-uen boeminduel-ege dol-eul deonjeo jueotta]

¹³ 韓国語の表記について「記号・略語等の表記について」でも述べたが、韓国国立国語院による「語文規定・ローマ字表記法規定」に従い、釜山大学校と(株)ナラ・インポテックが共同開発した「ローマ字変換機」を利用して韓国語のローマ字表記を記した(「ローマ字変換機」の詳細は「参照したインターネット・サイト」に記した)。

(lit.住民たちは 犯人たちに 石を 投げて あげた・くれた)

(류시정 리ュウ・シジョン 1995 : 103)

上記の(1.12)を見ると、一つは、住民たちが警察に協力するかのよう¹に犯人等に石を投げる行為をした場合で、日本語にすると「犯人等に向けて石を投げる」の意味があり、もう一つは、住民たちが犯人等の味方になり、「犯人たちのために石を投げる」という意味がある。つまり、韓国語授与動詞の「어/아 주다[eo/a juda]」は、前項動詞に当たる動詞の受け手に向けた行為を表す場合と受け手のための行動である場合といった二通りの解釈ができるという特徴を持つ。また、(1.12)から「住民たちは我々警察のために犯人たちに石を投げてくれた」という文章で考えられるように日本語の授受補助動詞文には「恩恵と利益」を表す表現として扱われるケースが多い。しかし、韓国語授与動詞にはこのような「恩恵と利益」を表す傾向がなく、(1.13)のような場合、特定の場面の設定がなくても容認できる。反面、日本語の場合、(1.14)は非難の意でしか考えられなく、容認するには特定の場面の想定が必要となる。

(1.13) (誰かに作ってもらったお弁当が美味しくなかった場合)

맛없는 도시락을 싸 주었다.

[maseobsneun dosilageul ssa jueossda.]

(lit.美味しくない お弁当を 作って くれた)

(1.14) ?美味しくないお弁当を作ってくれた。

また、황봉희 (ファン・ボンヒ、2008) では、韓国語授与動詞構文の分析では「에게 ([ege] (lit. (人を表す名詞) に))」の解釈によって授与行為の対象が決まるため、文要素を持つ意味が重要となると指摘している。上記の韓国語授与動詞の研究では、韓国語授与動詞には「視点の制約」による使い分けがないことが分かる。

また、塚本 (2012) では、韓国語「주다 ([juda] lit.あげる・くれる)」が日本語の「くれる」よりも文法化が進んでおらず、元来の授受の意味を持っているため、「私のために、かばん、作ってくれた？」という表現において韓国語の「어/아 주다 ([eo/a juda])」は相応しくないことになる²と述べ、本動詞用法と補助動詞用法への推移過程を次のように説明している。

(1.15) 私のために、かばん、作ってくれた？

(塚本 2012 : 285)

(1.16) (1.14)に対する韓国語の訳文

나를 위해서 가방 만들어 준거야?

[naleul wihaeseo gabang mandeuleo juneun geoya?]

(lit.私のために、カバン、作ってくれた?)

しかし、(1.15)の表現に対する韓国語表現(1.16)は、「어/아 주다 ([eo/a juda])」を含む形式で表すことができ、意味としても同じく、発話機能としても聞き手の行為「かばんを作る」ことが話し手である「私」のためであることを確認している場面である。

1.2.4 日本語教育の観点から

日本語教育の観点から授受補助動詞文を捉えている研究には、以下のような研究が挙げられる。

(1.17) 第二言語習得の日本語教育の観点から捉えた主な授受補助動詞文研究

堀口 (1983)、山橋 (1999a・1999b)、蒲谷 (2001)、稲熊 (2004・2005・2006a・2006b)、尹喜貞 (2004・2006)、萩原 (2007)

授受補助動詞における第二言語習得研究には、上述の(1.17)のように、坂本・岡田 (1996)、二宮 (2002)、稲熊 (2004)、尹喜貞 (2008) があるが、これらに共通するのは「学習者が母語に関係なく困難さを感じる項目の一つに授受表現があり (稲熊 2004 : 13)」という点である。その要因の一つは各形式がそれぞれ表す視点の差異による格情報の示し方にあると考えられる。各表現の主格と与格について文法的に理解はしていても省略された格情報の復元と省略しなければならない格情報についての理解も不可欠である。また、恩恵の授受のみの習得には限界がある (二宮 2002 : 73) という指摘のように、依頼や事象叙述といった授受補助動詞文の役割も考慮に入れるべきである。

一方、尹喜貞（2008）は、日本で外国語として日本語を学習したグループと日本以外の国で第二外国語として学習したグループに分けて、授受動詞の本動詞と補助動詞の習得について調査を行ったところ、授受補助動詞の使用において学習環境における学習達成度の差は有意でなかったと述べている。しかし、日本語能力が低いグループにおいては、「日本語能力が低い JFL 学習者¹⁴が『てくれる』を『てもらう』より多く用いていることから、母語転移は、学習環境と日本語能力に複合的に影響されるといえる」（ibid. : 20）と述べている。しかし、日本語能力が低いグループにおいて、「～てくれる」文が「～てもらう」文より多用されていることで、語用論転移が分かるかということ、必ずしもそうとは限らない。特に「～てくれる」文と「～てもらう」文は相互交換が可能な場合もあり得るため、正用・非用・誤用についての判断において判断基準を精緻化させねばならないという問題が残されている。

1.2.5 授受補助動詞文の構造および意味・機能について

(1.18) 授受補助動詞文の構造および意味と機能の観点から捉えた主な研究

【授受表現全般】教科研東京国語部会・言語教育研究サークル(1963)、宮地(1965)、Kuno(1973)、大江(1975)、久野(1987[1978])、奥津(1984a・1984b・1986)、山岡(1990・1993)、金久保(1993)、三宅(1996・2011)、滝浦(2001)、橋元(2001)、益岡(2001)、森田(2002)、高見・加藤(2003a)、山本(2003b)、澤田(2004a・2004b・2006・2007b・2009・2011・2014)、山田(2004)、原田(2006)、守屋(2011)、米澤(2012)

【各授受補助動詞文別細部】堀口(1987a・1987b)、竹林(1998)、井島(1999)、山橋(1999a・1999b・2000・2003a・2003b)、熊田(2001)、茜(2002)、倉持(2002)、山田(2002・2009)、山本(2002a・2002b)、高見・加藤(2003b・2003c・2003d)、砂川(2006)、金澤(2007)、澤田(2007a)、関根(2007)、石山(2008)、仁科・鄭企娟(ジョン・ギヨン、2009)、伊藤(2011)、犬飼(2011)

授受補助動詞文の構造および意味・機能についての研究は最も本研究と関連のある

¹⁴ 日本以外の国で日本語を学習したグループのことを示す。

分野であるため、詳細については第Ⅱ章の2.1節と2.2節で述べることにするが、ここでは簡単に研究動向を記述する。

授受補助動詞文を捉えた研究は、上述した(1.18)のように様々であるが、主に視点の制約という統語論レベルでの分析と、恩恵性という意味論レベルでの分析がある。まず、授受補助動詞文の視点については、宮地(1965)や久野(1987[1978])、奥津(1984a・1984b・1986)等により、本動詞用法の視点の制約がそのまま引き継がれ、話し手が基準となり、行為者との人間関係による授受補助動詞文が決まるといえる。その際、話し手と行為者の人間関係には、親疎関係のみならず、年齢や社会的地位の上下による関係性により常体と敬体に分けられている。教科研東京国語部会・言語教育研究サークル(1963)では補助動詞用法としての授受補助動詞文については三つの形があり、それぞれの形体に分類し、主語と対象語における転換について述べている。

授受補助動詞文において、主語と視点の置き方によって次のような基本構造を持つとされている(宮地 1965、大江 1975、久野 1987[1978]、山岡 1990、山田 2004)。

(1.19) 授受補助動詞文における行為者と被行為者に格位置について

- a. 行為者が被行為者に～てやる・あげる・さしあげる。
- b. 行為者が被行為者に～てくれる・くださる。
- c. 被行為者が行為者に～てもらう・いただく。

「～てあげる」系と「～てくれる」系の構文の相違点は、「行為者」と「被行為者」が同じ位置にあるが、話し手の立場をどちらに置くかによって、文が決まるのである。つまり、与え手が話し手本人もしくは受け手よりは話し手に近い人物の場合には「～てあげる」系を、受け手が話し手本人もしくは近い人物の場合には「～てくれる」系を選択する。また、「行為者が被行為者に向けて～する」という事柄を述べる際、「～てくれる」系と「～てもらう」系で言い表すことができる。ここでは、被行為者のほうが話し手になるかもしくは話し手と近い人物であることが共通点である。しかし、事柄を行為者の視点から述べるか、あるいは受け手の視点から述べるかによって表現が決まる。

- (1.20) 田中さんが本をくれた。
(1.21) *田中さんが私に本を買った。
(1.22) 田中さんが私に本を買ってくれた。

(1.20)のように本動詞として授受動詞を使用する際、物の移動を表すが、物である「本」が話し手に移動していることについて、田中さんを動作主にして描かれている。次に、田中さんが話し手である私に「買う」という動作を行った際、(1.21)のように言うと不自然さを感じる。これを(1.22)の「買ってくれた」のように、授受動詞を補助動詞用法として加えることで容認度が上がることが分かる。このような場面では、物である「本」が実際に私に向けていても、向けていなくても想定可能である。ここでは、「本を買う」行為が話し手に向けての動作であることを表すことが、授受動詞の本動詞用法との相違点である。このように物の移動から行動の移動というように用法が拡大されたことを授受動詞の本動詞用法から補助動詞用法へと派生したと解釈できる。

一方、意味論のレベルにおける授受補助動詞文の分析では、以下のような例(1.23)を用いて、授受補助動詞文の「恩恵性」について述べられている。

- (1.23) 太郎は僕にそのソフトの使い方を教えてくれた。

(益岡 2001 : 31)

授受補助動詞文が「利益・恩恵」の意を表す際、その解釈にはいくつかの語用論的条件が必要である。まず、話し手による当該行為（前項動詞）が好ましいと考える判断がなければならない。また、恩恵を感じるものが有情物であることが挙げられる。しかし、以下の例では全体的には恩恵の意を表してはいるが、授受補助動詞文では否定形を用いている。

- (1.24) この本を書くことは何度も諦めかけた。諦めさせてくれなかった〇〇書店編集部の〇〇さんと、（中略）、ありがとうございました。

(滝浦 2013 : 194)

上記(1.24)の「諦めさせてくれる」の「～てくれる」文が恩恵性を含意しているとする

れば「諦めさせてくれない」は恩恵の否定となるため、迷惑や不満の気持ちになるはずである。しかし、文の最後は感謝表現「ありがとうございました」で終わっており、この表現から不満や非難の意とは言えない。このような文をどのように解釈するかという問題が残されている。

次に、「～てもらう」系を使役構文と照らし合わせて考察した研究には、권승림 (クオン・スンリム、2006) がある。권승림 (クオン・スンリム、2006) は、「～てもらう」系と使役構文が交換可能な例の特徴として、「利益の付与・授受」の用法が共通点として存在すると指摘している。しかし、交換可能性において、「～てもらう」系では「利益の付与」として捉える例が、使役構文にすると「不利益の付与」の意に転じる場合、交換可能性があるかとみるのは妥当ではないと考える。構文の面においては交換が可能であるかもしれないが、意味や用法の面において異なる場合は交換が可能であると判断し難い。

また、「～てくれる」系と「～てもらう」系の互換性について研究がなされている点が挙げられる。「～てくれる」系と「～てもらう」系を比較考察した研究のうち、構造の面から考察した研究は堀口 (1987b) がある。堀口 (1987b) では両表現の構造とムード的意味¹⁵の相違点について述べており、主格名詞句と与格名詞句を含む構造を持つと述べている。またムード的意味における相違点について、本動詞用法としての「くれる」系と「もらう」系を比較し、置き換えが可能かどうかという問題について、「伝えているコトの意味が同じであるか、非文ではないか、文脈の中で適切であるか (ibid. : 71) 」の要因を手がかりとしている。

伊藤 (2010) では、「～てもらう」系のほうが「～てくれる」系より丁寧であると結論付けている。その要因について、被依頼者の行動に直接触れない表現である「～てもらう」系の言い方がより丁寧さが現れるためであると述べているが、なぜ相手の行動を直接言及しないことが丁寧さにつながるかという理由については論じられていない。丁寧さについては1.3.2節の「ポライトネスの原理」で詳しく扱うが、丁寧さを表す方法として、相手の行動が話し手にとって利益となることを最大限に強調するこ

¹⁵ ここでのムード的意味とは、話し手が伝達しようとしている事柄と区別する概念で、話し手の主観的な心的態度を表す。例えば、授受補助動詞文「～てくださる」文を含む「ちょっとペン貸してくれる？」文は、聞き手に対する依頼を表す対人的ムードである。他の研究ではモダリティ表現と同様に扱われていることもある。

とで達成できるという原理では説明できないのである。

1.2.6 授受表現研究における鳥瞰図

上述した授受表現に関する研究動向をまとめると、次の図 I.4 のように説明できる。

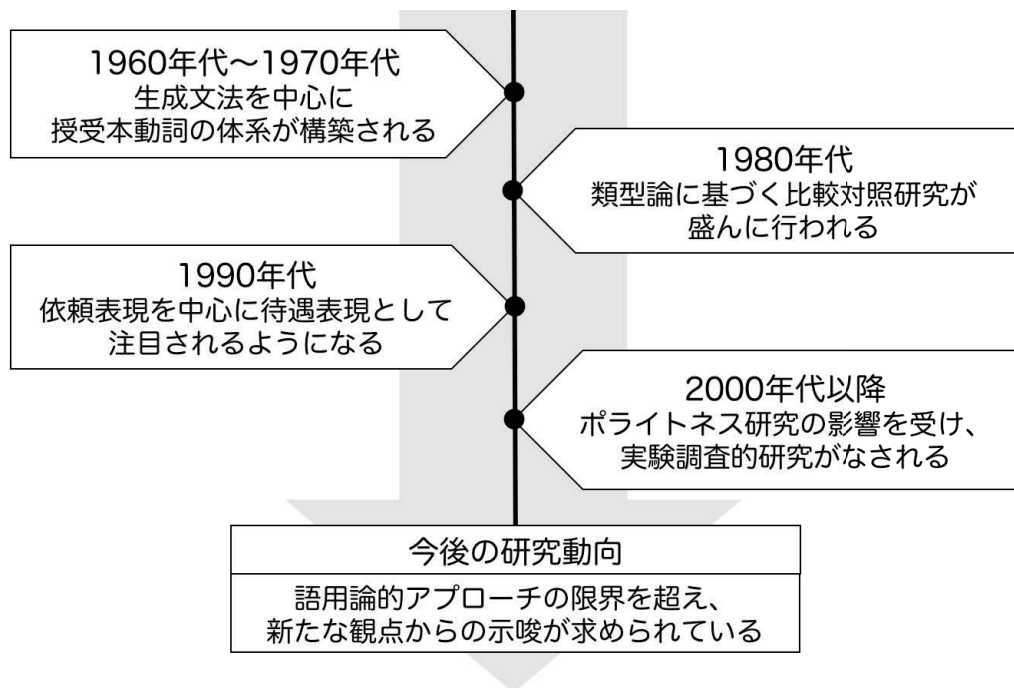


図 I.4 授受表現研究における鳥瞰図

1980年代以前の研究では、生成文法の影響を受け、授受本動詞の構造に注目した研究がなされている。こうした知見を受け、1980年代には他言語との比較対照研究が盛んに行われ、類型論的な類似と相違について分析した。その後、1990年代に入ってからポライトネスという概念から、依頼表現として用いられる授受表現に注目した研究が多くなされ、2000年代以降現在に至るまで、ポライトネス研究の影響を受け、アンケート調査に基づく意識調査が行われている。今後の研究動向として、今までの語用論的なアプローチの限界をどのような視点から乗り越えていくかという課題が残されている。

1.3 理論的な枠組み：語用論の考え方

1.3.1 語用論と発話機能論

本研究の理論的背景にある語用論研究は、「(前略)ある言語形式が話し手によってどのような目的に使われ、聞き手にどのような効果をもたらすかといった問題を扱う(高原・林宅男・林礼子、2002:165)」研究分野である。Austin(1962)による発話行為は「発語行為」「発語内行為」「発語媒介行為」の三つに分類される。授受補助動詞文という言語形式に注目し、オースティンの発話行為の観点から考えてみると、例えば、「忙しいのにわざわざ来てくれて、ありがとうね」と声に出して話す発話行為が行われる際、話し手から聞き手へ「感謝を表明する」発語内行為と、その結果「聞き手を喜ばせる」という発語媒介行為が発語行為と同時に遂行されるのである。このように、授受補助動詞文は感情表明という発話機能として有効に働いていることが分かる。授受補助動詞文が発語行為としてどのように現れているかを把握することが重要である。

(1.25) 教えてもらえますか。

(1.26) 彼女は私が買ってあげたケーキを食べた。

(1.27) 来てくれて、助かった。

構文における授受補助動詞文の位置付けにより、(1.25)のような単文形式、(1.26)のような複文形式、(1.27)のような重文形式の文形式で現れることが分かる。今までの研究においては(1.25)のような単文形式における授受補助動詞文の使用に注目が置かれていたが、今後複文や重文におけるより複雑な談話のレベルにおける分析が求められる。その理由について、例えば、同じく重文形式であっても、(1.28)に比べて(1.29)の表現は不自然さを感じ、「～てくれる」文と「～てもらおう」文は「ありがとう」という感謝表現とのコロケーションにおいて相違点があるように見受けられる。

(1.28) 来てくれてありがとう。

(1.29) *来てもらってありがとう。

こうした問題点を解決するため、各表現に文形式、参加者の人間関係、発話場面（コンテキスト）を総合的に判断し、発話機能や他の構文とのコロケーション関係について考察する必要があると考えられる。

語用論の研究では、人間の普遍的な基本的欲求としてフェイス（face、面子）¹⁶という概念が重要な要素となる。対人コミュニケーションにおいて、話し手は聞き手のフェイスを尊重したり、脅かしたり相互に作用することが前提となる。互いのフェイスを尊重することが望ましいが、実際には相手のフェイスを侵害することもある。このようなことをFTA（face-threatening acts）といい、例えば「依頼」「命令」などは相手にある行為を促す行為であり、話し手が聞き手の消極的フェイスを脅かす行為となる。反対に、聞き手の積極的フェイスを脅かす行為となる。例えば「非難」をすることなどは、相手の積極的フェイスを否定的に捉える行為である。

授受補助動詞文には「授受の対象が通常好ましいものであるという特徴（益岡2001：28）」があるため、恩恵性¹⁷の意味として研究が多くなされてきた。しかし、恩恵性の概念で説明がしきれない授受補助動詞文の使用が指摘できる。恩恵かつ謙譲の意が含意されている例として以下の(1.30)(1.31)の「～てさしあげる」文を考察すると、発話場面において不自然な表現になるケースがある。

(1.30) (先生が持っている重そうなかばんを見て)

??先生、かばんを持ってさしあげましょうか。

(1.31) (その後、友だちに会って先生に会ったことについて話しながら)

先生のかばんを持ってさしあげたの。

同じく「～てさしあげる」文を使用しているのにも関わらず、直接先生に対して発話するときの表現(1.30)はなぜ不自然さを感じるのか。ここから、授受補助動詞文では

¹⁶ フェイス（face、面子）による概念について、様々な研究者による提言があるが、本研究では、主にBrown & Levinson（1987）で述べられた概念を用いる。詳細については次節1.3.2節で述べる。

¹⁷ 恩恵性の概念について再掲しておく。先述した通り、恩恵性について明確な定義はなされていないが、伊藤（2010：149）では「事態とそれに関わる状況全体から、その直接的あるいは間接的な受影者の内面に生じた一つの感情のありかた」を「恩恵」と定義し、「受益」と区別している。また、益岡（2001）では「好ましいと思われる」という判断の介入があれば恩恵性を有すると判断している。

受け手と与え手の視点だけでなく、話し手と聞き手との関係が関与していることが分かる。つまり、「かばんを持つ」行動の受け手を目の前の聞き手とした場合には「～てさしあげる」文の不自然さを感じる事が指摘できる。

授受補助動詞文もこのように話し手と聞き手のフェイスの相互作用において、語用論的機能が働くと考える。上記の(1.30)で学生である話し手が聞き手である先生に「～てさしあげる」文を用いることについては、統語上は何ら問題がない。しかし、この場合、話し手が援助の申し出として意志を表出することは聞き手の消極的フェイスを脅かすことになる。そこで「～てさしあげる」文を含む「～てあげる」系の授受補助動詞文は、与え手から受け手の領域に深く関与することで、受け手の消極的フェイスを脅かす行為と同様の働きがあると考えられる。また、聞き手が話し手にとって上下関係の上位に当たる人物となるため、聞き手の消極的フェイスを守らなければならないという「共通の知識（高原・林宅男・林礼子 2002：7）」が存在する。そのため、「～てさしあげる」文を使用するのは、聞き手である先生の消極的フェイスをさらに害してしまうため、語用論的観点からは不適格となる。

本研究では、語用論という観点から、授受補助動詞文が持つ発話機能の類について検討する。このような考察を通して、統語論レベルにおける視点と動作の方向性、意味論レベルにおける「利益・恩恵」の意や「不利益・迷惑」の意といった分析の、次のレベルとして、語用論レベルにおいて発話機能につながる新たな解釈を提案することが期待できる。

本研究における発話機能とは、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの（山岡 2008：2）」であるが、研究者によって様々な種類の発話機能が提案されている。その詳細と本研究における分類基準については第IV章で扱う。

1.3.2 ポライトネスの原理

本研究は、語用論研究の中で、ポライトネス¹⁸の理論に密接な関連があることを説

¹⁸ ポライトネスについて、従来日本語で「丁寧さ」と訳されることが多かった。日本人母語話者30名（学部生）に対して、「丁寧さとはどんなものなのか、イメージを教えてください」という記述式アンケート調査を行った。その結果、日本語の「丁寧さ」には、

明する。ポライトネス理論では、発話において話し手が聞き手のことを意識して言葉を発することが前提となり、どちらのフェイスを尊重するかを解釈する理論である。ポライトネスの観点では、話し手のフェイスと聞き手のフェイスのどちらを優先するかによって言語表現が選択される。

ここで言う「ポライトネス」とは、「対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現（山岡・牧原・小野 2010）」である。また、姫野（2006：50）、張相彦（チャン・サンオン、1988：49）によると、授受補助動詞文は日本語としても特別な形態で発達した表現で、人間関係をより緊密に維持するための産物であると述べられている。

ポライトネスに関する理論的考察についてまず、Grice (1975) に遡って述べる。Grice (1975) は、談話における発話を解釈する際、働く原理として「協調の原理 (cooperative principle)」を提唱しており、それを以下のように定義付けている。

(1.32) Grice (1975 : 45) による「cooperative principle (協調の原理)」¹⁹

- i . Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange) .
- ii . Do not make your contribution more informative than is required.

(Grice 1975 : 45)

上記の「協調の原理」における「貢献」とは、発話することであり、談話において談話の目的に合わせて発話することが重要であることを表している。この原理は、低位規範として「量の公理 (Maxim of Quantity)²⁰」、「質の公理 (Maxim of Quality)」、「関係の公理 (Maxim of Relation)」、「様態の公理 (Maxim of Manner)」から成り

仕事のやり方が手を抜かず行っている様子であるというイメージと、動作や態度が礼儀正しいことのイメージがあることが分かった。そこで、本研究では話し手が聞き手のことを配慮して発話する際、使用場面において選択される言語形式を考察するため、「丁寧さ」という曖昧な用語は用いず、「ポライトネス」という用語を採用する。

¹⁹ 次の日本語訳は、高原・林宅男・林礼子（2002：64）によるものである。

- i . (現在の会話のやり取りの目的に) 必要とされるできるだけ多くの情報を与えて貢献しなさい。
- ii . 必要とされる以上の情報を与えるような貢献をしてはなりません。

²⁰ 原文の「maxim」について、「公理」「公準」と訳す研究があるが、本研究では「公理」に統一する。

立っていると述べている。

(1.33) Grice (1975) による四つの「Maxim (公理)」²¹

1) Maxim of Quantity (量の公理)

i . Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange) .

ii . Do not make your contribution more informative than is required.

2) Maxim of Quality (質の公理)

i . Do not say what you believe to be false.

ii . Do not say that for which you lack adequate evidence.

3) Maxim of Relation (関係の公理)

Be relevant.

4) Maxim of Manner (様態の公理)

i . Avoid obscurity of expression.

ii . Avoid ambiguity.

iii . Be brief (avoid unnecessary prolixity) .

iv . Be orderly.

(Grice 1975 : 45–47)

このような四つの公理が実際の談話においてどのように作用するかという問題はよ

²¹ 次の日本語訳は、高原・林宅男・林礼子 (2002 : 65) によるものである。

1) 量の公理 (Maxim of Quantity)

i . 発話の目的を果たす上で必要とされる十分な量の情報を与えなさい。

ii . 発話の目的を果たす上で必要とされる以上の量の情報を与えてはならない。

2) 質の公理 (Maxim of Quality)

i . 偽であると信じていることを言ってはならない。

ii . はっきりとした証拠がないことを言ってはならない。

3) 関係の公理 (Maxim of Relation)

発話を関連性のあるものにしなさい。

4) 様態の公理 (Maxim of Manner)

i . 意味が理解し難い不明瞭な表現を避けなさい。

ii . 曖昧さを避けなさい。

iii . 簡潔に言いなさい。

iv . 発話を順序立てたものにしなさい。

り複雑である。そこで、上記の基本的な公理の中で、話し手の発話意図によって優先される公理があり、公理から違反しているように見える言語表現の根底にどのような意図が含意されているかを探ることが重要である。

次に、Lakoff (1973) は、上述の Grice (1975) の協調の原理を受け、次のような「語用論的能力の原則」を提唱した。

(1.34) Lakoff (1973) の「Rules of Pragmatic Competence (語用論的能力の原則)」²²

- i . Be clear.
- ii . Be polite.

(Lakoff 1973 : 296)

上述の二つの原理を合わせると、話し手が伝えようとしていることについて聞き手を配慮した話し方で、明確に伝達することが重要である。つまり、話し手が伝達している内容における原理と、聞き手との関係を重視する原理の両方に焦点を当てられている。前者は、Grice (1975) が言う「量の公理」と「質の公理」に当たり、後者は「関係の公理」と「様態の公理」に当てはまるといえる。

一方、Leech (1983) では、ポライトネスの原則について、次の六つの原則を挙げて説明している。

(1.35) Leech (1983) による「ポライトネスの原則 (politeness principle)」

- 1) Tact Maxim
 - i . Minimize the expression of beliefs which imply cost to other
 - ii . Maximize the expression of beliefs that imply benefit to other
- 2) Generosity Maxim
 - i . Minimize the expression of benefit to self
 - ii . Maximize cost to self
- 3) Approbation maxim

²² 日本語訳は筆者によるものである。

- i . 明確に述べよ。
- ii . ポライトに述べよ。

- i . Minimize dispraise of other
- ii . Maximize praise of other
- 4) Modesty maxim
 - i . Minimize praise of self
 - ii . Maximize dispraise of self
- 5) Agreement maxim
 - i . Minimize disagreement between self and other
 - ii . Maximize agreement between self and other
- 6) Sympathy maxim
 - i . Minimize antipathy between self and other
 - ii . Maximize sympathy between self and other

(Leech 1983 : 35) ²³

Leech (1983) で述べられたポライトネスの原則は、話し手が聞き手に対して発話内行為を達成させるため、効率的な伝達方法を提示している。このような原則の根底には、人間の持つ基本的な欲求に起因しているとみる研究として、Brown & Levinson (1987) が挙げられる。

²³ 次の日本語訳は、山岡・牧原・小野 (2010 : 68) によるものである。

- 1) 気配りの原則
 - i . 他者の負担を最小限にせよ
 - ii . 他者の利益を最大限にせよ
- 2) 寛大性の原則
 - i . 自己の利益を最小限にせよ
 - ii . 自己の負担を最大限にせよ
- 3) 是認の原則
 - i . 他者への非難を最小限にせよ
 - ii . 他者への賞賛を最大限にせよ
- 4) 謙遜の原則
 - i . 自己への賞賛を最小限にせよ
 - ii . 自己への非難を最大限にせよ
- 5) 一致の原則
 - i . 自己と他者との意見相違を最小限にせよ
 - ii . 自己と他者との意見一致を最大限にせよ
- 6) 共感の原理
 - i . 自己と他者との反感を最小限にせよ
 - ii . 自己と他者との共感を最大限にせよ

まず、Brown & Levinson (1987) による「フェイス」の概念について整理しておきたい。フェイス (face) は人間が持っている基本的な欲求を意味するが、Brown & Levinson (1987) は「消極的フェイス (negative face)」と「積極的フェイス (positive face)」²⁴あり、その定義を以下のように述べている。

(1.36) ポライトネスにおけるフェイス (面子) の概念²⁵

- i . negative face : the want of every 'competent adult member' that his actions be unimpeded by others.
- ii . positive face : the want of every member that his wants be desirable to at least some others.

(Brown & Levinson 1987 : 61-63)

この二つのフェイスは、「人間の普遍的欲求であり、誰もがそれを求めているということを我々は認識している (高原・林宅男・林礼子、2002 : 167)」と言われており、どちらのフェイスをより重要とするかによって、言語形式が決まるとも言えよう。

また、Brown & Levinson (1987) は、ポライトネスの原則を二つに分けて考察している。一つ目は「ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)」であり、聞き手に無礼な発話内行為の効力を最小限にすることを意味し、二つ目は「ポジティブ・ポライトネス (positive politeness)」で、聞き手に対して礼儀に叶う発話内行為の効力を最大限にすることを表す。

言語研究一般に適用される Brown & Levinson (1987) の対人関係維持のための原則と Leech (1983) による「ポライトネスの原則」を、日本語研究に適合するように解釈を行った研究として、山岡・牧原・小野 (2010) が挙げられる。以下は、山岡・牧原・小野 (2010 : 140) によるポライトネスの原則²⁶を以下の表 I.5 に示す。

²⁴ 本研究における「消極的フェイス」と「積極的フェイス」という日本語訳は、高原・林宅男・林礼子 (2002 : 167-168) によるものである。

²⁵ 次の日本語訳は滝浦 (2008 : 17) によるものである。

i . 消極的フェイス：他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくない欲求

ii . 積極的フェイス：他者に受け入れられたい・よく思われたい欲求

²⁶ 山岡・牧原・小野 (2010) では、日本語におけるポライトネスのことを「配慮表現」という用語を用いているが、本研究では「ポライトネス」という用語に統一して記述する。

表 1.5 山岡・牧原・小野（2010）によるポライトネスの原則

| | |
|---------------|-------------------|
| (A) 気配りの原則 | (a) 他者の負担が大きいと述べよ |
| | (b) 他者の利益が小さいと述べよ |
| (B) 寛大性の原則 | (a) 自己の利益が大きいと述べよ |
| | (b) 自己の負担が小さいと述べよ |

(山岡・牧原・小野 2010 : 140)

本研究では、理論的アプローチとして「他者の負担が大きいと述べよ」あるいは「他者の利益が小さいと述べよ」といったポライトネスという概念で授受補助動詞文の役割を再考する。

つまり、「ポライトネス」の仕組みを授受補助動詞文の世界に入れて考えると、授受補助動詞文の対人的コミュニケーションにおける意味機能が把握できるものと考えられる。このような解決方策を用いて、授受補助動詞文をポライトネスという観点から捉えることで、理論的・実証的検証をふまえ、授受補助動詞文に対する新たな解釈方法を提示できると考える。

上記の発想を手掛かりとして、今までの分析に語用論的アプローチを研究手法として加えることで、分析をより精緻化することができ、授受補助動詞文における発話機能と話し手の聞き手に対する主観性・間主観性について明らかにすることができると判断した。

1.3.3 構文化と共起ネットワーク

構文化の定義の前に、本研究における構文の概念を以下に示す。

(1.37) 辻編（2013）における「構文」の概念

- i. 伝統的な意味では、単に類似文の集合を統語的な型から整理したリストであり、記述的・学習的な便宜から記憶・記録されるべきもので、特に説明の必要のない事実
- ii. 意味と形式との結びつきが一つの Kategorie として実現されたもので、典型と拡張の幅を有し、相互に関わりを持つ有意なまとまり

授受補助動詞文は、本動詞構文における物の授受の意味が抽象化され、助動詞的な機能を持つ構文として、意味用法が拡張されている。このように意味が抽象化され、意味用法が拡張される過程を構文化とし、授受本動詞構文からの連続性と拡張の有機的な関連性を捉えることを目的とする。

構文化には、大きく二つの概念が存在する。一つは、イディオムのように固定化された形式で、「顔が広い」「頭に来る」のように、2語以上の語・句が固く結びついて特定の意味を持つもので、慣用表現とも言う。もう一つは、使用頻度の高いコロケーションが固定されて形成された構文フレームを指すものである。ある構文フレームが格パターンと述語とのコロケーション関係を有し、特定の意味と発話機能のもとで使用されている特性を浮き彫りにする。本研究における構文化は後者を指し、授受補助動詞文において格パターンと前項動詞を含む授受補助動詞文の構文パターンを明らかにしたいと考える。

構文化に関する研究には、通時的側面と共時的側面を対象としたものがある。前者は、ある文法的な意味を持つ語彙が時間を経て異なる意味や機能を持つようになる現象に着目する。例えば、「ところ」という場所を表す名詞が、「帰ってきたところで」のように時間を表すようになった例などがこれに当たる。一方、後者は、ある程度の時間幅の間、特定の語彙が異なる意味や機能を有している現象に着目する。例えば、英語において *be* の代わりに *get* を用いる受動文が存在するが、動詞 *get* は *be* の本来持っていた語彙の意味が希薄化された意味として使用されている（尾谷・二枝 2011 : 134）。

本研究で用いている「構文化」は、Traugott & Trousdale (2013) の概念を引き継ぐものである。

(1.38) Traugott & Trousdale (2013) における構文化の概念

(前略) 構文的变化の一つで、記号の[新しい]形式と意味の組み合わせを創出するものである。この変化は形式と意味のステップごとの連続で、再分析により創り出される。その際、*schematicity* (スキーマ性)、*productivity* (生産性)、*compositionality* (合成性) が程度の差はあれ伴う。記号の新しい形式と意味の組み合わせは体系に対して新しいタイプのものとなる。変化というものはミクロ的ステップの繰り返しであるので、そ

ここでは通時的斬進性 (gradualness) と共時的グレイディエンス (gradience) が含まれることになる。

この概念を用いて、現代日本語の授受補助動詞文が本動詞から補助動詞へ推移してきたことを前提として、考察する。授受本動詞において「物の移動」という実質的な意味が、授受補助動詞用法では希薄化されていることは自明であるが、「文法体系中の特定の範疇」をどのように表しているかについては未だ十分な議論が尽くされていない。したがって、本研究では授受補助動詞文に焦点をあて、構文化プロセスを明らかにすることを目的とする。

構文文法では、言語知識について「習慣化された言語記号の体系的な目録 (Langacker 1991)」であると述べている。「習慣化された言語記号」は、語彙や複数の語彙の組み合わせである構文を意味する。「体系的な目録」は共起ネットワークのことを指すが、語彙や複数の語彙の組み合わせ同士の関連性を表す概念である。一般的に「精緻化」と「拡張」というリンク関係で説明できるが、精緻化とは、「抽象的なスキーマ²⁷を具現化したものが事例になる (尾谷・二枝 2011 : 79)」を意味する。一方、拡張とは「精緻化のようにきれいにスキーマと一致する関係ではなく、スキーマから逸脱する特徴が見られるものの、概ねそのスキーマを精緻化したものと捉えられる (ibid.)」という関係である。

授受補助動詞文の構文化を探るには、ネットワークが鍵概念となるが、構文論におけるネットワークとは、プロトタイプの構造とそこから逸脱している構造との関係を表すものである。これを尾谷・二枝 (2011 : 78) では、「体系的な目録」であるとし、人間のカテゴリー化能力の発現と捉えている。本研究では、授受補助動詞文のそれぞれの共起ネットワークを探り、構文間のネットワークを比較する。

共起ネットワークの「共起」とは、コロケーションともされるが、「何らかの語と、語もしくは語以外の要素が結合する現象 (石川 2012 : 88)」を意味する。つまり、同一発話において当該語 (ここでは「中心語」という) が、特定の語や語句 (ここでは、「共起語」という) と一緒に使用する確率があるかどうかを表す。共起関係を探ることには、「中心語と共起語からなる語結合」、語と文法範疇が結合する「連辞的結合」、

²⁷ スキーマ (schema) とは、当該カテゴリーに属する事例の共通点を抽出して抽象化したものである。

同じ意味を持つ語集合が結合する「優先的意味選択」、語と話者の態度や談話機能が結合する「談話的韻律」を調べることで、明らかにすることができる。また、共起について、偶然により起こることもあれば、特定のパターン化されることもある（石川 2012 : 88-89）。偶然による現象とパターン化による現象を区別して探る必要がある。

共起を測る指標として、共起頻度と共起強度の二つの概念がある。「共起頻度」とは、「いずれがより重要なコロケーションであるかを判断する最も単純な方法（石川 2012 : 124）」で、現れた頻度の数をカウントして把握する方法である。例えば、インターネット検索で〇〇件が検索結果としてヒットしたかなどで比べることができる。しかし、このような方法は頻度数で比較することはできるが、そもそもコロケーションを構成する個々の語が、全体においてどの程度使用されているかは考慮に入っていない。そのため、結果として得られた件数が少ないと言っても強い共起関係であるケースもあり、その逆も考えられる。このようなことを補完させるための方法が「共起強度」を調べる方法である。

「共起強度」とは、「中心語と共起語の単独頻度をふまえて共起頻度を補正した尺度（石川 2012 : 125）」である。対象となる個々の語が、出現する頻度を考慮し、一つの変数として加えている。つまり、共起頻度、中心語・共起語の単独頻度、コーパス総語数などという変数を用いて、強度の数値を計算する。次の図 I.5 に、様々な共起強度の計算式を示す。

・類似度系指標を測る計算式の例

| | | | |
|---------|--|-----------|----------------------------|
| ダイス係数 | $D = 2 \times \frac{F}{X+Y}$ | ジャックカード係数 | $J = \frac{F}{X+Y-XY}$ |
| コサイン類似度 | $Cos = \frac{F}{\sqrt{X} \times \sqrt{Y}}$ | シンプソン係数 | $S = \frac{F}{\min(X, Y)}$ |

・情報量系指標を測る計算式の例

$$MI = \log_2 \frac{F \times N}{X \times Y}$$

図 I.5 共起強度の計算式（石川 2012 : 126-128）

類似度系指標は、データ集合の類縁性を評価するためのものであり、情報量系指標

は、中心語と共起語が互いに相手の情報をどの程度持っているかを示すものである。

Langacker (1999) で示されたネットワーク・モデルによると、ある構文には典型的な意味であるプロトタイプと上位概念であるスキーマが存在し、スキーマを具体化したものがプロトタイプであるという。このような考え方によれば、次の図 I.6 と図 I.7 のように、プロトタイプと拡張された意味との共通性から抽出したスキーマが得られるのである。

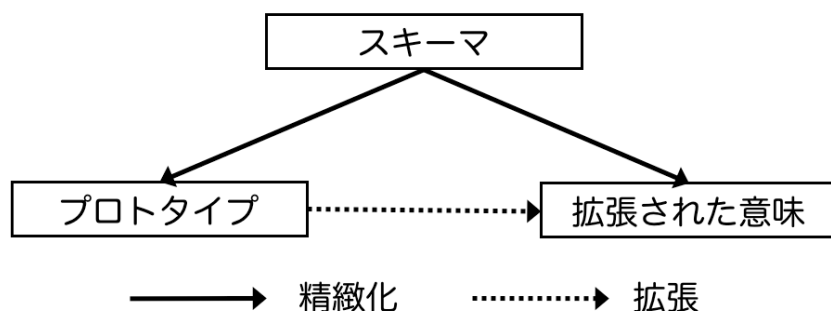


図 I.6 ネットワーク・モデル (Langacker 1999)

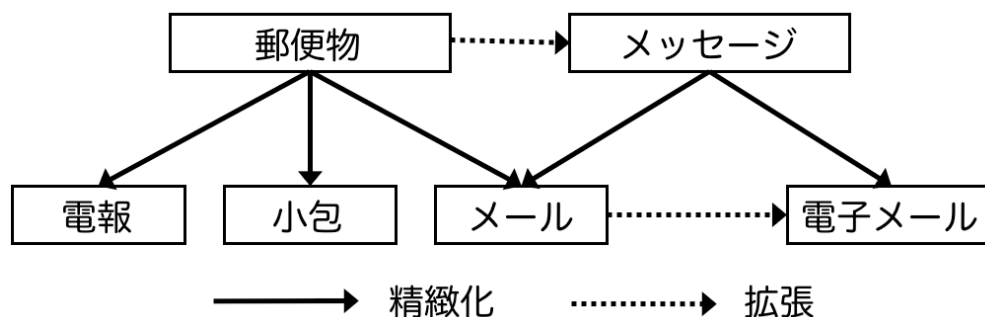


図 I.7 ネットワークにおける精緻化と拡張 (尾谷・二枝 2011 : 80 を修正)

本研究では、授受補助動詞文を研究対象とし、授受補助動詞文のフレームを抽出し、各フレーム間の関係を明らかにすることを目的とする。従来の研究においては授受補助動詞文の持つコアの意味合いに恩恵・利益という概念が置かれているが、授受補助動詞文ネットワークを明らかにすることで、授受補助動詞文のスキーマのあり方を検証する。

1.4 本研究の構成と各章の概要

本節では、本研究の具体的な内容について述べる。図 1.8 に論文構成を示した。

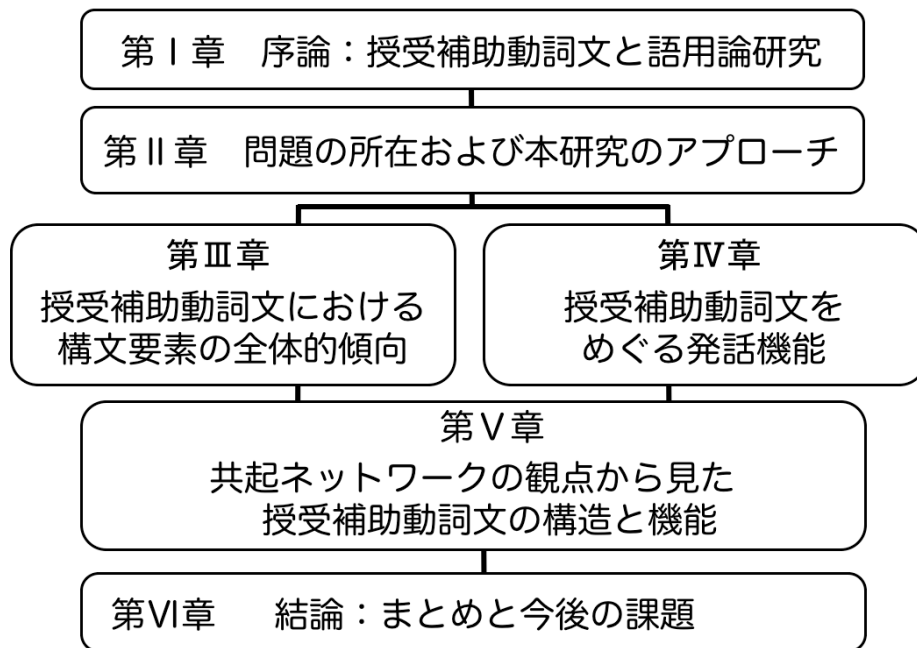


図 1.8 本研究の構成

第 I 章 序論：授受補助動詞文と語用論研究

第 I 章は、序論であり、本研究の研究背景を述べ、授受表現における研究史を概観した。また、理論的な枠組みである発話機能論の観点から考察する必要性と、構文化と共起の概念について述べた。そして、各章の構成と概要を示した。

第 II 章 問題の所在および本研究のアプローチ

第 II 章では、本研究に関連する先行研究について、構文構造と意味・機能の観点から概観し、問題点をそれぞれ指摘する。その上で、本研究のアプローチを述べ、取り扱うデータの特徴について説明する。次に、先行研究における本研究の位置付けを行う。恩恵性だけでは授受補助動詞文の発話機能の全てが説明しきれない点と丁寧さの概念の不明確さを問題点として取り上げる。

このような問題点を解決するための語用論的アプローチに基づく分析方法について

整理する。表現形式だけではなく、コンテキストの把握も重要であることから、様々な場面における授受補助動詞文を調査する。そして、本研究の課題を探索的に明らかにするため、研究方法としてコーパス調査法を採用し、コーパスから収集したデータを研究資料とし、出現頻度に基づく量的分析を行った。また、量的分析を補う形で、授受補助動詞文の使用状況や文脈を考慮に入れた質的分析を加える。

第III章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

第III章では、コーパスに現れた授受補助動詞文の用例を概観し、構文を成している要素の特徴を分析する。授受補助動詞文は、その特徴から、内部構造と外部構造に二分されるが、単文の述語における授受補助動詞文の構文的特徴として内部構造に着目する。特に、格パターンに注目し、用例を分析して、授受補助動詞文における主格名詞句と与格名詞句の特徴について述べる。そして、前項動詞句の語彙的な意味と授受補助動詞文との関係について分析する。

第IV章 授受補助動詞文をめぐる発話機能

第IV章では、授受補助動詞文を含む談話が持つ発話機能を分析する。本研究では、発話機能の分類基準について、聞き手が授受補助動詞文の参与者として直接関わっているか否かを基準とする。それは、〈対者性〉と〈没対者性〉が、授受補助動詞の常体・敬体の選択のみならず、授受補助動詞の選択にも影響を及ぼすためである。聞き手に対する〈対者性〉の場合、聞き手への働きかけの度合いにより、「聞き手への要求有り」「聞き手への要求無し」に分類した。前者には《情報要求》《行為要求》があり、後者には《意志・決意の表明》《関係作り・礼儀》《非難》《感情表出》がある。また、〈没対者性〉の場合には、客観的事柄の伝達として《情報提供》の発話機能のもとで授受補助動詞文が使用されていることについてコーパスの例を用いながら説明する。

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

第V章では、KH coder を利用し、共起度から共起ネットワークのグループを取り出し、格パターン、前項動詞、授受補助動詞の構文形式と、発話機能の関わりを共起ネットワークの図で表す。各形式において共起強度が強いフレームから、それに拡張さ

れたフレームを拡張フレームとして関連付け、どのような拡張のリンクで形成されているか考察する。また、共起ネットワークのモデルを用い、「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の使い分けの要因について探る。「～てくれる」「～てもらおう」文の使用区分における共起ネットワークの要因である、格情報や前項動詞の情報、発話機能との組み合わせの相違点を明らかにする。このようなケース・スタディを通じ、授受補助動詞文における構文化現象を探ることができると期待できる。

第VI章 結論：まとめと今後の課題

第VI章では、授受補助動詞文をめぐる表現形式、授受補助動詞を含む談話における発話機能、そして表現形式と発話機能との共起ネットワークという本研究の三つの論点をまとめる。また、残された問題を整理し、その解決案を述べる。本研究の分析結果をもとに、諸言語におけるタイポロジー研究と日本語教育分野において、発展する可能性を示す。

第II章 問題の所在および本研究のアプローチ

2.1 授受補助動詞文の構造と要素

授受表現の用法は、本動詞用法から補助動詞用法へと、そして語用論的に拡張してきている。そこで、語用論的拡張を考察することは、授受表現における構文化プロセスを理解することにつながる。物の移動を表す本動詞用法は(2.1)のように「主格＋与格＋対格＋授受動詞」で、主格²⁸、与格、対格を必須格²⁹とする3項述語である（角田 1991：90－94）。

(2.1) 授受本動詞の構造「主格＋与格＋対格＋授受動詞」

- a. 私が妹に本をあげた。
- b. 太郎は私に本をくれた。
- c. 私は次郎に本をもらった。

一方、授受補助動詞文は、対格は前項動詞による任意格となり、主格と与格の二項述語の構造を持つ。その基本構造は、「主格＋与格＋前項動詞＋接続助詞『て』＋授受動詞」である（宮地 1965、久野 1987[1978]、山岡 1990、山田 2004）。

このような構造について、山岡（1990：19－23）は、以下の(2.2)のように説明している。

²⁸ 「格」とは語と語の意味的關係を表すものであるが、本研究では述語成分が授受補助動詞文である文を取り上げるため、授受補助動詞文と主格（主にガ格名詞句）・与格（主にニ格名詞句）との關係について述べる。

²⁹ 必須格とは、述語を補うために、必ずなくてはならない要素である。言い換えると、ある述語には特定の必須格の存在が含意されているといえる。

(2.2) 渡辺さんが 小林さんに 本を 貸し てあげる。

+ガ human Ag +ニ human G +ヲ concrete O +貸ス

+ガ human Ag +ノタメニ human Bf +テアゲル

(ibid. : 20) ³⁰

(2.3) 渡辺さんが小林さんに本を貸してあげる。

渡辺さんが+小林さんに+[本を貸す]+て+あげる。

(2.4) 渡辺さんが小林さんに会ってあげる。

渡辺さんが+小林さんに+[会う]+て+あげる。

対格の「本を」は、前項動詞「貸す」の必須格であり、(2.4)のように対格を必須格としない用例から考えると、授受補助動詞文の構造において対格は、必須格ではないといえる。動詞「貸す」は動詞「教える」と同じく動作そのものに行動の向けられる対象を含んでいるため、基本的に同じ構造を持つと言えよう。

(2.5) 「もう少し辛くするとぐっと、うまくなるよ！」とか、言いながら一緒に味付け直すと、な～るほど～と、なる彼女だったら、いいんですけど、わたしは、ダンナにそうやって教えてもらいました。ホントにおいしくなるので、素直にきいてました。

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 OC09_05642 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(2.6) わたしは、ダンナに [ダンナがそうやって教えた] てもらいました。

また、(2.5)の「～てもらう」文において、前項動詞「教える」の構文は、(2.6)の[ダンナがそうやって教えた]という行為が、私のためであることを表しているが、前項動詞句では、「ダンナが」の主格で表示する格情報が、授受補助動詞文を含む際には、授受補助動詞文の格情報が優先され、「ダンナに」の与格と表示されることが分かる。

³⁰ human は人間、Ag は動作主 (Agent)、G は目標 (Goal)、O は対象 (Object) である。concrete は具体的で、Bf は受益者 (Beneficiary) を意味する (山岡 1990 : 19-23)。

2.1.1 授受補助動詞文における視点制約と共感度

授受補助動詞文は、本動詞の視点制約がそのまま補助動詞にも引き継がれているとされている（久野 1987[1978]）。本節では、授受補助動詞文における視点の問題について整理する。

第 I 章の 1.2.5 節で、言語における視点の問題について述べたが、ここで久野（1987[1978]）の概念を再掲しておく。

(2.7) カメラ・アングルの違い、即ち、話し手が何処にカメラを置いて、この出来事を描写しているかの問題にある。

（久野 *ibid.* : 129 = 注 3 を再掲）

次の図 II.1 は、話し手の視点をカメラの位置によって示すものであるが、(A) は中立的な視点、(B) は John 寄りの視点、(C) は Mary 寄りの視点を表す。

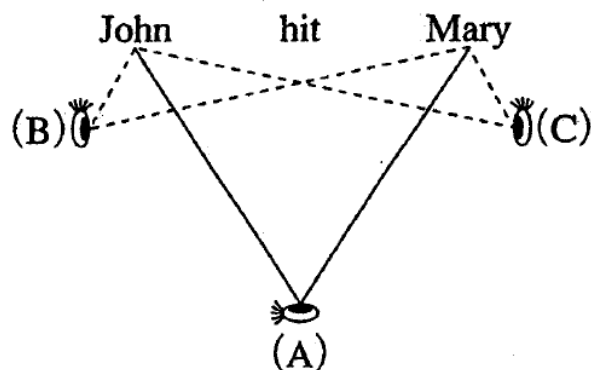


図 II.1 カメラ・アングル（高原・林宅男・林礼子 2002 : 19）

つまり、視点とは、「主語の指示対象寄り（久野 *ibid.* : 130）」であり、このカメラ・アングルが置かれる人物と話し手との心理的關係を「共感 (Empathy) 度」で説明することができる。次に共感度の定義を述べておく。

(2.8) 久野（1987[1978] : 134）による共感 (Empathy) 度の定義

文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy)

と呼び、その度合い、即ち共感度を $E(x)$ で表わす。共感度は、値 0（客観描写）から値 1（完全な同一視化）迄の連続体である。

(2.9) $E(\text{話し手}=1\text{人称}) > E(\text{その他}=2\text{人称}, 3\text{人称})$ ³¹

(高原・林宅男・林礼子 2002 : 22)

このような共感度は、一つの文において共感度関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない特徴を持つ（久野 *ibid.* : 136）。さらに、授受動詞における共感度関係を以下のように述べている。

(2.10) 補助動詞「クレル・ヤル」の視点制約

……テクレル $E(\text{非主語}) > E(\text{主語})$

……テヤル $E(\text{主語}) > E(\text{非主語})$

(久野 *ibid.* : 152–159)

本研究では久野 (*ibid.*) での視点制約を「～てもらう」系にも応用し、かつ格情報の意味役割を加え、以下のように整理する。

(2.11) 「～てあげる」系

・ 構文形式 \boxed{A} が \boxed{B} に [前項動詞句]て {やる／あげる／さしあげる}

・ 視点制約 $\boxed{E(\text{話し手}) \geq E(A)} > \underline{E(B)}$

・ 意味役割 $\boxed{\text{前項動詞の動作主}}$ $\underline{\text{受け手}}$

(2.12) 「～てくれる」系

・ 構文形式 \underline{C} が \boxed{A} に [前項動詞句]て {くれる／くださる}

・ 視点制約 $\boxed{E(\text{話し手}) \geq E(A)} > \underline{E(C)}$

・ 意味役割 $\underline{\text{前項動詞の動作主}}$ $\boxed{\text{受け手}}$

³¹ 記号「>」について、共感度の値は正確な数字で表わすようなものではなく、相対的な共感度の差を表わすものである。E(x) が E(y) より大きいことを意味する「 $E(x) > E(y)$ 」と表記した場合、E(話し手) = 1ということから、話し手にとって、y という人物より x のほうが、心理的距離が近いことを意味する。例えば、「 $E(\text{自分の子ども}) > E(\text{見知らぬ人})$ 」のような関係を示す。

(2.13) 「～てもらう」系

- ・ 構文形式 A が C に [前項動詞句]て{もらう/いただく}
- ・ 視点制約 $E(\text{話し手}) \geq E(A) > E(C)$
- ・ 意味役割 前項動詞の受け手 動作主

各授受補助動詞文を見ると、「～てあげる」系と「～てもらう」系では話し手自身もしくは共感度が高い人物 A が主格となり、相対的に共感度が低い人物 B・C が与格となる。「～てあげる」系の主格は前項動詞の動作主であるが、「～てもらう」系の主格は前項動詞の受け手である点が相違点である。一方、「～てくれる」系は、話し手自身もしくは共感度が高い人物 A が与格に現れ、共感度が低い人物 C が主格に位置している。つまり、話し手自身の格情報は、「～てあげる」系と「～てもらう」系では主格となり、「～てくれる」系においては与格に位置する。

このような解釈が従来の一般的な視点の捉え方である。しかし、(2.11)(2.12)(2.13)に対する記述はあくまでも本動詞用法に準じた一種の仮説であり、実際の構文構造については検証してみなければならない。その問題を示すため、以下の用例を挙げておく。

(2.14) (語り手=母親、亜矢=5才の娘)

保育園で行われた七夕まつりに、私は娘たちと兄と連れ立って出かけた。当時五歳の亜矢は、私に買ってもらったアイスクリームをなめなめ、もうそろそろ始まる催し物を待っていた。その横に、歯のまったくない口を開けて兄が立っている。

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 PB33_00003：坂田次男『子どもたちの人間宣言』明治図書出版：2003)

(2.15) 亜矢は私に買ってもらったアイスクリームをなめなめした。

(2.16) 「～てもらう」系 (= (2.13)を再掲)

- ・ 構文形式 A が C に [前項動詞句]て{もらう/いただく}
- ・ 意味役割 前項動詞の受け手 動作主
- ・ 視点制約 $E(\text{話し手}) \geq E(A) > E(C)$

第Ⅱ章 問題の所在および本研究のアプローチ

(2.17) 私は亜矢にアイスクリームを買ってあげた。

(2.14)は、小説の地の文で示された文であるが、下線に注目すると、(2.15)の構造であることが分かる。「～てもらう」系の構造を(2.16)で見ると、Aの主格には「亜矢」を、Cの与格には「私」が入り、前項動詞の受け手は「亜矢」で、前項動詞の動作主は「私」である。構文形式と格情報の意味役割には問題がないが、次の視点制約では、「 $E(\text{話し手}) \geq E(\text{「亜矢」}) > E(\text{「私」})$ 」となるが、話し手の共感度と「私」の共感度は「話し手＝私」であるため、一致するため、その間に他人である「亜矢」の共感度が介入することはできない。つまり、授受補助動詞文の視点制約により、(2.17)のように、話し手自身の行動を表す際には「～てあげる」系の使用が適切であるように思われるが、実際の用例からどのような意義があるかについて考察する必要がある。このように、文レベルと談話レベルにおける解釈の乖離をどのように整理するかという問題が残されている。また、このような用例は、視点と共感度の概念に新たな示唆を与えられると考える。

さらに、視点の問題において、視点というのは授受補助動詞文の参加者が人間であることを前提としているが、授受補助動詞文の使用は有情性の低いものを対象とすることもできる。

(2.18) そこでは、結構安らかに長い夜が行き、朝が来てくれた。

(吉本ばなな (2002[1991]) 『キッチン』角川文庫)

(2.19) つまり、相似比の数を両方とも3乗してあげると体積比になるんです。

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 OC12_02291 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(2.18)(2.19)のように、有情性の低い「朝」、または行為の受け手が不明な場合に使用された授受補助動詞文において、従来の視点と共感度の観点をどのように捉えるかという問題が残されている。したがって、本研究では、実際の用例を用いて分析することで、授受補助動詞文の構造について明らかにし、構造と要素の記述の精緻化を試みる。

2.1.2 前項動詞の語彙的な意味について

授受表現の本動詞用法では、行為の受け手にとって好ましくない物や事柄を表す際、授受動詞の容認度が低い。次の例を挙げて説明する。

(2.20) ? 一部の学生に不可をやった。

(2.21) 一部の学生に不可の成績をつけてやった。

((2.20)(2.21)は、益岡 2001 : 27)

(2.20)の授受表現文が不自然であると判断するのは、「不可」という意味が授受表現の本動詞用法として相応しくないと考えるためである。しかし、(2.21)に示されるように、補助動詞用法となると、文として容認できるようになる。この例では「不可の成績をつける」という話し手の行為が行為の受け手である「一部の学生」には好ましくない行為であっても、授受補助動詞文で表すことができる。授受補助動詞文では、前項動詞の持つ語彙的意味によって、参与者にとって利益になることであれ、負担になることであれ、様々な意味を持つ動詞を持つことができる。

(2.22) 渡辺さんが小林さんに本を貸してあげる。(=(2.3)を再掲)

(2.23) よくも私にそんなこと言ってくれたわね。

(2.22)では、渡辺さんによる「本を貸す」という行為が、小林さんにとって良いことであるという意味になる。一方、(2.23)では、相手による「そんなこと言う」という行為は、話し手にとって良くない時も、恩恵をもたらす時もあり、授受補助動詞の使用が可能である。このようなことから、授受表現において本動詞用法から補助動詞用法へ語用論的な拡張を経ていることが理解できる。

2.2 意味論レベルから語用論レベルまでの授受補助動詞文

意味論のレベルでは、授受補助動詞文は前項動詞の動作の受け手が利益や恩恵を得ることを表す表現として扱われてきた。本節では、利益・恩恵を表す授受補助動詞文の研究について概観し、恩恵性の概念について再定義を行う。また、非恩恵性のスタンスとして、利益・恩恵の意に相反する不利益・迷惑の意味としての使用を考察し、利益・恩恵と不利益・迷惑の意味で捉えることが困難である使用を新しい意味用法として分析する。

2.2.1 利益・恩恵を表す授受補助動詞文

授受補助動詞文は、利益・恩恵を伴う動作を表す表現として受益動詞とも呼ばれる。以下の用例は、利益・恩恵を表す授受補助動詞文の例である。

(2.24) (自分の子どもに) おもちゃを買ってやる。

(陣内 1998)

利益・恩恵の与え手と受け手の関係については、先述した意味役割と同じである。利益とは、前項動詞の行為により行為の受け手が得をするという意味であり、物質的に良い物を得ることから、実質的な物品を介さず益になることも含む。利益の意味については従来の概念で把握できるが、恩恵の概念については未だ明確にされていない。恩恵という概念を持って授受補助動詞文を捉えている研究が多くなされているにもかかわらず、恩恵とはどのようなものであるかという概念の整理が不足しているといえる。次の(2.25)は、日本語記述文法研究会編(2009a)による授受補助動詞文についての記述である。また、熊田(2001)では(2.26)のように、「～てくれる」文「～てもらう」文を捉えている。

(2.25)・恩恵的事態表示に関係する補助動詞構文を作るのは、「てあげる」「てくれる」「てもらう」などである。

・「てあげる」「てくれる」「てもらう」は、恩恵のやりとりを表す。(中

第Ⅱ章 問題の所在および本研究のアプローチ

略) 通常、恩恵があることを明示する場合に用いる。

(日本語記述文法研究会編 2009a : 121-127)

- (2.26)・「～てくれる」「～てもらおう」は、共に恩恵の受け手側に立ち、恩恵の受け手が、恩恵の与え手の行う(行った)行為に対して感謝の念を示す表現
- ・この際、話し手の意識は待遇意識との関わりという観点から、大きく分けて次の二つを意識すると考える。一つは「恩恵の与え手に対する待遇意識」であり、もう一つは「恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識」である。

(熊田 2001 : 16)

(2.25)(2.26)のように、授受補助動詞文の使用により、恩恵的な場面・事態を表すと述べられてはいるものの、恩恵というものが一体どのようなものであるかという考察がなされていなかった。

恩恵の概念を貫いている研究には、益岡(2001)と伊藤(2010)がある。本節では、益岡(2001)と伊藤(2010)における概念を考察し、問題点を指摘する。

益岡(2001)では、本動詞用法における恩恵性が、補助動詞用法へ拡張された領域にまで有効性を持つと述べている。

- (2.27) 太郎は僕にそのソフトの使い方を教えてくれた。

(益岡 2001 : 31=(1.23)を再掲)

(2.27)のように「教えた」ことによって行動の受け手が何らかの恩恵を被ると想定する際に使われるのが授受補助動詞文であると判断するのが意味論レベルでの考察である。益岡(2001)では、恩恵性の概念について次のように述べている。

- (2.28) 授受の対象である事物が当事者にとって「好ましい」ものであるという意味を表すということ

(益岡 *ibid.* : 27)

第Ⅱ章 問題の所在および本研究のアプローチ

つまり、恩恵性は、恩恵を被る、もしくは利益を得ることを表している。また、このような恩恵性は、授受補助動詞文は通常、事態の「好ましき」を表すことがその原点にあると述べている。しかし、上記の概念において当事者が行為の受け手であるか与え手であるか、もしくはそれ以外の人物であるかという判断まではなされておらず、曖昧な点があると指摘せざるをえない。

(2.29) 太郎が花子をほめてくれた。

(伊藤 (2010 : 148) の用例を一部修正)

(2.27)のように「太郎は教えてくれた」ことによって行動の受け手である「僕」が何らかの恩恵を被ると想定する際に使われるのが授受補助動詞文であると判断できるケースもあるが、(2.29)では、「太郎が花子をほめた」ことによって行動の受け手になるのは、「花子」であり、「花子」は話し手側の人物である。このように恩恵を受ける側である対象が既存の考え方のみでは明確にならない点が指摘できる。

また、伊藤 (2010) では、恩恵と受益の概念を分けて論じており、以下のよう

- (2.30) ・恩恵：事態とそれに関わる状況全体から、その直接的あるいは間接的な受影者の内面に生じた一つの感情のありかた
- ・受益Ⅰ：行為者の行為やあり方そのものから事態内の参加者が得るものとしての受益
 - ・受益Ⅱ：行為やあり方によって生じる、または生じた事態とそれに関わる状況全体から話し手側が得る受益

(伊藤 *ibid.* : 149)

伊藤 (2010) は受益を二つに分け、恩恵との関係において、当該事態の所在がどちらに置かれているかで分けている。

(2.31) 太郎が花子に手伝ってくれた。

(伊藤 *ibid.* : 146)

上記の(2.31)では、「太郎」の「手伝う」行為そのものから「花子」への受益が発生し、「事態とそれをめぐる状況全体から話し手に受益があることが『～てくれる』文で示され、結果的に話し手が恩恵と感じていることになる(伊藤 *ibid.*)」と述べている。しかし、「結果的に話し手が恩恵と感ずることになる」点において疑問が残る。(2.31)のように、話し手が当該事態に直接関わらない時、第三者同士における事態において、話し手が恩恵を感じていることについてその根拠が乏しいと考えるからである。

以上、(2.27)(2.31)の解釈のように、場面から「利益」や「恩恵」を感じさせる用例については、上記の概念でも説明可能な文もある。このような点は、恩恵性に該当する解釈であると考えられるが、その概念を精緻化するにはさらなる新たな解釈が必要であると考えられる。次節では、利益・恩恵の相反する意味として使用される授受補助動詞文について考察する。

2.2.2 不利益・迷惑を表す授受補助動詞文

授受補助動詞文には、利益・恩恵のみならず、不利益・迷惑を表す用法もある。次の(2.32)～(2.36)の例を挙げて説明する。

(2.32) 一部の学生に不可の成績をつけてやった。

(益岡 2001 : 27 =(2.21)を再掲)

(2.33) 腹が立ったので、怒鳴りつけてやった。

(金殷模 キム・ウンモ 2003 : 23)

(2.34) (非難の口調で) さっきはよくもやってくれたわね!

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 LBJ9_00085 : あかほり・さとる『Maze☆爆熱時空』角川書店 : 1995)

(2.35) おれに手紙をくれるとは不用意なことをしてくれたね。

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 OB3X_00110 : 筒井康隆『文学部唯

野教授』岩波書店：1990)

(2.36) そのことを絶対忘れてもらっては困る。

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 OM58_00001：国会会議録：2000)

(2.32)～(2.36)の文脈状況は、怒る、非難する、警告や注意をするといったものであり、相手の積極的フェイスを脅かす典型的な行為である。このような不利益・被害をもたらす行為は、従来の恩恵の概念からは相反するものである。しかし、上記のような場面のもとでも、授受補助動詞文が使用されていることが分かる。「不利益・被害」を表す使い方は、恩恵性において「恩恵」の反対に当たる概念である。

不利益・迷惑を表す表現として、受身文が挙げられるが、ここでは授受補助動詞文の用法との違いについて述べる。高橋（1985）では受身文と能動文を比較しながら、迷惑性について述べている。

(2.37) 雨が降った。

(2.38) 太郎は雨に降られた。

((2.37)(2.38)は、高橋 *ibid.*)

上記の(2.38)は「太郎」は迷惑を受ける対象、「雨」は迷惑をかける主体で表現しており、(2.37)と比較すると、被害の意味を付加している³²。これに対し授受補助動詞文は、授受補助動詞文を使用しなくても被害・迷惑の意であることは変わらないが、授受補助動詞文の使用によってある効果が狙われていると考える。

(2.32)のように、話し手が「一部の学生」に「不可の成績をつける」ことが「一部の学生」にとって「不利益・被害」であることを示すことになる。このようなことを(2.39)のように受身文で表す場合、ここでは話し手による事態への介入が含意されにくい。明確に表そうとすると「私によって」を入れる必要があるが、(2.40)のような文は語用論的に制限があると考えられる。

³² 高橋（1985）は、傍迷惑という用語を持って迷惑について説明している。傍迷惑とは、まわりの人が迷惑することを意味し、本研究では迷惑と統一して述べる。

(2.39) # 一部の学生が不可の成績をつけられた。

(2.40) ? 一部の学生が私によって不可の成績をつけられた。

このように、被害・迷惑を表す授受補助動詞文と受身文の差異は、話し手がどの立場に立っているかを表現できるか否かであり、受身文は話し手が行為の受け手に位置付けられる点で授受補助動詞文と異なる。

次に、先述した益岡（2001）による授受補助動詞文と受身文に関する以下のような特徴について本研究の立場を整理する。

(2.41) 日本語では当該の事態が当事者にとって好ましいかどうかと言語化される傾向が強いように思われる。好ましい場合は「てくれる」等の受益構文が、好ましくない場合は受動構文が使用される。

（益岡 2001 : 31）

益岡（2001）では、授受補助動詞文と受身文の選択において基本的には行動の受け手にとって好ましい行為であるか否かという判断が関係すると述べているが、授受補助動詞文においては、どちらの行為であっても用いられるため、一概に言うことはできないと考える。

また、「～てくれる」系「～てもらう」系は、話し手側が前項動詞行為の受け手となるため、次のような受身文に言い換えが可能であると判断できるが、文脈状況によって異なる意味となる場合がある。

(2.42) # （非難の口調で）よくも、やられたわねえ！

(2.42)は、(2.34)と比較すると、「よくも」という表現が向けられている対象が異なる。(2.42)はやられた側のほうを、(2.34)はやった側に対する修飾表現である。次は「～てもらう」の例を受身文に直した例である。

(2.43) そのことを絶対忘れられては困る。

(2.43)の「忘れられては困る」と(2.36)の「忘れてもらっては困る」は言い換えが可能である表現である。意味としては、「私が誰かに何かを忘れられては、私が困る」「私が誰かに何かを忘れてもらっては、私が困る」と同価値である。

以上、不利益・迷惑を表す授受補助動詞文の使用において考察を行った。先行研究ではこのように不利益・迷惑を表す授受補助動詞文についてあまり注目しておらず、論外とすることも多々あった。限られた先行研究における知見を述べ、未解決のまま残された問題について指摘した。本研究では、ある事柄が話し手によって好ましくない事態であると判断する際に、授受補助動詞文が選択されることもあるということを主張したい。また不利益・迷惑を表す授受補助動詞文と受身文との違いは、基本的に視点の置き方の違いにあると考えられる。このような問題を解決することで授受補助動詞文の用法をより深く理解できると考える。

2.2.3 利益・恩恵と不利益・迷惑の概念で解釈しにくい授受補助動詞文

本節では、次のような例について考察する。

(2.44) 蜂が花粉を花に運んでくれる。(山崎 1999b : 25)

(2.45) 魚は三枚におろしてあげます。(井島 1999 : 34)

(2.46) つまり、相似比の数を両方とも3乗してあげると体積比になるんです。

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 OC12_02291 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(2.44)のように、「～てくれる」文において「花粉を運ぶ」ことが有情性³³の低い「花」にとって恩恵を感じることであり難い。次に、テレビの料理番組で「魚は三枚におろします」でも作業内容は十分伝わるにも関わらず、

³³ 人間、動物のように有情物は生き物として有情性が高く、それに比べて、植物、物体などは有情性が低いものである。

(2.45)のようにわざわざ授受補助動詞文「～てあげる」文を用いる効果は恩恵性とは無縁のように思われる。(2.46)は数学問題の解説として、方法を説明するのに「～てあげる」文が使用されている。上記の例文はいずれも、以下のように授受補助動詞文がない形でも伝達しようとする事柄は変わらない。

(2.47) 蜂が花粉を花に運ぶ。

(2.48) 魚は三枚におろします。

(2.49) つまり、相似比の数を両方とも3乗すると体積比になるんです。

このような用例は、上記で述べている恩恵性や迷惑性での用例とは異なり、授受補助動詞文を使用しなくても、(2.47)(2.48)(2.49)のように使用できることが特記できる。したがって、これらの授受補助動詞文は、「恩恵性」の概念では説明しきれない用法であるといえる。授受補助動詞を含む文と、含まない文の相違点は、事柄に対して話し手が直接関与しているように見せかけているか否かである。このような表現は、蒲谷（1999）の「あたかも表現」と一脈相通ずるところがある。「あたかも表現」は話し手が発話の場や人間関係、表現形態を考慮し、典型的な表現ではなく、表現意図と関連のある表現を用いて、その効果を最大に得ようとするものである³⁴。ここでも、(2.47)(2.48)(2.49)のように客観的事柄を描写する際、授受補助動詞を含まない文が典型的な表現であるが、授受補助動詞を用いることで、話し手が当該事柄に関与しているように見せようとする意図を含意する。

本研究では、従来の研究で研究の対象外とされていた上記の例文が実際使用されていることに注目した。以上のように、既存の研究で述べられている恩恵性のレベルでは説明しきれない点があることから、本研究ではこのような「恩恵性」の曖昧さの問題を指摘し、語用論レベルで授受補助動詞文をどのように解釈するかについて探ることにしたい。

³⁴ 「あたかも表現」の定義概念については、第 IV 章の(4.79)で詳細に述べることにする。

2.3 授受補助動詞における構文と意味の結合と使用様相

2.1 節で考察した授受補助動詞文の構文的な特徴と 2.2 節で提示した構文の意味は結合した時に語用論的機能として働く。本節では、構文形式と意味との関係について考察する。

本研究では、具体的な事例研究として、まず「～てあげる」系の使い分けについて注目する。「～てあげる」系において参加者の関係性から生じる「～てやる」文「～てあげる」文「～てさしあげる」文の選択について問題点を指摘する。まず、「～てやる」文と「～てあげる」文における使い分けについて述べる。「～てあげる」系は前項動詞の行為の受け手が、話し手より共感度の低い人物が来るが、「～てやる」文の与格は動物や植物などの所有物や、話し手の家族など親しい関係である場合に用いられ、「～てあげる」系は話し手と同等な関係である人物が与格を取るとされていた。文化庁（1995）の「国語に関する世論調査」では、「やる」と「あげる」の使用について次の表 II.1 のような設問を設定しており、その結果は、以下の(2.50)のようにまとめられる。

表 II.1 文化庁（1995：22）による「やる・あげる」の設問

(1) ～ (3) それぞれに挙げた二つの言い方のうち、あなたがふつう使うものはどちらですか。

(1) 植木に水をやる /

植木に水をあげる

(2) うちの子におもちゃを買ってやりたい /

うちの子におもちゃを買ってあげたい

(3) 相手チームにはもう一点もやれない /

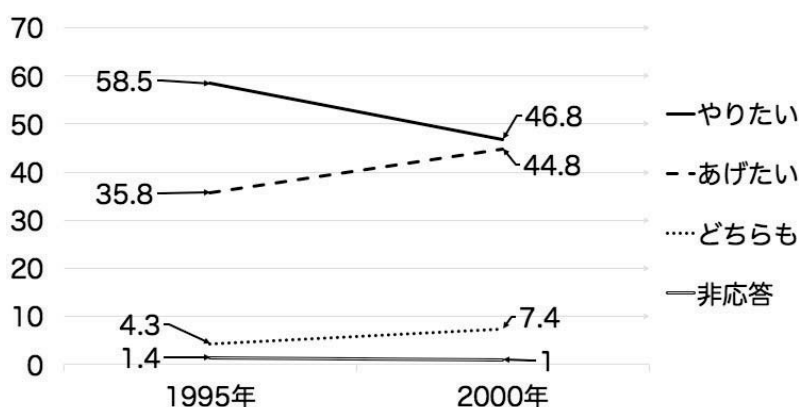
相手チームにはもう一点もあげられない

(2.50) 「やる」「あげる」のどちらを使うかについては、「やる」派が「あげる」派を上回る。「あげる」は、うちの子→植木→相手チームの順に多く使われている。この言葉遣いには地域差があり、（中略）。また、性差もある。

（文化庁 1995）

(2.50)の記述から、文化庁(1995)による調査では、「うちの子におもちゃを買ってやりたい」のほうが、「うちの子におもちゃを買ってあげたい」よりも多用されていることが分かった。一方、その後2000年に行った「国語に関する世論調査」では、以下のような変化が窺える。

図 II.2 は、1995 年調査と 2000 年調査を比較し、図にまとめたものである。その推移を見ると、「うちの子に～てやる」文の選択が減り、「うちの子に～てあげる」文の選択が大幅増えていることが分かる。この調査では、5 年間の変化は把握できるが、その後の推移については考察する必要がある³⁵。その後の推移について、参与者間の関係を調査することで予想できると考える。



(数値は%)

図 II.2 「うちの子におもちゃを買って{やりたい・あげたい}」の選択における変化

「子供におもちゃを買ってやる」か「買ってあげる」という問いについて陣内(1998:116)は、両者に対して世代別に容認する度合いが異なることを指摘し、これまでは「乱れ」と認識されてきたのが、最近では「揺れ」として認められるようになったと述べている。井島(1999:35)は利益・恩恵の意が薄ま

³⁵ 本動詞用法としての「やる」「あげる」文の使い分けにおいて、庵・高梨・中西ほか(2000)では次のように記述している。

「以前は、『花に水をあげる』『犬にえさをあげる』はおかしいとされていましたが、『あげる』が『やる』よりも丁寧なことばであるという意識から許容されるようになってきています(ibid.:110)」

第Ⅱ章 問題の所在および本研究のアプローチ

って授受の相手を必要としない配慮・気配りとしての使用について述べ、この点について検証する必要があると指摘している。さらに、山本（2003a）によると、「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文には対人的なコミュニケーション機能があり、共通して話し手が授受行為の受け手より上位であることを示すが、「～てさしあげる」の文に関する分析はなされておらず、各表現に関する用法を調べる必要があると考える。

「～てくれる」と「～てもらう」文を比較し、考察した研究について、構造の面から考察した研究には堀口（1987b）、山田（2002）がある。堀口（1987b）では両表現の構造とムード的意味の相違点について述べており、主格名詞句と与格名詞句を持つ構造であるとまとめている。またムード的意味の相違点について、本動詞用法としての「くれる」系と「もらう」系を比較し、置き換えが可能かどうかという問題には、「伝えているコトの意味が同じであるか、非文ではないか、文脈の中で適切であるか（*ibid.* : 71）」が手がかりであると述べている。また、山田（2002）は構造面の特徴から、「日本語では動作主を主語におかない方が動作主に対する敬意を表しやすい（*ibid.* : 49）」と述べ、「～てもらう」が「～てくれる」より「動作主に対する待遇上の配慮が強く感じられる（*ibid.*）」と説明している。しかし、このような説明が可能であるのは与え手が目の前にいて、聞き手である場合には容認されるが、与え手が目の前にいない場合にも両表現は使用できるため、参加者の範疇を広げて考察する必要がある。

また、両表現を配慮意識の面から分析した研究には熊田（2001）、山本（2002a）、金澤（2007）、石山（2008）がある。熊田（2001）では、「発話の場における恩恵の与え手の在・不在」を分析の枠組みとして提示しているが、これが原因となるいくつかの用例があると述べてはいるものの、その使い分けにおける影響については分析がなされていない。金澤（2007）は、各表現の敬語形態である「～てくださる」と「～ていただく」のうち、話し言葉の実例から、「～ていただく」の方が高い割合で使用されていることを確認した。一方、石山（2008）では、「『～てくれる』よりも『～てもらう』の方が包括的により丁寧であると断ずるだけの理論的根拠はないように思われる（*ibid.* : 41）」と述べている

が、このような考えに賛同し、「丁寧」であるかどうかの判断³⁶は状況と個人の判断によるものであるため、一概には言えないと考える。それ以前に、「～てくれる」系と「～てもらおう」系が当該状況においてどのような役割を果たすのかに、その要因があると推測する。例えば、「友だちがカレーを作ってくれた」「友だちにカレーを作ってもらった」のように、入れ替え可能な例がある。しかし、「カレーを作ってくれて、ありがとう」と、感謝表現と共起³⁷している表現において、「～てくれる」を「～てもらおう」に差し替えてみると、「??カレーを作ってもらって、ありがとう」は不自然さを感じる文である。このことから、発話の働きによる「～てくれる」系と「～てもらおう」系の使用を考察することで、両表現の使い分けをさらに明確にすることができると考える。

2.4 本研究のアプローチ

上述した問題の所在から、本研究で扱う課題について整理すると以下のように3点にまとめられる。

(2.51) 本研究で扱う課題のまとめ

課題1：授受補助動詞文をめぐる構文的特徴を把握する。

課題2：授受補助動詞文が使われる発話機能の特徴を明らかにする。

課題3：授受補助動詞文の構造と発話機能との関わりについて共起ネットワークを手掛かりに分析する。

³⁶ 「丁寧」に関する日本語母語話者へのアンケート調査結果を見ると、敬語として相手を敬う気持ちを表すこと以外に、動作を慎重に行う気持ちを表すことの意味を持つ時もある（小野・朱・許ほか 2013）。このような指摘から、「～ていただく」が「～てくださる」より丁寧に思われるとの判断は、どちらの意味に該当するかの判断が個人差によるものであることが分かった。

³⁷ 共起（collocation）とは、ある語と語が同時に出現する頻度の強弱を表すものであり、共起性が強いものの例として慣用句などが挙げられる。

2.4.1 語用論研究で解決できると考えられる課題

(2.51)で提示した課題を解決するため、談話における授受補助動詞文の発話機能について語用論という理論的枠組みで分析を行うこととする。語用論とは、「言語表現とそれを用いる話し手と文脈の関係(高原・林宅男・林礼子 2002)」を研究するため、授受補助動詞文がどのような時にどのように使用されているかの考察を課題とする。本研究で「どのような時に」に相当する概念は語用論的状况を意味し、「どのように」に相当するのは授受補助動詞文の構文的な特徴と話し手の発話意図の実現を図る発話機能である。

発話機能とは、「発話の向けられた相手に対して、どのような効果を生じさせようとするものかの条件(国立国語研究所編 1987:153)」である。例えば、「よくもやってくれたね」では「~てくれる」を用いることで、相手の「やった」行動に対して非難表明という発話機能が働いている。また、「発表します」よりも、授受補助動詞文を用いた「発表させていただきます」は、宣言という発話機能が現れている。その際、授受補助動詞文の様々な発話機能を主観性(話し手が事柄をどう見ているかの判断・評価を表す)と間主観性(聞き手に対する話し手の態度や配慮を表す)という観点から分析できる。つまり、授受補助動詞を含む文は、話し手の主観的態度を示す表現と、聞き手への対人的態度や配慮を示す表現として眺めることができる。このように日本語の授受補助動詞文を主観性の観点から捉える理由は、他言語における授受補助動詞文の主観性との相違点が見られるためである。

(2.52) ?先生のお鞆を持ってさしあげます。

(2.53) (2.52)に対する韓国語表現

선생님 가방을 들어 드릴게요.

[seonseongnim gabang-eul deuleo durilgeyo]

(2.54) お鞆、お持ちします。

(2.55) (2.54)に対する韓国語表現

?가방 들게요.

[gabang dulgeyo]

例えば、(2.53)のように韓国語では「先生のカバンを持ってさしあげます」は容認されるが、日本語では(2.52)のように違和感を覚え、(2.54)のように「カバン、お持ちします」と間主観性の弱い表現のほうが好まれる。しかし、韓国語で(2.55)の「カバン、お持ちします」というと、「お持ちします(들게요[dulgeyo])」の韓国語の断定表現は先生の私的領域に踏み込む危険性があるため、失礼な言い方となる。このように発話場面を考慮に入れた語用論的分析を通じ、日本語の授受補助動詞文を理解するために主観性・間主観性の概念は有効性を持つといえる。

本研究は授受補助動詞文の発話機能について、主観性の観点から各発話機能の位置づけを解明する。語用論的アプローチにより、多様な場面における授受補助動詞文の発話機能を実証的に提示することができると思う。さらに、主観性と間主観性の概念を援用し、話し手が事態把握を主観的に捉えているか、聞き手への態度を示そうとしているかを把握することで、日本語の授受補助動詞が好まれる要因について解明できると考える。このような点は、従来の授受補助動詞研究には見られなかった新たな視点の提言が本研究のオリジナリティである。

2.4.2 用例収集対象とするコーパスについて

本研究では、授受補助動詞文が使用された一文のみならず、授受補助動詞文が使用された談話にも注目する。談話とは、書き言葉の性格のものから、話し言葉の性格を持つものも含まれており、「コミュニケーションのために言葉を使うこと（砂川 2005 : 4）」である。

本研究で取り扱うデータは、コーパスから収集した情報を主とする。『現代日本語書き言葉均衡コーパス（『Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese』、以下『BCCWJ』）』は、国立国語研究所が開発した日本語コーパスで、現代日本語の全体像を把握するために構築されたコーパスである。書籍・雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律等のジャンルにまたがり、1億430万語のデータを収録している。

『BCCWJ』を収集対象とした理由は、規模の面において約1億語以上の規模

第 II 章 問題の所在および本研究のアプローチ

と大きく、様々なジャンルにおいて用例を収集できる利点があり、「ある言語（の部分集合）の特徴や性質を知るために、その言語（の部分集合）の多様性をできるだけ忠実に反映するようにバランスよくサンプルを収集して構築（柏野・丸山・稲益ほか 2009：5）」された均衡コーパスであるためである³⁸。また、出所や文脈の把握が可能である点においてもデータとしての有効性を持つと考える。

コーパスのタイトルには「書き言葉」という用語が含まれているが、データの詳細を見ると、書き言葉の性格の言葉のみ格納されているわけではない。小説の会話文、国会議事録、Yahoo!知恵袋、ブログなどの情報は、談話の性格上、書き言葉の性格より話し言葉の性格の要素を含むといえる。『BCCWJ』における各テキストの種類と語数について表 II.2 に示す。

表 II.2 『BCCWJ』の収録テキストの種類と語数（前川編 2013：123）

| | | | | | |
|----|-------|-----------|-------|-------|-----|
| 書籍 | 6,270 | 教科書 | 90 | 韻文 | 20 |
| 雑誌 | 440 | 広報紙 | 380 | 法律 | 110 |
| 新聞 | 140 | Yahoo!知恵袋 | 1,030 | 国会会議録 | 510 |
| 白書 | 490 | Yahoo!ブログ | 1,020 | | |

（単位：万語）

つまり、このコーパスのタイトルにおける「書き言葉」とは、図 II.3 のように、書き手が読み手に対して伝達する媒体が「書き言葉」であることを意味するといえる。本研究においては、このような性格を踏まえて、テキストの種類における話し言葉的性格も分析範囲に含め、分析を進める。

³⁸ 「綿密な調査に基づいた設定（コースデザイン）を持ち、母集団に対する統計的な代表性を有するサンプリングが実施されている（前川編 2013：123）」と評価されている。

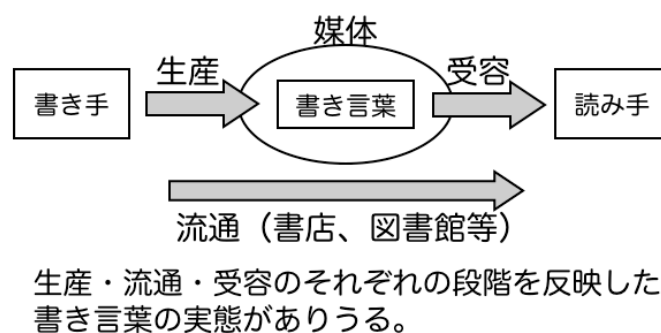


図 II.3 『BCCWJ』における「書き言葉」の意味³⁹

『BCCWJ』に収録された用例の中で、「書籍」「教科書」「韻文」「雑誌」「広報紙」「法律」「新聞」「白書」は「書き言葉的性格の談話」と判断する。また、国会会議録は「話し言葉的性格の談話」とする。最後に、「Yahoo!知恵袋」「Yahoo!ブログ」はネットの書き込みであるが、書き言葉的性格と話し言葉的性格の談話が混在しているといえる。このようなネットからのデータを「ネット言葉による談話」として区別する。以上の区分で全体用例の数の割合の表 II.3 を図に表したのが図 II.4 である。

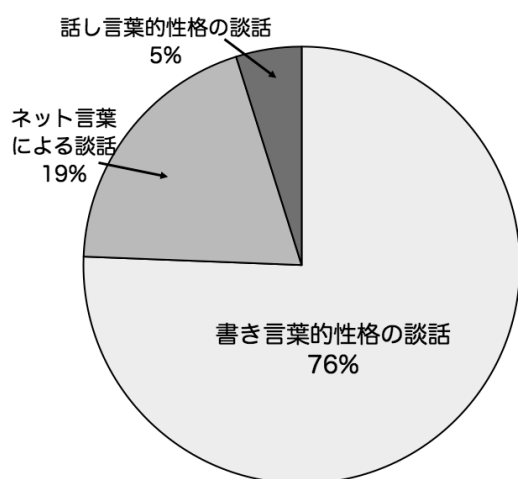


表 II.3 『BCCWJ』における談話分類

| 談話の性質による分類 | 用例 |
|------------|--------|
| 書き言葉的性格の談話 | 7,940 |
| ネット言葉による談話 | 2,050 |
| 話し言葉的性格の談話 | 510 |
| 合 計 | 10,500 |

(単位：万語、数値は実数)

図 II.4 『BCCWJ』データの談話性格

³⁹ 国立国語研究所の「コーパス開発センター」ウェブ・ページに掲載された図を改めて書き直した。 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/sampling.html
(アクセス：2017年11月20日)

「書き言葉的性格の談話」は、典型的な書き言葉の特徴を持つ談話のことであるが、小説のように、書き手によって作られ、表現に関して推敲がされていて、完結されたテキストである点が特徴として挙げられる。一方、「話し言葉的性格の談話」は、音声によって発せられることが前提となり、聞き手を想定した対面性を持ち、一旦発話されたことが記録されるため瞬時性を持つといえる。

また、「ネットにおける言葉の性格」について見てみると、書き言葉と話し言葉の性格が混在し、またネットのみの特徴として現れる言葉が増えつつある。チャット用語や、笑いを「www」で表すなど、ネット上でコミュニケーションをとるために新たな表現と用法が存在する。そのため、本研究では「ネット言葉による談話」と区分し、「書き言葉的性格の談話」と「話し言葉的性格の談話」「ネット言葉による談話」の3種類に分けて論を進める。

本研究では文字化されているコーパス・データを用いて、談話において授受補助動詞文の形式がどのような場面にどのような形で現れているかを観察し、その形式が選ばれた語用論的解釈を追求する。

2.4.3 コーパスによる用例調査方法

本研究の主な研究方法について述べる。まず各授受補助動詞文の出現頻度数を算出し、数量的な傾向を示し、その用例を中心とした帰納的記述を採用する。

はじめに、「中納言」を利用し、各授受補助動詞文を含む用例を収集する。そのデータを Microsoft Excel で整理し、必要に応じて「ひまわり」と「秀丸エディタ」を用いて分析を行った。「中納言」における検索設定を以下の図 II.5 で示す。

図 II.5 で示したように「キー」の設定には、「アゲル」と入力し、前方共起 1 に接続助詞である「テ」を入れ、前方共起 2 に「動詞」と設定する。これで「～てあげる」文の用例が収集できる。



図 II.5 「中納言」を利用した「～てあげる」文の収集設定画面

また、『BCCWJ』の検索システムである「NINJAL-LWP for BCCWJ⁴⁰」を利用することで、前項動詞とのコロケーション関係の頻度の MI スコアの値を求めることができた。当該検索システムの画面を図 II.6 に示す。

次に、「秀丸エディタ」を利用した調査方法について簡単に述べる。「秀丸エディタ」では定型表現の検索が可能だが、くだけた表現の用例も自動的に拾い上げるため、接続助詞「て」と授受補助動詞文の活用形における語幹をソーラスの検索語に設定することで、より正確な情報が得られるように工夫をした。調査画面の例として、図 II.7 を示し、用例収集のまとめ方については、図 II.8 に表す。

⁴⁰ 「NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)」とは、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のデータを国立国語研究所と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムであり、本研究で取り扱っている用例が含まれているものである。詳細は「参照したインターネット・サイト」に記した。



図 II.6 「NINJAL-LWP for BCCWJ」のツールを利用した前項動詞とコロケーションの確認画面⁴¹

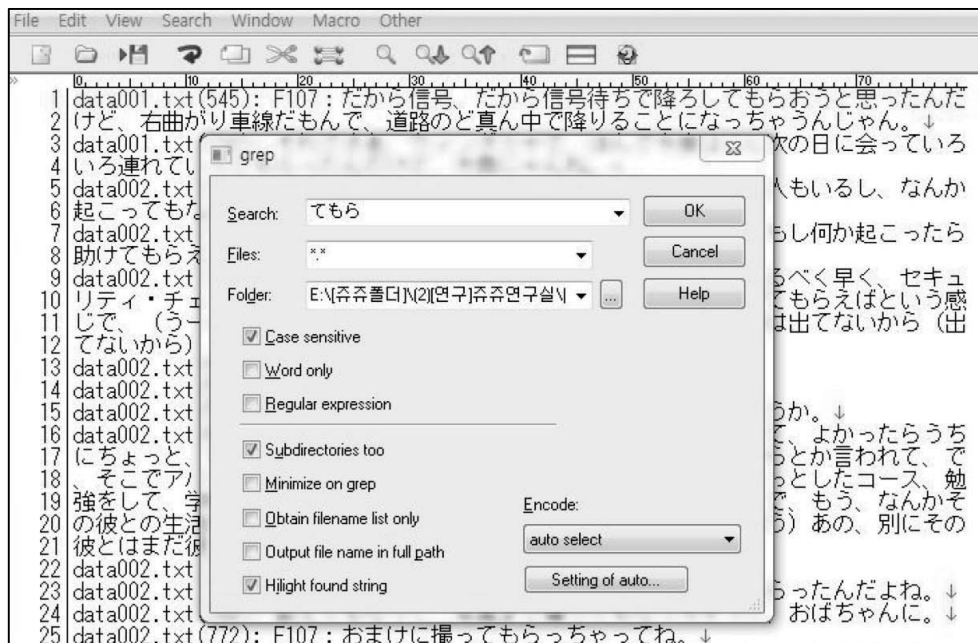


図 II.7 「秀丸エディタ」を利用した「~てもら」文の調査画面

⁴¹ 確認画面のサンプルは「NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)」のページから「差し上げる」を検索語にして得た結果である (2017年11月29日)。

第 II 章 問題の所在および本研究のアプローチ

| | A | C | D | E | Q | U | V |
|----|------------|-------------------------------|-------|-------------------------------|--------|-----------|-----------|
| 1 | サンプルID | 前文脈 | キー | 後文脈 | レジスター | 執筆者 | 生年代 |
| 2 | LBa0_00002 | (らむぶ 舎) を 参考 に (し) (て) | いただき | たい # (八+ 五 、 一 ○) | 図書館・書籍 | 岡庭 昇(著) | 1940 |
| 3 | LBa1_00003 | して 史料 編纂 所 で 鑑定 (し) (て) | いただい | た こ と が ある 。#桃 氏 の お 家 は | 図書館・書籍 | 中村 元(著) | 1910 |
| 4 | LBa1_00006 | 注意 を 念頭 に 、 読 み 進 め (て) | いただき | たい # ト ラ ン ス パ ー ソ ナ ル な ア | 図書館・書籍 | フランシス・ヴ | //1940 |
| 5 | LBa1_00016 | ま じ て く る 。#第 一 に (考 え) (て) | いただき | たい の は 、 基 本 的 な 方 向 こ そ 統 | 図書館・書籍 | オットー・フリ | 1900/1940 |
| 6 | LBa2_00006 | 、 そ れ を 一 つ は っ き り (し) (て) | いただき | たい と 思 う 。#○ 小 澤 委 員 長 # | 図書館・書籍 | 塩田 庄兵衛(著) | 1920 |
| 7 | LBa2_00018 | に 感 激 し 、 共 訳 者 に (な っ) (て) | いただけれ | ば 稿 料 を 分 け たい と 書 き 送 っ て し | 図書館・書籍 | 藤野 幸雄(著) | 1930 |
| 8 | LBa2_00026 | り ま す 。#い っ ま で も (続 け) (て) | 戴け | ま し た ら 本 当 に う れ し い 事 だ が と | 図書館・書籍 | 一海 知義(著) | 1920/1880 |
| 9 | LBa2_00035 | から 、 更 に 研 究 を (す ず め) (て) | いただき | たい と と 、 全 会 員 の 前 で 話 さ れ | 図書館・書籍 | 近盛 晴嘉(著) | 1910 |
| 10 | LBa3_00009 | て い た 頃 を 頭 に (浮 か べ) (て) | いただき | たい と 思 い ま す 。#そ う 、 赤 ち ゃ ん | 図書館・書籍 | 安斎 千鶴子(著) | 1940 |
| 11 | LBa3_00027 | 新 聞 記 者 に 体 験 記 を (寄 せ) (て) | いただい | た が 、 こ れ な ん か は 異 色 の リ ポ | 図書館・書籍 | 実著者不明 | |
| 12 | LBa3_00027 | り 、 手 紙 や 電 話 で 激 励 (し) (て) | 戴い | た り 、 ご 寄 附 を 戴 い た り 致 し て | 図書館・書籍 | 実著者不明 | |
| 13 | LBa3_00027 | 復 だ た し さ が 、 よ く (わ か っ) (て) | いただける | の で は な い の で し ょう か 。# 夜 | 図書館・書籍 | 実著者不明 | |
| 14 | LBa3_00027 | 行 を 、 ど う し て も 禁 止 (し) (て) | いただき | たい の で あ り ま す 。 | 図書館・書籍 | 実著者不明 | |
| 15 | LBa3_00028 | で こ れ か ら 三 年 間 (過 ご し) (て) | いただく | の に 不 足 の な い 、 度 胸 の す わ っ | 図書館・書籍 | 樋口 容視子(著) | 1940 |
| 16 | LBa3_00036 | た ば か り で 、 早 速 贈 呈 (し) (て) | いただき | 、 一 読 し 、 翻 訳 す こ と に 決 め | 図書館・書籍 | 無藤 隆(著) | 1940 |
| 17 | LBa3_00044 | です 。#残 念 な が ら 、 聞 い (て) | いただい | た と お り 、 こ の う そ つ き た ち は 、 | 図書館・書籍 | 実著者不明/飯書 | 1920 |
| 18 | LBa7_00019 | 「リ ース 船 長 」 を (思 い 出 し) (て) | 頂き | たい)、 い っ つ の 間 に か ど ん な に | 図書館・書籍 | 庄野 潤三(著) | 1920 |
| 19 | LBa9_00011 | す 。#先 生 の ご 本 を (読 ま し) (て) | いただい | て 、 お も ろ い で す な 。#女 の 葛 藤 | 図書館・書籍 | 田辺 聖子(著) | 1920/1920 |
| 20 | LBa9_00011 | の 俳 優 が 多 い か ら 錯 覚 (し) (て) | いただい | て い る だ け で 。#田 辺 # そ れ は 大 | 図書館・書籍 | 田辺 聖子(著) | 1920/1920 |
| 21 | LBa9_00012 | # そ の 点 は 含 ん で (お い) (て) | いただき | た く 存 じ ま す 」# 景 虎 の 言 葉 に | 図書館・書籍 | 咲村 観(著) | 1930 |
| 22 | LBa9_00026 | 出 た つ い で に 、 ぜ ひ (聞 い) (て) | いただき | たい こ と が あ り ま す 。#そ れ は 、 | 図書館・書籍 | アンネ・フラン | 1920/1930 |

図 II.8 収集用例の整理画面

2.5 本章のまとめ

本章では、本研究と関連がある先行研究を分析し、未解決とされている問題点について指摘し、認知語用論的研究を通じて解決できる可能性について述べた。

まず、従来の研究では、授受補助動詞文を利益・恩恵を表す表現として捉えてきたことに対して、利益・恩恵の概念で解釈することが困難である使い方を指摘した。この問題を解決するため、授受補助動詞文の用法と、使用様相について探る必要があり、使用された文脈状況を探る語用論的アプローチが必要であることを述べた。

次に、本研究で研究分析の対象としているコーパス『BCCWJ』について、その概要と特徴について説明し、分析方法としてのツールである「中納言」について本研究の立場を述べた。

次章からは、『BCCWJ』から収集した授受補助動詞を含む文が、どのような表現形式で用いられ、どのような談話の発話機能で使用されているかについて分析し、表現形式と発話機能を共起ネットワークという観点から考察を行う。

第III章 授受補助動詞文における構文要素の 全体的傾向

本章ではコーパスから授受補助動詞「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」「～てくれる」「～てくださる」「～てもらう」「～ていただく」文を含む用例を収集し、文を構成している要素を分析することにより、授受補助動詞文の構造を探る。

コーパスの特徴については上述した通りであるが、本章では全体的な出現用例の数を述べる。また、本研究で用いた構文の要素や意味・機能について説明する。最後に、授受補助動詞における全体的な傾向や出現数を示し、構造と意味機能との関係について述べる。

3.1 収集データの概要

本研究において収集するデータについて数量的分布の概要を述べる。本研究では、『BCCWJ』の「中納言」システムを使い、各授受補助動詞文「～てやる・あげる・さしあげる」「～てくれる・くださる」「～てもらう・いただく」文を含む用例を抽出する。それぞれの出現用例の数は以下の通りである⁴²。

『BCCWJ』の調査により得られた授受補助動詞文は、「～てあげる」系は1,302用例（「～てやる」文が1,167用例、「～てあげる」文が34用例、「～てさしあげる」文が101用例）、「～てくれる」系は110,847用例（「～てくれる」文は57,548用例、「～てくださる」文は53,299用例）、「～てもらう」系は40,764用例（「～てもらう」文は24,163用例、「～ていただく」文は16,601用例）が出現した。出現用例の数を次の表 III.1 に示す。

⁴² 各表現における抽出シソーラスについては、【参考資料1】に記した。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

表 III.1 『BCCWJ』における授受補助動詞の出現用例の数（総数）

| 授受補助動詞文の形式 | | 用例の数 |
|-------------|------------|---------|
| 「～てあげる」系 | 「～てやる」文 | 13,498 |
| | 「～てあげる」文 | 8,010 |
| | 「～てさしあげる」文 | 218 |
| 「～てあげる」系の小計 | | 21,726 |
| 「～てくれる」系 | 「～てくれる」文 | 57,548 |
| | 「～てくださる」文 | 53,299 |
| 「～てくれる」系の小計 | | 110,847 |
| 「～てもらう」系 | 「～てもらう」文 | 24,163 |
| | 「～ていただく」文 | 16,601 |
| 「～てもらう」系の小計 | | 40,764 |

（数値は実数）

次に、各コーパス別出現ジャンルの性格による分析結果であるが、「書き言葉的性格の談話」「話し言葉的性格の談話」「ネット言葉による談話」のジャンルを設け、分析を行った。各ジャンルの詳細について説明する。「書き言葉的性格の談話」は、用例の出典が、出版（新聞・書籍・雑誌）、図書館（書籍）、特定目的（ベストセラー・広報誌・教科書・白書・韻文）とカテゴリ分けされているものである。『BCCWJ』における全体用例の数は 1 億 5 千万語であり、その中で書き言葉的性格を持つ出典は、7,940 万語と、全体の 76% に相当する。次に、特定目的（国会会議録）を話し言葉的性格のジャンルと分類する。『BCCWJ』における全体用例の中で話し言葉的性格を持つ出典は、2,050 万語であり、全体の 19% に相当する。また、特定目的（ブログ・知恵袋）のカテゴリーの文をネット言葉的性格のジャンルと分類する。『BCCWJ』における全体用例の中でネット言葉による談話のジャンルは、510 万語であり、全体の 5% に相当する。まず、『BCCWJ』における授受補助動詞の出現数を以下の表に示す。

表 III.2 『BCCWJ』における「～てあげる」系の出現数

| ジャンル \ 表現 | 「～てやる」 | 「～てあげる」 | 「～てさしあげる」 |
|------------|--------|---------|-----------|
| 【書き言葉的性格】 | 1,054 | 4,360 | 147 |
| 【話し言葉的性格】 | 973 | 110 | 10 |
| 【ネット言葉的性格】 | 2,071 | 3,540 | 61 |
| 合 計 | 13,498 | 8,010 | 218 |

(1 億 1 千万語当たりの実数)

表 III.3 『BCCWJ』における「～てくれる」系の出現数

| ジャンル \ 表現 | 「～てくれる」 | 「～てくださる」 |
|------------|---------|----------|
| 【書き言葉的性格】 | 38,777 | 17,468 |
| 【話し言葉的性格】 | 567 | 761 |
| 【ネット言葉的性格】 | 16,410 | 33,506 |
| 合 計 | 55,754 | 51,735 |

(1 億 1 千万語当たりの実数)

表 III.4 『BCCWJ』における「～てもらう」系の出現数

| ジャンル \ 表現 | 「～てもらう」 | 「～ていただく」 |
|------------|---------|----------|
| 【書き言葉的性格】 | 16,324 | 5,563 |
| 【話し言葉的性格】 | 1,365 | 4,415 |
| 【ネット言葉的性格】 | 9,326 | 4,018 |
| 合 計 | 27,015 | 13,996 |

(1 億 1 千万語当たりの実数)

3.2 授受補助動詞文における構文的な特徴について

本節では、授受補助動詞における構文的な特徴を探るための理論的な土台について述べる。構文論の研究として、英語の構文分析を中心にした研究に、

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

Goldberg (1995) 等があり、日本語における構文論の理論的枠組みについて、Shibatani (1994)、天野 (2011)、尾谷・二枝 (2011) 等の研究がなされている。

Goldberg (1995) における構文とは「特定の意味構造とそれに統合する形式とを併せたもの (ibid. : 4)」であり、特に動詞と構文の相互作用を把握することが重要であると主張している。天野 (2011) では、構文を「類型的意味を抽象させた、ひとまとまりの文類型」(ibid. : 8) であると述べている。構文タイプには様々な下位カテゴリーが想定でき、そのうち、カテゴリーの拡張について述べている。

授受補助動詞文を構文論的に考察した研究は多くなされているが、主に本動詞の構造分析に関する研究には奥津 (1986) がある。補助動詞文について、まず視点の観点から考察した研究には久野 (1987[1978])、高見・加藤 (2003a) があり、発話機能の中、依頼行為に注目した研究は山岡 (1993)、山本 (2002b)、恩恵性の概念を中心とした研究は、益岡 (2001)、守屋 (2002)、伊藤 (2010) がある。また、受身文など他の構文と比較分析した研究には、三宅 (1996)、澤田 (2008)、英語や韓国語等他言語との構文比較をしている研究には奥津 (1979)、澤田 (2014) がある。

- (3.1) 太郎が花子にチョコを買ってあげた。
- (3.2) 太郎が花子にチョコを買ってくれた。
- (3.3) 花子が太郎にチョコを買ってもらった。
- (3.4) ～ が ～に ～てあげる・～てくれる・～てもらう

2.1 節で指摘した通り、授受補助動詞文の構造は、(3.4)のように、「主格⁴³＋与格＋前項動詞＋接続助詞『て』＋授受動詞」である（宮地 1965、久野 1987[1978]、山岡 1990、山田 2004）と述べられてきた。しかし、次のような例では、上述の構造から外れた形式を持つことが指摘できる。

⁴³ 本研究における分析でも、主格を表す助詞について「は」「が」で示されたもの限定し、「も」や「こそ」の名詞句の分析は除外する。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.5) *僕は花子にゴミを捨ててやった。

(Shibatani 1994 : 43)

(3.6) *太郎は私の妹に褒めてくれた。

(寺村 1990)

(3.7) *私は医者の一言に安心させてもらった。

(高見・久野 2014 : 170)

(3.8) 悪いことがあったなんて、わたしちっとも思っていない。雨もちゃんと降ってくれた。

(BCCWJ LBc9_00096 : 青野聰『七色の逃げ水』講談社 : 1988)

(3.9) a.*雨が降ってやった。

b. 雨が降ってくれた。

c.*雨に降ってもらった。

((3.8)の例をもとに作例)

(3.5)では、話し手が「ゴミを捨てる」という行為を行っているが、与格で表示されている「花子に」が相応しくないため、不適格文である。助詞「に」で表示される格情報は、場所もしくは到着点を表す格が優先され、「花子のところに」や場所を表す格情報を入れると容認度が上がる。またここで「花子」に利益・恩恵を与えるという意味があることを前提として「花子のために」という節で表さなければならない。(3.6)では、「太郎」が「私の妹」に向かって褒めていけば、褒める行為の対象を表す格である助詞「を」が優先され、「私の妹を褒めてくれた」で容認度が上がる。(3.7)では、与格の格情報として安心させてくれた人物が位置され、「医者に」と人を表す格情報を示すことで容認度が上昇する。「医者の一言」というのは安心できた要因となる出来事であるが、当該文においては与格としては相応しくないことが分かる。また、(3.9)で分かるように、同じ構造を持っていても、授受補助動詞文によって使用可能・不可能が異なるといえる。「雨が降る」という無意思動詞句の表現に関して、「～てくれる」系が使用できる傾向について考察するため、前項動詞で示される語彙的な意味について調べる必要がある。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

したがって、本研究では(3.4)の構造のような構文構造⁴⁴を授受補助動詞文の構文フレームとして見做せるか検証する必要があると判断する。そこで、授受補助動詞文の構文構造における各要素を分析し、構文類型の類型化の基準を定めることを目指す。言い換えると、現代日本語授受補助動詞文を網羅的に記述することを目的とする。対象とするテキスト・データは『BCCWJ』で、このコーパスから抽出した授受補助動詞文の用例から各要素の特徴を取り出し、第 5 章で行う分析に必要である構文タイプの基準を立て、構文の各要素がどのように関連しあっているのかという共起ネットワークを見出すことに繋げたい。

高見・久野(2014)では、「～させてやる・くれる・もらう」文について機能的分析を行い、「～させてやる」は話し手自身が引き起こす事象が非主語指示物にとって利益になると考えていることを示すと分析した。「～させてくれる」は主語指示物が引き起こす事象が話し手自信にとっていい利益になることであることを示し、「～させてもらう」は非主語指示物が引き起こす事象が主語指示物にとって利益となることであると考へ、非主語指示物のおかげであると判断すると述べている。しかし、「～させて+授受補助動詞」と「～て+授受補助動詞」のみでの相違点について分析がなされていない点が指摘できる。

また、澤田(2014)は、「やる」系「くれる」系に注目し、前項動詞の類と恩恵を施す意図によって区分されると述べられている。授受補助動詞文の文法化が進む度合いによって、物の授与性を失い、前項動詞の意味との調和も薄れていくとされる。断片的な構造の特徴は分かるが、構文類型が互いにどのように関連しているかが不明であると考ええる。

高見(2000)では、授受補助動詞文と被害を表す受身文を比較し、機能的構文論のアプローチを採用している。両表現の主となる要因を三つに分け、与格名詞句の階層と行為に対して自ら引き起こす事象、そして被害・恩恵の意味の項目においてそれぞれを数値化し、その相違点を探ろうとしている。ここでは、与格名詞句の階層として「人間>動物>自然の力>無生物」の順で、「2>1>0>-1」と設定し、与格名詞句が「自ら引き起こす事象>無生物や自然の力などの外的要因により引き起こされる事象>人間や動物などの外的要因により引き

⁴⁴ 本研究における「構文構造」とは、文の構成要素間の支配、従属の関係、文のフレームを表現する単位としてみなす。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

起こされる事象」でそれぞれ「1>0>-1」とした。最後に、被害・恩恵の意味では、その意味が「意味が明確にあり>意味を含蓄>意味なし」のレベルに分け、「2>0>-2」の数値を与え、それぞれの用例の合計の数値によって文の適格性を判断している。

(3.10) 母に日記を読まれ、嫌な思いをした。

(3.11) 教科書を忘れたので、隣の人に見せてもらった。

(3.12) (3.10)(3.11)の分析

- ・名詞句の階層： 2 (人間)
- ・自ら引き起こす事象： 1 (自らの力)
- ・被害/恩恵の意味： 2 (あり)

合計得点： 5 [適格]

(高見 2000 : 220)

合計得点が高ければ高いほど文法的に適格であることを意味するが、上記の(3.10)(3.11)はその例であり、(3.12)のような分析を経ている。一方、文法的に不適格である場合の例は以下のように述べている。

(3.13)*皿に割れられ、手を切ってしまった。

- ・名詞句の階層： -1 (無生物)
- ・自ら引き起こす事象： -1(人間による外的要因)
- ・被害/恩恵の意味： 0 (含蓄あり)

合計得点： -2 [不適格]

(高見 2000 : 222)

(3.14) 雨に降られて、着ていた服とカバンが濡れてしまった。

(3.15) (3.14)の分析

- ・名詞句の階層： 0 (自然)
- ・自ら引き起こす事象： 0 (自然の力)
- ・被害/恩恵の意味： 2 (あり)

合計得点： 2 [適格]

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.16)* 雨に降ってもらって、着ていた服とカバンが濡れてしまった。

(3.17) (3.16)の分析

| | |
|-------------|----------|
| ・名詞句の階層： | 0 (自然) |
| ・自ら引き起こす事象： | 0 (自然の力) |
| ・被害/恩恵の意味： | 2 (あり) |
| <hr/> | |
| 合計得点： | 2 [適格] |

(3.14)の受身文と(3.16)の「～てもらう」系の例を、高見(2000)の数値化で考えるとそれぞれ、(3.15)と(3.17)であるが、合計得点は同じであるが、(3.16)の「～てもらう」文の使用には容認度が落ちる。

しかし、このような方法で指摘できる点について、まず数値化された結果による両方の相違点が明らかになっていない点と、各項目間における数値の設定基準に関する検証が必要であるということである。

また、構文と意味との結合において、状況文脈によって使用する表現が異なる点に注目できる。

(3.18) (直接先生に向かって言う場合)

* 来週のピクニックに先生も誘ってさしあげましょうか。

(庵・高梨・中西ほか 2000 : 112)

(3.19) E (話し手) > E (先生)

例えば、(3.18)の例は、構文的には、視点の制約に違反しておらず、(3.19)の通り、共感度関係においても矛盾がない。また意味の面においても先生のためにお誘いの言葉を伝えているため、《行為要求》の発話機能が含意されているといえる。しかし、直接先生に向かって言う場合には不自然さを感じるが、その要因については語用論的制限とみると判断することができよう。

コーパスから得られた授受補助動詞文をその対象にし、授受補助動詞文における各要素を考察する。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.20) ぼくが神さまに、ねがいごとをかなえてもらった。

- i. 主格：ぼく
- ii. 与格：神さま
- iii. 前項動詞句：ねがいごとをかなえる
- iv. 授受補助動詞：～てもらう
- v. 文末モダリティ：過去の「タ」

(BCCWJ PB1n_00041:しらと・あつこ/山本悦子『幽霊屋敷のなぞを追え!』
偕成社：2001)

(3.21) a.*雨が降ってやった。

b. 雨が降ってくれた。

c.*雨に降ってもらった。

(=(3.9)を再掲)

授受補助動詞文の構文要素として内部構造と外部構造に分けることができる。まず、内部構造としては、(3.20)でみると、「ぼく」の主格と「神さま」の与格で表される格情報がある。格情報の間には、授受補助動詞文による視点で共感度が決まると言われている。(3.20)では、「～てもらう」文であるため、もっとも共感度の高い話し手である「ぼく」が主格に置かれ、相対的に共感度が低い「神さま」は与格に置かれる。このように、動作主と受け手がそれぞれの授受補助動詞文の形式に共感度によるものとして格情報が当てられている。しかし、有情性の低い対象に対しての共感度をどのように解釈するかという問題が残されている。(3.21)のようにその対象が「雨」となった場合には、「～てくれる」文は適格文であるが、それ以外の授受補助動詞文は不自然さがある。

従来の研究で重視されてきた授受補助動詞文の要素は、参与者間の共感度関係であり、各授受補助動詞文において話し手が主格名詞句あるいは与格名詞句のどちら側の人物に近いのかという点に注目されてきた。ただし、これらの議論は、人を表す人物を格情報とした場合であるが、人を表さない格情報にはどのようなものがあり、視点と共感度の観点では説明できない点をどのように解釈するかという問題がある。また、有情性を持つ格関係についても考察を加える必要がある。

第三章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

次に、授受補助動詞文の内部要素として、前項動詞をめぐる問題が指摘できる。(3.20)では「神さま」による「ねがいごとをかなえる」という行為が「ぼく」のために行われていることが分かるが、以下のような例では与格ではなく表示格をかえなければならないと考える。

(3.22)*僕は花子にゴミを捨ててやった。(=(3.5)を再掲)

(3.23)*太郎は私の妹に褒めてくれた。(=(3.6)を再掲)

(3.24)*私は医者の一言に安心させてもらった。(=(3.7)を再掲)

上記の(3.22)(3.23)(3.24)の文が不自然であると判断した理由は、与格にあると考えられる。授受補助動詞文の基本的な構造から見ると、「主格＋与格＋前項動詞＋て＋授受動詞」の構造を、上記の例でも同じく持っているが、ここで不自然となる要因は、前項動詞との関連性から探ることができよう。行為の受け手の意味としては「～のために」を用いなければならない。したがって、前項動詞と格情報の関係について注目する。

視点の制約について、大江（1975）と久野（1987[1978]）では、各授受補助動詞文における視点の違いについて述べている。大江（1975）は、視点がどのようなものであるかについて「視線の軸」という基準で述べている。「視点の軸」とは、「授受動詞が描写する授受のできごとを、その当事者として内部から主観的に眺める人の位置（大江 *ibid.* : 34）」と定義づけている。

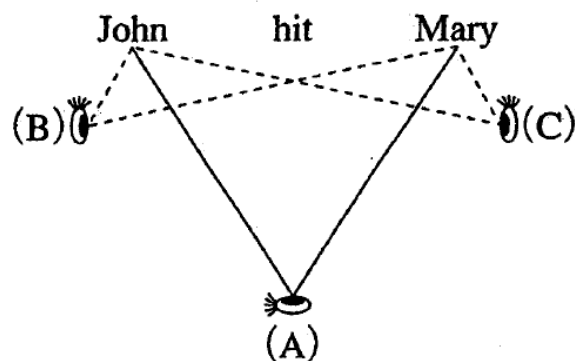


図 III.1 カメラ・アングル（=図 II.1 を再掲）

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

第 II 章でも触れているが、視点の概念について詳細に述べる。視点は「カメラ・アングル」で表すことができるが、図 III.1 の (A) は中立的な視点、(B) は John 寄りの視点、(C) は Mary 寄りの視点を表している。

授受補助動詞文は、上記のカメラ・アングルのうち、(B) もしくは (C) の視点から記述しているが、各授受補助動詞文における視点の違いについて、次の例で説明する。

(3.25) 僕が太郎に自動車を貸してやった。

(3.26)* 太郎が僕に自動車を貸してやった。

(3.27)* 僕が太郎に自動車を貸してくれた。

(3.28) 太郎が僕に自動車を貸してくれた。

(久野 1987[1978] : 155-156、旧仮名遣いの表記を修正)

(3.29) 私は太郎に手紙を書いてもらった。

(3.30)* 太郎は私に手紙を書いてもらった。

(久野 1987[1978] : 161、旧仮名遣いの表記を修正)

上記の視点制約について、授受補助動詞文の主格と与格が表す人物と話し手との関係を共感度⁴⁵で表すことができる。各授受補助動詞文の共感度関係を以下のように表す。また、このような関係を上記のカメラ・アングルの図で表すと次の図のようになる。

(3.31) 「～が～に～てやる」系 E (主格) > E (与格)

(3.32) 「～が～に～てくれる」系 E (主格) < E (与格)

(3.33) 「～が～に～てもらう」系 E (主格) > E (与格)

⁴⁵ 共感度の定義について、久野(1987[1978])による共感度の定義を再掲しておく。

「文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy) と呼び、その度合い、即ち共感度を E (x) で表わす。共感度は、値 0 (客観描写) から値 1 (完全な同一視化) 迄の連続体である」 (久野 1987[1978] : 134)

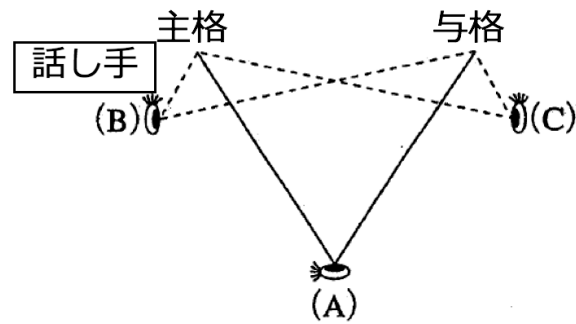


図 III.2 「～てあげる」系・「～てもらう系」の視点

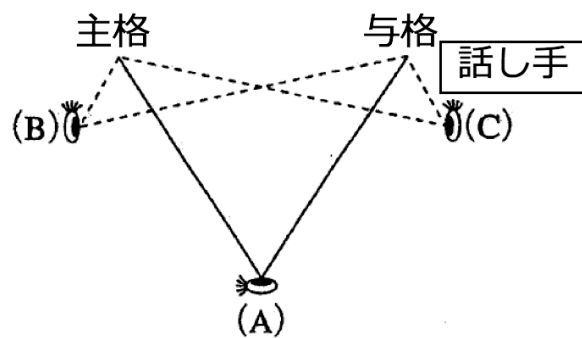


図 III.3 「～てくれる」系の視点

授受補助動詞文は、話し手が当該事柄に直接関与していなくても表すことができる。「太郎が次郎のためにお菓子を買った」という事柄に対して以下の授受補助動詞文の視点の図で説明する。ここでは、参加者と話し手の距離によってウチとソトに分け、相対的に距離の近いウチの関係を四角で囲んで示す。共感性が高い人物がウチの関係であり、共感性の低い人物は相対的にソトの関係である。

次の(3.34)～(3.36)の用例と、それぞれに対する図 III.4、図 III.5、図 III.6 のように、話し手が直接関わらない事態に対して、「～てあげる」系と「～てもらう」系の主格は話し手側の人物であり、「～てくれる」系の与格が話し手側の人物であることが分かる。このような共感性は、一つの文において共感性関係に論理的矛盾を含んではいけない(久野 *ibid.*: 136) 特徴を持つと述べられている。また、久野 (*ibid.*) によると、「～てやる」系は主格に視点を置かなければならず、「～てくれる」系は与格に視点を置かなければならない。

(3.34) 太郎は次郎にお菓子を買ってあげた。

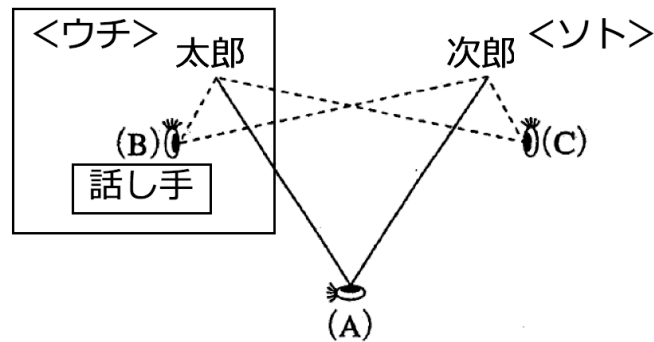


図 III.4 「～てあげる」系の視点と話し手

(3.35) 太郎は次郎にお菓子を買ってくれた。

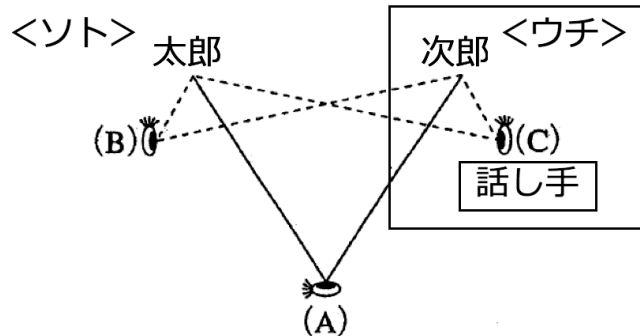


図 III.5 「～てくれる」系の視点と話し手

(3.36) 次郎は太郎にお菓子を買ってもらった。

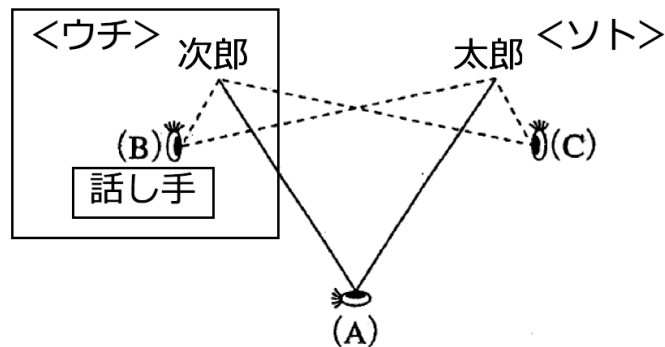


図 III.6 「～てもらう」系の視点と話し手

また、共感度には階層が存在するが、Langacker (1991) では、共感のハイアラキーを話し手の事態に対する共感を引き起こす可能性を軸として以下のようにランクづけている。

(3.37) speaker > hearer > human > animal > physical object > abstract entity

話者 > 聞き手 > 人間 > 動物 > 物 > 抽象的な実体

(Langacker 1991 : 307) ⁴⁶

上記の共感のハイアラーキーを授受補助動詞文にも当てはめることができると考えられる。話し手と聞き手が他の人間（第三者）より上位に置かれており、有情性を持つものが非情物より上位にランクされている。各授受補助動詞文において各格情報がこのハイアラーキーのどこに位置づけられるかを考察することで「～てあげる」系「～てくれる」系「～てもらう」系の視点制約の相違点を明らかにすることができると思う。

「～てくれる」系と「～てもらう」系は、話し手から見ると求心系の表現であるため、話し手もしくは話し手側の人物を主格とすることが統語論的構造から分かるが、未だ語用論的なレベルにおいての検証が待たれている。また「～てあげる」系のような遠心系の表現との相違点を視点の観点から分析することで、各授受補助動詞文における視点の制約を明らかにすることができると思われる。

したがって、各授受補助動詞文における視点の制約について、主格と与格そして話し手との関係を中心に考察し、久野（1987[1978]）の制約条件を検証する。

次節の 3.3 節では、主格と与格の格情報の問題について、3.4 節では、前項動詞の構造に注目し、与格名詞句を表す助詞と前項動詞との関係を考察する。

3.3 格情報の傾向

本節では授受補助動詞文の内部構造で主格と与格で表される格情報について考察する。この格情報は、先述した通り、前項動詞の動作主と受け手の関係が分かるものである。まず、格情報の関係を明らかにするために、コーパス・デ

⁴⁶ 日本語訳は尾谷・二枝（2011 : 219）によるものである。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

一タにおいてどのような格情報が使用されているかを考察し、格情報の類に注目する。次に、格情報の明示と非明示の問題に注目する。授受補助動詞文の基本的構造において主格と与格が含まれているが、実際の言語運用の面においては省略される可能性もある。そのため、明示された格情報の特徴を探り、従来の共感度では説明しきれない用例を中心に格情報間の関係について考察する。また、省略された格情報の特徴と比較することで、言語運用における格情報の明示と省略条件が明らかになることが期待できよう。

3.3.1 格情報の明示と非明示

各授受補助動詞文における各々の格情報については、授受補助動詞文の構文内で現れる場合と現れない場合に分かれる。前者を格情報の「明示」とし、後者を「非明示」とする。本節では、授受補助動詞文の構文要素の中でも、格情報についての分析結果を述べる。本節では、主格名詞句は「が」で表示される格情報を、与格名詞句は「に」で表示される格情報のみを対象とした。

次の結果から分かるように、授受補助動詞文における格情報の明示・省略については、授受補助動詞文の構造から主格名詞句と与格名詞句が想定できるが、実際の使用においては、現れないことが多いことが分かった。「～てあげる」系では、主格名詞句の非明示が 91.9%、与格名詞句の非明示が 84.1%である。

表 III.5 「～てあげる」系に現れる格情報について

| 主格名詞句「X」 | | 与格名詞句「Y」 | |
|---------------|--------|----------|--------|
| 明示 | 非明示 | 明示 | 非明示 |
| 1,760 | 19,966 | 3,450 | 18,276 |
| 8.1% | 91.9% | 15.9% | 84.1% |
| 「～てあげる」系の用例の数 | | | 21,726 |

(数は実数と、その下に%を記す)

また、「～てくれる」系は、主格名詞句の省略が 87.1%、与格名詞句の省略が 79.1%占めており、「～てもらう」系は、主格名詞句の省略が 98.5%、与格

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

名詞句の省略が 95.9%である。

表 III.6 「～てくれる」系に現れる格情報について

| 主格名詞句「X」 | | 与格名詞句「Y」 | |
|---------------|--------|----------|---------|
| 明示 | 非明示 | 明示 | 非明示 |
| 14,348 | 96,499 | 23,210 | 87,637 |
| 12.9% | 87.1% | 20.9% | 79.1% |
| 「～てくれる」系の用例の数 | | | 110,847 |

(数は実数と、その下に%を記す)

表 III.7 「～てもらう」系に現れる格情報について

| 主格名詞句「X」 | | 与格名詞句「Y」 | |
|---------------|--------|----------|--------|
| 明示 | 非明示 | 明示 | 非明示 |
| 615 | 40,396 | 1,675 | 39,336 |
| 1.5% | 98.5% | 4.1% | 95.9% |
| 「～てもらう」系の用例の数 | | | 41,011 |

(数は実数と、その下に%を記す)

授受補助動詞文の主格名詞句と与格名詞句の両名詞句ともに明示されないケースが多いことは明らかである。その要因については、談話における基本的原理から説明できると考える。

また、出現の頻度数からわかることは、格情報は明示されるよりも、非明示されるケースが多いことである。その要因については、まず復元可能性の情報であることが挙げられる。授受補助動詞文の視点の制約により、話し手と聞き手との対人関係において、話し手と聞き手の関係は、ダイクシス（直示）的であるといえる。また、文脈の前後においてその要素が前出しているのであれば、復元可能性によって省略されることが想定できる。言い換えると、授受補助動詞を使うことで、すでに格情報が背景化されるにも関わらず、格情報の明示が選択される要因は、主題化などの特別な意味合いを表すためであるといえる。

次に、非明示された格情報について述べる。非明示は言い換えると、省略と

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

もいえるが、本研究では授受補助動詞文の文構造から想定できる格情報が表示されていない現象を省略と見る。談話における省略の条件と最も関連性を持つ理論は、Grice (1991) の「協調の原理」の中に見られる「簡潔な言い方をすること（不必要に余計なことは言わないこと）」であると考えられる。つまり、復元可能性のある情報に関しては言及しないことが望まれるのである。このような復元可能性という観点からは、話し手と聞き手が互いに認識しており、判断できる情報であることを前提としている。

(3.38) iTunes に入れるにはどうすれば良いのでしょうか？教えてもらえると助かります。

(BCCWJ OC02_07586 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

例えば、(3.38)のように、ネット上である情報の提供を求めたり、情報を提供したりする発話場面において、「教えてもらえると助かります」のように、「誰が」「誰に」という情報を表さないのは、話し手と聞き手（ネット上では、書き手と読み手となる）が互いに「書き手の私が、読み手のあなたに教えてもらえると助かります」という解釈を自明と判断しているためである。言い換えると、聞き手にとって復元可能な情報であるためである。

格情報の非明示に関しては、話し手および聞き手の共通知識であり、もっとも関連性の高いものは推論が容易であるため非明示されるという関連性理論において説明できる。聞き手による推論が可能であることは、先述の Grice(1991) による協調の原理の中で、「不必要に余計なことは言わない」という量の面における原理にも即しているのである。

3.3.2 格情報の特徴：有情物から非情物まで

本節では、授受補助動詞文において表示される格情報の特徴について分析する。3.3.1 節で述べたように、表示される格情報の割合はそれほど多くないことが分かった。それは、文脈によっては、授受補助動詞文の前後に提示されることで、授受補助動詞文においては省略されることがある。また、話し手や聞き

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

手が授受補助動詞文の参与者として関与している際にも省略が可能であることを 3.3.1 節で明らかにした。本節では、格情報として表示された主格名詞句と与格名詞句の性質について探る。

授受補助動詞文における主格と与格には前項動詞の動作主と受け手が想定されるため、人間を表す名詞句が表示されることが多いと推測できる。人間同士であれば、従来の共感性による格情報間の関係で考えることができるが、人間以外を表すものに対する類をどのように分類するかが問題である。

そこで本研究では、まず、格情報の有情⁴⁷と非情という分類で格情報を並べ、分析する。有情を表す典型的な対象は「人間」であり、非情では、物や出来事のような抽象的な事柄を指し、中間的な過程として自然や動物、団体を表す語がある。有情についての定義は、『日本国語大辞典（第二版）』の記述に従う。

(3.39) ゆう-じょう【イウジャウ】【有情】

- i. 心あること。情趣のあること。また、そのさま。
- ii. 感覚や感情を具えていること。また、そのさま。
- iii. とうじょう（有情）。

(3.40) うじょう【有情】

- i. 感情など心の働きを持っているいっさいのもの。山川草木などに対して、人間、鳥獣などの生き物⇔非情・無情
- ii. 世に生を受けている人
- iii. 風情があること。もののあわれが感じられること。

（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2000）『日本国語大辞典』第二版）

⁴⁷ 有情は、有生性（animacy）のことを指すが、「生き物であるかどうか言語表現に現れる現象（『日本語文法事典』日本語文法学会編 2014：648－650）」である。『日本国語大辞典（第二版）』（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 2000）では「感情など心の働きを持っているいっさいのもの。山川草木などに対して、人間、鳥獣などの生き物⇔非情・無情」と定義づけている。日本語で存在を表す際、有情物に対しては「いる」を用い、非情物に対しては「ある」を用いることで区別できる。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

有情と非情の区分については、上述した辞典の記述のように、感情を具えているもので、意志を持っていると判断できるものに限る。ここで境目となるのは「神様」である。「神様」は人間や動物のように有情であることがはっきりと判断できる存在ではないが、人間のように擬人化して意志性を持つ存在として見做されている。授受補助動詞文の構造に明示された格情報を上記の有情・無情の基準で大まかに分析すると以下のような情報が出現した。

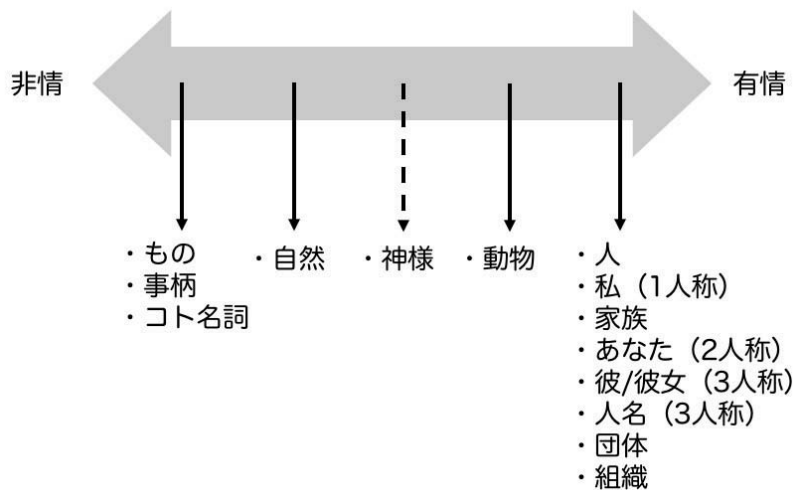


図 III.7 非情・有情の軸を基準とした授受補助動詞文の格情報

まず、「～てあげる」系「～てくれる」系における前項動詞の動作主である主格名詞句、そして「～てもらう」系の与格名詞句の格情報について分析した図を挙げながら考察する。

次の図 III.8、図 III.9、図 III.10 の縦軸は格情報の縦軸を上に行けば行くほど非情であり、抽象的な意味を持つ物で、下のほうは有情を表す情報である。図 III.8、図 III.9、図 III.10 は各授受表現の動作主に当たる格を示したものであるが、いずれの表現も、格情報の有情性に偏っていることが分かる。

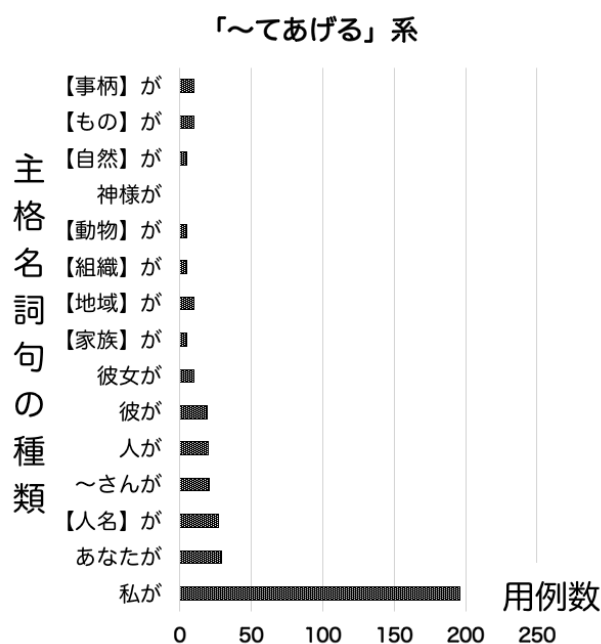


図 III.8 「～てあげる」系における主格名詞句の情報

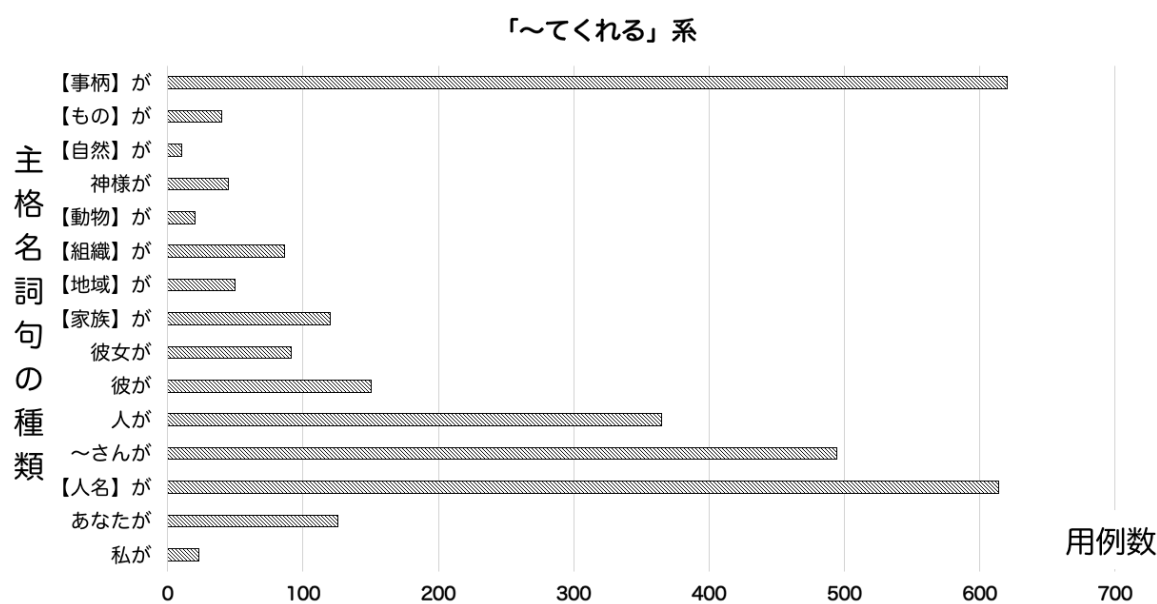


図 III.9 「～てくれる」系における主格名詞句の情報

図 III.8 の「～てあげる」系と図 III.9 の「～てくれる」系の人を表す部分を比較すると、「～てあげる」系は、「私」の話し手自身を表す 1 人称の使用が顕著であり、「～てくれる」系では、「私」以外の人を表す名詞が多く出現し

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

た。このことは、話し手自身もしくは話し手側の人物を主格とする「～てあげる」系と、話し手側から離れた人物を主格とする「～てくれる」系の共感度の原則からも理解できる点である。しかし、共感度の原則から説明できない用例として以下の用例が挙げられる。

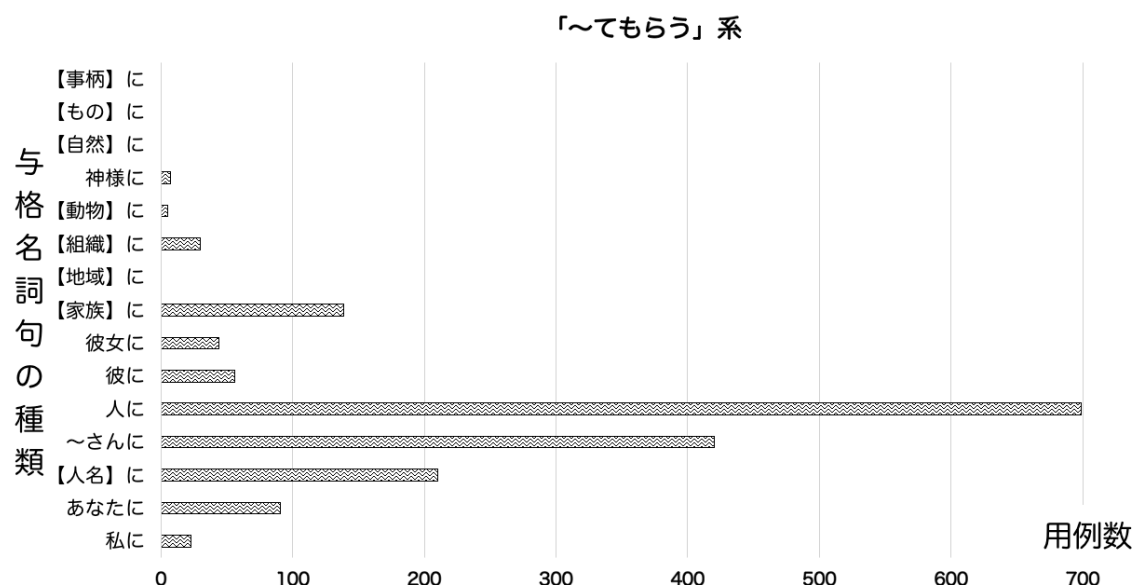


図 III.10 「～てもらう」系における与格名詞句の情報

(3.41) その人が、**国が保護してあげる**に足る、十分な技能を持っていると認められるとき、人間国宝に指定されます。

(BCCWJ OC12_01112 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(3.42) 柴田錬三郎に書かれた「マスコミの寄生虫」が一番ぴったりだと思うけど、**寄生虫がいてあげない**といけない、木や動物もいたりするんです。

(BCCWJ PB12_00356 : 佐田智子/永六輔『季節の思想人』平凡社 : 2001)

(3.43) 母親が生み落としてすぐに亡くなってしまったときなど、わが子を案じてしっかりと守っていることがよくありますし、親が仏さまになっていなくても親についている**守護霊が親子いっしょにセットで守ってあげている**というものもあります。

(BCCWJ OB4X_00211 : 宜保愛子『宜保愛子の幸せを呼ぶ守護霊』大陸書房 : 1991)

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

上述した例は、「～てあげる」系における主格名詞句の情報であるが、有情性を持つもののみならず、「国」といった団体の性格を持つものや、「寄生虫」といった小動物、「守護霊」のような霊魂などにも使用されていることが確認できた。このような物は人間を表す情報よりは、有情性の低い類であるが、ここでは「～てあげる」系の主格名詞句として使用されている。このような情報は、人間が持つ意志性よりは弱いがある種の意志を持っていると判断できる。

「国」は人々の集まりという集団性を持っているため、使用が可能となると考える。

また、「～てくれる」系においても有情性の低いものが主格名詞句として出現した。

- (3.44) 時間が解決してくれるのだろうか・・・、そのうち気持ちが落ち着くのか・・・とも思うのですが、心身共に壊れそうです。

(BCCWJ OC09_09883 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

- (3.45) 「お金以上の価値を持つ場合もあるでしょうね。それが心を豊かにしてくれる」「君は結果論者なんだ」庸助ががっかりしたように言う。

(BCCWJ LBc9_00078 : 左能典代『彼女たちのオフィスで』新潮社 : 1988)

- (3.46) 基本的に、チームというのは排他的であってはいけない。行動や背景の違いに寛容であることが、チームに力を与えてくれる。チームを家族ととらえることは、チームワークを高める強力なアプローチになる。

(BCCWJ PB37_00026 : ジョー・トーリ/ヘンリー・ドレイアー/北代 晋一訳『覇者の条件』実業之日本社 : 2003)

- (3.47) しかし、生態系の頂点のライオンは自然が数を制御してくれているのです。

(BCCWJ OC06_03597 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

- (3.48) 3年間というもの、まともにクルマに乗れないような状況だったのがウソのように、シッカリとクルマが走ってくれる。

(BCCWJ PM15_00314 : 藤本慎一『CAR BOY』八重洲出版 : 2001)

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.49) 難しい計算は自動的にコンピュータが処理してくれる。自分はただそこに行き抜けて道を目で探せばいい。

(BCCWJ PB19_00192 : 白石かおる『Level 6 の怪物』角川書店 : 2001)

(3.50) よほど暇なところなら調べてくれるかも・・・宝くじは機械がやってくれますから。

(BCCWJ OC03_00519 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(3.51) ええ、確率は低いんですけど、天が助けてくれた時のあの快感というのがズーッとあるから、いつかはクモの糸が下りてくるだろうということを頼りにしてますね。昔は夕方になって浮かばないと少し焦ったり、十時ぐらいまで浮かばないと焦ったりしたんだけど、最近、その日に浮かばなくても翌日の朝早く浮かべばいいやっというような（笑）、いつの間にかずるくなってきて...

(BCCWJ LBf7_00025 : 井上ひさし/吉川潮/山藤章二『「笑い」の混沌』講談社 : 2001)

(3.52) 管理会社が手配してくれるとは思いますが。

(BCCWJ OC08_04556 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

特に「～てくれる」系では、「～てあげる」系における主格名詞句よりもさらに意志性が弱いとされる格情報の使用が顕著であった。「時間」や「それ」（お金以上の価値を持つこと）、「～であること」、「自然」、「クルマ」、「コンピュータ」、「天」は、意志性を持たない物を主格名詞句の対象としている。ただ、「管理会社」は一見意志を持たないように見えるが、実際に会社の担当者が働くことを意味するため、「管理会社の担当者が」の意味であり、「～てあげる」系の(3.41)の「国が保護してあげる」の用法と似通っていると考えられる。

「～てもらう」系は前項動詞の動作主として現れた与格名詞句に注目する。「～てもらう」系の与格は、有情物に偏っていることが分かった。有情性が低いものとしては、団体を表す(3.53)の「会社」、(3.54)の「現販売店」等が挙げられる。このような用例から、主格名詞句に依頼や申し出のような場面において使用されていることが分かる。このような使用は、「～てくれる」系や「～

てあげる」系との相違点でもある。

(3.53) 会社に買い取ってもらう方法

(BCCWJ PB43_00004 : 実著者不明『相談業務ハンドブック』銀行研修社 : 2004)

(3.54) 必ず現販売店に撤去してもらうようにしてください。

(BCCWJ OP25_00002 : 「広報くりはし」埼玉県北葛飾郡栗橋町 : 2008)

次に、「～てあげる」系「～てくれる」系の前項動詞動作の受け手である与格名詞句、そして「～てもらう」系の主格名詞句の格情報について考察する。

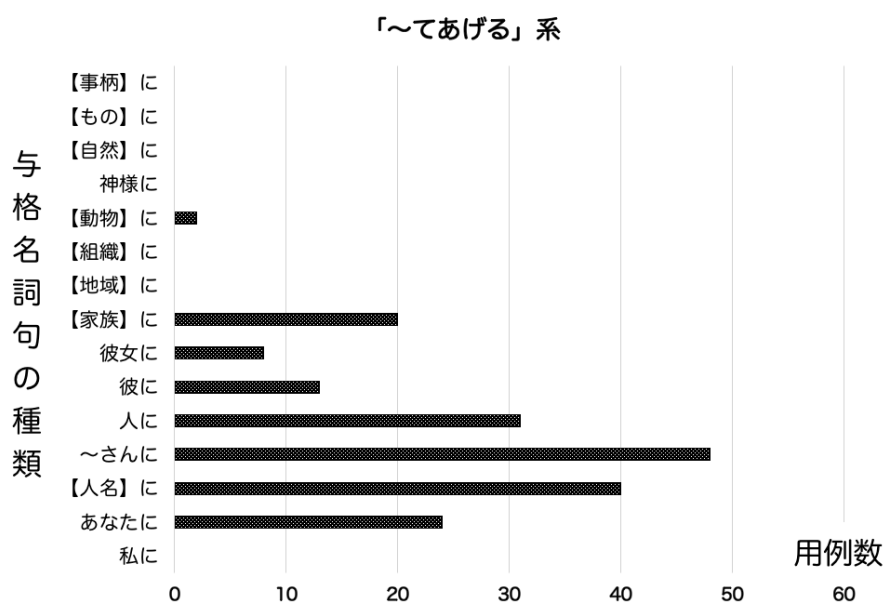


図 III.11 「～てあげる」系における与格名詞句の情報

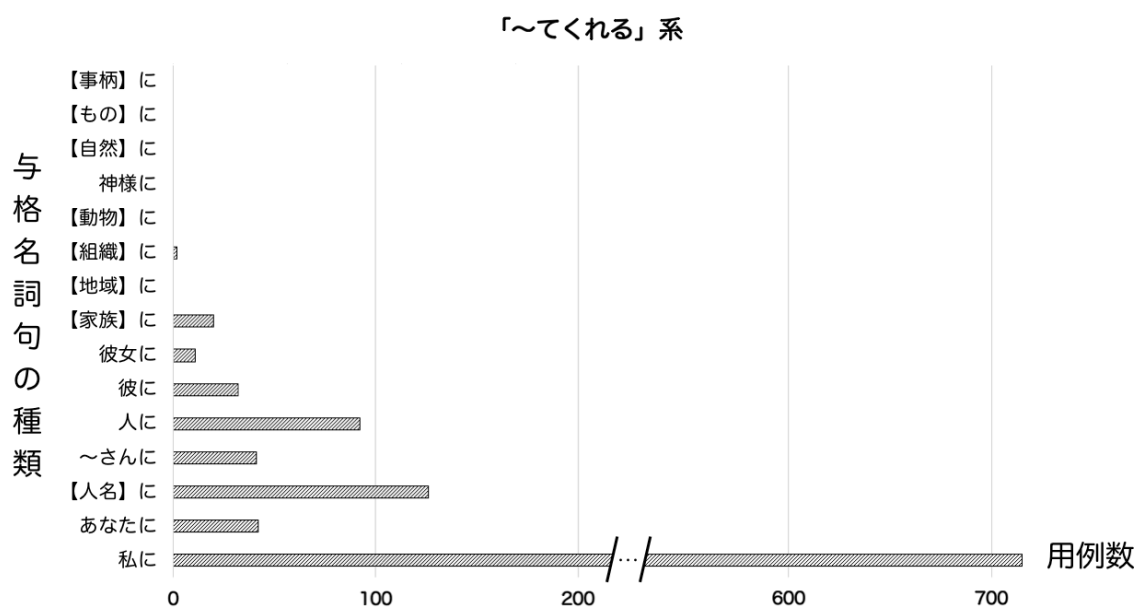


図 III.12 「～てくれる」系における与格名詞句の情報

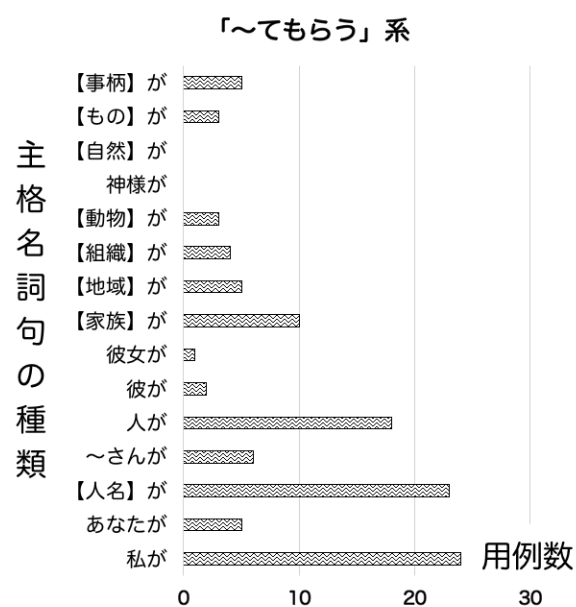


図 III.13 「～てもらう」系における主格名詞句の情報

「～てあげる」系の受け手を表すものには、1 人称である「私」を除く人を表す名詞がその情報として現れた。また、人以外の対象としては、次のような「動物」や「物」を表す表現があった。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.55) でも、できるかぎり毎日犬にブラシをかけてあげてください。

(BCCWJ PB36_00042 : 小林倫子『ワンちゃん大好き!』池田書店 : 2003)

(3.56) 犬にとって服は迷惑だし、犬に服を買ってあげる金があるならもっと有効な使い道があるんじゃないですか？

(BCCWJ OC12_06362 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(3.57) ゾウに触ってあげよう。

(BCCWJ PB36_00042 : 坂本小百合『ゾウが泣いた日』祥伝社 : 2004)

(3.58) 何気なく乗ってる車ですが、たまにはクルマにも耳をかたむけてあげてください。

(BCCWJ OC06_00730 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

また、「～てくれる」系の与格名詞句の情報には、有情物への偏りが顕著であり、特に話し手自身を表す「私」の使用が多く現れた。主格名詞句の情報を表す図 III.11 と比較すると、動作主が有情であれ、非情であれ、関係なく使用されているが、与格名詞句の情報を表す図 III.12 を見ると、当該動作が話し手自身に向かっていることを表す使い方が多いことが把握できる。また「～てくれる」系の与格名詞句の情報において非情の類は出現しなかった。それは有情の人物による動作が【もの】や【事柄】に影響を与える際には「～てあげる」系が使用されるためであると考えられる。

「～てもらおう」系の主格名詞句の情報には有情を表すものから非情のものまで分布しているが、他の授受補助動詞文と異なり、【自然】と【神様】を主格名詞句の情報としてとらえている用例が見受けられないことが特記できる。「森や木が～てもらおう」の表現がない理由としては、「～てもらおう」系では、【自然】を擬人化して表す使い方としての使い方が相容れない傾向であるためである。

また、「神様が～てもらおう」等の表現がない理由としては、「神様」が自己同一視できない存在であると判断しているためであるが、図 III.10 と比較すると、「神様に～てもらおう」表現は存在するのに対して「神様」を動作の受け手と捉える用例がない理由は、「神様」の存在は人間に対して恩恵や恵みを与える者として捉えられるためである。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

その他に、「～てもらう」系には、擬人化ができない語が主格に置かれるケースがあったが、次の用例を挙げて説明する。

(3.59) ここまで来たなら、自分が無事に解放されるためにも、彼らの**犯罪**が成功してもらわないと困る。

(BCCWJ LBi9_00175 : 狩野洋一『ダービーを盗んだ男』出版芸術社 : 1994)

(3.60) 4章三十八-三十九節にシモン（ペテロ）のしゅうとめの**病気**がイエス様に癒していただいているからです。

(BCCWJ OY03_06825 : Yahoo!知恵袋 : 2008)

(3.61) 最近、ほんっと、ステキな方との**出会い**が、自分の肥やしをたくさん作っていただてる。

(BCCWJ OY01_03724 : Yahoo!ブログ : 2008)

上記の「犯罪」「病気」「出会い」という語が主格で表現されているが、話し手自らの行為ではなく、外因である点が特徴として挙げられる。外因を引き起こす主体である「彼ら」「シモンのしゅうとめ」「ステキな方」という人物を与格で表すことができない場合、事柄を表す主格の連体修飾節として表していることが分かった。

また、「～てくれる」系と「～てもらう」系の格情報を比較考察する。両表現は、互換性を持つとされ、対称的な構造を持っているとも言われている（堀口 1987b : 59）。対称的な構造であるとは次のようなことである。

(3.62) 太郎は私に手伝ってくれた。

(3.63) 私は太郎に手伝ってもらった。

((3.62)(3.63)は、伊藤 2010 : 145)

つまり、「～てくれる」系の主格名詞句が「～てもらう」系の与格名詞句に代替でき、前者の与格名詞句と後者の主格名詞句が代替ができるケースで、(3.62)と(3.63)がそのような互換性のある例である。上記に示した「～てくれる」系の主格名詞句の図 III.9 と「～てもらう」系の与格名詞句の図 III.10 を比較

する。

両表現の動作主において、有情性を持つものに対しては同じ傾向を示す反面、【自然】【もの】【事柄】を表すもの、つまり非情の対象においては、次のような相違点が見られる。

(3.64) 留学生にとっても日本人学生にとっても、**自然が教えてくれる**異文化体験だった。

(BCCWJ OT02_00019 : 宮地裕ほか『国語 1』光村図書出版株式会社 : 2005)

(3.65)*留学生にとっても日本人学生にとっても、**自然に教えてもらう**異文化体験だった。

(3.66) しかし**自然は**人間に援助の手をさしのべてくれている。

(BCCWJ PB35_00214 : 竹内均『大事業をおこした技術者列伝』ニュートンプレス : 2003)

(3.67)*しかし人間は**自然に**援助の手をさしのべてもらっている。

(3.64)では、「自然が教えてくれる」が「異文化体験」を修飾している文であるが、これを「～てもらう」系にした(3.65)は不自然な文となる。このような文は両表現において対称性を持たないものであり、置き換えができない。このような傾向は上記の図の分析結果とも一致するものである。

(3.68) 3年間というもの、まともにクルマに乗れないような状況だったのがウソのように、**シッカリとクルマが走ってくれる**。(=(3.48)を再掲)

(3.69)***シッカリとクルマに走ってもらう**。

(3.70) 車に乗せてもらうなら、どっちを選ぶ？

(BCCWJ OB3X_00132 : 実著者不明『究極の選択』ニッポン放送出版 : 1989)

このように「クルマ」に対して「～てくれる」系では「走る」ことの主体として捉えられるが、「～てもらう」系においては主体としてみなさないのである。「～てもらう」系では、「車」のような【もの】を表すものは、(3.70)のように場所や手段を表すことが多い。つまり、「～てくれる」系は、話し手が動

第III章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

作主に対する感情移入が起こりやすく、非情物であっても使用が可能となる。

(3.71) 希望は人間に勇気を与えてくれる。

(BCCWJ LBh1_00033 : 宮内博一『六十歳からなすべきこと』海竜社 : 1993)

(3.72) *人間が希望に勇気を与えてもらう。

「希望」のように【事柄】を表す抽象名詞の場合も、「～てくれる」系では適格であるのに対して「～てもらう」系では容認度が下がることが分かる。このような使い方は、「～てくれる」系の特有の表現であるといえる。主格名詞句の対象に対して、話し手の態度を表すものであり、「希望は人間に勇気を与える」という事柄に対して「好まれる」事象であるという話し手の判断が含まれている。動作の受け手が「人間」となっており、有情物の代表であるもので、格言のような言い方である。

次に、先行研究で取り扱っている格情報における共感度の観点から見ると、有情物の間で、主格名詞句と与格名詞句の人物に対する共感度の大小が判断できるはずであるが、以下の用例でも同じことがいえるか考察する。

(3.73) それを知った女将さんは、幸一に言ってくれた。

(BCCW PB39_00296 : 浅野美和子『笑顔の法則』竹書房 : 2003J)

(3.74) それを知った女将さんは、幸一に言った。

(3.75) カウンセラーは毎週練習の成果を奏太に見せてくれている。

(BCCWJ OY14_33772 : Yahoo!ブログ : 2008)

(3.76) カウンセラーは毎週練習の成果を奏太に見せている。

上記の例は、第三者同士での出来事であるが、この出来事において話し手の直接的関与はないように思われる。また、共感度の関係から見ると、主格と与格の関係において、話し手側にある人物が授受補助動詞文の類によって決まるわけであるが、上記のようなものにおいては「～てくれる」系を使わなくても伝えようとしている事柄は伝えられる。だが、「～てくれる」系では、当該事柄に対して動作の受け手にとって好ましいと考える話し手の判断が含意されて

いる点が異なるといえる。

(3.77) それを知った女将さんは、幸一に言ってあげた。

(3.78) 幸一は、それを知った女将さんに言ってもらった。

(3.79) 奏太は毎週練習の成果をカウンセラーに見せてもらっている。

第三者同士における事柄を述べる際に使われる授受補助動詞文には、「～てあげる」系「～てくれる」系「～てもらう」系の中でどれを使用しても伝えようとしている事柄には変わりがない。このような場合には、誰に視点を置いて伝えているかという視点の置き方のみ異なる。つまり、授受補助動詞文において第三者を主格に置くか、与格に置くかによって、話し手の事柄に対する態度を読み取ることができるといえる。

3.3.3 格情報の視点制約と共感度関係

本節では授受補助動詞文の格情報における視点の運用と制約について述べる。まず、「～てあげる」系と「～てくれる」系における視点の運用と制約について具体的に述べる。先行研究で述べられてきた視点制約の条件を提示すると、以下のようになる。

(3.80) 補助動詞「クレル・ヤル」の視点制約

……テクレル E (非主語) > E (主語)

……テヤル E (主語) > E (非主語)

(久野 1987[1978] : 152)

(3.81) 視点の一貫性：単一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない。

(久野 1987[1978] : 136)

上記の条件の成立について、実際のコーパスから収集した用例ではどのようなように使用されているかその実態を分析する。「～てあげる」系における主格が明

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

示された用例は 372 用例、与格が明示された用例は 186 用例であった。「～てくれる」系においては、主格が明示された用例は 2,854 用例、与格が明示された用例は 1,081 用例出現した。まず、主格として示された格情報を Langacker (1991) による共感のハイアラーキーを基に分析した結果を表す。Langacker (1991) のハイアラーキーの基準の中では分類されていないが、授受補助動詞文の分析では、出現している格情報に「神様」や「自然」を表すものがあり、これらは「動物」や「物」の類とは属性が異なるものであると判断し、新たにハイアラーキーに加えた。

表 III.8 『BCCWJ』に現れた「～てあげる」系・「～てくれる」系の格情報と共感のハイアラーキー

| 授受補助動詞文 共感 ハイアラーキー | 「～てあげる」系 | | 「～てくれる」系 | |
|--------------------------|----------|-------|----------|-------|
| | 主格の情報 | 与格の情報 | 主格の情報 | 与格の情報 |
| 話し手 | 196 | 0 | 23 | 715 |
| 聞き手 | 29 | 24 | 126 | 42 |
| 人間（第三者） | 117 | 160 | 1,970 | 324 |
| 動物 | 5 | 2 | 20 | 0 |
| 神様・自然 | 5 | 0 | 55 | 0 |
| 物 | 10 | 0 | 40 | 0 |
| 抽象的な実体 | 10 | 0 | 620 | 0 |
| 合計 | 372 | 186 | 2,854 | 1,081 |

(数は用例の総数)

上記の表を、主格情報と与格情報を出現用例の数の割合で表すと、次の図のようになる。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

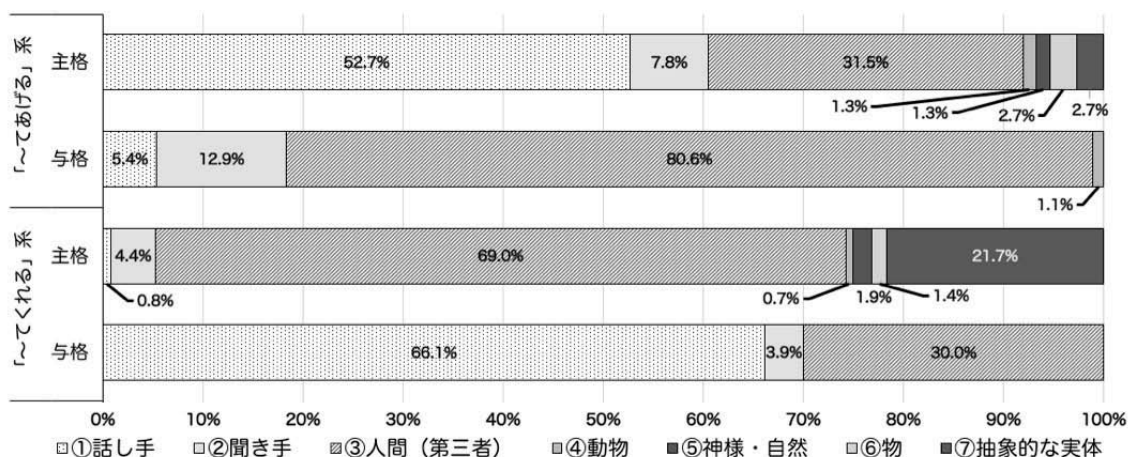


図 III.14 「～てあげる」系と「～てくれる」系の主格・与格情報と共感のハイアラーキー (%)

上記の表 III.8 と図 III.14 で分かることは、「～てあげる」系の主格と、「～てくれる」系の与格において「①話し手」自身を表す格が最も多く使用されていることである。それに対して「～てあげる」系の与格と、「～てくれる」系の主格には「③人間(第三者)」を表す格情報が最も多く使用されていることが分かった。また、「～てあげる」系では、話し手自身が第三者に対する行為について述べる際に使用されることが多く、「～てくれる」系では第三者が話し手自身に向けて行う行為を述べる用例が多いという傾向が把握できた。

さらに、「～てあげる」系の主格名詞句の 92% (①+②+③) が有情の対象であるのに対して、「～てくれる」系の主格では、「④動物」「⑤神様・自然」「⑥物」「⑦抽象的な実体」といった非情の類が 25.7% を占めている点の特記できる。

一方、「～てあげる」系の視点制約に反して用いられている以下の用例に着目する。

(3.82) てめえがそう易々と手を退くかどうかくらい、ちゃんと見通してるんだ。

一步外へ出れば、てめえ(が)、俺に復讐してやろうと思うだろう。

(BCCWJ PB49_00127 : 丹羽一郎『耽溺』河出書房新社 : 2004)

(3.83) その友達は資生堂の美容部員をやっていてマッサージが上手でオシャレでかわいいコで、そのコから私に健康のことや育児のいろんなことを教えてあ

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

げたいから一緒に連れてきたいと言うのです。

(BCCWJ OC10_00271 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(3.84) (彼が) 僕に、本当の遊びを、**教えてあげる**といていたんですよ。

(BCCWJ PB59_00633 : 西村京太郎『京都感情案内』中央公論新社 : 2005)

(3.85) (3.82)用例における共感度関係 : E (てめえ) < E (俺)

(3.86) (3.83)用例における共感度関係 : E (そのコ) < E (私)

(3.87) (3.84)用例における共感度関係 : E (彼) < E (僕)

(3.88) 「～てあげる」系の共感度関係 : E (主語) > E (非主語)

久野 (1987[1978]) による(3.88)の視点制約で見ると、非主語、つまり与格に話し手自身を表す一人称で示されている(3.82)(3.83)(3.84)は、従来の視点制約の条件に相反することになる。しかし、このような用例が容認される要因として、まず使用された授受補助動詞文が複文の従属節に現れていることに注目したい。

引用節を示す「ト」を含む構造を考えると、以下のような文構造を持つ。

(3.89) ?あなたは「君に復讐してやる」と言った。

(3.90) あなたは私に復讐してやると思った。

上記の例のように、直接話法では主語の言葉をそのまま引用するため、「君に」となるはずだが、「君」が話し手自身を指している場合には、(3.90)のように「君に」を「私に」と間接話法のように直す必要がある。引用とは、言われたことや思ったことをもう一度述べる表現であり、情報を提供することが発話の目的でもある。その際、授受補助動詞文「～てあげる」系では、視点の制約が解除される点が指摘できる。このように、引用節における問題は「～てくれる」系でも次のような用例が収集できた。

(3.91) 彼、**あたしが誰よりも自分を理解してくれた**って言ったわ。

(BCCWJ LBn9_00202 : ジョイ・フィールディング/吉田利子訳『私のかげらを、見つけて』文藝春秋 : 1999)

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.92) わたしがヴィクターを撃ってくれと頼んだなんて。

(BCCWJ LBo9_00145 : ヒラリー・ウォー/吉田誠一訳『事件当夜は雨』東京創元社 : 2000)

(3.91)の「って」は引用を表す「と」のくだけた表現として見ると、「～てあげる」系の引用節における視点制約の解除が「～てくれる」系においても成立していることがいえる。「～てくれる」系は「E (非主語) > E (主語)」という視点の制約を有するが、(3.91)では、E (彼) > E (あたし) となっており視点の制約が守られていないことになる。また、(3.92)のように「～てくれと頼む」という表現は「わたしにヴィクターを撃ってくれ」という直接話法に、引用節が介され、間接話法になると、「～てくれる」系における視点の制約が働かなくなるのである。

このように、授受補助動詞文の視点制約の解除は、「～てあげる」系と「～てくれる」系が複文の従属節に現れた場合であるが、引用節「～と思う」「～と言う」「～と頼む」表現においては、授受補助動詞文の視点制約が成立しないことが指摘できる。

一方、「～てくれる」系を引用節に用いる際、「E (非主語) > E (主語)」という視点制約が解除される現象は、次のように「コト節」においても同様である。

(3.93) メルのいたずら相手になってやるのは私が一番で、**私**がいたずらを家族の中で一番許してくれることをメルは知ってるんですね…遊び相手というか…同類視してるんですね、きっと。でも、その無邪気さで私も結構癒されてるんです。

(BCCWJ PM11_00458 : 桑原たかし『愛犬の友』誠文堂新光社 : 2000)

(3.94)*私にいたずらを家族の中で一番許して**あげる**ことをメルは知ってるんですね。

コト節における視点制約の解除については、「～てくれる」系ではいえるが、「～てあげる」系においては適用できない点が両表現の相違点として挙げられ

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

る。(3.93)の事態は、「私がメルのいたづらを家族の中で一番許していること」をメルが知っているという情報を伝えているが、その際、「私が～許してくれること」をメルは知っているという表現が可能である。このようなことが可能である場面は、情報を伝えるなどの報告の発話場面で現れている。このような点は、「私がメルのいたづらを家族の中で一番許してあげてくれることをメルは知っている」の意味と同様であるが、「～てあげる」系の場合には視点制約が「E（主語）>E（非主語）」で守られている。(3.94)のように視点制約が守られていない「～てあげる」系は用いることができない。

また、「～てくれる」系においては以下のように、久野（1987[1978]）の視点制約に相反する用例があった。

(3.95) 「宇宙、お主の妻を連れてくるのだ。わしが、この眼で確かめてくれる—」
「わかりました」

(BCCWJ LBh9_00229 : 伴野朗『日本ベストミステリー選集』光文社 : 1993)

(3.96) もしも、長兵衛めが無礼なあつかいをしたならば、おれが、その場において斬り捨ててくれよう。

(BCCWJ LBn9_00011 : 池波正太郎『侠客』角川書店 : 1999)

(3.97) こっちに来るんだ、ひよっこの肝っ玉しかないいくじなしめ、二人ともおれがこらしめてくれるわ。

(BCCWJ LBi9_00219 : マーク・トウェイン/吉田映子訳『マーク・トウェインコレクション』彩流社 : 1994)

上記の用例は、話し手の意思を表出する際に用いる「～てくれる」文として、話し手自身を主格ととしている。このような視点制約に反して用いられる用例の要因は古典語における「～てくれる」系の用法に起因すると考える。森(2016: 81)によれば、「くれる」は語彙的意味として上位者から下位者への授与を表し、運用の面において中世中期以降待遇的な理由から話し手を上位におくことが話し手を高めることとして避けられるようになったと述べている。このことを考えると、「～てくれる」系の体系の視点制約以前に、上位者から下位者への授与として表すことが優先される用例として、話し手が主格に置かれる用例

第III章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.95)(3.96)(3.97)が適格となると考えられる。ここでは、話し手自身を与格より上位者であるという語用論的文脈条件が特徴である。つまり、話し手が上からの目線で与格人物に対して動作を行う意志を表し、聞き手をぞんざいに扱う言語態度を表す。このような「～てくれる」系は、古典語の名残が残っており、「～てくれよう」のように意志形が用いられるのも主格を話し手自身にした場面のみに限る。

「～てあげる」系と「～てくれる」系における視点制約について、久野(1987[1978])で述べられた視点制約に加え、視点制約が解除される条件については以下のように整理できる。

(3.98) 「～てあげる」系を引用節として複文の従属節に用いる際、視点制約が解除される。

(3.99) 「～てくれる」系が引用節とコト節として複文の従属節にくる際、視点制約が解除される。

(3.100) 話し手を主格とする「～てくれる」系の表現では、話し手自身を上位者として捉え、相手のことをさげすむ場合に用いられる。

次に、「～てもらう」系における視点制約について、久野(1987[1978])では前項動詞としての「もらう」系を中心に以下のように述べている。

(3.101) 授与動詞の視点制約

貰う E(主語) > E(非主語)

(久野 1987[1978]: 160)

(3.102) 発話当事者の視点ハイアラーキー：話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない。

1=E(一人称) > E(二・三人称)

(久野 1987[1978]: 146-147)

久野(1987[1978])によれば、「～てもらう」系の視点制約には、「発話当事者の視点ハイアラーキー」の条件が満たされる必要がある。そこで、本節で

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

は「～てもらう」系の用例を用いて、上記の条件を検証していく。まず、コーパスに現れた主格と与格の情報について以下の表に示し、各共感ハイアラーキーをパーセントにし、図で示した。

表 III.9 『BCCWJ』に現れた「～てもらう」系の格情報と共感ハイアラーキー

| 授受補助 共感 動詞文 ハイアラーキー | 主格の情報 | 与格の情報 |
|------------------------------|-------|-------|
| 話し手 | 196 | 23 |
| 聞き手 | 29 | 91 |
| 人間（第三者） | 117 | 1,598 |
| 動物 | 5 | 5 |
| 神様・自然 | 5 | 7 |
| 物 | 10 | 0 |
| 抽象的な実体 | 10 | 0 |
| 合 計 | 109 | 1,724 |

(数は用例の総数)

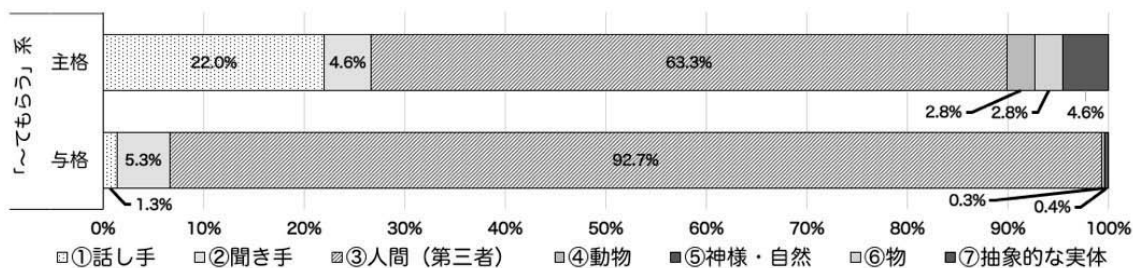


図 III.15 「～てもらう」系の主格・与格情報と共感のハイアラーキー (%)

図 III.15 で分かるのは、「～てもらう」系においても、「①話し手」や「②聞き手」、「③人間（第三者）」を表す有情の格情報が多くを占めていることである。その中で、「E（主語）>E（非主語）」の視点制約が解除されるケースについて次の用例を挙げて説明する。

第III章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.103) (語り手=母親、亜矢=5才の娘)

保育園で行われた七夕まつりに、私は娘たちと兄と連れ立って出かけた。当時五歳の亜矢は、私に買ってもらったアイスクリームをなめなめ、もうそろそろ始まる催し物を待っていた。その横に、歯のまったくない口を開けて兄が立っている。

(=(2.14)を再掲)

(3.103)では、「亜矢は、私に買ってもらったアイスクリームをなめた」という文で、「亜矢は私に買ってもらった」が「アイスクリーム」を修飾しているが、共感度関係から見ると矛盾していることが分かる。

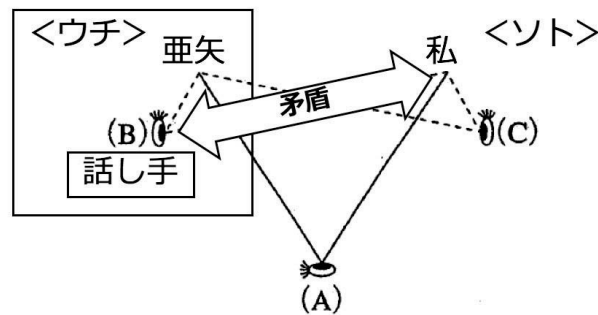


図 III.16 話し手視点と共感度の矛盾

つまり、共感度の観点によれば、話し手自身が関与している事態であるため、次のような文が適格となる。

(3.104) 亜矢は、私が（亜矢に）買ってあげたアイスクリームをなめなめ、催し物を待っていた。

ここで、授受補助動詞文の与格「亜矢に」は文の冒頭で「亜矢は」を主題として提示されているため、省略が可能である。「～てくれる」系は、(3.105)のように連体修飾節において不適格となる。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.105) * 亜矢は、私が買ってくれたアイスクリームをなめなめ、催し物を待っていた。

視点制約の観点から見ると、「～てあげる」系を用いられる場面において「～てもらう」系が用いられた場面は、話し手自身による行為を連体修飾節で表した複文のケースである。

(3.106) * 亜矢は私にアイスクリームを買ってもらった。

(3.106)のように単文においては視点制約を守らなければ適格の文とならないが、連体修飾節における「～てもらう」系は、授受補助動詞文特有の視点の制限が影響されないことを意味する。連体修飾節は、当該名詞句を補足し説明する役割を持つものである。そのため、主格と与格の間での共感度関係より、事態としての叙述のほうが重要とされることから、話し手自身を主格とする「～てもらう」系の使用が容認されると考える。

共感度を違反することが許容される文脈的状况は、話し手が関与する報告文である時である。また、亜矢という人物と話し手との関係が重要であるが、ここでは話し手である「私」の幼い娘であることで、話し手と自己同一視されやすい対象であると考えられる。亜矢の行動を描写し、報告する談話であるが、報告文の従属節に埋め込まれた節においては、視点の制約条件が弱まる可能性が窺えた。

(3.107) (ドラマ『冬のソナタ』の内容を説明している場面において)

a. 高校生のユジンがチュンサンに作ってあげていたのがこれ。

(BCCWJ PB4n_00170 : 内野由美子・辻啓子『韓国ドラマの不思議に迫る』実業之日本社 : 2004)

b. 高校生のユジンがチュンサンに作ってくれていたのがこれ。

c. チュンサンが高校生のユジンに作ってもらっていたのがこれ。

(3.108) ? 高校生のユジンがチュンサンに作って φ いたのがこれ。

第III章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

(3.107)は、話し手にとって、ユジンもチュンサンもドラマの人物になっているため、親疎関係によるものを判断することは困難である。久野(1987[1978])で述べられている共感度によると、「E(話し手) > E(ユジン) > E(チュンサン)」の関係であるはずだが、実際にはどのような関係であるかは検証することができず、「～てくれる」系や「～てもらおう」系を使用しても意味は変わらない。しかし、(3.108)の文と比較して分かることは、ユジンの行為がチュンサンという人物に良い影響を与えると、話し手が判断しているということである。(3.108)が不自然に思われる理由は「作る」という動詞文が与格を必須としないため、与格で示す情報がどのような意味を持つのか表す必要があり、「チュンサンのために」などで容認度を上げることができる。(3.107)のような例は、授受補助動詞文を使用せずとも伝えている事柄は変わらない。しかし、その事柄に対する話し手の感情、つまり当該事柄に対する態度が示される点が異なる。

話し手も聞き手も第三者と実際の人間関係を持たないが、(3.107)のように授受補助動詞文が使用されている要因については、文脈効果の差から探ることができよう。授受補助動詞文を使うことで得られる文脈効果はドラマの人物を話し手と関係のあるように感じさせる効果があり、ドラマの人物に対する感情移入が行われていると考える。

3.4 前項動詞句の語彙的意味と制約

3.4.1 仁田・村木・柴谷・矢澤(2000)による記述分析

仁田・村木・柴谷・矢澤(2000)における動詞の語義と動詞の下位的タイプで授受補助動詞文を考える。仁田・村木・柴谷・矢澤(2000)では、以下のよう動詞の下位的タイプを提示している。

(3.109) 動詞の語義と動詞の下位的タイプ

<+動き>動き動詞：教える、聞く、出す、入れる、作る、行く

<-動き>状態動詞：ある、いる、占める、存在する、なる

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

<一動き>属性動詞：当たる、劣る、異なる、優れている、できる、似る

(仁田・村木・柴谷・矢澤 2000)

上記の類を前項動詞とする授受補助動詞文について考察すると、まず、「<一動き>状態動詞」の一部、「<一働き>属性動詞」と授受補助動詞文との共起が不可能である。次の例(3.110)(3.111)(3.112)を挙げて説明する。

(3.110) * 周りよりも劣って{あげる・くれる・もらう}。

(3.111) * 彼は私のおじに当たって{あげる・くれる・もらう}。

(3.112) * この部屋には大きな机があつて{あげる・くれる・もらう}。

(3.110)(3.111)は「<一動き>属性動詞」であるが、授受補助動詞文で言い表すことができない。また、(3.112)のように「<一動き>状態動詞」でかつ無意思動詞でもある動詞「ある」も授受補助動詞文とは共起できない。「<一働き>属性動詞」は全て無意思動詞であるため、授受補助動詞文との共起関係を持たないが、状態を表す動詞の場合にも、意思動詞であるか否かで授受補助動詞文との共起可能性が決まる。無意思動詞は「～てください」「～てもらえますか」等の依頼を表す形にできないことから理解できよう。「<一動き>状態動詞」の中で、「なる」は意思動詞と無意思動詞としての使い方が異なるため、授受補助動詞文と共起性は意思動詞と無意思動詞により異なる。

(3.113) 奥さんになる。「<一動き>状態動詞」<+意思性>

(3.114) 奥さんになって{あげる・くれる・もらう}。

(3.115) もう9時になる。「<一動き>状態動詞」<-意思性>

(3.116) * もう9時になって{あげる・くれる・もらう}。

他に、「<+動き>動き動詞」と、「<一動き>状態動詞」の中で「いる」「存在する」動詞のみが授受補助動詞文と共起が可能である。このような動詞は意思動詞であるため、共起が可能であると判断できよう。

さらに、「<+動き>動き動詞」に対する共起について考察する。「<+動

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

き>動き動詞」を細分すると、主体変化動詞、主体運動動詞がある。

(3.117) 主体変化動詞：主体に変化をもたらす動詞。行く、移る、起きる、帰る
＜+持続性＞開く、消える、崩れる

＜-持続性＞年が明ける、行く、伺う、帰る、起こる

(3.118) 主体運動動詞：主体に変化をもたらすとは捉えていない動き。集める、謝る、洗う、書く、教える

＜+持続性＞遊ぶ、動く、切る、書く、教える

＜-持続性＞失う、生む、事件を起こす、許す

(仁田・村木・柴谷・矢澤 2000)

上記の分類の中で、次の例(3.120)について、山田(2004)では文法的に非文(*)であると判断しており、(3.119)の表現がより好ましいとされている。

(3.119) 金を落として困っていると一人の老婆が私に近づいてきた。

(3.120) 金を落として困っていると一人の老婆が私に近づいてくれた。

(山田 2004 : 38)

その理由について、山田(2004)は、「近づく」を文末位置ではテクルを含め一語化していると見ており、「～てくれる」文が非文であることと比較している。しかし、以下のような反例がコーパス・調査から明らかになった。

(3.121) すると、保育園前の自転車置き場でゆなみゆ姉妹を乗せている時に手を振って近づいてきてくれる中学生のお姉さんが！

(BCCWJ OY05_04431 : Yahoo!ブログ : 2008)

(3.122) 「ハナちゃん、ハナちゃん」って呼んだら近づいてくれます。

(BCCWJ OY14_01138 : Yahoo!ブログ : 2008)

「近づく」は、＜+持続性＞の「＜+動き＞動き動詞」であるが、文脈内容が適格な場合、(3.120)の例では「老婆」の行動が「私」にとってうれしい気持

ちになった時などの文脈内容において、授受補助動詞文との共起関係が成立するといえる。

〈－持続性〉の「〈＋動き〉動き動詞」においても基本的に瞬時的な行動と授受補助動詞文との共起性が伺える。仁田・村木・柴谷・矢澤（2000）では、この類に「年が明ける」という語句を入れているが、状態が変化するという意味として「〈－動き〉状態動詞」に属されると判断できる。授受補助動詞文を含む文を作例しても以下の(3.123)のように適格ではなく、不自然な文であることから「動き動詞」としての類からは離れているように思われる。

(3.123) *年が明けて{あげる・くれる}。

(3.124) *年に明けてもらう。

以上、仁田・村木・柴谷・矢澤（2000）の動詞の下位的タイプの分類基準に則って授受補助動詞文の前項動詞としての使用について考察を行い、仁田・村木・柴谷・矢澤（2000）の分類基準に修正を加えた。「〈＋動き〉動き動詞」は授受補助動詞文の前項動詞として使用可能で、あり、「〈－動き〉状態動詞」は意志性の有無で分けられる。また、「〈－動き〉属性動詞」は基本的に授受補助動詞文の前項動詞にはできないとまとめることができる。

3.4.2 コーパス分析から得られた前項動詞句の特徴

本節では、『BCCWJ』の出現用例の中でも、前項動詞と授受補助動詞文の共起関係において、MI スコア 3.0 以上で、かつ、頻繁に出現していた 16 動詞をそれぞれ抽出した。MI スコアとは、「任意の語が与えられたとき、どの程度、その共起語が予測できるかという指標（石川 2006）」で、二つの語句の間で有意な組み合わせであるかどうか分かるものである。一般的に MI スコアが 2.0 以上になると有意であると判断する（石田 2008）が、本研究では有意性をあげ、3.0 以上のものと設定した。本研究でまず MI スコア 2 以上の用例を対象に調査を行ったが、合計用例の数が 1 件のみで MI スコアが 2 以上となるケースが多く見られた。1 件の用例で一般化する危険性を避けるため、本研究では MI スコ

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

ア 3 以上の用例を分析対象とした。結果として得られた前項動詞のリストを次の表 III.10 に示す。

表 III.10 『BCCWJ』に現れた授受補助動詞の前項動詞の種類（頻度順・総数）

| | 「～てあげる」系 | | 「～てくれる」系 | | 「～てもらう」系 | |
|----|----------|-----|----------|--------|----------|--------|
| 1 | する・VN する | 143 | する・VN する | 6,942 | する・VN する | 3,212 |
| 2 | やる | 126 | 教える | 19,370 | 教える | 1,501 |
| 3 | 言う | 39 | 来る | 4,148 | 見る | 1,276 |
| 4 | 持つ | 25 | 言う | 1,596 | 来る | 962 |
| 5 | なる | 24 | やる | 1,530 | やる | 795 |
| 6 | 教える | 22 | いる | 1,149 | 見せる | 491 |
| 7 | かける | 21 | 見る | 1,064 | 買う | 308 |
| 8 | 入れる | 18 | 頑張る | 1,039 | 送る | 307 |
| 9 | 出す | 16 | あげる | 887 | 作る | 300 |
| 10 | 褒める | 16 | 与える | 844 | 出す | 286 |
| 11 | 見つける | 3 | 見せる | 822 | 行く | 278 |
| 12 | 作る | 3 | 話す | 738 | なる | 271 |
| 13 | 遊ぶ | 3 | 作る | 718 | 知る | 266 |
| 14 | あげる | 2 | 注意する | 537 | 聞く | 246 |
| 15 | 起こす | 2 | 確認する | 444 | 書く | 244 |
| 16 | 買う | 2 | 行く | 441 | 入れる | 224 |
| | 合計 | 465 | 合計 | 42,269 | 合計 | 10,967 |

その後、国立国語研究所（1980[1972]）の動詞の意味⁴⁸を分類基準とし分類分析結果を提示する。まず、以下のような前項動詞が各授受補助動詞文と共起関係であることが分かった。出現した前項動詞を国立国語研究所（1980[1972]）の動詞分類の基準に合わせて整理し、図に示す。今回の調査では、「動作・作

⁴⁸ 「動作・作用の属性」「主体」「相手」「評価」「意図」「結果」「対象」の説明については、国立国語研究所（1980[1972]）の「動詞の意味・用法の記述的研究」を参考にした。

第 III 章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

用の属性」「主体」「相手」「評価」「意図」「結果」「対象」の七つの動詞の意味の類が出現した。

前項動詞との共起関係から見た授受補助動詞文の使用について、次の図 III.17、図 III.18、図 III.19 に示すが、「～てあげる」系、「～てくれる」系、「～てもらおう」系に共通に使用されている動詞の類は「動作・作用の属性」に関する動詞が大きい割合で使われている点である。

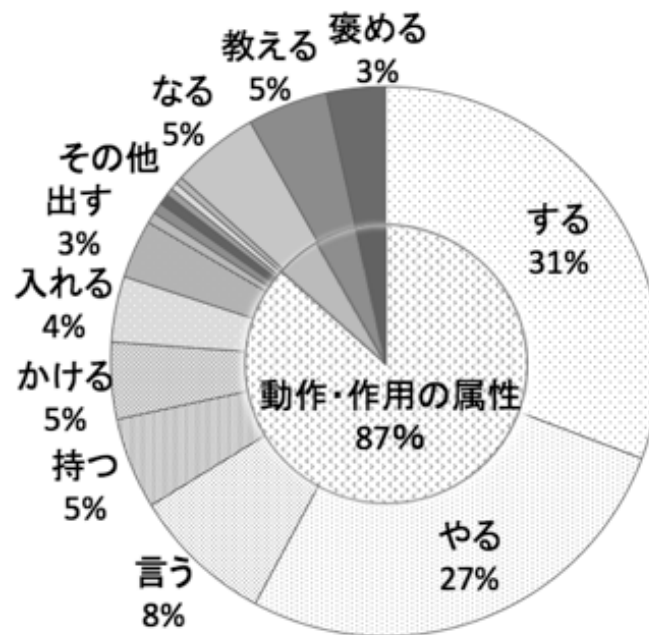


図 III.17 「～てあげる」系と共起関係である前項動詞の割合 (%)

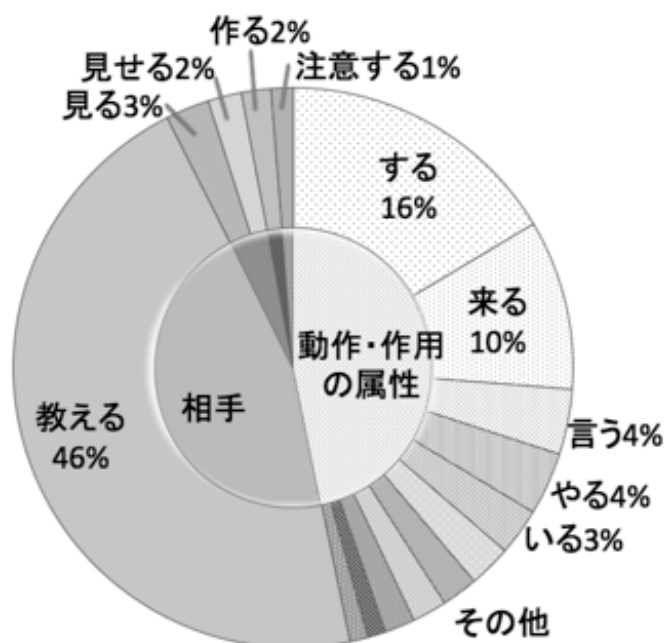


図 III.18 「〜てくれる」系と共起関係である前項動詞の割合 (%)

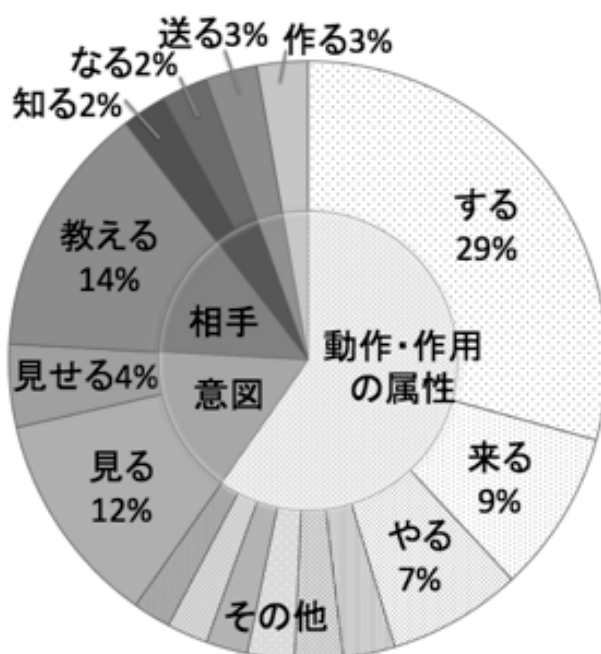


図 III.19 「〜てもらう」系と共起関係である前項動詞の割合 (%)

動詞の意味属性を中心に見ると、「〜てあげる」系は、「動作・作用の属性」の類の動詞が多くを占めており、「〜てくれる」系では「相手」の動詞が多い

ことが分かった。また、「～てもらう」系においては「動作・作用の属性」の動詞が多いことには変わりはないが、より多様な意味の動詞と共起関係があることを確認できた。

授受補助動詞文における前項動詞には、「動作・作用の属性」を表す動詞が多く使用されているという特徴が挙げられるが、この点は第IV章で扱う発話機能との関係でより明らかになると考える。授受補助動詞文では、前項動詞の行為が他者に向けられていることを表す表現であるため、動作を表すことが多く出現するということは予想できる。

ここで注目には値するのは、相手、つまり聞き手に直接動作を行う動詞「教える」がそれぞれの授受補助動詞文とコロケーション関係にある点である。「～てあげる」系には5%、「～てもらう」系は14%であるが、「～てくれる」系においては46%も占めていることが分かった。これは「教える」という動作が行われた場面において「～てくれる」系と「～てもらう」系という二つの選択肢から、「～てくれる」系をより好んで使用していることが窺える。このような現象については、第IV章で扱う発話機能に密接な関係があると考えられる。

3.5 前項動詞句により格表示が変化するケース

(3.125) *太郎は私の妹に褒めてくれた。(=(3.6)を再掲)

(3.126) 太郎は私の妹を褒めてくれた。

(3.127) 田中さんがうちの子と遊んでくれました。

(3.128) *田中さんがうちの子に遊んでくれました。

(3.129) *僕は花子にゴミを捨ててやった。(=(3.5)を再掲)

(3.130) 僕は花子のためにゴミを捨ててやった。

(3.131) 僕は弟の宿題を見てあげた。

(3.132) *僕は弟に宿題を見てあげた。

(3.133) *私は医者の一言に安心させてもらった。(=(3.7)を再掲)

(3.134) 私は医者に安心させてもらった。

(3.135) 私は医者の一言で安心させてもらった。

(3.126)(3.127)で分かるように、前項動詞の構造で、ヲ格、ト格で表される場合、授受補助動詞文の構造において前項動詞の格情報が優先されることが分かる。また、(3.130)のように前項動詞「捨てる」の構造で「場所を表すニ格」を想定した場合、前項動詞の構造が優先され、授受補助動詞文の与格に対する対象は、「～のために」もしくは「～の代わりに」と表示する。言い換えると、(3.22)の「ゴミを捨てる」における「に格」は場所を表す格との結びつきが強い⁴⁹ためである。

また前項動詞がヲ格を含んでおり、それを与格の人物が所有している場合には、(3.131)のように、「～の N」の形で表すことが分かる。また、(3.133)(3.134)では、3.3.2 節で述べたように、「医者の一言」のような事態を表すコト名詞は、「～てもらふ」系との共起性が低いことからその要因が伺える。そのため、「～てもらふ」系の与格名詞句に有情性を高め、「医者」にした時には容認度が上がる。また、前項動詞句である「安心させた」の理由を表す「で格」に変えることによって、(3.135)のようになり、容認度が上がる。

3.6 本章のまとめ

本章では、本研究の一つ目の課題である「授受補助動詞文はどのような形式で使われているか」という課題について考察した。

まず収集したデータの概要について概観し、「書き言葉的性格」「話し言葉的性格」「ネット言葉的性格」のジャンルに分けた結果、ジャンルごとに出現した授受補助動詞文の割合が類似していることから、コーパス結果の有意性が確認できた。次に、授受補助動詞文の構文的な特徴について、各格情報に出現している名詞の類について調査し、有情を表すものから無情を表すものまでの

⁴⁹ 情報処理振興事業協会技術センター編 (1987) の『計算機用日本語基本動詞辞典 IPAL (Basic verbs) 辞書編』に「捨てる」項の第 1 文型を見ると、以下のよう
に構造が示されている。

・「すてる」【捨てる】N1 ガ N2 ヲ (N3 カラ) (N4 ニ/へ)
e.g. 弟がゴミを箱に捨てた。

第III章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

バリエーションがあることを述べた。さらに、前項動詞に位置する動詞の類について、先行研究で述べられた制限に対して反例を挙げ、前項動詞として使用する動詞の傾向について分析した。「～てあげる」系と「～てもらう」系では動作や作用の属性を表す前項動詞が多く現れたが、「～てくれる」系では、相手(聞き手)と関連する動詞が前項動詞として使用されていることが分かった。

以上のように、本章では授受補助動詞文の形式的な特徴について考察したが、次章では、談話において授受補助動詞文がどのような意味・機能として役割を果たしているかについて、発話機能論の観点から探る。

第IV章 授受補助動詞文をめぐる発話機能

4.1 談話の発話機能と授受補助動詞文

発話機能について、前章までに述べたように、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの(山岡 2008:50)」であるが、4.1節では先行研究における発話機能の詳細を述べ、4.2節では本研究における発話機能の分類基準について説明する。まず、国立国語研究所編(1987)によると以下のように概念を分類している。

表 IV.1 国立国語研究所編(1987:153-158)による発話機能のカテゴリー

| 文の形式上の特徴 | 場面を形成する要因 | | |
|---|--|--|--------------------------------|
| 文末の表現意図 | (1) 発話の動機 (場面メアテ) | (2) 働きかけの種類 (聞き手メアテ) | (3) 発話内容に対する態度(素材メアテ) |
| 1. 叙述要素文 2. 伝達要素文 21. 終助詞 ネ 22. その他の終助詞 23. ノダ 3. 疑問要素文 31. 質問 32. 納得・詰問 4. 要求要素文 41. 命令 42. 依頼 5. 意志要素文 6. 単語文 7. 言いさし文 | 1. 自律的 2. 非言語的文脈への対応 21. 事態の推移に対する反応 22. 他の動作・行為に対する反応 3. 言語による文脈への対応 31. ワキ的文脈 32. マトモ的文脈 | 1. 没対者性 11. 独語 12. 聞かせ 2. 対者性 21. 要求 211. 情報要求 2111. 質問 2112. 同意要求 212. 行為要求 2121. 単独行為 2122. 共同行為 22. 非要求 221. 情報提供 222. 意志表示 223. 注目表示 | 0. 中立的 1. 肯定的評価 2. 否定的評価 |

国立国語研究所編（1987）では、外国人のための日本語教育のための教材のシナリオにおける発話機能を分析したものである。形式面におけるものに触れ、場面を場面目当て、聞き手目当て、素材目当ての3分類している点が特徴である。文末の表現意図では、文の表現上意図が最も現れやすい文末の要素による分類を行っており、授受補助動詞文においても当てはめられる要素である。場面を形成する要因として、まず、話し手が当該発話を発話した動機が何であったかの条件として発話の動機を示している。また、発話に向けられた相手に対してどのような効果をもたらすかの条件として、働きかけが決まる。ここでは、聞き手へ働きかけているかの有無は、発話機能の中核的な要素であると考えられる。つまり、話し手の考えや出来事を叙述しているか、聞き手へある行為を促しているかということである。最後に、発話内容に対する話し手の評価であるが、評価を含まないものを中立的で、次に肯定的評価と否定的評価に分けられる。

次に、ザトラウスキー（1993）では、電話での会話における勧誘のデータとして、発話機能を定義し、分類している。このような発話機能の分類を基準に、授受補助動詞文に見られる発話機能を考えてみると、以下のように、「情報提供」「意志表示」「情報要求」「共同行為要求」「単独行為要求」として想定できる。ザトラウスキー（1993）では、以下のように用例を紹介し、表IV.2に定義づけとカテゴリーの詳細をまとめた。

- (4.1) 太郎は次郎にプレゼントを買ってあげた。「情報提供」
- (4.2) 合格してやる！「意志表示」
- (4.3) これは誰に買ってもらいましたか？「情報要求」
- (4.4) 先生に話していただきましょうか。「共同行為要求」
- (4.5) この本を彼に渡してくれる？「単独行為要求」

（(4.1)～(4.5)は、ザトラウスキー 1993）

表 IV.2 ザトラウスキー（1993：67-68）の発話機能と定義

| カテゴリー | カテゴリーの意味および下位分類 |
|-----------|---|
| ① 注目要求 | 「呼びかけ類」の類。「もしもし」 |
| ② 談話表示 | 「接続表現」「だから」「じゃあ」「メタ言語的発話」 |
| ③ 情報提供 | 実質的内容を伝える発話で、客観的事実に関する質問に対する答えも含む。 |
| ④ 意志表示 | 話し手の感情、意志等を表示する発話で、それらに関する質問の答えも含む。 |
| ⑤ 同意要求 | 相手の同意を求める発話。「～でしょ?」「～じゃない?」 |
| ⑥ 情報要求 | 情報の提供を求める発話で、「質問」の類が多い。 |
| ⑦ 共同行為要求 | 「勧誘」等のように、話し手自身も参加する行為への参加を求める発話である。 |
| ⑧ 単独行為要求 | 話し手が参加しない、聞き手単独の行為を求める発話で、「依頼」「勧告」「命令」等がある。 |
| ⑨ 言い直し要求 | 先行する発話がうまく聞き取れなかった場合の発話 |
| ⑩ 言い直し | 「言い直し要求」に先行する発話を繰り返す、あるいは多少言い換えてもう一度述べる形の応答である。 |
| ⑪ 関係作り・礼儀 | 「感謝」「陳謝」「挨拶」等の良い人間関係を作る。 |
| ⑫ 注目表示 | 相手の発話、相手の存在、その場の状況・事物の存在などを認識したことを表明する。「あいづち」 |

しかし、ザトラウスキー（1993）における発話機能は、勧誘の談話から収集しているため、話し手による聞き手への「共同行為要求」「単独行為要求」が中心となっている。したがって、様々な談話における発話機能を扱うには限界が見られ、談話内容において種類が増えていくことが考えられる。

次に、山岡・牧原・小野（2010）による発話機能の分類では、Searle（1969）による発語内行為⁵⁰の5分類をさらに詳細に分類している。

⁵⁰ Austin（1962）は、有意味の言語音声を発語する「発語行為（locutionary act）」、発話行為によって遂行された行為である「発語内行為（illocutionary act）」、聞き手側に発生すると思われる効果および影響を表す「発語媒介行為（perlocutionary

表 IV.3 山岡・牧原・小野（2010：109－135）による発話機能の各範疇

| 大範疇 | 小範疇 | |
|---------------------------------------|-----------------------|--------------|
| {策動} 参加者の行為に 対する 制御機能 | 《意志要求》《意志表明》 | 《助言要求》《助言》 |
| | 《命令》《服従》 | 《忠告》《履行》 |
| | 《依頼》《協力》 | 《許可要求》《許可》 |
| | 《改善要求》《改善》 | 《勧誘》《参加》 |
| | 《提供要求》《提供》 | 《脅迫》 |
| | 《約束要求》《約束》 | |
| {宣言} 世界を変化させる 遂行機能 | 《承認要求》《承認》 | 《譲渡要求》《譲渡》 |
| | 《認知要求》《認知》 | 《判定要求》《判定》 |
| | 《拒否》＝《断り》 | 《解任》／《破門》 |
| | 《命名要求》《命名》／《任命要求》《任命》 | |
| | 《辞任要求》《辞任》／《辞退要求》《辞退》 | |
| {演述} 世界の現象に関する 記述機能 | 《陳述要求》《陳述》 | 《賞賛要求》《賞賛》 |
| | 《報告要求》《報告》 | 《非難》 |
| | 《主張要求》《主張》《賛同》／《反論》 | |
| {表出} 参加者の心情に 関する 遂行機能 | 《感情要求》《感情表出》 | 《祝福》 |
| | 《激励》《決意表出》 | 《願望要求》《願望表出》 |
| | 《感謝要求》《感謝》／《恩着せ》 | |
| | 《謝罪要求》《謝罪》／《不満表明》 | |
| {形成} 会話を形成する メタ的機能 | 《挨拶》 | 《補充要求》《補充》 |
| | 《交話》 | 《問い返し》 |
| | 《注意要求》《注意表明》 | |
| | 《言い直し要求》《言い直し》 | |

上記の表 IV.3 は山岡・牧原・小野（2010）による各範疇の分類であるが、その中で、授受補助動詞文で表現できると想定できる発話機能には、以下のよ

act)」に注目し、発話の三層構造として提唱した。Searle（1969）は、Austin の概念を受け、様々な動詞における発語内行為を一般化しようとした。

うな例がある。次は{策動}の発話機能として授受補助動詞文が使用された例である。

- (4.6) 明日の予定を教えてください。《意志要求》《意志表明》
- (4.7) 次はこれに書いてください。《命令》《服従》（案内）
- (4.8) 一緒に行っていただけますか？《依頼》《協力》
- (4.9) ちょっと、かばんをどけてもらえる？《改善要求》《改善》
- (4.10) この資料、もう一部もらえますか？《提供要求》《提供》
- (4.11) いつ教えてくれるの？《約束要求》《約束》
- (4.12) いい方法を教えてください。《助言要求》《助言》
- (4.13) 映画でも見にいきませんか。《勧誘》《参加》
- (4.14) 明日また返してもらいに来ますからね。《脅迫》

((4.6)~(4.14)は、山岡・牧原・小野 2010)

山岡・牧原・小野(2010)で示された発話機能の類と、国立国語研究所編(1987)による発話機能は、聞き手目当ての働きかけのある類がある点が同様である。次に{宣言}の発話機能についての例を挙げる。

- (4.15) 彼の立場もわかってやってくれ。《承認要求》《承認》
- (4.16) この土地を僕に譲ってくれないか。《譲渡要求》《譲渡》
- (4.17) 君は会計担当をやってくれ。《任命要求》《任命》
- (4.18) 君には主将を降りてもらおう。《解任》／《破門》

((4.15)~(4.18)は、山岡・牧原・小野 2010)

{宣言}の発話機能は、当該発話が聞き手の権限によって行為の実行が決まることであるが、上記の例のように、聞き手への働きかけのある類に属するといえる。{演述}の例、続けて{表出}の例を挙げておく。

- (4.19) 「こんどはまたやってくれたね」《非難》
「なんの話ですか」

「とぼけるなよ。東都スポーツの五十嵐という記者が君と大学で同窓と
いうことは、調べがついてる。」

(BCCWJ LBi9_00188 : 吉川潮『ホンペンの男たち』実業之日本社 : 1994)

(4.20) 「決めてくれ!」「決めてやる!」《激励》《決意表出》

(2008年北京オリンピックの日本応援団ポスター)

山岡・牧原・小野(2010:109-135)による発話機能と授受補助動詞文の例
を挙げたが、発話機能の分析を複文における分析にまで広げる際には、以下の
ような考えが有効であると考えられる。

(4.21) すごくつらく、苦しかったけど、本当のことを教えてくれてありがとう。

(BCCWJ OB6X_00025 : 木藤亜也『1リットルの涙』幻冬舎 : 2005)

(4.21)は、談話全体では《感謝》を表す働きを持っているが、詳しく考察する
と、「すごくつらく、苦しかったけど」のところは話し手の《感情表出》で、
「本当のことを教えてくれて」の「~てくれる」文では《陳述》であるが、「あ
りがとう」の《感謝》を表す言葉によって談話全体の発話機能が決まるといえ
る。つまり、主節の述語の発話機能によって談話における発話機能が決まるが、
主節の述語と従属節の述語の間には何らかの関係があることが指摘できる。次
の例を比較する例として説明する。

(4.22) *すごくつらく、苦しかったけど、本当のことを教えてもらってありがとう。

(4.22)は、(4.21)の「~てくれる」文を「~てもらう」文に置き換えたもので
あるが、文の容認度において差があると考えられる。その理由として、《陳述
》としての「~てもらう」文と、《感謝》を表す「ありがとう」の問題であり、
《謝罪》を表す「ごめんなさい」との共起⁵¹の方が適格とされることから分か

⁵¹ 本研究では、共起関係(コロケーション関係)について、ある語と語が同時に
出現する頻度を表すこととする。共起については、共起の有無の判断だけではなく、
強弱の程度でも表すことができる。

る。

前述したように、従来の発話機能による分析は、国立国語研究所編（1987）による日本語教材シナリオ分析や、ザトラウスキー（1993）による電話の勧誘の談話における分析、山岡・牧原・小野（2010）による理論的な発話機能の分類であった。

4.2 主観性・間主観性に基づく発話機能の類

本節では、本研究における発話機能の類について述べる。4.1 節で述べた発話機能の共通的な概念は、談話において話し手が聞き手を意識（配慮）して言語行動を行う際に現れるものとして捉えられている。しかしながら、本研究の研究資料である『BCCWJ』におけるジャンルの性格から見ると、全ての用例が会話文として話し手と聞き手が常に想定するとは言い難い。本研究における発話機能は談話におけるものであるとしているが、ここで談話とは会話文のみならず、言葉を使ってコミュニケーションを行うすべての言語行動を意味する。つまり、書き言葉的性格のジャンルからの用例であっても、書き手と読み手というコミュニケーションの与え手と受け手が存在するため、談話の一部とみなす。また、このような考え方は、ベケシュ（2015）による談話の捉え方と一脈相通ずるところがある。

(4.23) ベケシュ（2015：262）による社説の表現と対話の意味について

書き手の主観性を表す文末表現と、主題の展開・維持による構造との組み合わせによって、論法のマクロ構造、すなわち社説の、アリストテレス的に言えば「*energeia*」（言語活動）～中略～「対話」としての側面が再現できる。

ベケシュ（2015）によると、社説における内容の構成が、談話における内容の構成と同一のものであり、社説というジャンルも言語活動として一種の対話とみなしている。また、話し言葉的性格や書き言葉的性格、ネット言葉による

性格を明確に分類するには限界がある。ジャンルというのはあくまでもある談話が表出されたバックグラウンドのようなものであると思われる。しかしながら、どのような場面において当該談話が生まれたかは把握できるが、その表現が書き言葉であるか、話し言葉であるかという分類は談話内容によって変わるため、一般化が困難である。



図 IV.1 日本選手応援団のポスター（2008年 北京オリンピック）

上記の図 IV.1で分かるように、応援するという発話場面で、「決めてくれ！」という応援のメッセージに対する「決めてやる！」という返事から感じられる強い決意は、まさに授受補助動詞文の使用によって得られることであると考えられる。また、話し手（書き手）が伝えようとしている事柄が、聞き手（読み手）志向であることを表すことで、より発話機能を効果的に伝達できることに繋がると考える。

授受補助動詞文における発話機能の分類について、聞き手が授受補助動詞文の参与者として直接関わっているか否かを基準に、＜対者性＞＜没対者性＞に分けてそれぞれの発話機能を考察する。＜対者性＞＜没対者性＞に分ける基準となった概念は主観性・間主観性である。

まず、主観性・間主観性についてその概念について述べる。

Traugott (1995 : 32) は、主観性について「話し手の主観的信条や態度を反映する方向で意味・語用論的变化が起こる」と提唱し、通時的な観点から分析を行った。坪井 (2005) によると、授受表現が本動詞用法からテ形接続形式で構文化が進んだことについて、「利益・恩恵の授受という主観的価値評価を伴う

表現であるが故であろう (ibid. : 18) 」と述べているが、主観性の内実についての捉え方については今後の課題であると指摘している。間主観性について、堀江 (2008) は「話し手の聞き手への認識的・社会的注意 (配慮) を表す意味 (ibid. : 37) 」とし、主観性から間主観性への推移の研究が「談話と認知という言語外要因を有機的に関連づけ、文法の語用論的基盤の通時的・共時的比較研究に新たな展望を開いた (ibid. : 40) 」と評価している。

そこで、主観性と間主観性の定義について本研究における考え方を述べておく。主観性とは、話し手が事柄をどう見ているかの判断・評価を表すのであり、間主観性は、聞き手に対する話し手の態度や配慮を表すこととする。

一般的に構文化という大きい枠組みの中で、「主観化から聞き手への認識的・社会的な注意を表す意味へ (堀江 2008 : 37) 」と向かうことから、「客観的把握 (非主観的) > 主観的 > 間主観的」という語用論的なハイアラーキーを持つと考える。次に、授受補助動詞文を例に挙げて説明する。

- (4.24) ??私が妹にチョコを買った。
 (4.25) 私が妹にチョコを買ってやった。
 (4.26) ??太郎が私{に・のために}チョコを買った。
 (4.27) 太郎が私{に・のために}チョコを買ってくれた。
 (4.28) 私が太郎にチョコを買ってもらった。

上記の(4.24)(4.26)を見ると、客観的把握を表す事柄に話し手自身が経験者として関与される際、授受補助動詞が必要とされる。また、「太郎が次郎にチョコを買った」という事柄において、話し手の視点が介入されると、「太郎が次郎にチョコを{買ってやった・買ってくれた}」もしくは「次郎が太郎にチョコを買ってもらった」等の授受補助動詞が加わることになる。つまり、授受補助動詞文における視点の制約から、話し手と授受補助動詞の参与者との関係について話し手の態度を表すという面で主観性が伺える。

さらに、主観性を表す表現と、間主観性を表す表現の分析のため、次のような例を挙げ、間主観性としての授受補助動詞の意味・機能を述べる。

まず、聞き手を意識した丁寧な言い方として、次の例が挙げられる。

(4.29) 室温における水と同じように金属を液体にするには、金属を加熱してやればよい。

(4.30) 金属を加熱すればよい。

(BCCWJ LBa4_00006 : 岡田正和『表面の科学』大月書店 : 1986)

(4.29)は客観的把握である(4.30)「金属は加熱すればよい」で十分話し手の意図が伝わる。しかし、「～てやる」文を用いることで、視点の操作における間主観性の概念で把握できよう。ここで実質的な動作の受け手となる対象は金属であるが、金属を加熱する動作は、金属のためでもなく、聞き手のために行われているわけでもなく、聞き手を意識して話し手自身の動作「加熱する」を丁寧に伝える効果がある。つまり、聞き手の存在を意識した使い方であり、間主観的であるといえる。

次は、話し手の強い意志・不満を表出する例である。

(4.31) そのことを絶対に忘れてもらっては困る。(=(2.36)を再掲)

(BCCWJ OM58_00001 : 国会会議録 : 2000)

(4.32) そのことを絶対に忘れては困る。

(4.33) そのことを絶対に忘れられては困る。(=(2.43)を再掲)

上記の例は、客観的把握で考えてみると、(4.32)「絶対に忘れては困る」もしくは、(4.33)「絶対に忘れられては困る」となるが、授受補助動詞を使用しない形でも構文論上、問題はない。ここで授受補助動詞文の使用を用いて期待できることは、聞き手の行為が話し手自身にとってどのような意味があるかに注目できる。つまり、ここでの文脈効果は、話し手の意図や感情を聞き手へ直接表出するという効果である。

最後に、聞き手へ許可を求める形式で、話し手がこれから行う行為における当為性が得られる効果について述べる。

(4.34) 議論をぜひ続けさせていただきたいと思います。

(BCCWJ OM62_00001 : 国会会議録 : 2003)

(4.35) 議論をぜひ続けたいと思います。

(4.34)は、(4.35)「議論を続けたいと思います」のように客観的把握を表すことも可能だが、このように相手が行為をさせるという使役型を用い、許可を求めている。このことから、聞き手の存在を想定しなくては解釈が不可能であることが分かる。聞き手を意識していることが反映されているため、間主観性の解釈が可能である。

以上のように、主観性と間主観性の概念を設け、本研究で取り扱う発話機能の類について、主観性を表す発話機能を<非対者性>と分類し、間主観性を表す発話機能を<対者性>と分類した。次の図 IV.2 は、本研究における発話機能の類の詳細を示したものである。

図 IV.2 の詳細を述べる。まず、聞き手に対する<対者性>においては、聞き手への働きかけの有無によって、働きかけがある場合には「聞き手への要求有り」とし、働きかけがない場合には「聞き手への要求無し」と区分し、従来の研究で述べられてきた《情報要求》《行為要求》《注目要求》を「聞き手への要求あり」の発話機能として扱う。また、聞き手へ直接働きかけてはいないが、話し手自身の《意志・決意の表明》が聞き手に向けられている場合は、「聞き手への要求無し」の類に分類し、ここには聞き手との《関係作り・礼儀》も、聞き手への間接的な働きかけと判断する。また、このような類の発話機能は、話し手と聞き手が授受補助動詞文の参与者として関与していることが判断できる。一方、談話の内容が聞き手に向けられていない<没対者性>の場合、客観的な事柄を《情報提供》をする陳述の発話機能や、話し手の感情を表出する発話機能がある。

4.3 節からは、コーパスに現れた授受補助動詞文の発話機能について上述した分類を基準とし分析する。各発話機能において授受補助動詞文を伴わない形で同じ発話機能を意図することも十分にあるにもかかわらず授受補助動詞文を使用している意味について探ることで、授受補助動詞文の発話機能を網羅的に把握できると考えられる。

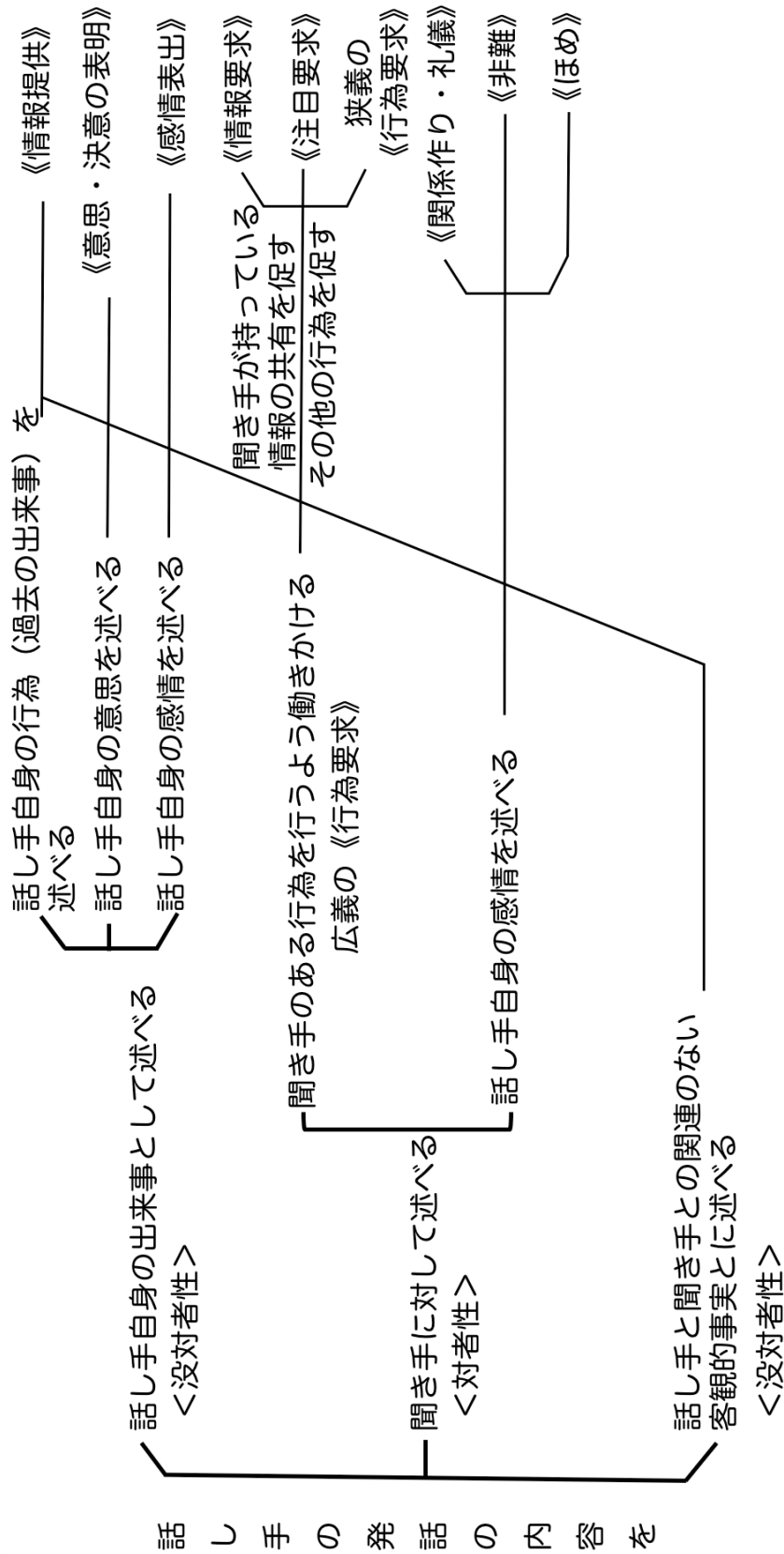


図 IV.2 本研究における発話機能の分類図

4.3 <対者性>を持つ発話機能の特徴

『BCCWJ』から調査した授受補助動詞文のデータの中で、聞き手に対する<対者性>を持つ発話機能としては、まず聞き手へ直接的な働きかけの類と、間接的な働きかけを持つ類がある。各分類の詳細についてコーパスからの例を用いながら検討する。

4.3.1 聞き手への直接的な働きかけを持つ発話機能

当該談話において聞き手へ直接働きかけている発話機能には、《情報要求》《行為要求》がある。このような発話機能について多くの先行研究では依頼や命令の意として扱われてきた。従来の依頼の概念を細分すると、ある情報を求めるものとして《情報要求》が挙げられる。《情報要求》の例として、(4.36)のような例が挙げられるが、「なにか話した」ことについて事実を確認している場面である。(4.37)のように授受補助動詞文を用いない例と比べると、「～てくれる」文にすることで、「なにか話す」ことが話し手にとって肯定的もしくは否定的評価が含意されている点が異なる。

(4.36) ぼくのことを、なにか話してくれましたか？

(BCCWJ LBr9_00066：メアリ・ホフマン/乾侑美子訳『ストラヴァガンザ』小学館：2003)

(4.37) そのことをほかのパートナーには話しましたか。

(BCCWJ PB47_00053：武藤崇恵/ハイ・コンラッド訳『名探偵はきみだ証拠をつかめ』早川書房：2004)

(4.38) 小林さんにノートを貸してあげましたか？

(4.39) 小林さんにノートを貸しましたか？

(4.40) 結婚式や家を建てる際に親に負担してもらいましたか？

(4.41) 結婚式や家を建てる際に親が負担しましたか？

このような発話機能における授受補助動詞文の特徴は、過去の出来事に関する

る確認においての《情報要求》が多く現れた点である。授受補助動詞文を用いない形式では、話し手が当該事柄に対してどのような評価を下しているかという面においては中立的な立場となるが、授受補助動詞文には話し手による評価が含意されている。このような特徴から、授受補助動詞文の構造において話し手が授受補助動詞文の動詞句に関与していなくては成立できないと考えられる。

次は、聞き手に対する《行為要求》であるが、以下のような例が挙げられる。《行為要求》においては、上述の《情報要求》とは異なり、授受補助動詞文を用いなければ《行為要求》の意味としては(4.43)のように、不適格となる。だが、動詞句に接続助詞「て」を加えることで《行為要求》の機能は保てるが、(4.44)のように常体で発話できる人間関係の状況のみ適格となる。人間関係において同等もしくは目下の人物に対する談話であることを前提に、(4.42)と(4.44)の発話を比較すると、授受補助動詞文を使用したほうが動詞句に対する話し手の評価が活かされ、話し手にとって有意義の行為であることが含意されているといえる。

(4.42) そういうときはさすがに話してくれる？

(4.43) *そういうときはさすがに話す？

(4.44) そういうときはさすがに話して？

(4.45) すみませんが、詰めていただけますか？

(4.46) *すみませんが、詰めますか？

(4.47) ??すみませんが、詰めて。

(4.45)では、「～てもらう」系の敬体である「～ていただく」文が用いられ、「～いただけますか」の形式で聞き手への《行為要求》を行っているが、授受補助動詞文の非使用の(4.46)で分かるように《行為要求》の発話機能では相応しい表現ではなくなり、接続助詞「て」の形式では、「すみませんが」という謝罪表現の敬意との不一致から不自然さを感じてしまう。

(4.48) これをちょっと飲んでみてください。

(4.49) これをちょっと飲んでみます？

(4.50) これ、ISBN書いてもらっていい？

(4.51) これ、ISBN書いて。

(4.52) これ、ISBN書いてもらえる？

(4.53) この村の特徴なんかを教えてくださいですかね？

(BCCWJ OY14_43228 : Yahoo!ブログ : 2008)

(4.54) #この村の特徴なんかを教えてくださいですかね？

(4.55) 記入してもらって大丈夫ですか。

(実際の経験談)

(4.56) #記入して大丈夫ですか。

しかし、授受補助動詞文における敬体の使用がいつも敬意を表すかの問題についてはまだ議論の余地がある。(4.48)の「～てください」の形式と(4.49)の授受補助動詞文の非使用を比較すると、相手への意志や意向の情報を要求する後者のほうがよりポライトであると感じる。その理由は、「～てください」が聞き手へ直接的に働きかける命令のニュアンスが強いためである。

また、(4.50)のように「～てもらっていい(ですか)」の「～てもらう」文が使用された《行為要求》の発話機能について考察する。(4.51)の授受補助動詞文の非使用に比べて(4.52)の「～てもらえる？」の形式は、話し手にとって前項動詞句の実行が望ましいこととして評価されることが含意されている。(4.50)の「～ていいか」という句が加えられていることから前項動詞句の実行を望む場合に使われていることがいえる。このような文は、「書いてもらう」ことに対する評価の決定権を聞き手に与えることで、聞き手の積極的フェイスを守ることにつながる効果がある。

聞き手への直接的な働きかけを持つ《行為要求》についてポライトネスの観点から見ると、「～てくれる」系を通して、聞き手の積極的フェイスを尊重することを表す方法と、「～てもらう」系を通して、聞き手の消極的フェイスを尊重することを伝える方法で、依頼と命令などの《行為要求》の場面で発生するFTAを緩和させる働きを持つと考える。また「～てもらう」系において、「～てもらっていいか」という形式で、聞き手の積極的フェイスの尊重を表現し、《行為要求》を達成させようとしている表現であることが理解できる。

4.3.2 聞き手への間接的な働きかけを持つ発話機能

聞き手への間接的な働きかけを持つ発話機能には、《意志・決意の表明》と、聞き手との《関係作り・礼儀》《非難》に関する発話機能が挙げられる。まず、《意志・決意の表明》について考察する。

(4.57) こんどは危ないかもしれん。貴様のフネがやられそうになったら、俺が助けてやるからな。

(4.58) 僕は彼女を助けて遣りたいと思って居たわけでは無い。

(BCCWJ PB49_00483 : 橋基緒『冗談』文芸社 : 2004)

《意志・決意の表明》の発話機能において、話し手は聞き手の消極的フェイスを脅かすものである。この際、授受補助動詞文「助けてやる」を使用することで、話し手が相手に向かって、自分の行動に対する強い意志と決意が表される。つまり、聞き手に積極的フェイスを示すことになり、《意志・決意の表明》の発話機能がさらに強化されるのである。

次に、聞き手との《関係作り・礼儀》としての発話機能における授受補助動詞文の例を挙げる。

(4.59) 台風により、大学休校となるため、休業とさせていただきます。

(用例の出所については注⁵²に記した)

(4.60) 台風により、大学休校となるため、休業とします。

(4.61) 総論としては、私は以上のような所信、感想を持っておりますので、発表させていただきます。

(BCCWJ OM58_00001 : 国会会議録 : 2000)

(4.62) 総論としては、私は以上のような所信、感想を持っておりますので、発表しました。

(4.63) あの、よろしかったらあと、は、私の方から記入させていただきます。

⁵² 茨城県 T 大学内書店の張り紙の内容である。(2013年10月16日)

第IV章 授受補助動詞文をめぐる発話機能

(4.64) あの、よろしかったらあと、は、私の方から記入します。

(4.65) 何かいい勉強させていただきました。

(4.66) #何かいい勉強しました。

(4.67) 何かいい勉強になりました。

(4.68) 議論をぜひ続けさせていたいただきたいと思います。(=(4.34)を再掲)

(BCCWJ OM62_00001 : 国会会議録 : 2003)

(4.69) 議論をぜひ続けたいと思います。

(4.59)(4.61)(4.63)のような発話行為は、話し手自身の行為について話している。「～てもらおう」系は、前項動詞の動作主を主語にせず、話し手自身を主語とすることで、聞き手の消極的フェイスを尊重する働きがある。聞き手とは直接関わりを持たない間接的な行為について、聞き手の存在を授受補助動詞文という構造に入れることで、話し手が聞き手の存在を意識していることを強調する効果がある。結果的にこのような発話場面において授受補助動詞文の使用は必然性を持つものではなく選択可能なものではあるが、授受補助動詞文を使用することで聞き手の消極的フェイスへの侵害が緩和される効果があると判断できよう。また、授受補助動詞文の使用を通じ、聞き手との人間関係を示すことで、聞き手との関係を作ることにつながると考える。

次に、《非難》の発話機能として授受補助動詞文が使用された例について考察する。

(4.70) 「こんどはまたやってくれたね」(=(4.19)を再掲)

(BCCWJ LBi9_00188 : 吉川潮『ホンペンの男たち』実業之日本社 : 1994)

(4.71) こんどはまたやったね。

(4.72) そんなので言っていたいただいても全然うれしくないんだけどさあ。

(4.73) 何もこの法案が通らないから株価が暴落するなんということを、勝手なことを言ってもらっちゃ困る。

(BCCWJ OM51_00001 : 国会会議録 : 1999)

(4.74) まあつき合いで来てやっただけさみたいなの。

《非難》の発話機能は、相手の積極的フェイスを脅かすFTAとなるが、(4.71)「よくもやったわねえ！」という表現より、授受補助動詞文を含む(4.70)「よくもやってくれたわねえ！」のほうが、授受補助動詞における格情報の含意により受け手の存在が特定できるため、相手の積極的フェイスを脅かす効果となる。また、「～てくれる」系と「～てもらう」系における《非難》の意は、被害の受身文と意味の面において相通じるところがある。両表現の相違点は、受身文では被害の意による《非難》が含意されていることが前提であるが、授受補助動詞文では話し手の評価はあるものの肯定的なものであるか否定的なものであるかという判断は文脈依存的である点が異なる。つまり、受身文では形式のみで《非難》の意を察することができるが、授受補助動詞文は必ず《非難》の場面であることが示されなければならない。

言い換えると、授受補助動詞の使用には、相手への《非難》が強化される働きがある。前項動詞で表した相手の行為に対して、話し手にとってどのような意味があるかを述べることに注目したい。ポライトネスから言うと、話し手自己の利益が少ないと述べることで、相手の行動の方向性やその影響について話し手の評価を表出する効果がある。つまり、話し手自身のフェイスを守るということに繋がり、相手の行動に対して否定的な評価を提示することで、聞き手の積極的フェイスを脅かす発話機能が強化される効果が生まれるといえる。

授受補助動詞文には「聞き手の負担が大きいと述べよ」または「話し手自己の利益が大きいと述べよ」というポライトネスの原理が作用されており、特に聞き手の消極的フェイスの侵害に配慮し、授受補助動詞文が使用されることが観察できる。

また、話し手の《感情表出》の発話機能において以下のような特徴が見られる。

(4.75) 来てくれた人、コメントくれた人、ありがとう。

(4.76) いろいろ指導していただいて、教えてもらって、すごく助かりました。

授受補助動詞文と共起する表現として、話し手の感情を表出する感謝表現「あ

りがとう」と謝罪表現「申し訳ありません⁵³」、「うれしい」と共起している例が見られる。この場合、「～てくれる」系は聞き手の積極的フェイスを尊重する働きを持つが、「ありがとう」の感謝表現もポジティブ・ポライトネスの一つであり、そのため、この二つの表現の共起性が顕著となると考える。また、「～てもらおう」系の場合、聞き手の消極的フェイスを尊重する表現であり、謝罪表現はネガティブ・ポライトネスの一つである。

このように、授受補助動詞文を含む節と、他の述語との共起関係においてそれぞれ同じ性質をもつ発話機能と共起しやすいことが見られた。もう一つ用例を挙げて説明する。

(4.77) アルバイト、応募してくださってありがとうございます。

(4.78) *アルバイト、応募してくださってすみません。

((4.77)(4.78)は、原田 2007 : 125)

原田(2007)では上記の(4.78)で「すみません」が用いられることができないため、非文として判断している。その理由として、「～てくれる」系の話し手には「聞き手が自発的に応募してくれたことへの謝意があるが、話し手から応募するように依頼したわけではなく、そのために『借り』の意識はない(ibid.: 125)」とされている。しかし、「応募する」こと自体応募するように誰かが働きかけなければ「応募する」ことはできない。つまり、「～てくださる」文における感謝・謝罪表現の共起性の差について「聞き手の自発性」との関連性は再考の余地がある。

ここでいう「聞き手の自発性」については、話し手が当該発話に聞き手を積極的に関与させることで、聞き手による自発的な行為であるように見せていることにつながると考える。このように、話し手が聞き手の意図を察しているように発話をすることは、日本語の特徴としてもいえる点であるが、このようなことについて蒲谷(1999)では、「あたかも表現」という用語で説明している。

⁵³ 「すみません」は謝罪を意味するほか、感謝の意味としても解釈可能であるため、代表的な謝罪表現として「申し訳ありません」を示す。

(4.79) 「あたかも表現」の規定

「あたかも表現」とは、ある「表現意図 (X)」を持った「表現主体」が、「場」や「人間関係」、「表現形態」などを考慮して、その「表現意図 (X)」を、典型的な「文話 (X')」ではなく、「表現意図 (Y)」と結びつく「文話 (Y')」によって叶えようとする「表現行為」である。

(蒲谷 1999 : 24)

例えば、タバコを吸ってはいけない場所における禁止の意図を、「ここは禁煙になっております」と発話することで、伝えることが「あたかも表現」となるのである。このような表現の解釈で最も重要なのは、文脈状況の理解である。つまり、禁煙の場所で聞き手に禁止するように伝えることが発話場面である。このような前提が成立しなければ、その意図は伝わらず、「禁煙」の場所である情報を伝達するだけの意味しか持たない。

(4.77)(4.78)では、話し手が「アルバイトを応募する」行為を行った聞き手に対して感謝の意を伝えている文である。このような場面において、「アルバイトに応募してありがとうございます」ではなく、「～てくださる」文を含む形式が使わなければならないのは、「あたかも表現」として聞き手への行為が、話し手に意味のある行為であることを理解してほしいという気持ち⁵⁴が含まれているためである。

本節では、従来授受補助動詞文が主節の述語表現としての用例を中心とした研究が進んでいることを踏まえ、より大きな単位である談話のレベルにおける考察の必要性について述べた。授受補助動詞文におけるミクロな視点からマクロな視点への考察を通じ、授受補助動詞文の使用をより精緻化することができよう。

⁵⁴ このような気持ちを、蒲谷 (1999 : 30) では「理解要請」として述べている。つまり、相手に感謝の意を伝える意図で発話するものは「あたかも自己表出表現」に当たる。

4.4 <没対者性>を持つ発話機能の特徴：《情報提供》

本節では、聞き手目当てではない発話機能の類を中心に、授受補助動詞文の使用に注目する。ここでは、客観的事柄としての《情報提供》について考察する。

授受補助動詞文において没対者性の発話場面では、聞き手つまり二人称を授受補助動詞文の参与者としない場合である。例えば、次のような例が挙げられる。次は聞き手へ客観的な情報が提供される場面での例である。

(4.80) さおりは、少し水気の抜けた顔をしていたが、顔色は生きているときのままだ。絵を見せてやった。

(BCCWJ PB39_00020 : 森青花『さよなら』角川書店 : 2003)

(4.81) たこは、うでをふってあいさつしました。「たこさんがたすけてくれたの。あたしのうきわをつかんで、こちらへつれてきてくれたのよ。」

(BCCWJ LBan_00013 : 神沢利子『くまの子ウーフ』ポプラ社 : 1986)

(4.82) 子供の頃よ。父親に頼んで（人形を）買ってもらったの。私は一人っ子だったし、無口で友だちもいなかったから、遊び相手が欲しかったのよ。

(BCCWJ LBa9_00017 : 村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』中央公論社 : 1986)

(4.80)は、小説の地の文であるが、省略された格情報を復元すると、「私はさおり（第三者）に絵を見せてやった」であり、聞き手に何か働きかけるのではなく、当該事柄を情報として伝えていることが分かる。(4.81)と(4.82)では、「たこさんが私を助けてくれた」となり、「私は父親に人形を買ってもらった」という情報を聞き手に伝える発話機能を持つ。このような例は、授受補助動詞文で表そうとしている事柄に話し手が直接関わっていることが分かる。つまり、授受補助動詞文を使用しない場合では話し手が当該事態とどのような関係であるか把握することができない。また、話し手自身が当該事柄に関与しておらず第三者同士において使用された授受補助動詞文について考察する。

- (4.83) ロイスはダイヤのペンダントを買ってもらっている。それをラングから手渡されたロイスは有頂天になり、ニコラにまで見せびらかしに来たものだ。
(BCCWJ PB59_00375 : Lamb, Charlotte./大沢晶訳『別れの薔薇でなく』ハーレクイン : 2005)
- (4.84) ロイスはラングにダイヤのペンダントを買ってもらっている。
- (4.85) ラングはロイスにダイヤのペンダントを買ってあげている。
- (4.86) ラングはロイスにダイヤのペンダントを買ってくれている。
- (4.87) ロイスはラングのためにダイヤのペンダントを買った。

上記の例(4.83)の授受補助動詞文の文の格情報を復元すると、(4.84)となるが、この文は第三者の人物「ロイス」と「ラング」の間で行われたことについて言及している。ここでは、「～てもらう」系のみならず「～てあげる」系と「～てくれる」系で表現しても、伝えようとしている事柄は変わらない。つまり、ここでは話し手と当該事柄の参与者との関係を直接表すことができず、聞き手にも働きかけていない。

上記のように、第三者同士の出来事について、話し手も聞き手も何ら関与していない場合で、(4.87)のように授受補助動詞文の非使用が妥当であると考えられる。しかし、(4.84)(4.85)(4.86)の「ラングのために」の句で分かるように、「ダイヤのペンダントを買った」という動作がラングのために行われていることであると判断しているのは話し手である。話し手はその判断を聞き手に伝達する働きとして授受補助動詞文が使用されている。

4.5 本章のまとめ

授受補助動詞文の発話機能について、五つの発話機能が強化される効果について検証を行った。整理した結果を以下の表 IV.4 と図 IV.3 に示す。

以上、本章では授受補助動詞文における様々な発話機能と、聞き手に対する働きかけによる表現の差異について考察した。対人コミュニケーションにおける授受補助動詞文の発話機能について『BCCWJ』のデータを用いて、授受補助

動詞文の語用論的機能として発話機能の強化について考察した。その結果、様々な発話機能において、授受補助動詞文が使用されることによって、聞き手のフェイスが守られており、発話機能の強化につなげる働きがあることが分かった。

表 IV.4 授受補助動詞文における発話機能の分類

| 分類基準 | 発話機能の大分類 | 発話機能の小分類 |
|-------------------|-----------|----------------------------------|
| 聞き手に対する ＜対者性＞ | 聞き手への要求有り | 《情報要求》 《行為要求》 |
| | 聞き手への要求無し | 《意志・決意の表明》 《関係作り・礼儀》 《非難》 《感情表出》 |
| 聞き手に対する ＜没対者性＞ | 客観的事柄の伝達 | 《情報提供》 |

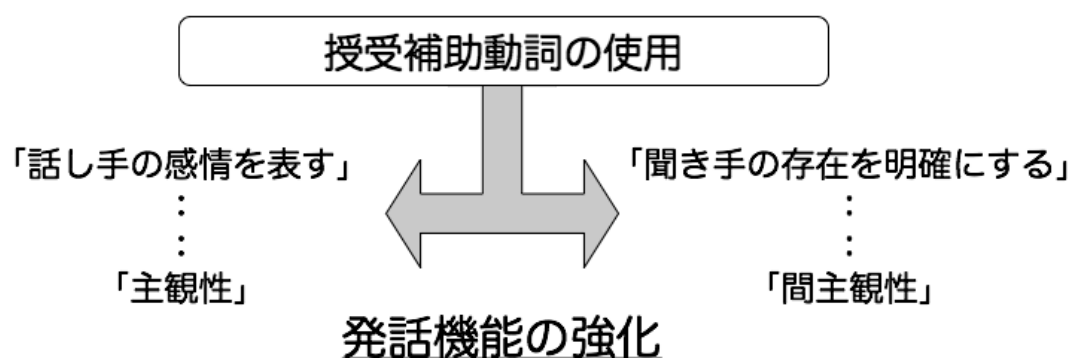


図 IV.3 授受補助動詞文における発話機能の強化

「～てあげる」系と「～てくれる」系は聞き手の積極的フェイスを守り、「～てもらおう」系は聞き手の消極的フェイスを守る傾向が窺えた。このような分析を通じて、従来の研究で説明できていなかった例文が説明できると考える。

本章の考察を通じ、恩恵性だけでは授受補助動詞文の仕組みを説明しきれない点を指摘した。その説明のために取り扱った授受補助動詞文の発話機能を明らかにすることは、授受補助動詞文の全体像を解明する上で重要な手掛かりとなる。

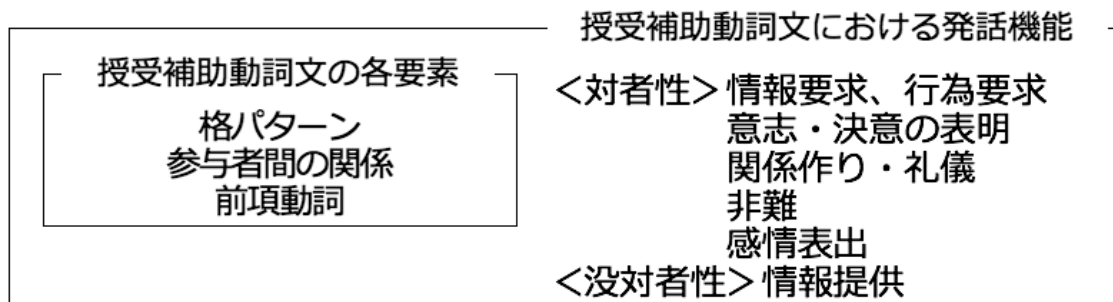


図 IV.4 授受補助動詞文の構造および発話機能との関係

以上、第IVでは授受補助動詞が使われた談話の発話機能を考察することで、どのような場面で授受補助動詞が使用されているかが把握できた。また、各発話機能において特定の表現形式が連続して使われていることを指摘した。しかしながら、その傾向性までは見出すことができず、発話機能の類を探るだけでは不十分であることが分かった。したがって、次の第V章では、第III章と第IV章の結果を統合させ、それぞれの表現形式と発話機能の関係性について明らかにする。

第V章 共起ネットワークの観点から見た 授受補助動詞文の構造と機能

本章では、第III章と第IV章での分析結果の相関関係について扱う。分析手法はKH coder⁵⁵を利用し、共起度から共起ネットワークのフレームを取り出し、格パターンや前項動詞、授受補助動詞が示す構文形式と、発話機能の関わりを共起ネットワークの図で表す。各授受補助動詞の典型的なタイプとなるものを構文フレームとし、フレームの間に、どのような拡張のリンクで形成されているか考察する。

5.1 KH Coder を用いた共起ネットワーク分析の概観

本節では、共起ネットワークのフレームを抽出する方法とツールを紹介する。共起ネットワークの構成要素には、第IV章で考察した格情報の表示と前項動詞の組み合わせがあるが、この組み合わせについて頻度と共起度で構文フレームを提示し、その周辺にある様々な構文パターンを提示する。採用基準として頻度のみならず共起度にも配慮している理由は、多く出現した用例の意味用法よりも、要素間の結びつきの強さが構文の特徴をより際立たせることに繋がると考えるためである。

本研究では、共起ネットワークのフレーム作成のため、KH Coder を使って分析を行った。KH Coder とは、テキスト型データを統計的に分析するためのソフトウェアである。分析対象のコーパス・データをテキストファイルにし、入力すると、データの中から語を自動抽出し、語と語の結びつきを探るため、共起ネットワークを調査することができる。また、その特徴として、形態素解析ソ

⁵⁵ 樋口耕一により開発されたテキストマイニング・ソフトであり、ウェブ・ページについては、「参照したインターネット・サイト」に記す。

フト「茶筌」の解析情報に基づくデータ抽出機能が組み込まれている。



図 V.1 KH Coder の概要⁵⁶

KH Coder における作業順序を説明すると、まずテキストファイルを読み込み、前処理オプションを実行してから、「抽出語・共起ネットワーク」のオプションを開く。この際、集計単位を「文」単位にすることが重要となる。次の図 V.2 に設定画面を示す。

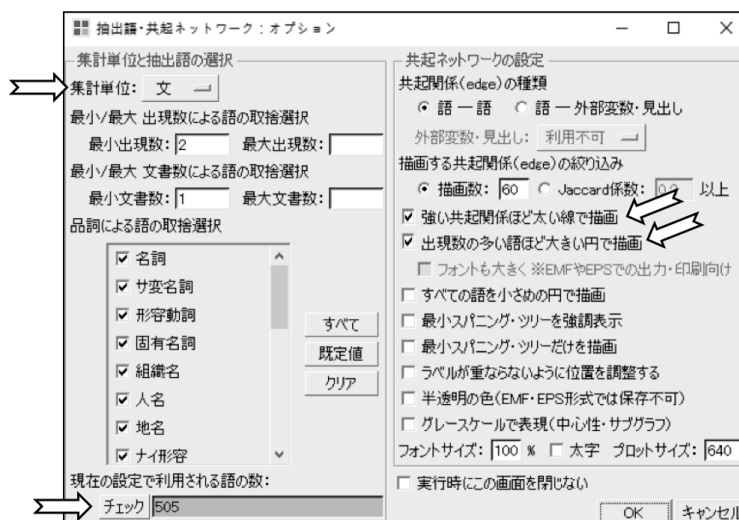


図 V.2 KH Coder における共起ネットワーク設定画面

⁵⁶ 出典は、<http://khc.sourceforge.net> の概要を記した。
(アクセス期間：2016年4月～2017年11月)

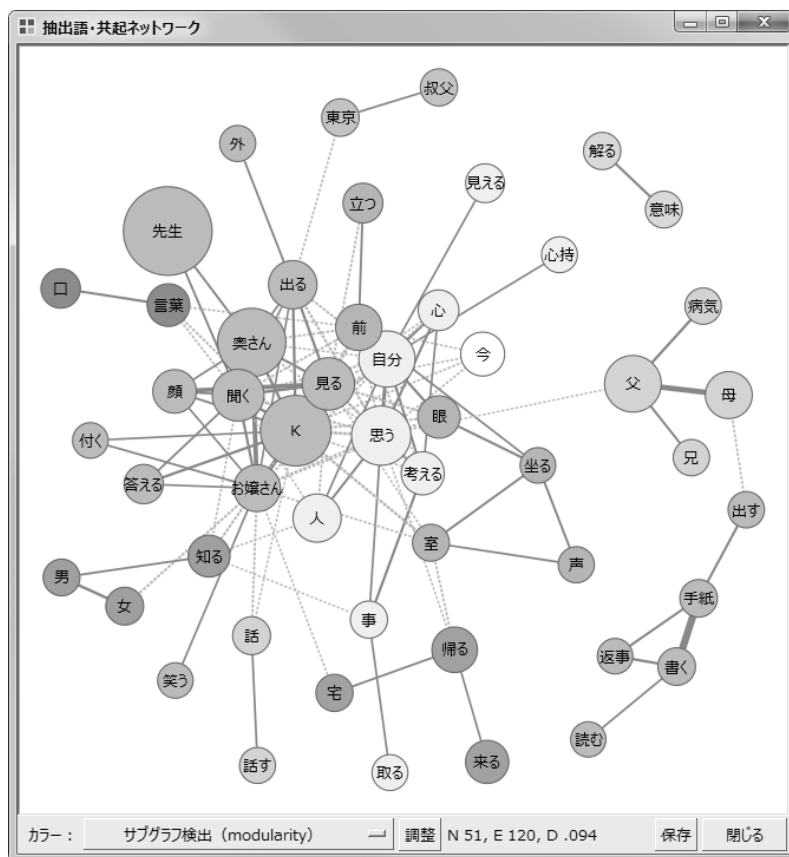


図 V.5 夏目漱石『こころ』に現れたテキストの共起ネットワーク分析⁵⁸

KH Coder における図の解釈について、円の大きさが大きければ大きいほど、円の中の語・表現が対象とする語・表現と共起する度合いが大きいことを示す⁵⁹。また、円と円を結ぶ線があれば、対象とする語・表現と共起する際、同時に共起されることを意味する。また、線の太さでその共起度の強弱を示し、太い線で結ばれている場合、結束性が強いといえる。

このような分析と、本研究で先述した発話機能との関係を分析することで、授受補助動詞文が使用された語用論的状况と形式の関わりを把握することができる。

⁵⁸ KH Coder ホーム・ページ (樋口耕一) より引用した。http://khc.sourceforge.net (データ収集日: 2016年10月1日)

⁵⁹ オリジナルデータでは、色でも区別できるが、水色、白、ピンクの順に中心性が高くなる。サブグラフの図では、同じグループに同じ色で色付けされている。

■ 共起ネットワーク 分析結果

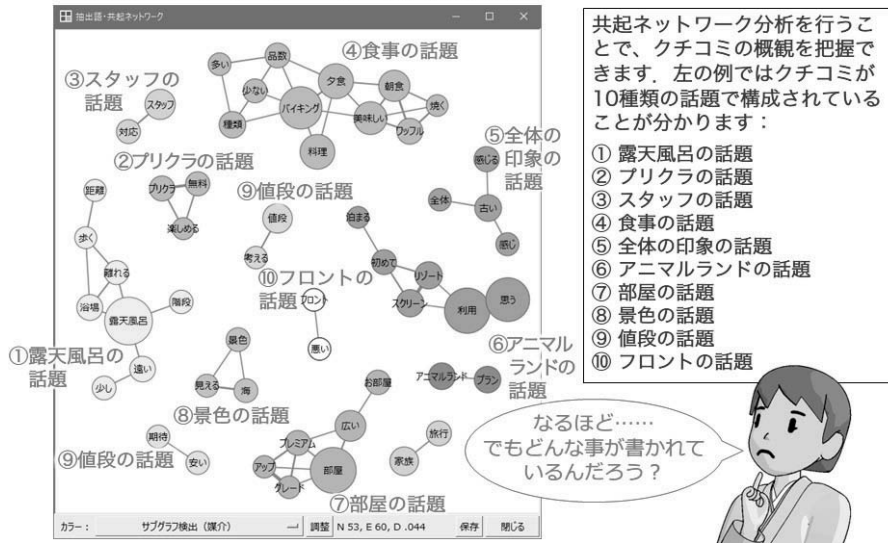


図 V.6 SCREEN（株）によるテキストマイニングの例⁶⁰

また、上述の共起ネットワーク分析からどのように構文フレームを取り出したかについて説明する。

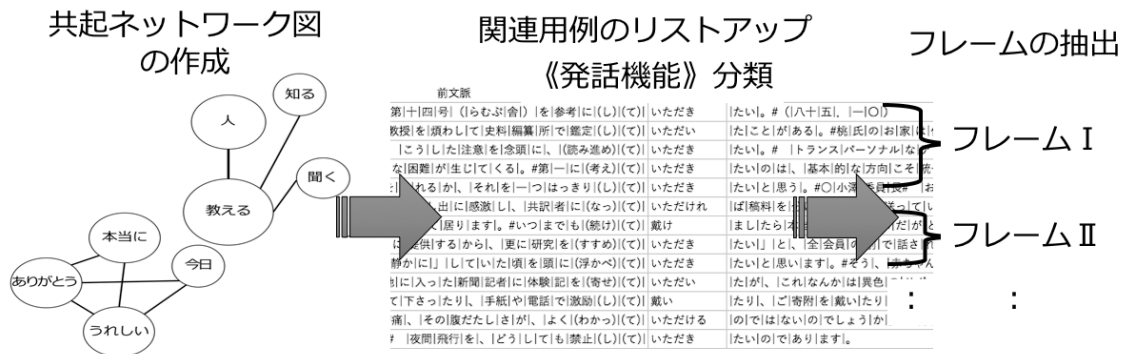


図 V.7 共起ネットワーク図から構文フレームの抽出過程

KH Coder を用いて抽出した共起ネットワーク図から、関連用例をリストアップした後、第IV章でまとめた発話機能の分類に基づき、多く使用されたフレームを取り出した。

⁶⁰ 分析例の出典は次の Web ページより引用した。

<http://screenco.jp.x-trans.jp/as/solution/idea.html> (データ収集日: 2017年5月26日)

5.2 授受補助動詞文と構文化

本節では、授受補助動詞文の共起ネットワークを用い、構文間の共通点と相違点について比較する事例分析を行う。構文化とは、1.3.3節(p.30)で述べたように、「意味と形式との結びつきが一つの Kategorie として実現されたもので、典型と拡張の幅を有し、相互に関わりを持つ有意なまとまり(辻編 2013)」である。

Traugott & Trousdale (2013) による構文化の概念について再掲する。

(5.1) Traugott & Trousdale (2013) による構文化の概念 (再掲)

(前略)構文的变化の一つで、記号の[新しい]形式と意味の組み合わせを創出するものである。この変化は形式と意味のステップごとの連続で、再分析により創り出される。その際、schematicity(スキーマ性)、productivity(生産性)、compositionality(合成性)が程度の差はあれ伴う。記号の新しい形式と意味の組み合わせは体系に対して新しいタイプのものとなる。変化というものはミクロ的ステップの繰り返しであるので、そこには通時的漸進性(gradualness)と共時的グレーディエンス(gradience)が含まれることになる⁶¹。

上記の概念の定義を言い換えると、使用頻度の高いコロケーションが固定されて形成された構文フレームを指す。また、ある構文フレームが特定の格パターンと述語とのコロケーション関係を有し、特定の発話機能のもとで使用されている特性を浮き彫りにすることがある。

このような構文間の特徴を比較するため、具体的に「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文における使い分けについて探り、「～てくれる」「～

⁶¹ 日本語訳は秋元訳(2015)によるものである。

構文化に関わる要因には、生産性、スキーマ性、合成性の三つの要因があると述べているが、各概念について述べておく。

- i. 生産性(Productivity) 今あるパターンを新しいコロケーションに拡大する。
- ii. スキーマ性(Schematicity) 形式的・意味的抽象性で、その抽象性には増減があり、下位スキーマの創出・廃止などに関わる。
- iii. 合成性(Compositionality) 形式と意味間のリンクがどの程度透明性があるか。

てもらう」文の使い分けについて互換可能性を手掛かりに分析する。

5.3 「～てあげる」系の共起ネットワーク分析

5.3.1 「～てやる」文における共起ネットワーク分析

コーパスから得られた「～てやる」文のデータを分析した結果、次の図の通り、3種類に大別された。

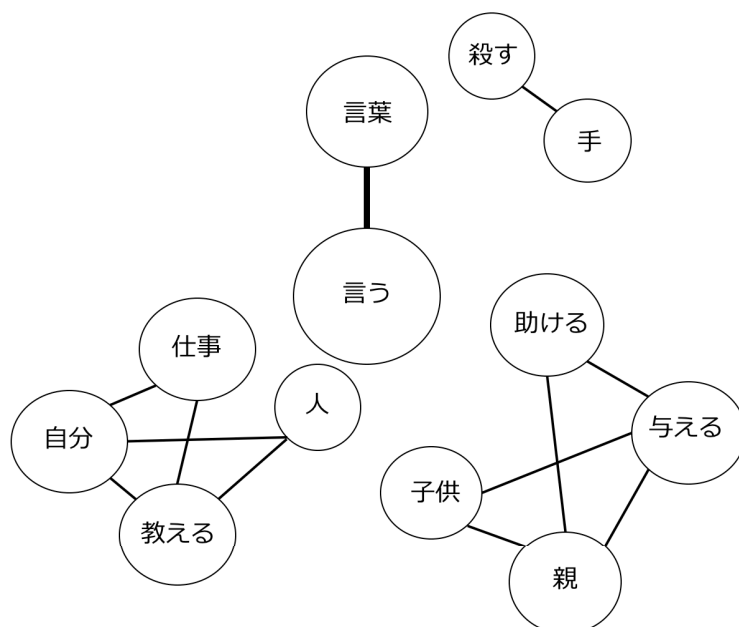


図 V.8 「～てやる」文における抽出語・共起ネットワーク⁶²

まず、「言葉」と「言う」が一つの共起関係を成しており、円の大きさから見ると「～てやる」文において大きな共起関係を持つものと見ることができる。このグループより円の大きさは小さいが、太い線で表現されているのは、「子供」「親」「助ける」「与える」のグループが作られる。次に、「人」「自分」「仕事」「教える」「知る」のグループが出現した。次に各フレームの用例を

⁶² KH Coder を使用して得られた結果は、図 V.5 のように複雑であるが、その中でも共起関係が強いもののみを指定し、筆者の判断で簡略化した。以降、同様である。

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

コーパスから収集し、どのような発話機能で使用されているかを調査した。

- (5.2) そして思いました、「確かに、この家出の因はといえば、おれが帝のお伴をして旅たつ前夜、ひどい言葉を言ってやったあれ以外にはない。(後略)」

(BCCWJ LBm9_00071 : 佐藤正彰『美食』国書刊行会 : 1998)

- (5.3) 自分でやればって言ってやりたくなる。

(BCCWJ LBf9_00032 : 赤川次郎『三姉妹探偵団』講談社 : 1991)

- (5.4) A : タガーのことを好きなの？

B : ううん。絶対お断りだって言ってやったじゃないの。

上記の例のように、《感情表出》の中でもマイナスの感情が表出される際の「言葉を言ってやる」「～って言ってやる」というタイプの使用がもっとも顕著であった。

- (5.5) 「～てやる」文のフレーム I

言葉を言う てやる 《感情表出》

次のグループに現れた用例については以下のようなものがあった。

- (5.6) そのときに、だれが、この子をかばってやれるんだ、この子をなんとか助けてやりたいてって真剣に思ってやれるのは、わたしだけじゃないかって、切羽詰まった状況で、初めて感じたんですよ。

(BCCWJ PM11_00225 : 伊藤比呂美/婦人生活社/室井佑月『プチタンファン』婦人生活社 : 2001)

- (5.7) 母親の役割は、それを細かに観察し、子どもの求める刺激を、与えてやることです。

(BCCWJ LBm3_00095 : 井深大『幼稚園では遅すぎる』ごま書房 : 1998)

- (5.8) 「～てやる」文のフレーム II

親が 子どもを 助ける・子供に いい影響を 与える てやる 《情報提供》

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

(5.6)(5.7)のように、「親」「子」の要素の関係では、「親が」「子供に」動作を行うことに対する《情報提供》を提示するような使用が顕著であった。そのフレームを(5.8)に示した。

また、「人」「自分」「仕事」「教える」のグループに現れた用例には以下のような例があった。

(5.9) 「そこでわれらとしては、自衛の必要を感じるとともに、ものを知らぬ若者に本物の職人仕事を教えてやらねばという使命感にかられたのでございますよ。むろん若者にも、あとで身をもって、われらの腕前を実地に体験していただきましたが」

(BCCWJ PB59_00199：五代ゆう 『パラケルススの娘』 メディアファクトリー：2005)

(5.10) アルマンたちがそれぞれ自分の仕事は何か、音奴に教えてやると言い出して、身ぶり手ぶり入りで説明したのです。

(BCCWJ PB19_00184：帚木蓬生『薔薇窓』新潮社：2001)

(5.11) 「～てやる」文のフレームⅢ

仕事を教える てやる 《意志・決意の表明》

このような「～てやる」文における共起ネットワークのフレームについて提示し、それぞれのフレームとの関わりを考えると、以下の図 V.9 のように示すことができる。

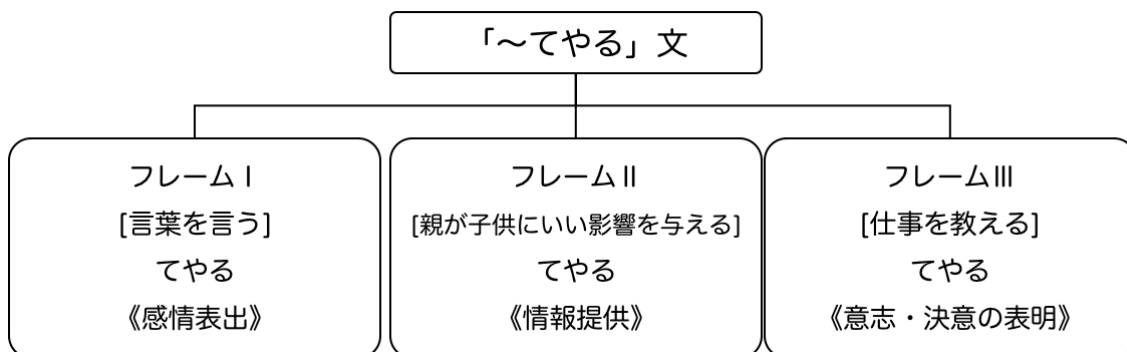


図 V.9 「～てやる」文における共起ネットワーク

5.3.2 「～てあげる」文における共起ネットワーク分析

本節では、「～てあげる」文における共起ネットワークのフレームを分析する。KH Coder の分析結果を次の図にまとめる。

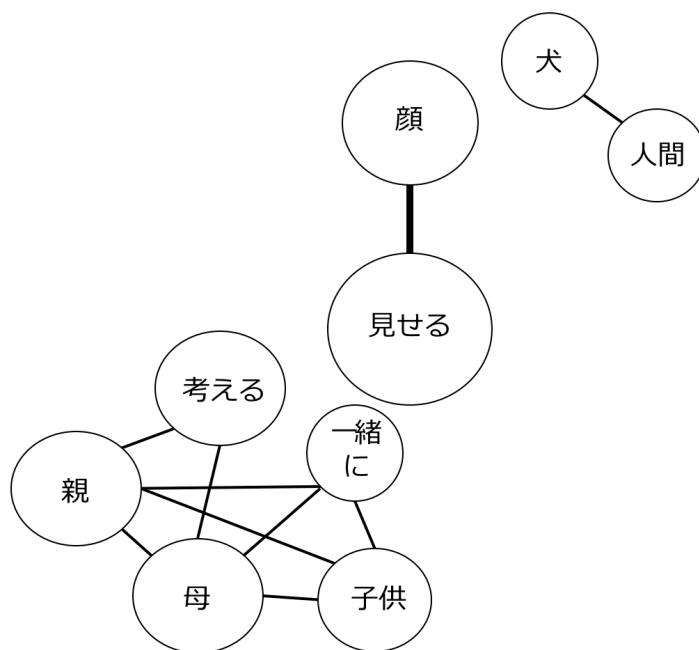


図 V.10 「～てあげる」文における抽出語・共起ネットワーク

「～てあげる」文では、「顔」「見せる」との共起関係が最も強く、次に「親」「母」「子供」「一緒に」「考える」が続き、「犬」と「人間」の共起関係が現れた。ここでは、「顔」「見せる」と「～てあげる」文の関係をフレーム I とみなし、他のフレームとの関係について述べる。

(5.12) 赤ちゃんが足をバタつかせ始めたら「バー」と言ってガーゼをとり、お母さんのにっこり笑った顔を見せてあげます。

(BCCWJ LBS5_00011 : 久保田競『能力と意欲を伸ばす積極育児法』主婦の友社 : 2004)

(5.13) 親に娘の顔を見せてあげてるっていってましたよ。

(BCCWJ OC02_00133 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

(5.14) 「～てあげる」文のフレームⅠ

顔を見せる てあげる 《情報提供》

「顔を見せる」という表現について、(5.12)では、笑った顔を見せるという微笑みの意味であるが、(5.13)の「顔を見せる」は直接会わせることを意味する。このような働き動詞と「～てあげる」文の共起関係であることがわかり、《情報提供》として聞き手に伝達している発話機能が把握できた。

(5.15) 寝て起きた時の事は、その時親が子供の様子を見て考えてあげなければと思います。

(BCCWJ OC10_03865 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(5.16) 親は子供の学力を見ながら適性を判断し、どのような才能があるかを考えてあげなくてはなりません。

(BCCWJ OB5X_00238 : 大川隆法『繁栄の法』幸福の科学出版 : 1999)

(5.17) 「～てあげる」文のフレームⅡ

親は子供のことを考える てあげる 《行為要求》

(5.18) でも、できるかぎり毎日犬にブラシをかけてあげてください。

(BCCWJ PB36_00042 : 小林倫子『ワンちゃん大好き!』池田書店 : 2003)

(5.19) 犬にとって服は迷惑だし、犬に服を買ってあげる金があるならもっと有効な使い道があるんじゃないですか？

(BCCWJ OC12_06362 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(5.20) 「～てあげる」文のフレームⅢ

犬にブラシをかける てあげる 《行為要求》

(5.17)は、親が子供のためにやるべき行動についての《行為要求》のフレームであり、(5.20)は、ペットの犬のためにやるべき行動についての《行為要求》であり、フレームの基本構造は同じであるが、その対象が「親：子ども」関係と「飼い主：ペット」の関係という差がある。

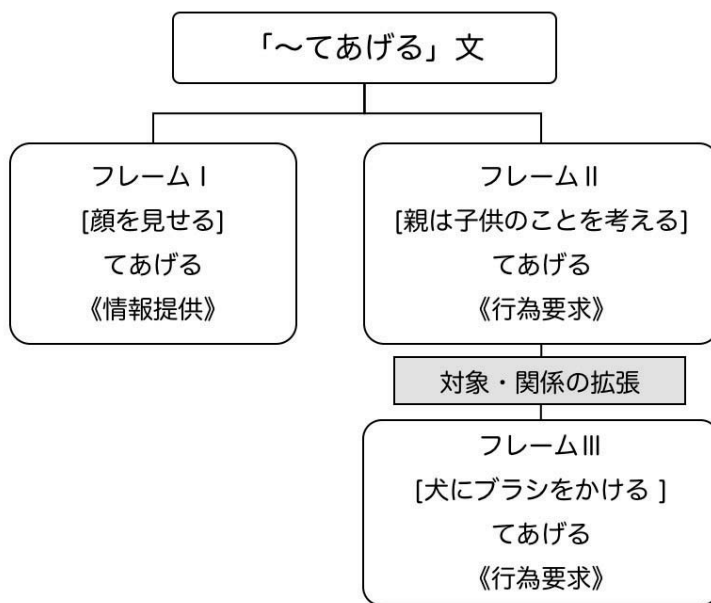


図 V.11 「〜てあげる」文における共起ネットワーク

5.3.3 「〜てさしあげる」文における共起ネットワーク分析

「〜てさしあげる」文における共起ネットワークのフレームを分析する。ここでは、「〜てさしあげる」文の全体用例の数が KH Coder を用いて計量的分析に相応しくないほど少ないため、今回も分析においては、手作業で分析にとりかかった⁶³。その分析結果を次の図にまとめる。

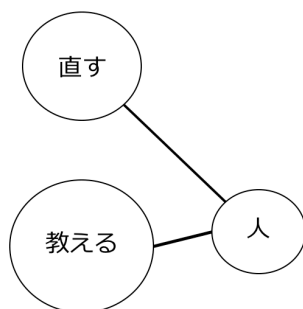


図 V.12 「〜てさしあげる」文における抽出語・共起ネットワーク

⁶³ 「NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)」のシステムでの分析結果も参考にし、MI スコアなどを獲得することができた。

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

図 V.12 のように、「～てさしあげる」文は、「人」「教える」「直す」の共起関係が窺えた。次に例を挙げて構文フレームについて考察する。

(5.21) これはいかがでしょう。来たらあなたの調査結果を教えて差し上げるという
ことで。入金報告をしないのはやはりあなたが失礼な人だと思われてしま
いますから、とりあえず伝えたほうがいいと思いますよ。

(BCCWJ OC14_07691 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(5.22) 店に来られる方々に教えて差し上げると喜ばれるかと思います。

(BCCWJ OY14_20830 : Yahoo!ブログ : 2008)

(5.23) お母様が気がついたところは直して差し上げて、あとは様子を見てくださ
い。

(BCCWJ OC10_00503 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(5.24) 「～さしあげる」文のフレーム I

(～を) 教える・直す てさしあげる 《行為要求》

(5.21)(5.22)(5.23)のように、「～てさしあげる」文の構文フレームでは、提案による《行為要求》の発話機能が特徴的である。聞き手（もしくは読み手）が第三者に向けて当該行為を行うように提案している点が特記できる。最後に「～てさしあげる」文の共起ネットワークを図 V.13 に示す。

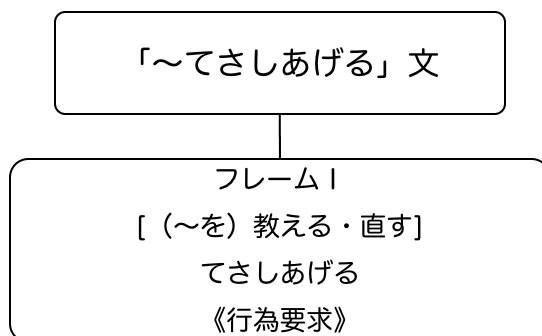


図 V.13 「～てさしあげる」文における共起ネットワーク

5.3.4 「～てあげる」系の使い分けに関する考察

授受補助動詞文に関して従来の研究では利益・恩恵という意味合いを持つ表現とされてきたが、近年の研究では利益・恩恵以外に多様な用法での使用が指摘されている。その中で、本研究は授受補助動詞文「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の使い方を明らかにすることを目的とする。次の例を見てみよう。

(5.25) (発話状況：手荷物がたくさんあるのを見て気遣いのつもりで)

？先生ひとつ持ってさしあげましょうか？/？あげましょうか？

(5.26) (弟に) 一つ持ってあげようか。

(5.27) その人は荷物で両手がふさがっていたので、私がドアを開けてあげました。

((5.26)(5.27)は、富田(2007:165)を一部修正)

(5.25)のような表現を目上の聞き手に話すと、「やや恩着せがましい感じ(ibid:166)」がし、不自然さを感じる。しかし、(5.26)(5.27)のように、親しい間柄や社会的地位が確認できない第三者に対しては「～てあげる」の使用が許されるとされる。

「～てやる」「～てあげる」文は話し手自身と同等あるいは目下の人物に対してある行為を行う際使用する。反面、「～てさしあげる」文の「さしあげる」という動詞は敬語の中では謙譲語であり、話し手自身の行動をへりくだっている表現である。そのため、授受補助動詞文の受け手に対して敬意を表す表現となる。しかし、(5.25)のように先生に対して「～てさしあげる」文を使うと不自然さを感じるのはなぜか。

ポライトネス理論から考えると、敬語は相手の「他者に自分の領域に踏み入れられたくない」という消極的フェイスに配慮するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを表すことができる。(5.25)で先生に対して先生の消極的フェイスを侵害しないようにする表現が逆の効果をもたらす要因を探るため、「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文が各々どのような場面にどう使われているのかをポライトネスの観点から明らかにしたい。

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

「NINJAL-LWP for BCCWJ」から「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文を収集し、文脈の前後を見て、以下のような発話場面を調べ、各表現の使い方について考察を行う。

(5.28) 場面の特徴：公的場面、私的場面

(5.29) 話し手と聞き手との人間関係：①表面的関係：地位と年齢の上下②心理的関係：親疎

(5.30) 「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の談話機能：《情報要求》《行為要求》《意志・決意の表明》《関係作り・礼儀》《非難》《感情表出》《情報提供》

次に、発話機能別に見る共通点と相違点について述べる。

(5.31) (前略) 最大限国の方で援助を**してやる**ぞ、こういうふうな構えをぜひやっていただきたいと思うのでございますが(後略)

(BCCWJ OM14_00001：国会会議録：1977)

同等・目下の人物に対する話し手自身の行動を表す場合に使用されることは先行研究と変わらない。しかし、(5.31)のように公的場面において、国民を授受の受け手として国家が援助をするという行動に「～てやる」文を使い、話し手の「強い気持ち」の心的態度を表す用例が認められる。

(5.32) 寛大になってきちんと覚えるまで待って**てあげて**。

(BCCWJ OC12_03128：Yahoo!知恵袋：2005)

「～てあげる」文の場合、私的場面においての表現が多く、子育てなどにおいての話し手の思いやりを感じさせる例が収集できた。これは、陣内(1998：121)のように、「自分を上品に見せたい、相手に丁寧な印象を与えたい、あるいはまた、相手に優しさや親愛の情を表したいというような表現欲求」によって、「あげる」文の使用が拡大しているという主張とつながり、ポライトネス

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

から考えると、話し手自身の積極的フェイスを守る行為としての解釈できよう。

(5.33) 室温における水と同じように金属を液体にするには、金属を加熱してやればよい。(=(4.29)を再掲)

(BCCWJ LBa4_00006 : 岡田正和『表面の科学』大月書店 : 1986)

(5.34) 金属を加熱すればよい。(=(4.30)を再掲)

(5.35) 魚は三枚におろしてあげます。(=(2.45)を再掲)

(井島 1999 : 32)

(5.36) 魚は三枚におろします。

上記は各々客観的把握である「金属は加熱すればよい」「魚は三枚におろします」で十分話し手の意図が伝わる。しかし、授受補助動詞文「～てあげる」系を用いる要因として、視点の操作という概念で説明できると考える。ここで実質的な動作の受け手となる人物を断定し難いが、金属を加熱する動作と、魚を三枚におろす動作は、聞き手のために行われているわけではないためである。聞き手のためであると想定する場合、「～てやる」文の使用は慇懃無礼な感じがすると考えられもするが、ここではそのような意味として解釈されない。つまり、聞き手である人物も話し手と同じく「ウチ」側の人物として捉え、一緒に動作を行っている臨場感を出し、聞き手へ親しみを感じさせる効果がある。

(5.37) 推理作家相手に、ここまで手とり足とり教えて差し上げなければならないのかしら。

(BCCWJ LBm9_00271 : 吉村達也『ベストセラー殺人事件』 : 1998)

最後に「～てさしあげる」は、ほとんど小説作品でしか出現せず、その中でも(5.37)のように不満表出のような場面で用いている。聞き手にとって良いと考えるものを提供するという行為の裏には、話し手が勝手に自分の行動を聞き手にとって良いと判断してしまっていることで聞き手の消極的フェイスを脅かすことになり、その点で配慮に相反する非難や不満表出に繋がっていると考えられる。

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

また、共起ネットワーク分析結果から見る「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の共通点と相違点について述べる。

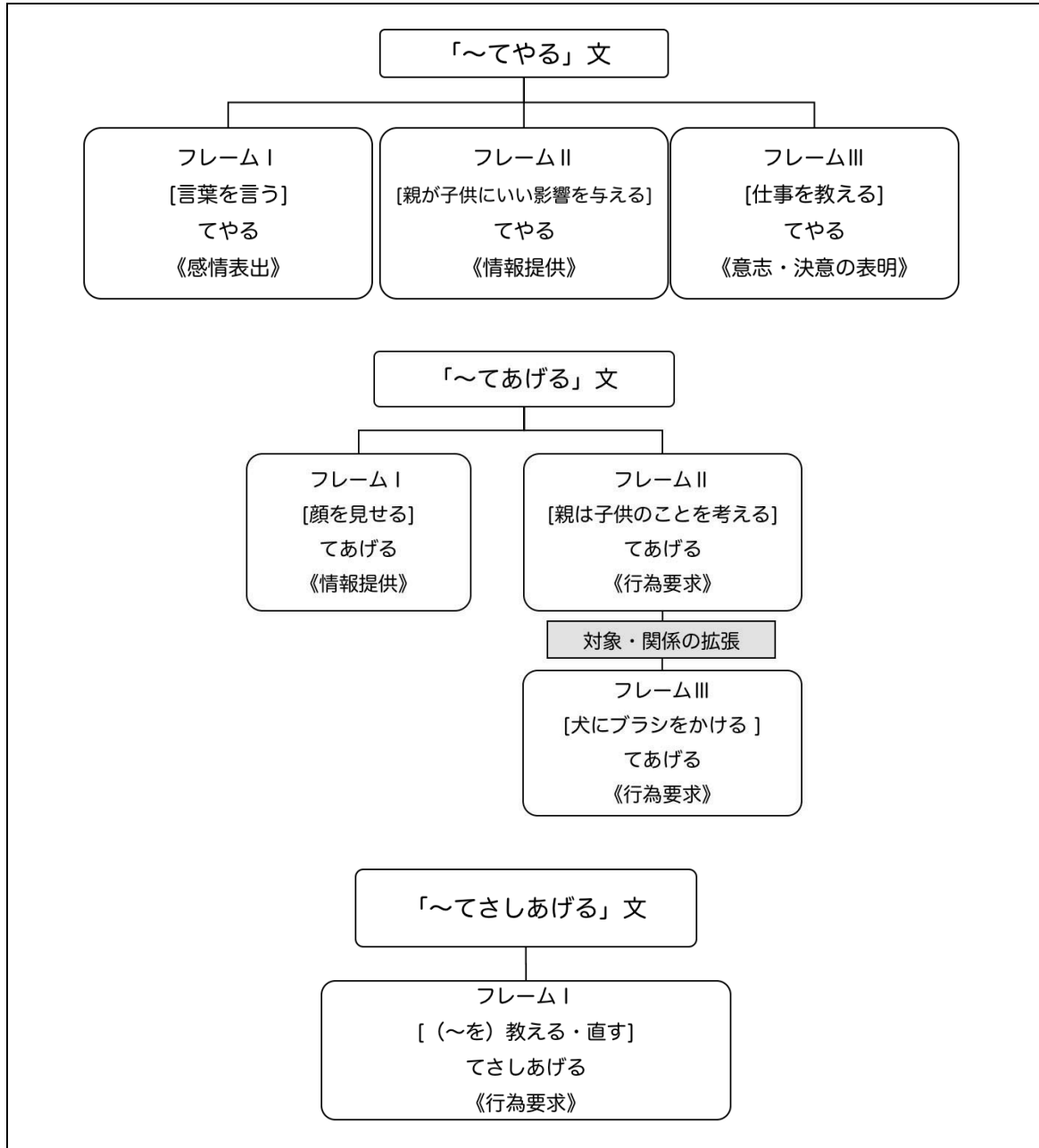


図 V.14 「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の共起ネットワークの比較⁶⁴

⁶⁴ 図 V.9、図 V.11、図 V.13 を再掲した。

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

各文のフレームⅠの発話機能を比較すると、「～てやる」文のフレームⅠは、《感情表出》であるが、「～てあげる」文は、《情報提供》、「～てさしあげる」文は《行為要求》の発話機能であり、各々特徴的な使い方を持っていることが分かる。

また、話し手の感情を聞き手に伝える場合において、「～てやる」文の使用が多いが、それは《感情表出》と《意志・決意の表明》の主体が話し手であるためである。「～てあげる」文は、《行為要求》におけるフレームが拡張された形式を見せるが、フレームⅡから、当該事柄における対象・関係の拡張の過程を経て、フレームⅢの《行為要求》の「(犬にブラシをかける)てあげる」につながることを理解できる。「～さしあげる」文は単独フレームしか持っておらず、《行為要求》の「(～を教える・直す)てさしあげる」で、第三者に向けての行為を聞き手に働きかけるパターンが確認できた。

5.4 「～てくれる」系の共起ネットワーク分析

5.4.1 「～てくれる」文における共起ネットワーク分析

次は、「～てくれる」文における共起ネットワークのフレームを分析する。KH Coderの分析結果を次の図にまとめる。

「～てくれる」文では、「人」「教える」「知る」「聞く」を共起関係が最も強く、次に「本当に」「ありがとう」「うれしい」「今日」のグループ、そして「来る」「行く」「会う」「買う」というグループが有意な共起性を見せた。フレームⅠと、他のフレームとの関係について述べる。

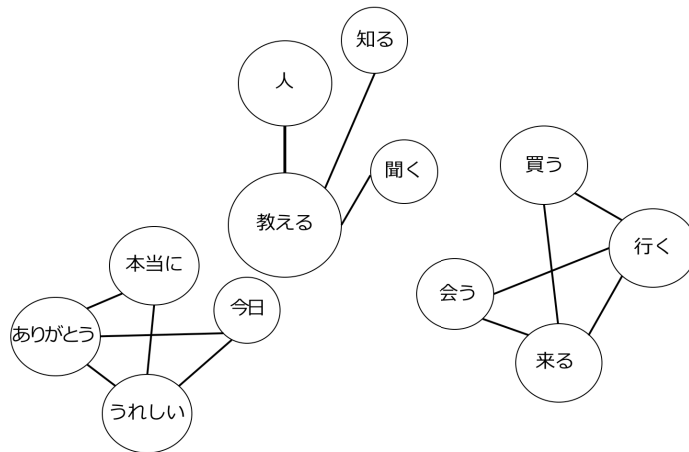


図 V.15 「～てくれる」文における抽出語・共起ネットワーク

(5.38) 会う人会う人皆様親切で、お聞きすると親切に教えてくれます。

(BCCWJ OY11_00220 : Yahoo!ブログ : 2008)

(5.39) 「～てくれる」文のフレーム I

人が教える てくれる《情報提供》

(5.40) その人たちの名前を教えてくださいませんか。

(BCWJ PB59_00633 : 西村京太郎『京都感情案内』中央公論新社 : 2005)

(5.41) 「～てくれる」文のフレーム II

(あなたが私に) 教える てくれる《行為要求》

「～てくれる」文において共起関係が高い「人」「教える」「知る」「聞く」には、二つ以上の発話機能が現れたが、《情報提供》の出現頻度が多く現れたため、フレーム I として設定した。《行為要求》としての「教えてくれる」のような文が次に多く出現したため、フレーム II として捉える。

(5.42) 「ママ、きれいにしてくれてありがとう」

(BCCWJ PB36_00042 : 小林倫子『ワンちゃん大好き!』池田書店 : 2003)

(5.43) 「突然、言われたので、初めは言葉が出なかったけど…みなさん、いつも淳と仲よくしてくれてありがとう。…弟は毎日、夕飯のしたくをしています。それでクラブ活動の途中で帰るので、迷惑をかけていると思います(後略)」

(BCCWJ OB3X_00230 : 栗良平『栗良平作品集』栗っ子の会 : 1988)

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

(5.44) 「～てくれる」文のフレームⅢ

(話し手にとって嬉しい) コトをする てくれてありがとう
《関係作り・礼儀》

(5.45) 来てくれるのを楽しみに待っていました。

(BCCWJ OP07_00002 : 「市政だより青葉区版」宮城県仙台市青葉区 : 2008)

(5.46) 「～てくれる」文の拡張フレームⅣ

(話し手にとって嬉しい) コトをする てくれるのを待っている
《関係作り・礼儀》

(5.47) あれを買ってくれる？

(BCCWJ OB5X_00080 : J・K・ローリング/松岡佑子訳『ハリー・ポッターと秘密の部屋』静山社 : 2000)

(5.48) 「～てくれる」文の拡張フレームⅤ

(話し手にとって嬉しい) コトをする てくれる？ 《行為要求》

「～てくれる」文の共起ネットワークを次の図に示すが、他構文のネットワークより複雑なフレーム構造を持っていることがわかる。

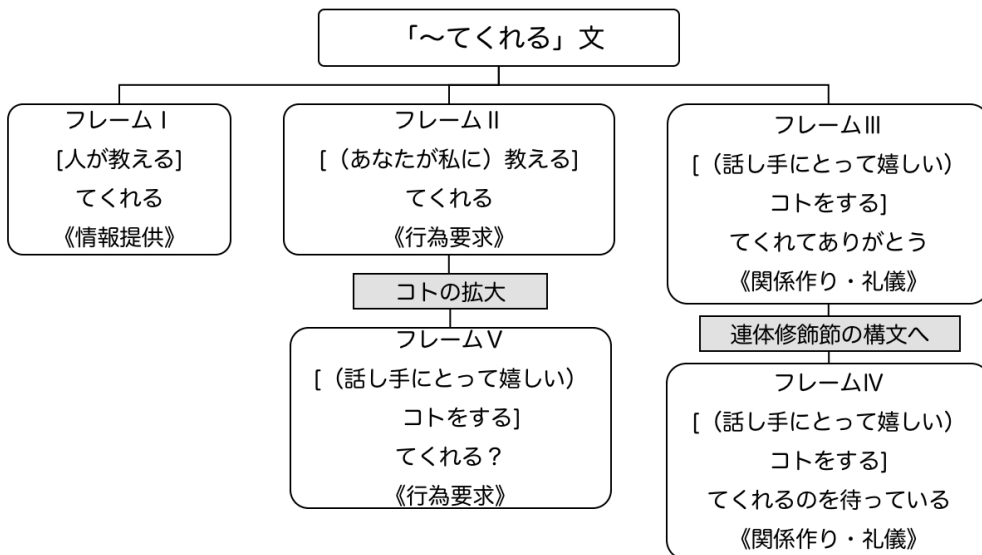


図 V.16 「～てくれる」文における共起ネットワーク

5.4.2 「～てくださる」文における共起ネットワーク分析

次は、「～てくださる」文における共起ネットワークのフレームを分析する。
KH Coder の分析結果を次の図にまとめる。

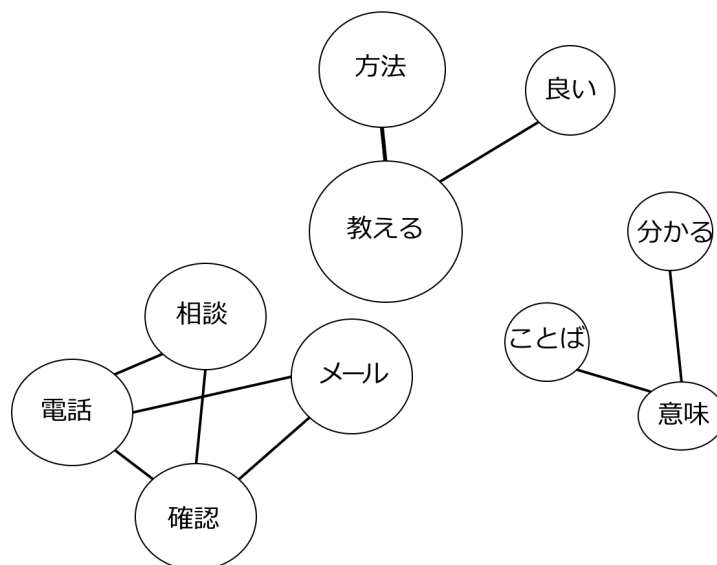


図 V.17 「～てくださる」文における抽出語・共起ネットワーク

「～てくださる」文では、「教える」「方法」「良い」との共起関係が最も強く、次に、「メール」「電話」「確認する」「相談する」の結びつきが確認できた。では、共起強度の順で、フレーム I を取り出し、他のフレームとの関係について述べる。

(5.49) 良い方法を教えてください。

(BCCWJ OC12_05805 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(5.50) 何かいい方法があれば、教えてください。

(BCCWJ OC08_01543 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(BCCWJ OC02_08674 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(5.51) 「～てくださる」文のフレーム I

良い方法を教える てください《行為要求》

(5.52) また、活動を続ける中で特に心配に思うのが「振り込め詐欺」の被害です。

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

パトロールで未然に防止することは難しいかも知れませんが、防犯推進委員協議会は警察と連携した活動を行っているので、「おかしいな」と感じたら一人で判断せずに身近なわたしたちに相談してください。今後は、同パトロールの取り組みが町内に広がったことで、防犯対策強化につなげていきたいと思えます。

(BCCWJ OP69_00004 : 「広報京丹波」 京都府船井郡京丹波町 : 2008)

(5.53) なお、iPod の容量には余裕があるはずなのに全曲の同期ができないのなら、一般データとして入れているものが容量を使っていないか確認してください。

(BCCWJ OC02_04452 : Yahoo!知恵袋 : 2005)

(5.54) 「～てくださる」文のフレームⅡ

相談する てください 《行為要求》

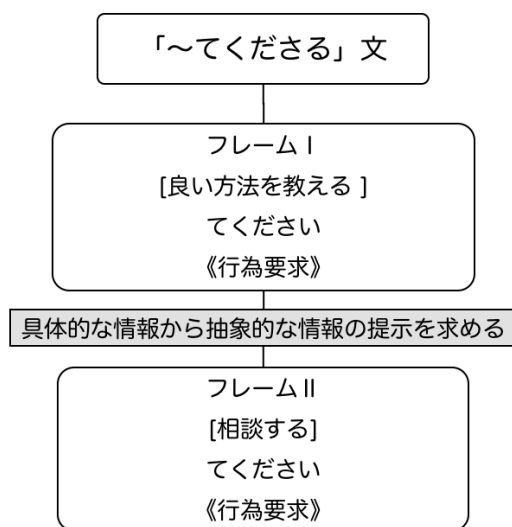


図 V.18 「～てくださる」文における共起ネットワーク

「～てくださる」文における特徴は、「～てください」の形で《行為要求》の発話機能の役割を担っている点であるが、(5.51)と(5.54)の相違点は、当該行為の実現が誰のための行為であるかという点が対比的である。つまり、フレームⅠでは、話し手側や主格名詞句に該当する人物のために《行為要求》を行なっているが、拡張されたフレームⅡでは、聞き手側のために行為の実現を願ったものと理解できる。

5.5 「～てもらおう」系の共起ネットワーク分析

5.5.1 「～てもらおう」文における共起ネットワーク分析

本節では、「～てもらおう」文における共起ネットワークのフレームを分析する。KH Coder の分析結果を次の図にまとめる。

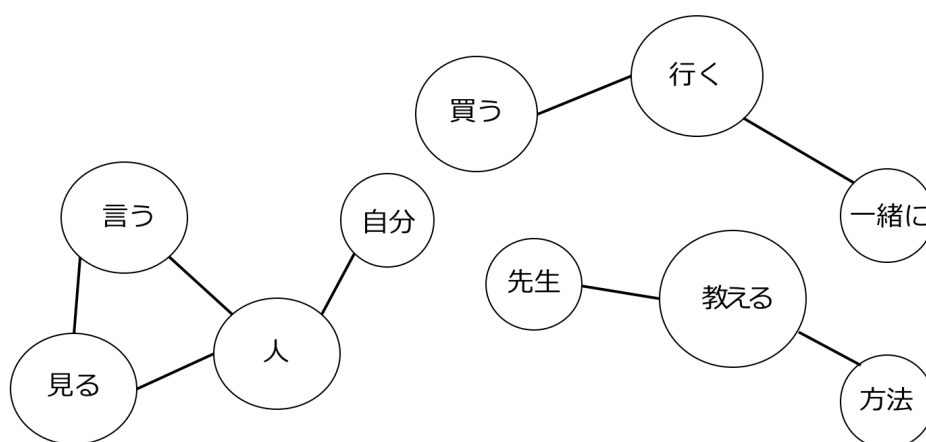


図 V.19 「～てもらおう」文における抽出語・共起ネットワーク

「～てもらおう」文では、「教える」「先生」「方法」の共起関係が最も強く、次に、「言う」「見る」「人」「自分」の共起、そして、「買う」「行く」「一緒に」において抽出語の共起が見られた。共起強度順から、フレーム I を設定し、他のフレームとの関係について次の例を挙げて考察する。

(5.55) 理由は、なじみになったお店で**教えてもらった**チヂミを作るためです。

(BCCWJ OY15_12175 : Yahoo!ブログ : 2008)

(5.56) 茶道の先生に簡単なお茶の楽しみ方を**教えてもらいます**。

(BCCWJ OP00_00001 : 「広報さっぽろ+ひがし区民のページ」北海道札幌市東区 : 2008)

(5.57) 「～てもらおう」文のフレーム I

(情報を) 教える てもらおう 《情報提供》

- (5.58) 男性のものとされていた時代劇を、女性や子供にも見てもらおう！
(BCCWJ PB17_00026：実著者不明『テレビ「水戸黄門」のすべて』講談社：2001)
- (5.59) 今度彼に婚約指輪を買ってもらいます。
(BCCWJ OC11_00500：Yahoo!知恵袋：2005)
- (5.60) 「～てもらおう」文のフレームⅡ

見る・買う てもらおう・もらいます 《意志・決意の表明》

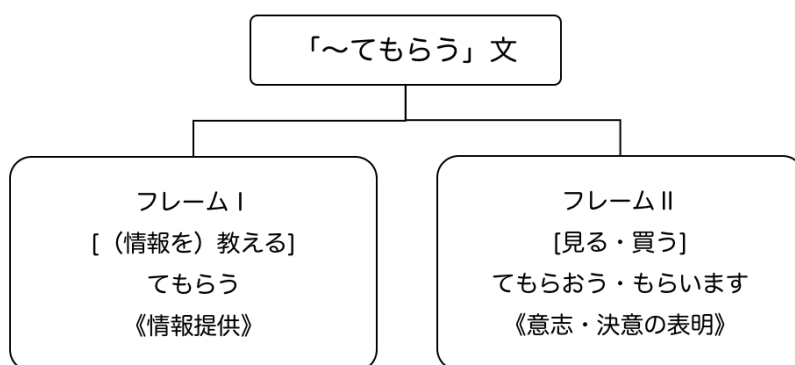


図 V.20 「～てもらおう」文における共起ネットワーク

5.5.2 「～ていただく」文における共起ネットワーク分析

最後に、「～ていただく」文における共起ネットワークのフレームを分析する。KH Coderの分析結果を図 V.21 にまとめる。

「～ていただく」文では、「検討する」「政府」「参考」を共起関係が最も強く、次に「教える」「分かる」「良い」「方法」があり、「本当に」「ありがとう」の共起関係が明らかであった。

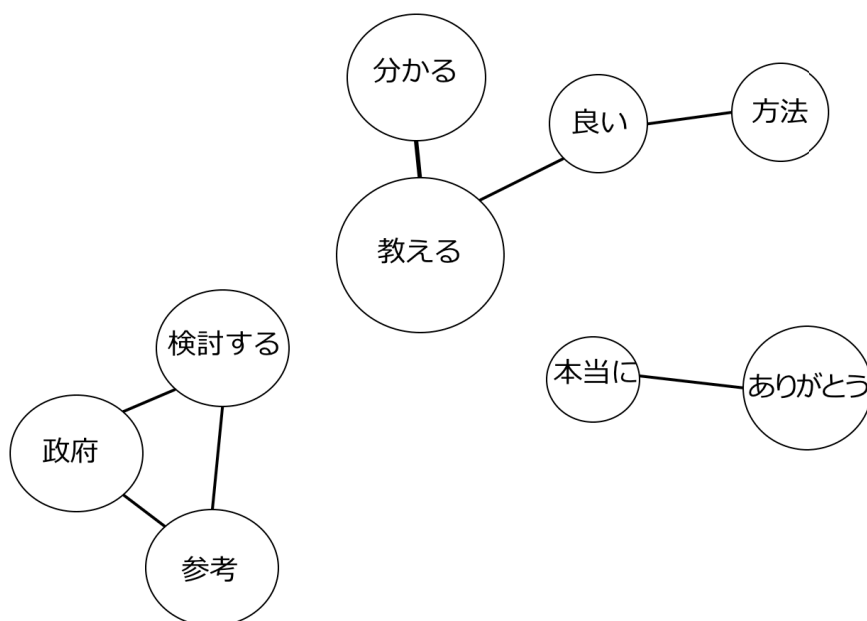


図 V.21 「～ていただく」文における抽出語・共起ネットワーク

- (5.61) 将来、そういう方向でひとつ検討していただきたいと思います。
(BCCWJ OM21_00002 : 国会会議録 : 1984)
- (5.62) ぜひとも前向きに検討していただきたい、このように思います。
(BCCWJ OM41_00007 : 国会会議録 : 1993)
- (5.63) では、その個々を教えていただきたいんですけど。
(BCCWJ OM65_00008 : 国会会議録 : 2005)
- (5.64) 「～ていただく」文のフレーム I

| |
|----------|
| 検討する・教える |
|----------|

 ていただきたいと思います・ていただきたいんですが《行為要求》
- (5.65) みんなで自己紹介し名前をおしえていただきました。
(BCCWJ OY07_01118 : Yahoo!ブログ : 2008)
- (5.66) いろいろ聞かせていただいて、ありがとうございました。
(BCCWJ PB39_00365 : 太田蘭三『摩天崖』祥伝社 : 2003)
- (5.67) 「～てくれる」文のフレーム II

| |
|----------|
| 教える・聞かせる |
|----------|

 ていただいた・ていただいてありがとうございます
 《関係作り・礼儀》《感情表出》

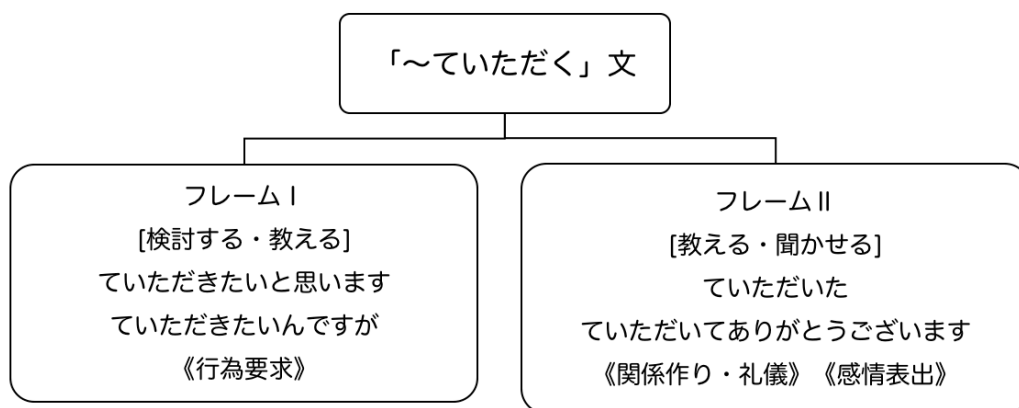


図 V.22 「〜ていただく」文における共起ネットワーク

「〜ていただく」文の場合、共起関係を表す構文フレームが固定されている用例の頻度が多いことから、形式による発話機能の区別が明確な共起ネットワークの特徴を持っているといえる。

5.6 「〜てくれる」「〜てもらう」文の互換可能性に関する考察

5.6.1 問題の所在および互換可能性の判断基準

本節では、授受補助動詞「〜てくれる」「〜てくださる」文、「〜てもらう」「〜ていただく」文の共起ネットワーク分析に通じ、使用状況における共通点と相違点を明らかにする。両表現は本動詞の動作主と受け手が対称的な構造を有すると言われている。しかし、常に対称的な構造を成すとは言い難い。

(5.68) 私 (A) は 田中さん (B) に 荷物を送ってもらいました。

(山本 2002a : 265)

(5.69) 田中さん (B') は 私 (A') に 荷物を送ってくれました。

(5.70) 来月から君に経理をやってもらおうよ。

(堀口 1987b : 60)

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

(5.71) # 来月から君が経理をやってくれるよ。

(堀口 1987b : 60)

(5.72) 医者の一言が私を安心させてくれた。

(高見・久野 2014 : 170)

(5.73) ? 私は医者の一言に安心させてもらった。

(高見・久野 2014 : 170)

(5.68)(5.69)のように、「～てもらう」文の主格 (A) と「～てくれる」文の与格 (A')、「～てもらう」文の与格 (B) と「～てくれる」文の主格 (B') が同一であり、格情報が対称的である。一方、(5.70)は聞き手に「経理をやる」ことを指示する場面であるが、「～てもらう」文と「～てくれる」文を置き換えると指示の意図が感じられなくなる。また、(5.72)「～てくれる」文の主格「医者

の一言」を(5.73)「～てもらう」文の与格に置き換えると文法的に成り立たないが、なぜ互換性を持つ場合と持たない場合があるか考察する必要がある。そこで、本節ではその要因分析に当たり、「～てくれる」文と「～てもらう」文が使われた談話の発話機能と各構文要素に注目し、共起ネットワーク分析法を考察方法として採用して、両表現における使用様相の仕組みを把握することを目的とする。

これまで「～てくれる」「～てもらう」文について様々な研究がなされてきた。その中で、最も本研究と関連性を持つと考える宮地 (1965)、久野 (1987[1978])、高見 (2000)、熊田 (2001)、金澤 (2007)、石山 (2008)、高見・久野 (2014) の知見について検討し、問題点を指摘する。

従来の研究では、両表現における最も大きな違いについて、話し手と参与者との人間関係にあると述べられている。話し手と参与者との関係は視点の制約で十分に説明されている。宮地 (1965 : 28) では、次の図を挙げて、視点の置き方の相違について述べている。

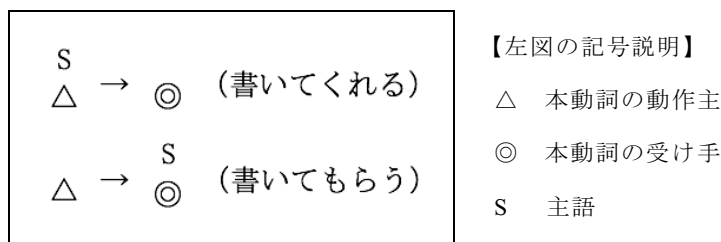


図 V.23 宮地 (1965 : 28) による授受補助動詞の視点の置き方

さらに、久野 (1987[1978]) では、話し手と主語と非主語の関係について、話し手の人物 x に対する共感 (Empathy) を $E(x)$ で表している。共感度は、話し手と当該人物との心理的距離を不等号で表したものである。「～てくれる」文の視点制約は「 $E(\text{非主語}) > E(\text{主語})$ 」となり、「～てもらう」文の視点制約は「 $E(\text{主語}) > E(\text{非主語})$ 」と表すことができる。

一方、(5.70)(5.71)で先述した通り、構造的に対称的な構造であっても、必ずしも両表現の互換が可能となるわけではない。このような問題は、当該構文の持つ発話機能と構文の関係を考察することで解釈が可能となると考える。

次に、主観性について、配慮の意識の面に注目して両表現を分析している研究を概観する。熊田 (2001) では、恩恵の与え手が恩恵行為を行なうことに対する配慮意識が高い場合に「～てもらう」文が、配慮意識の低い場合には「～てくれる」文の使用比率が高いと指摘している。配慮意識の判断基準として、動作の働きかけの有無、行為の当然性、負担の程度、行為の完了・未然の枠組みを挙げている。しかし、同じ形式を使っても文末表現やモダリティ等で多様な配慮意識を反映させることができる。そこで、単文のレベルを超えた範囲における総合的な分析が求められる。

金澤 (2007) は、各々の敬体である「～てくださる」と「～ていただく」の選択に焦点を置いて考察し、話し言葉の例から、「～ていただく」の方が高い割合で使用されていると述べている。その要因について、「相手となるべく直接的な関わりを持たない形で人間関係を維持してゆきたいというミーイズムの心理 (ibid. : 50)」が作用され、「～ていただく」が選択される理由として、日本語では話し手中心の言語表現が好まれるためであると分析している。

一方、石山 (2008) では、「『～てくれる』よりも『～てもらう』の方が包括的により丁寧であると断ずるだけの理論的根拠はないように思われる (ibid. :

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

41) 」と述べている。筆者は、「～てもらう」文のほうが「～てくれる」文より丁寧であるという判断に対する疑問に賛同し、「丁寧」であるかどうかの判断は発話場面と個人の判断によるものであるため、一概には言えないと考える。「～てくれる」と「～てもらう」文の使われ方の実態分析においてどのような発話機能を持つ談話においての使い方であるかが重要である。

高見（2000）では、「～てもらう」文と被害受身文を比較している。名詞句の階層、自ら引き起こす事象、被害・恩恵の意味の三つの基準を設定し、それぞれに数値を与え、合計数値で文の適格性を判断した。「～てもらう」文では行為の受け手を与格で表しているが、与格のハイアラーキーが人間であるか否かで数値化しており、有情性が低い場合、文法的な適格性も低いと判断した。次に、本動詞で表す動作が、本動詞の動作主が自ら引き起こす事象であるか、外的要因による事象であるかを基準に、後者のほうが文の適格性を下げる要因となることを示した。最後に「～てもらう」文が恩恵の意を持っているか否かを基準にしているが、そもそも「～てもらう」文が恩恵の意を表す表現であることを前提としながら、恩恵の意の有無を判定することは論理的に矛盾している。この問題の改善のため、高見・久野（2014）では、恩恵の意味を判断する根拠として先行文脈で示された利益の階層と、後続文脈で示された利益の階層の分析を加えている。しかし、先行文脈と後続文脈が明示されていないケースについて説明ができない問題が残っている。

(5.74) 私は、父に希望通り留学生させてもらって、感謝している。

（高見・久野 2014 : 213）

(5.75) 私は、父に留学させてもらった。（上記の例を修正）

| | |
|------------|----------|
| ・人間度 | : 2 (人間) |
| ・自ら引き起こす事象 | : 2 (意図) |
| ・先行利益度 | : 3 (明示) |
| ・後続利益度 | : 2 (明示) |
| 得点 | 9 [適格] |

図 V.24 (5.74)の適格度分析

| | |
|------------|-----------|
| ・人間度 | : 2 (人間) |
| ・自ら引き起こす事象 | : 2 (意図) |
| ・先行利益度 | : -3 (なし) |
| ・後続利益度 | : -2 (なし) |
| 得点 | -1 [不適格?] |

図 V.25 (5.75)の適格度分析

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

(5.74)の適格性分析として、高見・久野(2014)による適格度の値を取り入れたのが図 V.24 である。利益を表す「希望通り」という先行文脈と「感謝している」という後続文脈を取り除くと(5.75)の図 V.25 (5.75)の適格度分析のようになり、不適格と判断するが、実際の文の適格性には何ら問題がないように思われる。

各要素に関するカテゴリーのハイアラーキーについては本研究の分析においても有意義であると考え、それぞれを数値化することの意義に疑問が生じる。また、数値化で説明できない(5.75)のような例の使用傾向に対する説明が待たれる。

先行研究における問題点をまとめると、両者間には視点制約の相違のみならず、格情報という内的要因の傾向と、さらに広い範囲に渡る関係を明らかにする必要があると考える。

(5.76) 医者の一言が私を安心させてくれた。(=(5.72)を再掲)

(5.77) *私は医者の一言に安心させてもらった。(=(5.73)を再掲)

(5.78) すぐくつらく、苦しかったけど、本当のことを教えてくれてありがとう。
(=(4.21)を再掲)

(BCCWJ OB6X_00025 : 木藤亜也『1 リットルの涙』幻冬舎 : 2005)

(5.79) ??本当のことを教えてもらってありがとう。(=(5.78)を修正)

前述のように、(5.76)(5.77)における相違を明らかにするため、明示された格情報の特徴を比較する。(5.78)「～てくれる」文を(5.79)「～てもらおう」文に置き換えた際、不自然さを感じるのは「本当のことを教えてもらって」節の文法的な問題ではなく、この節に後接する「ありがとう」という感謝の意との関係にその要因があると考え。両者の前後に出されている表現を含めた共起ネットワーク分析を通じ、それぞれの関係を探る。

共起ネットワークについて、尾谷・二枝(2011)では、言語知識を構成する語と語の間で結びつきが強く、特定の傾向を見出すことができると述べている。「～てくれる」「～もらおう」文を対象とし、どのような発話機能の場面においてどのような言語形式が共起関係であるかという語用論的な傾向について分析

する。

次は、互換可能性の判断基準について述べる。互換性とは、「～てくれる」系と「～てもらおう」系を入れ替えても同一事態を表しているかどうかで判断する。この際、格情報については主格と与格の情報が明示されている場合には機械的に入れ替えることを基本とし、省略された情報は省略されたまま復元しない条件で言い換えができるかどうかを分析する。互換性の分析において以下のようなケースが想定できる。

(5.80) 互換性のあるケース

- a. 友だちが写真を撮ってくれた。
- b. 友だちに写真を撮ってもらった。

(5.81) 互換性のないケース① 文法的に適格文ではあるが、事態の意味合いが異なる文（記号「#」で示す）

- a. ちょっと調べさせていただきます。

(BCCWJ OM21_00002 : 国会会議録 : 1984)

- b. # ちょっと調べさせていただきます。

(5.82) 互換性のないケース② 文法的に非文であり、言い換え文が不可能である文（記号「*」で示す）

- a. すごくつらく、苦しかったけど、本当のことを教えてくれてありがとう。
(=(4.21)を再掲)

(BCCWJ OB6X_00025 : 木藤亜也『1 リットルの涙』幻冬舎 : 2005)

- b. *すごくつらく、苦しかったけど、本当のことを教えてもらってありがとう。

5.6.2 格情報および前項動詞の分析

まず、「～てくれる」系「～てもらおう」系の文構造における内的要素として、格情報の関係と前項動詞の類について頻度順に表 IV.1 に示す。

両表現における共通点は、人を表す名詞が格情報で使用されている点であるが、その割合が全体用例の数の10%～20%程度であることが指摘できる。格情報の

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

面においては、主格より与格のほうが非明示となる傾向があった。「～てくれる」「～てもらう」文を比較すると、非情の主格が「～てくれる」文には顕著に使用されていることが分かった。「ローソン」「計算機」という機関や物を表す物から、「時間」という抽象的な名詞を主格として表現している。

次に、前項動詞句の類について比較する。出現頻度順で整理し次の表 V.2 に示す。

表 V.1 「～てくれる」「～てもらう」文における格情報の明示と種類

| 格 | 表示 | ～てくれる | | ～てくださる | | ～てもらう | | ～ていただく | |
|----|-----|--------|-----|--------|-----|--------|-----|--------|-----|
| 主格 | 明示 | 人を表す名詞 | 15 | 人を表す名詞 | 14 | 人を表す名詞 | 23 | 人を表す名詞 | 11 |
| | | ローソン | 1 | 団体 | 1 | 国・団体 | 2 | | - |
| | | 表計算 | 1 | | - | | - | | - |
| | | 時間 | 1 | | - | | - | | - |
| | 非明示 | - | 82 | - | 85 | - | 75 | - | 89 |
| | 合計 | | 100 | | 100 | | 100 | | 100 |
| 与格 | 明示 | 人を表す名詞 | 4 | 人を表す名詞 | 6 | 人を表す名詞 | 10 | 人を表す名詞 | 2 |
| | 非明示 | - | 96 | - | 94 | - | 90 | - | 98 |
| | 合計 | | 100 | | 100 | | 100 | | 100 |

(数値は実数)

表 V.2 「～てくれる」「～てもらう」文の動詞句の種類 (頻度順)

| | ～てくれる | ～てくださる | ～てもらう | ～ていただく |
|---|-----------------|----------------|---------------|----------------|
| 1 | (VN) する | 教える | (VN) する | (VN) する |
| 2 | 来る | みる | 見る | 教える |
| 3 | 教える | (VN) する | 教える | 見る |
| 4 | 言う | 頑張る | 来る | 来る |
| 5 | やる | 来る | 見せる | 考える |
| 他 | 与える、見せる、 許す等 | 注意する、 確認する等 | 買う、送る、 作る等 | 読む、見せる、 作る等 |

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

「～てくれる」「～てもらおう」文において、前項動詞句の動作を話し手が受ける立場であるが、ある情報を得るための「教える」動詞の使用が共通的である。一方、相違点としては「～てもらおう」文と共起する動作に、「作る」等いわゆる作成動詞と、「見る」等の知覚動詞が現れた。

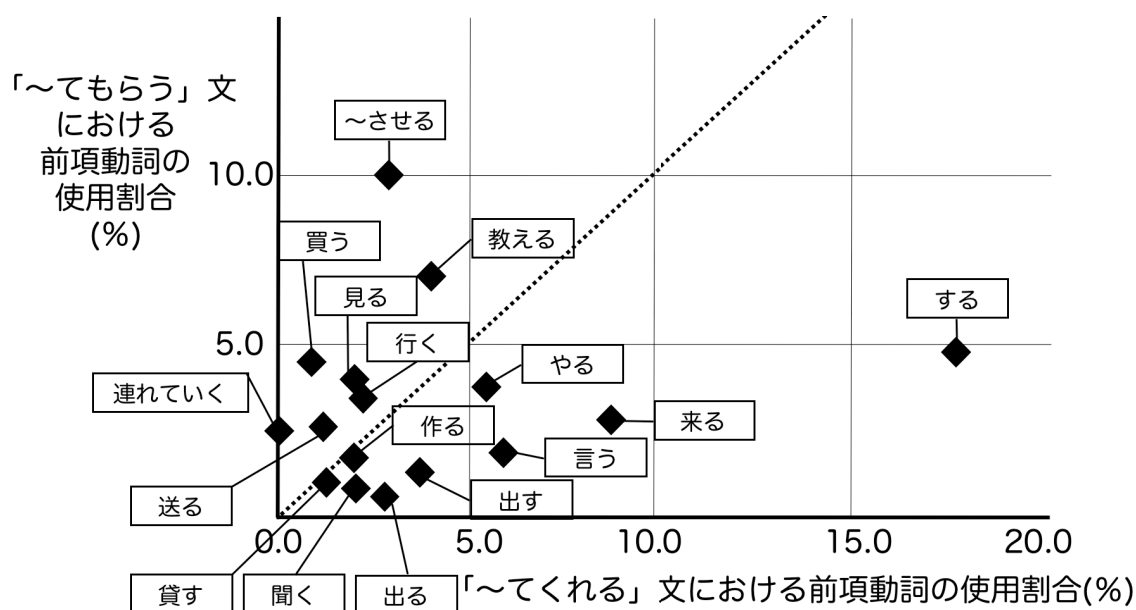


図 V.26 「～てくれる」系と「～てもらおう」系における前項動詞の使用割合

コーパス調査から得られた結果を見ると、まず「する」という動詞と「～てくれる」系の共起性が窺える。一方、「～てもらおう」系は「帰らせる」「食わせる」など使役型と共起している。また、「～てくれる」系は「来る」「言う」「やる」のような表現と、「～てもらおう」系は「買う」「教える」「連れていく」のような表現と結びつきが強いことが分かる。つまり、前項動詞の動作主にとって、行動の負担が大きいと考えられる表現に対しては「～てもらおう」文が使われ、比較的負担が少ないと考えられる表現の場合には「～てくれる」文が使用される傾向があるといえる⁶⁵。このような傾向は、ポライトネスの面においても示唆されると考える。

⁶⁵ 上記の例も同じく、「～てくれる」文は「する」動詞とコロケーション関係であるが、「～てもらおう」文は「する」動詞を使役の形にして動作の負担度を上げて表現することになるといえるだろう。

このような使われ方は、談話においてどのような発話機能で使用されているかによってその傾向が把握できる。つまり、話し手が相手に叙述するかもしくは依頼・命令として働きかけているかで、前項動詞句の動作を分ける必要があるだろう。次節では、発話機能を基に分析し、両表現の使い分けを考察する。

5.6.3 「～てくれる」「～てもらう」系における形式と発話機能の関わり

「～てくれる」「～てもらう」文の共起ネットワークを比較し、両表現の根底にどのような考え方の共通点と相違点があるのかを考察する。そのために、調査資料として『BCCWJ』から収集した用例を用いて分析を行った。これは、内省による判断のみではなく、コーパスからの用例を分析対象とすることで使用傾向をより明確に調査できるためである。

『BCCWJ』に現れる「～てくれる」文は 55,754 用例、「～てくださる」文が 51,735 用例で、「～てくれる」系は合計 107,489 用例が収集できた。「～てもらう」文は 27,015 用例、「～ていただく」文が 13,996 用例で、「～てもらう」系は合計 41,011 用例が収集できた。「～てくれる」文が圧倒的に多いことが分かるが、今回の調査では標準化作業を行うため、各表現からランダム関数で 100 用例ずつ抽出作業を行った。

両表現は授受補助動詞として述語に置かれるが、談話において次の図 V.27 のような共起ネットワーク構造を持つと考える。内的要素として NP1 の主格名詞句、NP2 の与格名詞句、V の前項動詞があり、述語としてアスペクト、テンス等の活用形がある。さらに、両表現は談話において単文の述語、複文の主節の述語、複文の従属節の述語に位置する⁶⁶。次に形式上の特徴における分類基準を示す⁶⁷。

⁶⁶ 当該用例における適格性判断は、日本語母語話者 3 名（女性 3 名）の協力を得て判定してもらった。判断の詳細の基準について「記号・略語等の表記について」に記した。

⁶⁷ 単文は述語を一つもつ文であり、複文は述語を二つ以上もつ文とする。複文には文のメインとなる主節と付随的な役割を持つ従属節があるが、複文の主節の述語における使い方と単文の述語のそれを同じ範疇とした。

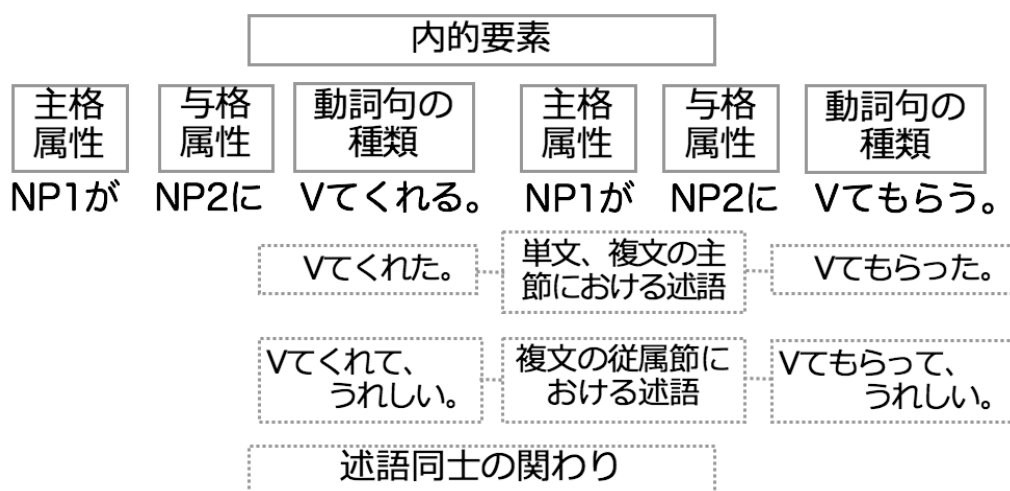


図 V.27 「～てくれる」「～てもらおう」文のネットワーク構造

本研究では「単文・複文の主節に現れる述語」と「複文の従属節に現れる述語」として二つの形式に分けた。また、それぞれの活用形と終助詞、後接する語の特徴をもって分析した結果、『BCCWJ』に現れた「～てくれる」「～てもらおう」文には以下のような類が現れた。

表 V.3 『BCCWJ』における「～てくれる」「～てもらおう」文の形式上の特徴（単文および複文の主節）

| | |
|-------|-------------------------------------|
| 叙述要素文 | 伝達要素や疑問・意志などを表す要素を含まない形で終わる形式 |
| 伝達要素文 | 終助詞「ね」やモダリティ表現と共起し、聞き手に対する伝達態度を含む形式 |
| 疑問要素文 | 質問や納得として終助詞「か」や「だろう」「でしょう」で終わる形式 |
| 要求要素文 | 命令形や「～てくれ」で終わる形式 |
| 意志要素文 | 意志形（未然形）で終わる形式を表す |

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

表 V.4 『BCCWJ』における「～てくれる」「～てもらう」文の
形式上の特徴（複文の従属節）

| | |
|-------|---------------------------------------|
| 引用節 | 引用形式「と」を伴う節 |
| 名詞修飾節 | 名詞を修飾して、その名詞を詳しく述べたり、名詞の指示対象を限定したりする節 |
| 条件節 | 二つの事態の因果関係を表す文において従属節に当たる節 |
| 様態節 | 主節の事態の仕方やあり方を述べ、主節を修飾する節 |
| 並列節 | 従属節の間が対等な関係で述べられた節 |

配慮の意識と共起ネットワークとの関わりについて考察するため、文レベルの発話機能についての概念を整理する。発話機能とは、「話者がある発話を行う際に、その発話が聴者に対して果たす対人的機能を概念化したもの（山岡2008：50）」である。国立国語研究所編（1987：153－158）は、発話機能の概念を「働きかけの種類」として捉えており、話し手一人による独語のような種類も含まれているが、本研究では対人性の基準ではなく、聞き手への働きかけの有無によって区分して分析を行った。

表 V.5 『BCCWJ』における「～てくれる」「～てもらう」文の発話機能

| 発話機能の種類 | | 概念 |
|----------|--------|---|
| 聞き手への要求有 | 《情報要求》 | 聞き手にある事実について質問したり、確認したり何らかの情報を与えるように求める。 |
| | 《行為要求》 | 聞き手がある行為を行うように仕向けることで、働きかけの度合いによって、代表的に命令、依頼、勧誘がある。 |
| 聞き手への要求無 | 《情報提供》 | 事実内容を伝達する。 |
| | 《意志表示》 | 話し手の感情や意志を表出する。 |

国立国語研究所編（ibid.）では、聞き手の想定する類のカテゴリーとして、大きく四つのカテゴリーがあるが、《情報要求》《行為要求》《情報提供》《意

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

志表示」という働きかけの種類である。《情報要求》《行為要求》は聞き手へ何らかの要求をする働きがあり、《情報提供》《意志表示》は聞き手への働きかけが《情報要求》《行為要求》の働きより弱く、聞き手に対して何も求めていないものである。それぞれの発話機能には下位レベルの発話機能が存在し得るが、詳細について、山岡（2008）の基準を参考にし、それぞれの概念を整理し表に示す。

表 V.6 「～てくれる」「～てもらう」文における発話機能の傾向

| 発話機能の種類 | ～てくれる | ～てくださる | ～てもらう | ～ていただく |
|---------|-------|--------|-------|--------|
| 《情報要求》 | 3 | 1 | 5 | 3 |
| 《行為要求》 | 28 | 90 | 35 | 26 |
| 《情報提供》 | 67 | 8 | 54 | 61 |
| 《意志表示》 | 2 | 1 | 6 | 10 |
| 合計 | 100 | 100 | 100 | 100 |

（数値は実数）

『BCCWJ』に現れる両者の発話機能については、以下の傾向が見られた。次に表で示して説明する。まず、全体的な傾向として、「～てくださる」文を除く「～てくれる」「～てもらう」「～ていただく」文は、聞き手へ直接働きかけていない発話機能での使用が目立つ。「～てくださる」文は、「～てください」の類型が多く（85用例）、聞き手への《行為要求》の談話においての使用が顕著であった。「～ていただく」文は、《情報提供》の発話機能が多く、その中でも「～ていただきたい」＋「のだ」の共起が伺えた（11用例）。

また、「～ていただく」が「～てくださる」より丁寧に感じるという従来研究の結果と今回の調査結果を比較すると、聞き手へ直接要求を行っている場面に限っては通用すると考えられるが、今回の調査では聞き手へ直接要求を行っていない場面においての使用が多く、聞き手に対する配慮意識の表出に直結する表現であるとは言い難い。

表 V.7 《情報提供》の発話機能に現れた「~てくれる」「~てもらう」系

| 《情報提供》 | ~てくれる | ~てくださる | ~てもらう | ~ていただく |
|----------|-------|--------|-------|--------|
| 単文・複文の主節 | 30 | 1 | 15 | 13 |
| 複文の従属節 | 37 | 7 | 39 | 48 |
| 合計 | 67 | 8 | 54 | 61 |

(数値は実数)

《情報提供》の発話機能における共通点は、複文の従属節に置かれる「~てくれる」系と「~てもらう」系が、名詞修飾節として使用されることが多く見られた点である。ここには、「こと」や「もの」などの形式名詞のみならず次の(5.83)(5.84)のように一般名詞に対する修飾節として広く使われている。

(5.83) その時、宗薫さんが私に言って下さった言葉は、「君ね、作家っていうのは、特別な仕事なんだよ（中略）」というものだった。

(BCCWJ LBI9_00013 : 丸茂ジュン『耽美小説の書き方』ごま書房 : 1997)

(5.84) 車を買って頂いたお客様がハウスメーカーの営業さんでした。

(BCCWJ OC08_05443 : Yahoo!智恵袋 : 2005)

表 V.8 《行為要求》の発話機能に現れた「~てくれる」「~てもらう」系

| 《行為要求》 | ~てくれる | ~てくださる | ~てもらう | ~ていただく |
|----------|-------|--------|-------|--------|
| 単文・複文の主節 | 14 | 85 | 7 | 11 |
| 複文の従属節 | 14 | 5 | 28 | 15 |
| 合計 | 28 | 90 | 35 | 26 |

(数値は実数)

(5.85) いろいろな表現をしていただきたいんです。

(5.86) だからこそ我々は見せて頂けると嬉しいです。

「~ていただけると+感情を表す表現」の形式（15用例の中、7用例）は、

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

「～てくださる」文においては出現せず、頻度の割合から見ると「～ていただく」文のほうがより定型化されていることが分かる。

(5.87) 本質的な差だと私は思いますので、その差を説明していただければと思います。

(BCCWJ OM51_00005 : 国会会議録 : 1998)

「～ていただければ＋と思います」の共起性が顕著（15用例の中、6用例）であったが、一方、「～てくだされば＋と思います」の共起は見られなかった。このようなことは、Googleにおける定型表現検索からも共起の度合いの差として把握できた。

表 V.9 Googleにおける定型表現（形態一致検索条件）の検索結果

| ていただければと思います | てくださればと思います |
|--------------|-------------|
| 3,570,000 | 112,000 |

(数値はヒット件数、2016年11月09日検索結果)

表 V.10 《意思表示》の発話機能に現れた「～てくれる」「～てもらう」系

| 《意思表示》 | ～てくれる | ～てくださる | ～てもらう | ～ていただく |
|----------|-------|--------|-------|--------|
| 単文・複文の主節 | 0 | 0 | 5 | 4 |
| 複文の従属節 | 2 | 1 | 1 | 6 |
| 合計 | 2 | 1 | 6 | 10 |

(数値は実数)

表 V.11 《情報要求》の発話機能に現れた「～てくれる」「～てもらう」系

| 《情報要求》 | ～てくれる | ～てくださる | ～てもらう | ～ていただく |
|----------|-------|--------|-------|--------|
| 単文・複文の主節 | 1 | 1 | 1 | 0 |
| 複文の従属節 | 2 | 0 | 4 | 3 |
| 合計 | 3 | 1 | 5 | 3 |

(数値は実数)

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

表 V.12 様々な発話機能に現れた「～てくれる」「～てもらおう」系

| | ～てくれる | ～てくださる | ～てもらおう | ～ていただく |
|----------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 単文・複文の主節 | 45 45% | 87 87% | 28 28% | 28 28% |
| 複文の従属節 | 55 55% | 13 13% | 72 72% | 72 72% |
| 合計 | 100 100% | 100 100% | 100 100% | 100 100% |

(数値は実数と、その下に%を記す)

上記の《情報提供》《行為要求》《意思表示》《情報要求》の発話機能を合わせて計量的に考察すると、表 V.12 で分かるように、「～てくれる」文は単文と複文の主節、複文の従属節の述語として使用されているが、「～てくださる」文、「～てもらおう」文、「～ていただく」文はどちらかの偏りが著しいことが分かった。特に「～てくださる」文はもともと形式上の傾向として要求要素文の性格が強く、「～てください」の形式が多く現れた。一方、「～てもらおう」「～ていただく」文においては複文の従属節での使用が多く、「～てもらおう」文は名詞を修飾する形式での使い方が顕著であった。「～ていただく」文は引用節としての使用が目立つ。

共通点としては、複文の従属節における使用の面で、名詞修飾節の使用が顕著であった点が挙げられる。次の例のように「こと」や「もの」などの形式名詞のみならず、一般名詞に対する修飾節として広く使われている。

(5.88) 来てくれた人、コメントくれた人、ありがとう。

(5.89) いろいろ指導していただいて、教えてもらって、すごく助かりました。

また、授受補助動詞文と共起する表現として、話し手の感情を表出する感謝表現「ありがとう」と謝罪表現「申し訳ありません⁶⁸」、「うれしい」と共起している例が見られる。この場合、「～てくれる」系は聞き手の積極的フェイ

⁶⁸ 「すみません」は謝罪を意味するほか、感謝の意味としても解釈可能であるため、代表的な謝罪表現として「申し訳ありません」を示す。

第V章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

スを尊重する働きを持つが、「ありがとう」の感謝表現もポジティブ・ポライトネスの一つであり、そのため、この二つの表現の共起性が顕著となると考える。また、「～てもらおう」系の場合、聞き手の消極的フェイスを尊重する表現であり、謝罪表現はネガティブ・ポライトネスの一つである。

換言すると、聞き手の言動を話し手にとって利益が大きいと述べるか、もしくは話し手の言動が聞き手にとって利益が大きいと述べることで、話し手と聞き手のより良好な関係を保つ効果がある。こちらでは、聞き手が話し手自身のために意図的に行動を行っているとして話し手が勝手に解釈していることを表出することで、感謝表現や謝罪表現につながっていると判断できる。

(5.90) 来てくれてありがとう。(=(1.28)を再掲)

(5.91) *来てもらってありがとう。(=(1.29)を再掲)

(5.92) 来てもらってごめんなさい。

「～てくれてありがとう」と、「～てくれてごめんなさい」の形式、そして、「～てもらってありがとう」と「～てもらってごめんなさい」の形式を比較する。つまり、《感謝》の理由を述べる《陳述》として「～てくれる」文が、《謝罪》の理由を述べる《陳述》として「～てもらおう」文が好まれることが分かる。このようなことがいえるのは、「～てくれる」文が持っている特徴のためである。「～てくれる」文には聞き手目当ての状況のもとで、聞き手の行為に直接触れていることで、聞き手の積極的フェイスが優先されるといえよう。感謝表現である「ありがとう」は感謝の対象であることが有り難きであるという語源から考えるとその関係がつながると考える。しかし、「～てもらおう」文では話し手の行為に注目されるため、感謝表現の「ありがとう」との共起関係が低いのである。

一方、「～てもらおう」文を「～ていただく」文の敬意を高めると「～ていただいております」「～ていただいて申し訳ございません」であるが、上記の「～てもらってありがとう」の形式が不自然さを感じさせる反面、「～ていただいてありがとうございます」の形式は容認度が上がることが指摘できる。その理由は、敬語のメカニズムとフェイスの関係から探ることができ

るためである。

(5.93) 留学生にとっても日本人学生にとっても、自然が教えてくれる異文化体験だった。(=(3.64)を再掲)

(BCCWJ OT02_00019: 宮地裕ほか『国語1』光村図書出版株式会社: 2005)

(5.94) *留学生にとっても日本人学生にとっても、自然に教えてもらう異文化体験だった。(=(3.65)を再掲)

(5.93)では授受補助動詞文「～てくれる」系が「異文化体験」の修飾節として使用されているが、(5.94)で「～てもらう」系に置き換えた場合には不自然な文となる。「自然が異文化体験を教える」という事態に対し、「～てくれる」系と「～てもらう」系の言い換えができない要因について探る必要があると考えられる。

また、話し手と聞き手が当該事態に直接関わる場合と関わらない場合がある。以下の例のように、第三者同士の事柄について話し手が話す際「～てくれる」系と「～てもらう」系が使われる状況もある。ここで、第三者とは話し手と聞き手以外に人物を指し、人間関係が話し手と社会的・心理的に近いと言われるいわゆるウチ側の人間関係である場合から社会的・心理的に遠いソト側の人間関係である場合まですべてに該当する。この第三者間の事柄についての用例を次に挙げる。

(5.95) 朴選手が健康管理のために病院で打ってもらった注射が原因だと指摘。

(『朝日新聞』2015/01/27「競泳・朴泰桓、ドーピング違反か」)

(5.96) *朴選手に健康管理のために病院で打ってくれた注射が原因だと指摘。

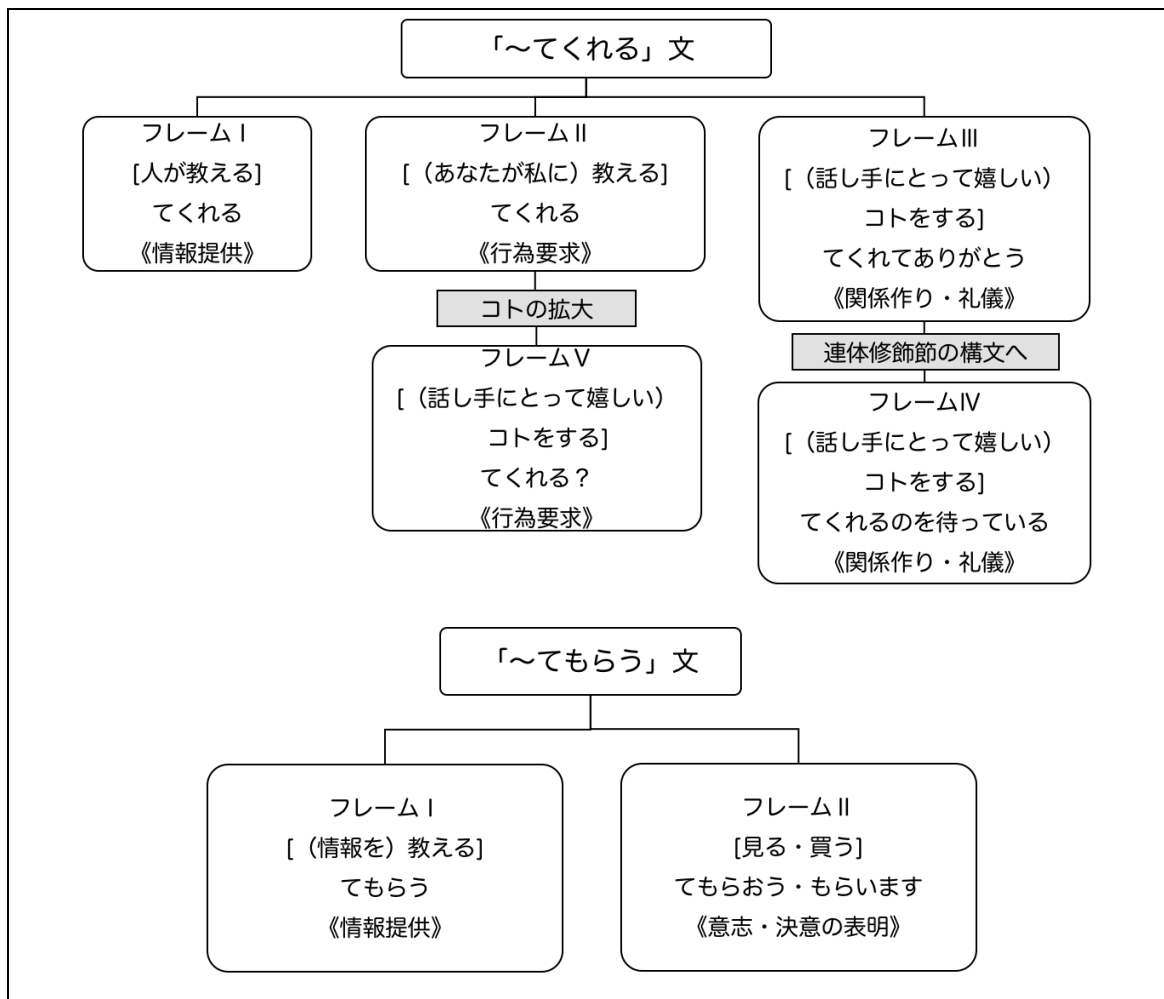
上記の例で「注射を打つ」動作の動作主は「病院側」であり、受け手は「朴選手」である。ここでは記者である語り手と読者の聞き手は、「注射を打つ」という事柄には何ら関わりがないのだが、「～てくれる」文ではなく、「～てもらう」文が使われていることに注目できる。

調査結果を通じ、従来の研究において内省による判断要因について考えると、

聞き手の存在を意識した瞬間、すでに配慮の意識が強く現れるためであろう。また定型化されている共起ネットワークのため、「～てもらう」文のほうがより聞き手に配慮した丁寧な表現であると感じられることについて、実際には聞き手の存在を意識していることが多いためであると考えられる。また、発話機能の分類と形式上の特徴は密接な関係であることが予想できる。

5.6.4 「～てくれる」「～てもらう」系の共起ネットワークの比較

本節では、共起ネットワークの観点から、両表現を比較する。次は 5.4 節と 5.5 節で分析した共起ネットワーク図 V.15 と図 V.19 を再掲したものである。



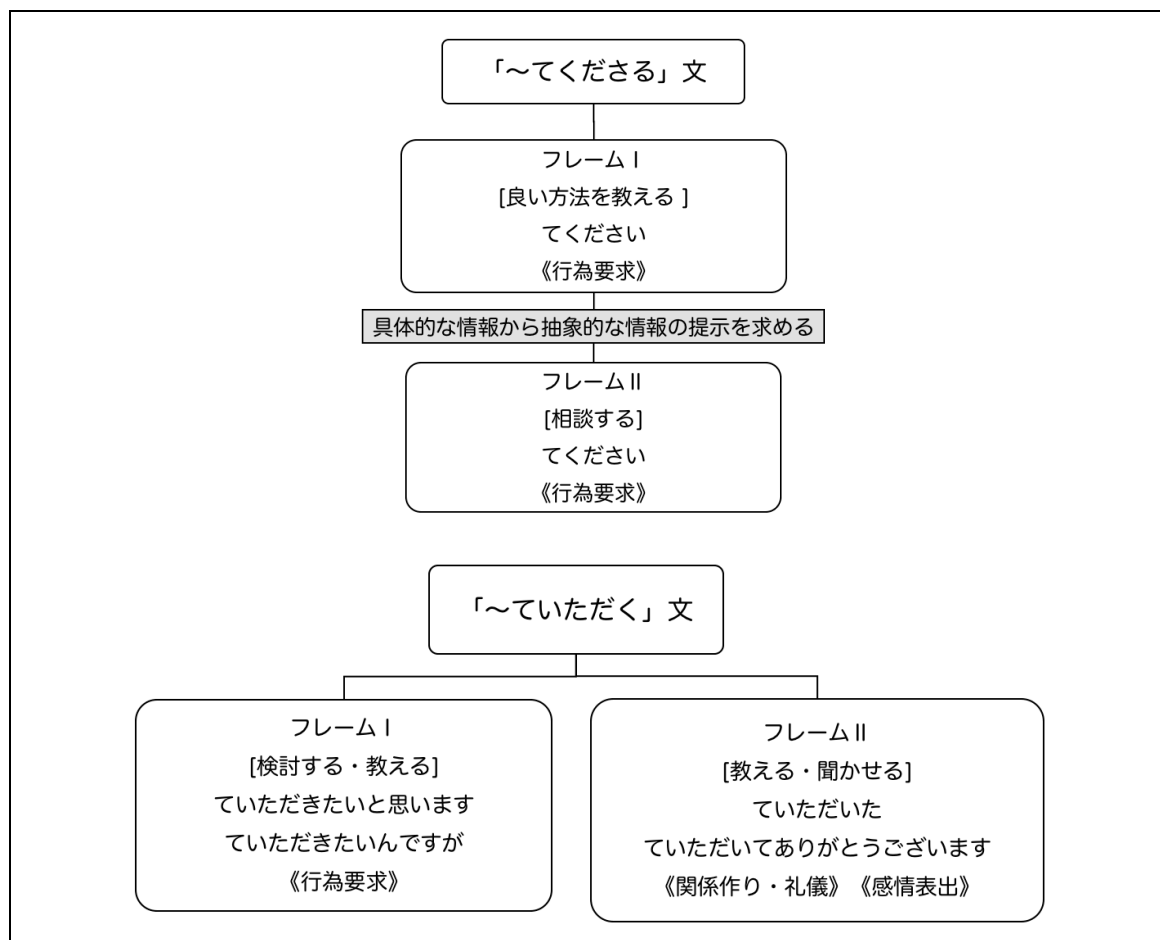


図 V.28 「～てくれる」「～てもらう」系の共起ネットワークの比較

「～てくれる」「～てもらう」の両表現を成す共起ネットワークを分析し、両表現の共通点と相違点を明らかにした結果、両表現には以下のような共通点と相違点が見られた。

「～てくれる」「～てもらう」文において、形式上の特徴では、名詞修飾節における使用が顕著であった。そして、発話機能との関わりにおいては、「～てくださる」文を除く全ての文が聞き手へ直接的な働きかけのない情報提供や意思表示の発話機能で多く使用されている点が共通点として挙げられる。

また、両表現における相違点は、「～てもらう」文のほうが構文類型と発話機能の関わりで定型化された共起ネットワークの様相が見られた点である。定型化されたのは言い換えると構文化が進み、特殊な意味機能として働くことに繋がると思われる。

これらの分析で、「～てくれる」「～てもらう」文において互換性の有無に

よる分析では取り扱うことができなかつたレベルでの考察が可能となったと考える。特に文の形式と談話の発話機能との関わり方は、さらに類型化していくことで両表現の特徴をより明確にすることができると思う。

5.7 本章のまとめ

本章では、共起ネットワークというツールを用い、授受補助動詞文の構造を探り、その構造パターン別現れた機能を繋いで分析を行った。

まず、「～てやる」文の分析では、三つのフレームが抽出された。フレームⅠは、《感情表出》の「(言葉を言う)てやる」、フレームⅡは、《情報提供》の「(親が子供にいい影響を与える)てやる」、フレームⅢは、《意志・決意の表明》の「(仕事を教える)てやる」である。フレームⅠとフレームⅡから、話し手の感情や意志・決意を表すための表現である特徴が窺える。「～てあげる」文の分析では、フレームⅠの《情報提供》の「(顔を見せる)てあげる」、フレームⅡの《行為要求》の「(親は子供のことを考える)てあげる」があり、フレームⅡから、当該事柄における対象・関係の拡張の過程を経て、フレームⅢの《行為要求》の「(犬にブラシをかける)てあげる」があることが分かった。「～てさしあげる」文は、単独フレームとして、《行為要求》の「(～を教える・直す)てさしあげる」で、聞き手に第三者に向けての行為を促すパターンに絞ることができた。

また、「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の使い方について、NINJAL-LWP というツールを通して例文を中心に分析を試みた。三者は授受行為の受け手と与え手の存在だけではなく、話し手の心的態度を含意していることが分かった。

次に、「～てくれる」文について、フレームⅠは《情報提供》の「(人が教える)てくれる」、フレームⅡは《行為要求》の「(あなたが私に)教えるてくれる」、フレームⅢは、《関係作り・礼儀》の「(話し手にとって嬉しいコトをする)てくれてありがとう」が分析できた。さらに、フレームⅢの構造が談話において連体修飾節という構造となり、フレームⅣの《関係作り・礼儀》

の「（話し手にとって嬉しいコトをする）てくれるのを待っている」のパターンが得られた。また、フレームⅡの拡張フレームとして、事柄の構造が複雑となったフレームⅤは、《行為要求》の「（話し手にとって嬉しいコトをする）てくれる？」で共起性が強いことが分かった。「～てくださる」文では、フレームⅠの《行為要求》の「（良い方法を教える）てください」が顕著に現れ、次に行為要求の内容が抽象化され、フレームⅡの《行為要求》の「（相談する）てください」が分析された。

一方、「～てもらおう」文の分析では、フレームⅠの《情報提供》の「（情報を教える）てもらおう」と、フレームⅡの《意志・決意の表明》としての「（見る・買う）てもらおう・もらいます」のパターンが出現し、共起性が窺えた。

「～ていただく」文の分析では、フレームⅠの《行為要求》の「（検討する・教える）ていただきたいと思います・ていただきたいんですが」と、フレームⅡの《関係作り・礼儀》《感情表出》としての「（教える・聞かせる）ていただいた・ていただいてありがとうございます」にまとめることができた。「～てもらおう」文と「～ていただく」文の両者において、「～てもらおう」文は聞き手の想定がされたい《情報提供》としての使用が多いが、「～ていただく」文は聞き手の想定を前提としたパターンが多く現れた。その要因は、敬体としての使用にあると思われる。

最後に、「～てくれる」「～てもらおう」の両表現を成す共起ネットワークを分析し、両表現の共通点と相違点を明らかにした。「～てくれる」「～てもらおう」文において、名詞修飾節における使用が多く、聞き手へ直接的な働きかけのない《情報提供》や《意思・決意の表明》の発話機能で多く使用されている点が共通点として挙げられる。また、相違点について、「～てもらおう」文のほうで定型化された共起ネットワークの様相が見られた点である。つまり、構文が固定化され、特殊な意味機能として働くことが多いことを意味する。

以上、本章で得られた分析結果をまとめたが、今後の課題としてランダム関数の抽出件数を増やし、より精度のあるデータを用いて精緻化させていきたい。

次章では、第Ⅲ章、第Ⅳ章、第Ⅴ章で行った分析の結果をまとめ、結論としての提言を行う。

第VI章 結論：まとめと今後の課題

6.1 結論

本研究は、授受補助動詞文を対象に基本構造を提案し、文の構成の各要素まで踏み込んで語用論的なアプローチで記述した。本節では、考察結果について述べるが、まず、本研究の課題を再掲しておく。

(6.1) 本研究で扱う課題のまとめ (= (2.51) を再掲)

課題 1：授受補助動詞文をめぐる構文的特徴を把握する。

課題 2：授受補助動詞文が使われる発話機能の特徴を明らかにする。

課題 3：授受補助動詞文の構造と発話機能との関わりについて共起ネットワークを手掛かりに分析する。

上記の課題における本研究の研究結果について、以下のようにまとめられる。

まず、課題 1 について主に第 III 章で述べている。第 III 章では、「授受補助動詞文はどのような形式で使われているか」という問題を扱った。収集したデータの構文的な特徴を把握するため、格情報の表示・非表示と表示された格情報の特徴、前項動詞の制約について、コーパス分析から得られた結果の傾向を述べた。その結果、談話における授受補助動詞文の使用では、格情報が省略されることが圧倒的に多いことが分かった。このような現象は、授受補助動詞文における格情報が背景化されていると考えられ、語用論的文脈により復元できる情報であるために生じるとされる。次に、表示された格情報の特徴について授受補助動詞文の種類ごとにその相違点を確認できた。「～てくれる」文には、無情物や抽象的な事柄を格情報に取りやすい傾向があり、その際には話し手の《感情表出》の発話機能が働いていることが要因として挙げられた。

次に、課題 2 について主に第 IV 章で述べた。第 IV 章では、「授受補助動詞文がどのような時に使われているか」という問いに答えるために行った調査結果

について報告した。従来の先行研究では利益・恩恵を表す表現として授受補助動詞文を捉えていたが、利益・恩恵だけでは説明しきれない表現をどのように解釈するかが課題であった。分析結果から、利益と恩恵を感じる主体は、授受補助動詞文における参与者ではなく話し手であると判断し、話し手と聞き手の存在を考慮に入れることで、様々な談話の発話機能のもとで授受補助動詞文が使用されていることを明らかにした。

一方、課題1と課題2の分析結果を見ると、談話の発話機能と授受補助動詞文の形式は無関係ではないことが分かった。つまり、各授受補助動詞文において特定の形式と発話機能との関わり方を探ることで、授受補助動詞文の使用のメカニズムを深く理解することができると思う。

そこで、課題3で示したように、授受補助動詞文の要素と発話機能がどのような関わりを持っているかを明らかにするため、共起度の強い構文パターンをフレームとして捉え、構文間のリンクに注目した。また、各構文の構文フレームとして構文の形式と発話機能の組み合わせを提示した。

「～てやる」文のフレームは、「[言葉を言う]てやる」の形式でマイナス的な意味合いを持つ《感情表出》の発話機能が認められた。「～てあげる」文では、「[顔を見せる]てあげる」形式を用い、《情報提供》の談話場面における使用が強い共起関係を持っていることが分かった。「～てさしあげる」文では、「[(～を) 教える・直す]てさしあげる」の形式を持ち、第三者に向けての行為を要求する《行為要求》が高頻度で出現した。「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文における使い分けでは、発話機能と密接な関わりがあることを主張した。

「～てくれる」文では《情報提供》として「[人が教える]てくれる」形式を用い、「～てくださる」文では《行為要求》の発話機能として「[良い方法を教える]てください」の形式を用いる共起度が高かった。

「～てもらう」文と「～ていただく」文は、決められた表現形式に偏りがあり、「～てもらう」文では、《情報提供》として「[(情報を) 教える]てもらう」のタイプがもっとも顕著であったが、「～ていただく」文では、「[検討する・教える]ていただきたいと思います・ていただきたいんですが」のように希望を表すことで、聞き手へ行為を促す《行為要求》の発話機能が共感関係を

有していた。

また、「～てくれる」「～てもらおう」文では、互換可能性を手掛かりに共通点と相違点を明らかにした。共通点は、名詞修飾節における使用が共に顕著であることである。しかしながら、「～てもらおう」文は、形式と発話機能が決まり文句のように固定された定型化文が、「～てくれる」文よりも多く使われており、この点において相違があるといえる。

以上、本研究の目的に対して各章における課題を設定し、その課題を解決するため、現代日本語授受補助動詞文における構造と機能における語用論的研究を行ってきた。その結果、以下のような結論を得た。

第一に、授受補助動詞文は、ある事柄に対する話し手の態度を示すための発話機能を持ち、聞き手に直接関わっている場合と関わっていない場合とに大きく分けられる。

第二に、授受補助動詞文上の特徴は、格情報の背景化にある。授受補助動詞の使用が、主格と与格の存在を含意するため、文脈によって格情報が省略されることが多い。一方、表示される格情報には人を指す有情物から、物や事柄を示す抽象的な事象まで取り入れられるが、構文によってそれぞれの傾向性がある。

第三に、授受補助動詞文は、授受本動詞文での利益・恩恵の意味から、様々な発話機能として使用するようになり、構文化が進んでいることが窺える。

以上の結論が、本研究の研究目的に対する主張である。本研究は、授受補助動詞文の一部の意味・用法にしか注目されてこなかった従来の研究に対して、授受補助動詞文の全体像を把握するという視点からの解釈を試みた。そして「利益・恩恵」の授受補助動詞文という位置付けを脱却し、「発話機能と共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞の構造と機能」が、従来の授受補助動詞文における問題点を解決する手掛かりとなることを期待する。

さらに、研究の特色・着眼点および独創的な点について述べたい。本研究は、従来の授受補助動詞文研究に欠けていたと考えられる多様な状況に注目した研究である。授受補助動詞を用いる文において発話機能という話し手の意図を語用論という観点から発話機能を捉え、分析を行った点に本研究の特色がある。着眼点は、授受補助動詞文における「利益と恩恵」の意味用法の限界であり、

この指摘を出発点に、授受補助動詞文が使用される文脈情報や授受補助動詞文をめぐる諸表現との関係を通して、《意志・決意表明》《感情表明》《非難》《演述》《行為要求》《情報要求》などといった発話機能を有していることを明らかにした。このような試みは、過去には見られないものであり、オリジナリティ性を主張する。また、共起ネットワークという概念で授受補助動詞のシステムを明確に把握することで、話し手の主観的判断を述べるだけでなく、聞き手への配慮表現として授受補助動詞文の用法の変化について言及できた点においても新たな視点を持ち込めたと考えている。

6.2 授受補助動詞文研究のこれから：課題と展望

まず、国内外に関連する研究の中で本研究が持つ意義や位置づけについて述べる。国内外において授受補助動詞文研究は統語論と意味論のレベルから対照研究や日本語教育の分野まで活発に研究されている。その中で本研究は語用論の観点から話し手の発話機能の概念を中心とした考察を通じ、対人コミュニケーションにおける授受補助動詞文の働きを理解するのに有効性を持つ。また、授受補助動詞を含む文の表現形式と談話における発話機能の関わりと、話し手が聞き手に向けて伝達しようとしている語用論的効果の解明に意義を満たすものであり、語用論研究に貢献する実証的研究である。

次に、本研究の分析結果から、今後予想される活用方法及び将来の見通しについて述べる。授受補助動詞文は日本語のみに現れる表現ではなく、英語や韓国語などにも存在する言語表現であるが、語用論的制約まで同じであるとは限らない。そのため、本研究で日本語授受補助動詞文に関する発話機能について捉えた内容は、今後諸言語における授受補助動詞文のタイプロジー研究にも発展する土台となり得る。また、日本語教育の面においても学習者が構文を丸暗記するのではなく、本研究の考察結果である様々な場面における授受補助動詞文の使用例と共起ネットワークの原理を教育現場で活用できよう。

本研究で得られた結果や分析手法を活用できる分野は、上述の通り、諸言語におけるタイプロジー研究と、日本語教育における有効な習得方法の提案およ

び教材開発における活用などがある。本節ではこの 2 点に焦点を当てて説明する。

まず、諸言語における授受補助動詞文のタイポロジー研究について詳細に述べる。タイポロジー研究とは、堀江・プラシャント（2009）で述べられているように、認知様式と言語機能に基づいた認知類型論の観点から言語の個別性の問題を捉えるものである。授受補助動詞文におけるタイポロジー研究は、各言語における授受補助動詞的用法を把握し、比較することから始まるといえる。その際、本研究で取り扱った共起ネットワーク図の分析を採用すると、各言語における構文的特徴を明らかにすることができると思う。つまり、日本語における授受補助動詞文を基準に対訳などを比較する方法ではなく、各々の言語における授受補助動詞文を分析した上で、その共起ネットワークを比較することで、より客観的な対照分析が可能であると思う。

朱（2014a : 20）では、日本語授受表現が韓国語でどのように表現されているかについてパラレル・コーパスから調査を行った。その結果の一部を表 VI.1 に示すが、この表から日本語授受補助動詞文を韓国語にする際、必ずしも韓国語の授受表現の形式が採用されるわけではなく、様々な表現で表されていることが分かる。言い換えると、日本語授受補助動詞には多様な発話機能に基づく用法があるといえる。

つまり、日本語授受補助動詞文と韓国語の表現が必ずしも 1 対 1 の関係となるのではなく、多対多の関係であることが分かった。日本語の授受補助動詞文の中の構文フレームが、韓国語の複数の構文フレームと関連している可能性があり、韓国語における構文フレームも日本語において複数の構文フレームと関連していることを意味する。

表 VI.1 日本語授受補助動詞文とその韓国語の表現について⁶⁹

| 表現 | | タイプ | ～て やる | ～て あげる | ～て くれる | ～て くださる | ～て もらう | ～て いただく |
|-----------------------|---|-----|----------|-----------|-----------|------------|-----------|------------|
| | | | | | | | | |
| 授 受 表 現 有 | A-1 タイプ 어/아 주다 [eo/a juda] (lit.～てあげる・くれる) | | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| | A-2 タイプ 授与動詞+尊敬もし くは謙讓を表す語 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| | A-3 タイプ 授受動詞のみ | | | | | | ○ | |
| 授 受 表 現 無 | B タイプ 本動詞のみ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| | C タイプ 어/아 놓다/두다 [eo/a notta/duda] (lit.～ておく) | | ○ | | ○ | | | |
| | D タイプ 어/아 버리다 [eo/a beorida] (lit.～てしまう) | | ○ | | ○ | | | |
| | E タイプ 意をやや強めてい う語 | | ○ | | | | | |
| | F タイプ 어/아 달다 [eo/a dalda] (lit.～て求める) | | | | ○ | | | |

⁶⁹ 朱 (2014a : 20) の表の中で、タイプの名称を一部修正して記す。「○」は、当該日本語授受補助動詞文のタイプに対して、訳された韓国語の表現に相当するものである。

次の図 VI.1 は共起ネットワーク図の各フレームを使ったタイポロジー研究の分析構想のモデルを示したものである。

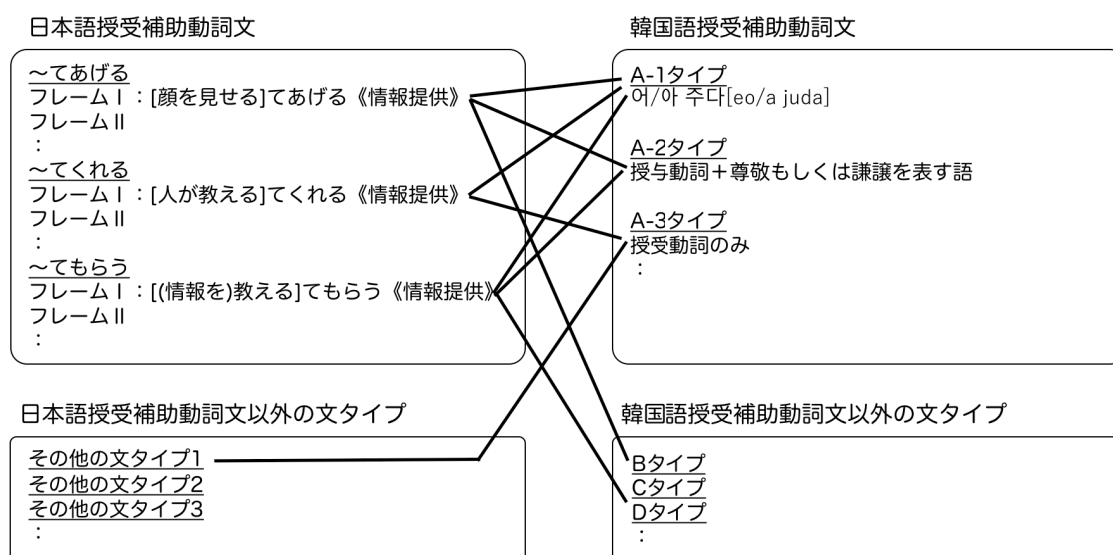


図 VI.1 日本語授受補助動詞文と韓国語授受補助動詞文の対照分析モデル

上記の図 VI.1 のように、本研究の分析結果である共起ネットワークを利用すれば、多言語におけるタイポロジー分析が可能となろう。多言語におけるタイポロジー分析を通じて得られた結果は、日本語授受補助動詞文の持つ個別性を明確にすることにつながり、かつ様々な言語における普遍性について考察することができると思う。

次に、日本語教育の面における活用方法について述べる。日本語教育の観点から考察した授受補助動詞研究に残された問題は、学習者の習得と教材の開発である。有効な習得方法を調査するに当たり、日本語教科書においてどのような授受補助動詞文が提示されているかという問いも有益な答えを示せると考える。ただ、本研究で取り扱った実際に使用される言語の蓄積であるコーパスの考察結果を比較し、より自然な日本語の習得のモデルとなる授受補助動詞の使用傾向を示す必要がある。朱（2014）で分析した考察結果の中で、授受補助動詞の格情報の明示についての考察を例に挙げて説明する。格情報について分析を行うきっかけとなったのは、次の(6.2)のように、文法的な間違いではないが、

談話の文脈によって不自然で違和感が残る例があったためである。

(6.2) (先生に直接ある漢字を教えてほしいと行為要求する場面において)

??先生は私にこの漢字を教えてくださいませんか。

(6.2)の用例について違和感が生じる要因を、次の表 VI.2 の分析結果から探ると、実際に授受補助動詞を用いた文では、格情報が非明示されることが多い点が挙げられる。このような特徴は、本研究の第 3 章の 3.3 節「格情報の傾向」でも明らかにしている通りである。その結果から、「～てあげる」系の格情報の表を例として再掲しておく。主格名詞句の情報は 91.9%が非明示され、与格名詞句の情報は 84.1%非明示されていることから、授受補助動詞文の格情報は非明示傾向にあるといえる。

表 VI.2 日本語教科書および筑波ウェブ・コーパスにおける
授受補助動詞文の格情報⁷⁰

| 授受補助 動詞文 | 格 | 初級 I・II | | | 中級 I・II | | | 筑波ウェブ・コーパス | | |
|-------------|----|---------|-----|-----|---------|-----|----|------------|--------|--------|
| | | 明示 | 非明示 | 小計 | 明示 | 非明示 | 小計 | 明示 | 非明示 | 小計 |
| ～てやる | 主格 | 19 | 1 | 20 | 1 | 6 | 7 | 83 | 640 | 723 |
| ～てあげる | 与格 | 18 | 2 | | 4 | 3 | | 111 | 612 | |
| ～てくれる | 主格 | 16 | 128 | 144 | 8 | 56 | 64 | 210 | 19,053 | 19,263 |
| ～てくださる | 与格 | 4 | 140 | | 0 | 64 | | 228 | 19,035 | |
| ～てもらう | 主格 | 12 | 25 | 37 | 2 | 73 | 75 | 12 | 2,522 | 2,534 |
| ～ていただく | 与格 | 31 | 6 | | 7 | 68 | | 345 | 2,189 | |

⁷⁰ この表 VI.2 は、朱(2014i: 68) の分析結果の一部であり、フォントの種類や名称等に修正を加えた。日本語教科書の出典は『みんなの日本語 初級 I・II』(第 2 版 2013) 『みんなの日本語 中級 I・II』(初版 2008) スリーエーネットワークであり、筑波ウェブ・コーパス (<http://corpus.tsukuba.ac.jp/>) は約 11 億語規模のコーパスから、頻度順の上位にある用例を無作為に抽出したものである。「～てさしあげる」の用例については、この調査結果では出現しなかったため、表示していない。

表 VI.3 「～てあげる」系に現れる格情報について⁷¹

| 主格名詞句「X」 | | 与格名詞句「Y」 | |
|---------------|--------|----------|--------|
| 明示 | 非明示 | 明示 | 非明示 |
| 1,760 | 19,966 | 3,450 | 18,276 |
| 8.1% | 91.9% | 15.9% | 84.1% |
| 「～てあげる」系の用例の数 | | | 21,726 |

(数は実数、その下に%を記す)

このような結果を根拠に、学習者が授受補助動詞文を習得する際、格情報の非明示に関する理解と習得が必要であり、日本語教育において積極的に取り組む必要があると主張する。また、各授受補助動詞における共起ネットワークについて、教科書に現れる構文フレームと比較することで、より優先とされる構文フレームの習得が有効であるかを検証する必要がある。さらに詳しく述べると、本研究での分析結果として得られた各授受補助動詞における構文フレームと、学習者が教科書を通じて習得する授受補助動詞における構文フレームの類を比較する。また、その結果の中から、より共起度が強いフレームを優先して習得できるような教材開発に繋げていく可能性が窺える。

例えば、表 VI.2 で分かるように、日本語教科書において「～てあげる」系に関する用例の提示はあまりなされておらず、初級における出現数が 20 件で、中級における出現数が 7 件である。一方、本研究の分析結果の一部を表 IV.4 に再掲したが、「～てあげる」系の出現が他の表現と比べて少ない。しかし、共起ネットワーク図から見ると共起度の面において有意な構文フレームが存在する。これについては、図 VI.2 で再掲した図を示して説明したい。共起ネットワーク分析の結果の図 VI.2 を見ると、「～てやる」文の構文フレーム I である《感情表出》としての「(言う)てやる」文について、共起度の面から有意であるにも関わらず教科書では触れられていない点が課題として指摘できる。

⁷¹ 表 III.5 を再掲する。

表 VI.4 『BCCWJ』における授受補助動詞の出現用例の数（総数）⁷²

| 授受補助動詞文の形式 | | 用例の数 |
|-------------|------------|---------|
| 「～てあげる」系 | 「～てやる」文 | 13,498 |
| | 「～てあげる」文 | 8,010 |
| | 「～てさしあげる」文 | 218 |
| 「～てあげる」系の小計 | | 21,726 |
| 「～てくれる」系 | 「～てくれる」文 | 57,548 |
| | 「～てくださる」文 | 53,299 |
| 「～てくれる」系の小計 | | 110,847 |
| 「～てもらう」系 | 「～てもらう」文 | 24,163 |
| | 「～ていただく」文 | 16,601 |
| 「～てもらう」系の小計 | | 40,764 |

（数値は実数）

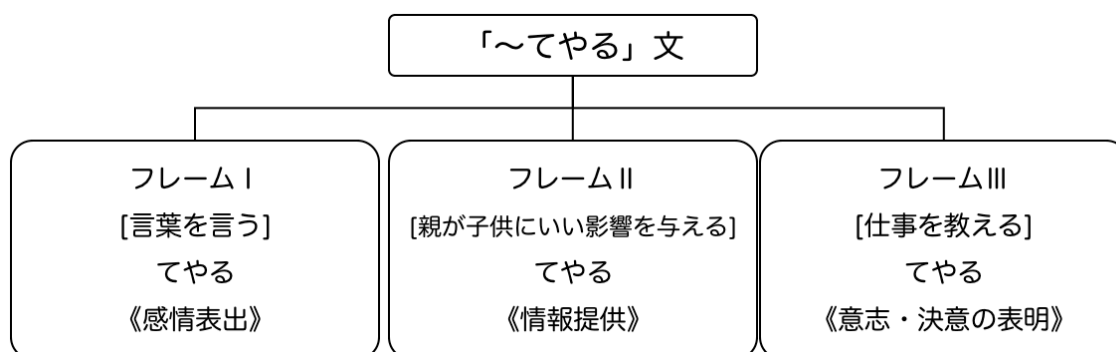


図 VI.2 「～てやる」文における共起ネットワーク⁷³

繰り返しとなるが、本研究では出現頻度だけでは当該表現形式が持つ特徴を明らかにすることには限界があることを検証し、共起における強度を判定基準とし、表現形式と発話機能の関係を構文フレームとして提案した。

もう一つの例を挙げて述べると、「～てくれる」系と「～てもらう」系における構文フレームを比較することで、優先的に習得が必要となる構文フレーム

⁷² 表 III.1 を再掲する。

⁷³ 図 V.9 を再掲する。

を用いた文を教科書に取り込める可能性が挙げられる。「～てくれる」系と「～てもらおう」系の使用率において、表 VI.2 と、表 IV.4 の傾向は、類似しているともいえるが、実際の構文フレームを比較するとその使用様相に隔たりがあることが把握できる。両表現における共起ネットワークを図 VI.3 に再掲したが、「～てくれる」系のほうが、頻度数が多いだけでなく、構文フレームの数も多いことが分かった。一方、「～てもらおう」系の場合、決められた文脈状況における使用が顕著である点が指摘できる。このような点を教科書に現れるフレームと比較することで、より実生活に活用できる授受補助動詞文を提示し、導入することができる。

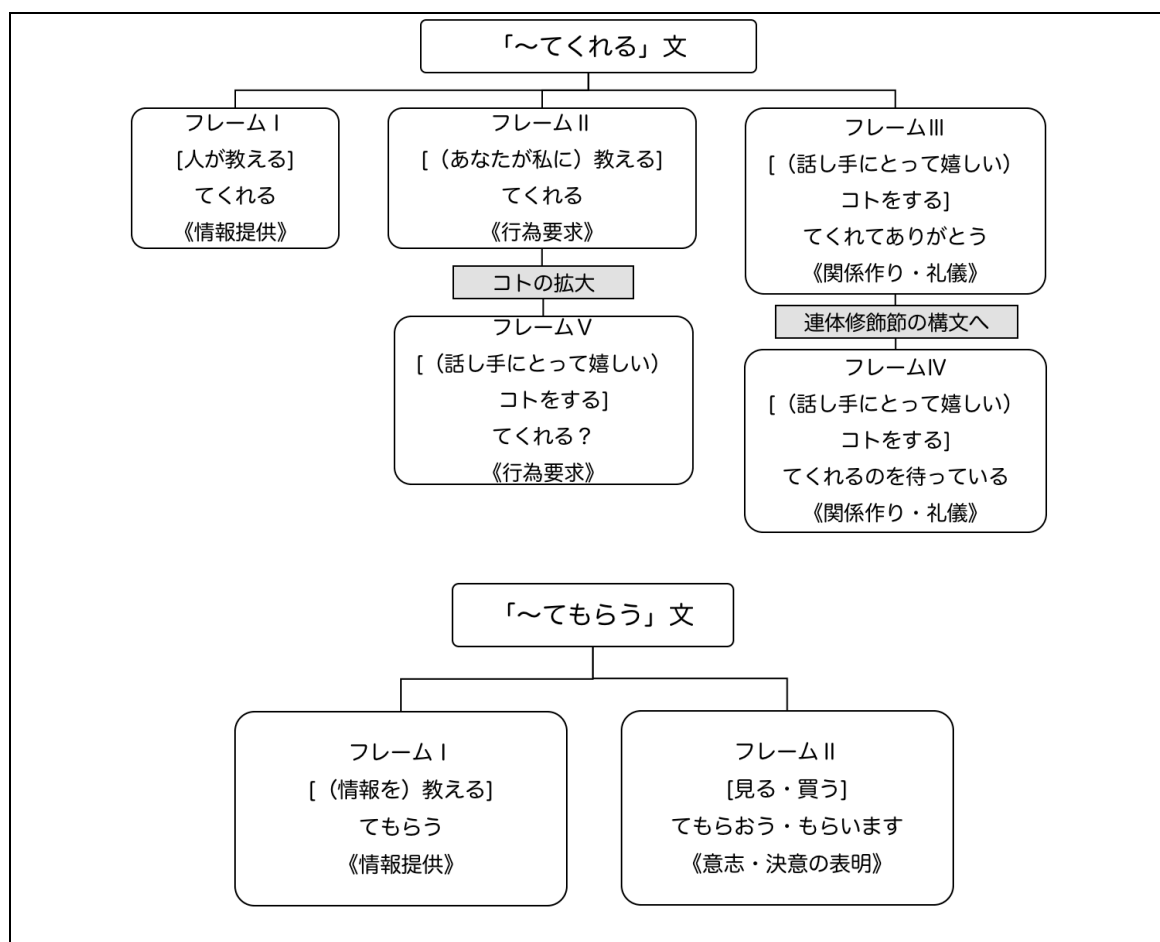


図 VI.3 「～てくれる」「～てもらおう」系の共起ネットワークの比較⁷⁴

⁷⁴ 図 V.28 の一部を再掲する。

ここから考えられることとしては、教科書に現れた「～てくれる」系には、教科書というジャンルの性格から、指示文として《行為要求》の「～てください」が圧倒的に多いことから、「～てくれる」系における多様な構文フレームの導入が必要であると予想できる。また、「～てもらう」系においては、教科書では聞き手への《行為要求》の文法・会話練習問題として提示することが多いが、図 VI.3 の共起ネットワークから見ると、《情報提供》としての「(情報を教える)てもらう」フレームや、話し手の《意志・決意の表明》である「(見る・買う)てもらおう・もらいます」のフレームを重点的に習得できるように提示する文法項目や用法を再考する必要があると思われる。

以上、本研究の分析結果をもとに、今後予想される影響及び今後の活用方法について述べた。

最後に、今後の課題について述べる。まず、本研究の方法論が、いまだ確立しているとは言えず、問題点を抱えているということである。特に、共起ネットワークのフレームの間における関連性について今後の推移を注意深く検討しなければならないという問題が残されている。しかしながら、本研究の研究手法としてコーパスからの用例を検討することで、新たな問題点が見つかり、議論を発展させることができた点から、今後さらに理論の精緻化へ向けて共起ネットワーク図の分析を改善していくことが期待される。

博士論文に関わる研究発表活動（関連章）

本研究の構成と既発表論文との関連について以下のように示し、口頭発表・ポスター発表・研究ノート・研究論文・受賞歴の情報を時間順に示す。また、共同研究に関して本研究と関連のある研究も含めている。

第Ⅰ章 序論：授受補助動詞文と語用論研究

新規執筆

理論的な枠組みについては、以下の（8）（12）（26）を大幅改訂・加筆

第Ⅱ章 問題の所在および本研究のアプローチ

先行研究の分析については、以下の（1）を改訂・加筆

- (1) 朱炫姝（2017a）「授受表現に関する研究動向と今後の課題：日本国内における文献調査より」『日本語コミュニケーション研究論集』第6号 pp.50-61 日本語コミュニケーション研究会【研究論文】

本研究のアプローチについては新規執筆

第Ⅲ章 授受補助動詞文における構文要素の全体的傾向

- (2) 朱炫姝（2013a）「日本語授受表現と韓国語授与動詞の体系に関する一考察：『韓日並列コーパス』を用いて」『日韓次世代学術フォーラム 第10回国際学術大会予稿集』pp.165-168 韓国東西大学校日本研究センター【口頭発表】
- (3) 朱炫姝（2013b）「日本語授受表現と韓国語授与動詞の体系に関する一考察」東京外国語大学国際日本研究センター主催夏季公開セミナー 東京外国語大学国際日本研究センター【口頭発表】
- (4) 朱炫姝（2014b）「授受表現の格情報に関する一考察」第4回日本語コミュニケーション研究会 日本語コミュニケーション研究会【口頭発表】
- (5) 朱炫姝（2014c）「情報構造の観点から見た授受表現と格情報について」『日本語学会春季大会予稿集』pp.71-78 日本語学会【口頭発表】

- (6) 朱炫姝 (2016a) 「授受表現の構文構造と要素について：『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』の用例を用いて」第 6 回日本語コミュニケーション研究会 日本語コミュニケーション研究会 【口頭発表】
- (7) 朱炫姝 (2016b) 「授受表現における一人称の明示性について」『国際日本研究』第 8 号 pp.195-209 筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究専攻【研究論文（査読付）】

第 IV 章 授受補助動詞文をめぐる発話機能

- (8) 朱ヒョンジュ (2012a) 「配慮表現からみた授受構文の発話機能について」『日本語教育国際研究大会予稿集』第 1 分冊 pp.228 (A279) 日本語教育学会 【ポスター発表】
- (9) 小野正樹・朱ヒョンジュ・許允瑄・山下悠貴乃・赤羽優子・孫思琦・伊藤秀明・デヒピティヤ スランジ ディルーシャ・グルミラ アリモヴァ (2013c) 「5 言語の“丁寧”の意味・用法と WEB 上のコロケーション分析：日本語・韓国語・中国語・シンハラ語・ドイツ語の分析」『日本語教育論集』第 28 号 pp.1-21 筑波大学留学生センター 【研究論文（査読付）】
- (10) 朱炫姝 (2013d) 「日本語授受表現における語用論的考察：発話機能の観点から」第 5 回日・中・韓 日本言語文化研究国際フォーラム 中国大連大学 【口頭発表】
- (11) 朱炫姝 (2014d) 「日本語授受表現における語用論的考察：発話機能の観点から」『中日韓言語文化研究』 中国大連大学 【研究論文（査読付）】

第 V 章 共起ネットワークの観点から見た授受補助動詞文の構造と機能

- (12) 朱炫姝 (2012b) 「『てくれる』文と『てもらう』文の使い分けに関する一考察：本動詞とのコロケーションを中心に」『第 1 回東アジア・ユラシア地域を結んだ国際日本研究フォーラム発表予稿集』 pp.23-24 筑波大学 【ポスター発表】
- (13) 朱炫姝 (2012c) 「語用論的観点からみた授受表現の日韓対照研究：韓国人日本語学習者の語用論的転移を中心に」『第 2 回「中日言語文化の交流と共有」シンポジウム予稿集』 pp.25-28 北京師範大学・筑波大学 【口頭発表】

- (14) 朱炫姝 (2013e) 「語用論的転移からみた授受表現の日韓対照研究」 第 3 回日本語コミュニケーション研究会 【口頭発表】
- (15) 朱炫姝 (2013f) 「『てやる』『てあげる』『てさしあげる』文の使い方について」『第 10 回国際学術会議・文明のクロスロード—言語・文化・社会の諸相—予稿集』 pp.33-35 カザフスタン国立大学・筑波大学 【口頭発表】
- (16) 朱炫姝 (2014e) 「授受補助動詞『～てくれる』系と『～てもらう』系の一考察」『東アジア日本研究国際学術フォーラム予稿集』 pp.72-76 韓国高麗大 学校 【口頭発表】
- (17) 朱炫姝 (2014f) 「動詞『教える』と共起する授受表現について」『第 5 回 コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.31-38 国立国語研究所 【口頭 発表】
- (18) 朱炫姝 (2014g) 「動詞『教える』と共起する授受表現について」『第 5 回 コーパス日本語学ワークショップ』 pp.31-38 国立国語研究所 【研究ノート (査読付)】
- (19) 小野正樹・朱炫姝・デヒピティヤ スランジ ディルーシャ・李国玲・スワン ナクトパッチャラーパン (2014h) 「動詞『きく』のコロケーションについて：WEB コーパスと日本語母語話者・上級日本語学習者の主観的判断から」 『第 5 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.271-278 国立国語研 究所 【ポスター発表】
- (20) 小野正樹・朱炫姝・デヒピティヤ スランジ ディルーシャ・李国玲・スワン ナクトパッチャラーパン (2015a) 「日本語動詞『きく』のコロケーション について」『日本語教育論集』第 30 号 筑波大学留学生センター 【研究論文 (査読付)】
- (21) 朱炫姝 (2015b) 「『～てくれる』『～てもらう』における使用条件につい て：日本語母語話者と学習者の用例を比較して」第 5 回日本語コミュニケーション研究会 日本語コミュニケーション研究会 【口頭発表】
- (22) 朱炫姝 (2015c) 「『～てくれる』系と『～てもらう』系に関する一考察： 単文・重文・複文における互換性を中心に」『日本語コミュニケーション研究 論集』第 4 号 日本語コミュニケーション研究会 【研究論文】
- (23) 朱炫姝 (2016c) 「『～てくれる』『～てもらう』の使用条件について：日

本語母語話者と日本語学習者の用例を比較して」『日本語コミュニケーション研究論集』第5号 日本語コミュニケーション研究会 【研究論文】

(24) 朱炫姝 (2016d) 「『～てくれる』『～てもらおう』構文の機能的分析：構文ネットワーク分析による共通点と相違点」『東アジア若手研究者合同研究フォーラム日本研究の新課題と新発展予稿集』p.49 北京日本学研究中心 【研究発表】

(25) 朱炫姝 (2017b) 「『友だちが買ってくれたチョコ』『友だちに買ってもらったチョコ』はどう違う」若手研究者プレゼンバトル学術賞プレゼンテーション最優秀賞受賞 筑波大学人文社会国際比較研究機構 (ICR) 【受賞歴】

第VI章 結論：まとめと今後の課題

新規執筆

今後の展望のところは、以下の(26) (27) (28) (29)を大幅改訂・加筆

(26) 朱炫姝 (2014a) 「日本語と韓国語における授受表現の対照研究-日本語授受表現と韓国語授与動詞構文を中心に-」『日本語コミュニケーション研究論集』第3号 pp.16-24 日本語コミュニケーション研究会 【研究論文】

(27) 朱炫姝 (2014i) 「日本語授受補助動詞の習得について：日本語教科書とコーパスの用例を比較して」『第二言語習得研究会 第25回全国大会予稿集』pp.67-68 第二言語習得研究会 【ポスター発表】

(28) 朱炫姝 (2015d) 「授受表現をめぐる主観性・間主観性」『東アジア若手研究者共同フォーラム予稿集』pp.153-162 台湾政治大学 【口頭発表】

(29) 朱炫姝 (2015e) 「主観性・間主観性の観点から見た授受表現に関する一考察」『第7回研究会ポスター発表予稿集』p.14 日本語・日本語教育研究会 【ポスター発表】

参 考 文 献

【凡例】

1. 参考文献は、単行本と研究論文を中心に、刊行された言語によって、邦文・洋文・韓国語文の順で記述する。
2. 巻数と号数が示されている研究雑誌の場合は、次に示すように簡略化して示す。
(例) 第 33 巻 2 号 → 33-2、Vol.11 No.3 → 11-3
3. 第 2 版以降の文献に関しては、参考とした版の出版年を記入し、[]角括弧の中に、初版出版年を示す。
(例) 久野 (1987[1978])
4. 題目の主題と副題の間には「:」で表記を統一する。
5. 韓国語の文献については、筆者が日本語訳をつけて示す。

【邦文著書・研究論文】

- 茜八重子 (2002) 「『～(さ)せていただく』について」『講座日本語教育』 38 早稲田大学日本語研究教育センター pp.28-52.
- 秋元美治 (2015) 「文法化から構文化へ」 秋元美治・青木博史・前田満 編 『日英語の文法化と文法化』 ひつじ書房 pp.1-40.
- 浅田秀子 (2001) 「待遇表現の構造」 飛田良文・佐藤武義 編 『現代日本語講座 第 2 巻 表現』 明治書院 pp.128-150.
- 天野みどり (2011) 『日本語構文の意味と類推拡張』 笠間書院.
- アンドレイ ベケシュ (2015) 「第 13 章 文脈から見た文末表現と主題の持続: 社説に潜む対話」 阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 編 『文法・談話研究と日本語教育の接点』 くろしお出版 pp.243-264.
- 庵功雄 (2011) 「日本語教育から見たやりもらい表現」『日本語学』 30-11 明治書院 pp.50-58.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリエーネットワーク.
- 池上嘉彦 (2006) 「日本語と日本語らしさ: 外からの視点・内からの視点」『昭和

- 女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』 1 昭和女子大学 pp.1－15.
- 池上嘉彦（2007）「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」『人工知能学会誌』 26－4 社団法人人工知能学会 pp.317－322.
- 池上嘉彦（2008）「主観的把握：認知言語学から見た日本語話者の一側面」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』 3 昭和女子大学 pp.1－6.
- 池上嘉彦（2011）「日本語と主観性・主体性」澤田治美 編『ひつじ意味論講座第5 主観性と主体性』 ひつじ書房 pp.49－67.
- 石川慎一郎（2006）「言語コーパスからのコロケーション検出の手法：基礎的統計値について」『統計数理研究所共同研究レポート』 190 神戸大学 pp.1－14.
- 石川慎一郎（2012）『ベーシックコーパス言語学』 ひつじ書房.
- 石黒広昭（1985）「日本語児における授受動詞構文理解の発達的研究：格と視点」『心理学研究』 56 公益社団法人 日本心理学会 pp.192－199.
- 石田基広（2008）『Rによるテキストマイニング入門』 森北出版.
- 石山哲也（2008）「『～てくれる』と『～てもらう』の使用条件に関する一考察：『～てくれる』『～てもらう』が過去を表す場合の互換性を中心に」『日本学研究』 23 韓国檀國大學校日本研究所 pp.29－49.
- 井島正博（1999）「魚は3枚におろしてあげます：〈配慮・気配り〉を表すテヤル・テアゲル」『日本語学』 18 明治書院 pp.32－35.
- 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』 凡人社.
- 伊藤健人（2003）「動詞の意味と構文の意味：『出る』の多義性に関する構文文法的アプローチ」『明海日本語』 8 明海大学日本語学会 pp.39－52.
- 伊藤博美（2010）「授受構文における受益と恩恵および丁寧さ：『てくれる』文と『てもらう』文を中心として」『日本語学論集』 6 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室 pp.132－151.
- 伊藤博美（2011）「させていただくの自然度と判断要因」『日本語学論集』 7 東京大学人文社会系研究科国語研究室 pp.152－139.
- 稲熊美保（2004）「韓国人日本語学習者の授受表現の習得について：『もらう』系と『くれる』系を中心に」『国際開発研究フォーラム』 26 名古屋大学 pp.13

-26.

- 稲熊美保 (2005) 「韓国人日本語学習者による『～てあげる』『～てさしあげる』の使用について」『愛知文教大学論叢』 8 愛知文教大学 pp.107-123.
- 稲熊美保 (2006a) 「日本語教育における授受表現指導法の再考：母語および第二言語としての授受表現習得研究概観に基づく妥当性の検証」『愛知文教大学論叢』 9 愛知文教大学 pp.37-62.
- 稲熊美保 (2006b) 「韓国人日本語学習者による『くれる』系および『もらう』系授受補助動詞の算出：ACTFL-OPI 形式によるインタビューコーパスの分析」『愛知文教大学比較文化研究』 8 愛知文教大学 pp.37-46.
- 犬飼明子 (2011) 「敬語表現の認知的意味機能：授受動詞『～ていただく』の場合」『愛知論叢』 91 愛知大学大学院院生協議会 pp.169-200.
- 井上史雄・金順任・松田謙次郎 (2012) 「岡崎 100 年間の『ていただく』増加傾向：受惠表現にみる敬語の民主化」『国立国語研究所論集』 4 国立国語研究所 pp.1-25.
- 井上優 (2006) 『シリーズ方言学 2 方言の文法』岩波書店.
- 林八龍 (イム・パルリョン、1980) 「日本語・韓国語の受給表現の対照研究」『日本語教育』 40 日本語教育学会 pp.113-120.
- 上原由美子 (2007) 「『ていただく』の機能：尊敬語との互換性に着目して」『*Scientific approaches to language*』 6 神田外語大学 pp.185-207.
- 内田聖二 (2011) 「第 1 章 関連性理論の概要」「第 5 章 テクストの視点から」『語用論の射程』 研究社 pp.9-34, pp.197-251.
- 王婉莹 (1998) 「『せる・させる』『～てもらう』『～ように言う』の日中語対照研究：中国人学習者の習得面から」『日本語教育』 99 日本語教育学会 pp.36-47.
- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究：主観性をめぐって』 南雲堂.
- 大塚望 (2006) 「行為動詞『やる』の俗語性」『日本語日本文学』 16 創価大学 pp.33-41.
- 大堀壽夫 (2005) 「日本語の文法化研究にあたって：概観と理論的課題」『日本語の研究』 1-3 日本語学会 pp.1-17.
- 岡田久美 (2000) 「授受表現の運用についての一考察：主語の立て方と省略をめぐ

- って」『南山大学国際教育センター紀要』 10 南山大学国際教育センター pp.47
 -58.
- 荻野千砂子 (2007) 「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』 3-3 日本語学会
 pp.1-15.
- 奥津敬一郎 (1979) 「日本語の授受動詞構文：英語・朝鮮語と比較して」『人文学
 報』 132 首都大学東京都市教養学部 人文・社会系 (東京都立大学人文学部)
 pp.1-27.
- 奥津敬一郎 (1984a) 「五 授受動詞文」 鈴木一彦・林巨樹 編 『研究資料日本文
 法 第 8 卷 構文編』 明治書院 pp.237-243.
- 奥津敬一郎 (1984b) 「授受動詞文の構造：日本語・中国語対照研究の試み」『金
 田一春彦博士古希記念論文集』 2 三省堂 pp.65-88.
- 奥津敬一郎 (1986) 「やりもらい動詞」『国文学解釈と鑑賞』 51-1 至文堂 pp.96
 -102.
- 尾谷昌則・二枝美津子 (2011) 『講座 認知言語学のフロンティア②構文ネットワ
 ークと文法』 (山梨正明 シリーズ編者) 研究社.
- 小野正樹 (2005) 『日本語態度動詞文の情報構造』 ひつじ書房.
- 甲斐ますみ (1995) 「省略のメカニズム：談話の構造と関連性および聞き手の推論
 を中心に」『岡山大学留学生センター紀要』 3 岡山大学留学生センター pp.1
 -18.
- 加賀信広 (1997) 「第 6 章 日英語の受益構文と意味役割」 筑波大学現代言語学研
 究会 編 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』 三修社 pp.209-248.
- 柏野和佳子・丸山岳彦・稲益佐知子・田中弥生・秋元裕哉・佐野大樹・大矢内夢子・
 山崎誠 (2009) 『「現代日本語書き言葉均衡コーパス」における収録テキスト
 の抽出手順と事例』 特定領域研究「日本語コーパス」平成 20 年度研究成果報
 告書 国立国語研究所.
- 柏木徳明 (1990) 「『やる』、『くれる』とエンパシー」『群馬大学教育学部紀要
 人文・社会科学編』 40 群馬大学教育学部 pp.135-156.
- 加藤薫 (2012) 「日本語の構文的特徴から見えてくるもの：『主体・客体』と『自
 分・相手』」『文化学園大学紀要 人文・社会科学研究』 20 文化学園大学 pp.1
 -13.

- 金久保紀子（1993）「待遇表現としての授受表現」『日本文化研究 筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム紀要』 4 筑波大学 pp.15-26.
- 金澤裕之（2007）「『～てくださる』と『～ていただく』について」『日本語の研究』 3-2 日本語学会 pp.47-53.
- 金武伸弥（2004）「『あげる』と『やる』」『新聞と現代日本語』 理想社 pp.168-170.
- 蒲谷宏（1999）「『あたかも表現』：『表現意図』と『文話』との『ずれ』」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 11 早稲田大学日本語研究教育センター pp.19-33.
- 蒲谷宏（2001）「日本語教育で授受動詞をどう教えるか」『月刊言語』 30-5 大修館書店 pp.52-53.
- 菊池康人（1997）「変わりゆく『させていただく』」『月刊言語』 26-6 大修館書店 pp.40-47.
- 金銀珠（キム・ウンジュ、2009）「日韓両言語の授受表現における行為の『方向性』と『完了性』」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 9 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 pp.101-121.
- 金殷模（キム・ウンモ、2003）「いわゆる非恩恵の『～てやる』における受け手の再検討」『言語科学論集』 7 東北大学 pp.23-34.
- 金瑞賢（キム・ソヒョン、2006）「韓国語と日本語における本動詞としての授受動詞の用法」『国際言語文学』 13 韓国国際言語文学會 pp.21-39.
- 金昌男（キム・チャンナム、1999）「日・韓両言語における授受動詞の対照研究：『やる/あげる/さしあげる』と『두다/드리다』について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 2 千葉大学 pp.194-209. [タイトルの『두다/드리다』の直訳は、『～おく/～さしあげる』である。筆者訳]
- 金昌男（キム・チャンナム、2002）「現代日本語の授受表現における人称と視点について：韓国語との対照を通して」『千葉大学社会文化科学研究』 6 千葉大学大学院社会文化科学研究科 pp.226-233.
- 金昌男（キム・チャンナム、2003）「現代日本語の授受補助動詞構文の敬語表現」『日本語文学』 17 韓国日本語文学會 pp.47-68.
- 金珉秀（キム・ミンス、2000）「授受動詞の意味分析：『もらう』と『受け取る』

- を中心に」『現代日本語の語彙・文法』くろしお出版 pp.51-70.
- 金珉秀（キム・ミンス、2001）「授受動詞の意味論的研究：『もらう』『買う』『借りる』を中心に」『日本語と日本文学』32 筑波大学 pp.1-17.
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル（1963）「第七節 やりもらい」『文法教育 その内容と方法』 麥書房 pp.109-127.
- 久野暉（1987[1978]）『談話の文法』第6版 大修館書店.
- 熊田道子（2000）「待遇意識からみた『～てくれる』系表現と『～てもらう』系表現」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』3-46 早稲田大学大学院文学研究科 pp.63-72.
- 熊田道子（2001）「待遇意識からみた『～てくれる』系表現と『～てもらう』系表現：恩恵の与え手が恩恵行為を行うことに対する配慮意識を中心に」『国語学研究と資料』24 国語学研究と資料の会 pp.15-28.
- 倉光雅己・日高吉隆（2004）「行為の授受表現『～てあげる/くれる』の文型と提示」『創価大学別科紀要』16 創価大学 pp.49-65.
- 倉持益子（2002）「ポライトネスの視点から見た『あげる』：授受動詞『あげる』『さしあげる』の使い方」『言語と交流』5 言語と交流研究会 pp.88-96.
- 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大 編（2014[1960]）『三省堂国語辞典』第7版 三省堂.
- 言語編集部 編（2011）『月刊言語』30:11 大修館書店.
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也（2002）「受給表現」「待遇表現Ⅰ・Ⅱ」「丁寧表現」『日本語表現・文型事典』朝倉書店 pp.177-180, pp.238-241, pp.278-279.
- 古賀悠太郎（2012）「授与補助動詞『てやる/てくれる』の使い分けと視点」『日本語学会 2012 年度秋季大会研究発表会発表要旨』日本語学会 pp.72-73.
- 古賀悠太郎（2013）「『視点』研究の枠組みを求めて：移動動詞文を例に」『神戸外大論叢』63-2 神戸市外国語大学研究会 pp.169-188.
- 国立国語研究所（1980[1972]）『国立国語研究所報告 43 動詞の意味・用法の記述的研究』第4版 秀英出版.
- 国立国語研究所 編（1987）「Ⅱ 発話機能の部」『日本語教育 映画基礎編 総合文型表』日本シネセル pp.153-159.

- 小松英雄（1999）『日本語はなぜ変化するか』 笠間書院.
- 斎藤純男（2010）『言語学入門』 三省堂.
- 坂本正（2000）「日本語の授受動詞の習得：母語と第二言語を比較して」『日本文化学報』 9 韓国日本文化学会 pp.107-118.
- 坂本正・岡田久美（1996）「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア 文学・語学編』 61 南山大学 pp.157-202.
- 佐々木勲人（2013）「ヴォイスと主観性」『2013 年中国人民大学・北京大学・筑波大学 3 大学学術フォーラム 発表予稿集』 中国人民大学 pp.59-62.
- 佐藤香織（2001）「日本語のコントロール構文の成立条件について」『筑波応用言語学研究』 8 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース pp.29-42.
- 真田信治（1999）『よくわかる日本語史』 アルク.
- 澤田淳（2004a）「日本語の受益構文における否定性・アスペクト性の『浸透現象』」『日本言語学会第 128 回大会 予稿集』 日本言語学会 pp.25-36.
- 澤田淳（2004b）「日本語の受益構文に対する認知的・語用論的アプローチ：『ウチ/ソト』性条件再考」『早稲田大学 日本語教育研究』 5 早稲田大学 pp.113-123.
- 澤田淳（2006）「ヴォイスの観点から見た日本語の授受構文」上田功・野田尚史 編『言外と言内の交流分野：小泉保博士傘寿記念論文集』 大学書林 pp.253-263.
- 澤田淳（2007a）「日本語の授受構文が表す恩恵性の本質：『てくれる』構文の受益者を中心として」『日本語文法』 7-2 日本語文法学会 pp.83-100.
- 澤田淳（2007b）「日本語の受益構文の格表示と物の授受性：認知言語学的アプローチ」『言語科学論集』 13 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座 pp.71-83.
- 澤田淳（2008）「日本語の他動詞構文と受益構文の構文ネットワーク：日英語の対照分析を含めて」『関西言語学会第 32 回大会 予稿集』 関西言語学会 pp.215-225.
- 澤田淳（2009）「日本語の授受動詞構文をめぐって：非行為的事態との共起を中心に」『日本語学会 2008 年度秋季大会研究発表会発表要旨』 日本語学会 pp.123-124.

- 澤田淳（2011）「日本語のダイクシス表現と視点、主観性」 澤田治美 編 『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』 ひつじ書房 pp.165－192.
- 澤田淳（2014）「日本語の授与動詞構文の構文パターンの類型化：他言語との比較対照と合わせて」 『言語研究』 145 日本言語学会 pp.27－60.
- 澤田治美（1993）「第10章 視点と照応」 『視点と主観性：日英語助動詞の分析』 ひつじ書房 pp.289－322.
- 澤田治美（2012）「序論」 澤田治美 編 『ひつじ意味論講座 第2巻 構文と意味』 ひつじ書房 pp.3－22.
- 澤田治美 編（2011）『ひつじ意味論講座 第5巻 主観性と主体性』 ひつじ書房.
- 志波彩子（2015）『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』 和泉書院.
- 城田俊（1996）「場面応接態（いわゆる『やり・もらい』）：『外』主語と『内』主語」 『国語学』 186 日本語学会（国語学会） pp.1－14.
- 情報処理振興事業協会技術センター 編（1987）『計算機用日本語基本動詞辞典 IPAL（Basic verbs）辞書編』 情報処理振興事業協会技術センター.
- 陣内正敬（1998）「さ付きで差がつく？丁寧表現」「自分をほめてやる？あげる？」 『日本語の現在』 アルク pp.27－32, pp.116－121.
- 鈴木康之（2004）「ヤリモライ研究の半世紀」 『日本文学研究』 43 大東文化大学 pp.185－176.
- 砂川有里子（2005）『文法と談話の接点：日本語の談話における主題展開機能の研究』 くろしお出版.
- 砂川有里子（2006）「『～てもらっていいですか』という言い方：指示・依頼と許可求めの言語行為」 上田功・野田尚史 編 『言外と言内の交流分野：小泉保博士傘寿記念論文集』 大学書林 pp.311－321.
- 関根和枝（2007）「『～てください』の機能について：『～てください』は依頼か」 『昭和女子大学大学院 言語教育・コミュニケーション研究』 2 昭和女子大学 pp.81－95.
- 瀬田幸人・保阪靖人・外池滋生（2010）『[入門] ことばの世界』 大修館書店.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子（2011）「歴史語用論の基礎知識」 『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』 大修館書店 pp.5－44.
- 高橋太郎（1985）「現代日本語のヴォイスについて」 『日本語学』 4－4 明治書院

- pp.4-23.
- 高原脩・林宅男・林礼子（2002）『プラグマティックスの展開』 勁草書房.
- 高見健一（2000）「被害受身文と『～に V してもらう』構文：機能的構文論による分析」『日本語学』 19-5 明治書院 pp.215-223.
- 高見健一・加藤鉦三（2003a）「受益表現の新展開 1 受益表現と話し手の視点」『月刊言語』 32-1 大修館書店 pp.140-145.
- 高見健一・加藤鉦三（2003b）「受益表現の新展開 2 『～てやる』表現の意味の多様性と基本的意味」『月刊言語』 32-2 大修館書店 pp.94-99.
- 高見健一・加藤鉦三（2003c）「受益表現の新展開 3 『～てやる』表現の基本スキーマと意味の多様性」『月刊言語』 32-3 大修館書店 pp.104-109.
- 高見健一・加藤鉦三（2003d）「受益表現の新展開 4 『～てあげる』表現の意味」『月刊言語』 32-4 大修館書店 pp.100-105.
- 高見健一・久野暲（2006）「第 7 章 主語をマークする『ハ・ガ』の省略：『自分より先に子供死ぬのは淋しい』はなぜ不適格文か」『日本語機能的構文研究』大修館書店 pp.176-212.
- 高見健一・久野暲（2014）『日本語構文の意味と機能を探る』 くろしお出版.
- 高山義行・青木博史 編（2010）『ガイドブック 日本語文法史』 ひつじ書房.
- 滝浦真人（2001）「敬語の論理と授受の論理：『聞き手中心性』と『話し手中心性』を軸として」『月刊言語』 30-5 大修館書店 pp.54-61.
- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』 研究社.
- 滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』 岩波書店.
- 田窪行則（2010）『日本語の構造』 くろしお出版.
- 竹林一志（1998）「日本語の『～に V してもらう』構文について：非対格性との関連をめぐって」『月刊言語』 27-9 大修館書店 pp.115-120.
- 田中典子（2009[2006]）『プラグマティックス・ワークショップ：身のまわりの言葉を語用論的に見る』 第 2 版 春風社.
- 田中寛（1997）「授受表現における日タイ語対照研究：＜現象的理解＞から＜場面的理解＞へ」『講座 日本語教育』 32 早稲田大学日本語研究センター pp.72-97.
- 田中裕幸（2009）「授受動詞の統語論」『商学論研』 57-2 関西学院大学商学研

- 研究会 pp.185-199.
- 田中真里・舘岡洋子 (1992) 「構文と意味の面からみた『受身』と『～てもらう』の使い分け：『迷惑・被害の受身』の考察を通して」『ICU 日本語教育研究センター紀要』 2 国際基督教大学 pp.235-256.
- 多和田眞一郎 編 (2006) 『講座・日本語教育学 第6巻 言語の体系と構造』 スリーエーネットワーク.
- 崔善喜 (チェ・ソンヒ、2012) 「命令を表す『てもらう』文についての一考察：『しろ/しなさい』との比較を通して」『日本語文法』 12-1 日本語文法学会 pp.71-87.
- 趙彦志 (2009) 「依頼表現をあらわす『～てください』形の諸特徴」『東アジア日本語教育・日本文化研究』 12 東アジア日本語教育・日本文化研究会 pp.287-300.
- 塚本秀樹 (2012) 「第11章 諸言語現象と文法化」『形態論と統語論の相互作用：日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』 ひつじ書房 pp.265-287.
- 辻幸夫 編 (2013) 『新編認知言語学キーワード事典』 研究社.
- 辻村敏樹 編 (1971) 『講座国語史5 敬語史』 大修館書店.
- 土屋俊 (2009) 『言語・哲学コレクション 第4巻 なぜ言語があるのか』 くろしお出版.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版.
- 坪井美樹 (2005) 「テ形接続形式と文法化」『国語と国文学』 82-11 至文堂 pp.13-25.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』 くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第II巻』 くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1990) 『外国人学習者の日本語誤用例集』 大阪大学. [国立国語研究所により「寺村誤用例集データベース」として2011年にウェブ公開
<http://teramuradb.ninjal.ac.jp> (利用期間：2013年～2014年)]
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 第III巻』 くろしお出版.
- 堂坂浩二 (1994) 「語用論的条件の解釈に基づく日本語ゼロ代名詞の指示対象同定」『情報処理学会論文誌』 35-5 情報処理学会 pp.768-778.
- 富田英夫 (2007) 「第11章 授受表現」『日本語文法の要点』 くろしお出版 pp.157

－176.

豊田圭子（2013）「ヤラレル/ヤラレタの意味用法の史的変遷」『岡大國文論稿』
42 岡山大学文学部言語国語国文学会 pp.75－65.

部田和美（2009）「授受動詞『ヤル・クレル・モラウ』文の意味分析：抽象的対象
物を含む授受動詞文を中心に」『言語学論叢 オンライン版』28 筑波大学 pp.33
－47.

中右実・神尾昭雄・高見健一（1998）「第Ⅰ部 情報のなわ張り理論 第1章 情報
のなわ張り理論とは何か」「第Ⅱ部 情報構造と伝達機能 第1章 省略」『日
英語比較選書2 談話と情報構造』研究社 pp.1－28, pp.114－138.

中川裕志（1997）「複文における因果性と視点：計算機で処理できるもの、できな
いもの」田窪行則 編『視点と言語行動』くろしお出版 pp.77－117.

中川良雄（1989）「授受補助動詞構文：日・英・仏語対照」『研究論叢』32 京都
外国語大学 pp.492－515.

中崎温子（2006）「『もらう』系コミュニケーションにおける『話し手主観性』と
人称詞ハイアラーキー」『言語と文化』15 愛知大学語学教育研究室 pp.1－
20.

中野洋（1991）「『（て）いただく』文における省略」『計量国語学』18－2 計
量国語学会 pp.66－79.

新美和昭・山浦洋一・宇津野登久子（1987）「総論」「授受動詞」『外国人のた
めの日本語例文・問題シリーズ4 複合動詞』荒竹出版株式会社 pp.1－15, pp.60
－72.

仁科弘之・鄭企娟（ジョン・ギヨン、2009）「恩恵授受構文の適正使用条件：『～
させていただく』の使役とその恩恵受理を巡って」『埼玉大学紀要 教養学部』
45－1 埼玉大学 pp.99－107.

仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人（2000）『文の骨格』岩波書店.

二宮喜代子（2002）「日本語学習者の授受補助動詞の習得における問題点：『～て
くれる』文と『～てあげる』文を中心に」『山口国文』25 山口大学 pp.71－
82.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編（2000）『日本国語大
辞典』第二版 [初版 日本大辞典刊行会編 1972] 小学館.

- 日本語記述文法研究会 編 (2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部複文』 くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 編 (2009a) 『現代日本語文法 2 第 3 部格と構文 第 4 部ヴォイス』 くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 編 (2009b) 『現代日本語文法 7 第 12 部談話 第 13 部待遇表現』 くろしお出版.
- 日本語文法学会 編 (2014) 『日本語文法事典』 日本語文法学会.
- 沼田善子 (1999) 「授受動詞文と対人認知」 『日本語学』 19-8 明治書院 pp.46-54.
- 野村益寛 (2014) 「第 12 章 文法化」 『ファンダメンタル認知言語学』 ひつじ書房 pp.137-147.
- 萩原章子 (2007) 「『～てあげる』『～てくれる』『～てもらう』の文法性判断テスト：学習者の日本語履修歴とのかかわりにおいて」 『ICU 日本語教育研究』 4 国際基督教大学 pp.3-19.
- 萩原孝恵 (2012) 『「だから」の語用論：テキスト構成的機能から対人関係的機能へ』 ココ出版.
- 橋元良明 (2001) 「授受表現の語用論」 『月刊言語』 30-5 大修館書店 pp.46-51.
- 長谷川哲子 (2007) 「授受表現における日本語とスペイン語の対応」 『大阪産業大学論集 人文科学編』 121 大阪産業大学 pp.55-78.
- 畠山雄二 編 (2013a) 『書評から学ぶ理論言語学の最先端 (上)』 開拓社.
- 畠山雄二 編 (2013b) 『書評から学ぶ理論言語学の最先端 (下)』 開拓社.
- 原田登美 (2006) 「恩恵・利益を表す<授受表現>と<敬意表現>の関わり：特に『てくれる』を中心として文法的側面と社会言語学的側面から見る」 『言語と文化』 10 甲南大学 pp.203-217.
- 原田登美 (2007) 「日本語会話における<授受表現>の使用実態とポライトネス・ストラテジー」 『言語と文化』 11 甲南大学国際言語文化センター pp.117-138.
- 日高水穂 (1994) 「越中五箇山方言における授与動詞の体系について：視点性成立過程への一考察」 『国語学』 176 日本語学会 (国語学会) pp.125-114.
- 日高水穂 (2007) 『授与動詞の対照方言学的研究』 ひつじ書房.

- 姫野伴子（2006）「日本語学習者のための授受動詞の体系的記述：類似・対立する形式との関連を中心に」『留学生教育』 8 埼玉大学 pp.33-52.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子（2010）『日本語から見た日本人 主体性の言語学』 開拓社.
- 深田智・仲本康一郎（2008）『講座 認知言語学のフロンティア③ 概念化と意味の世界：認知意味論のアプローチ』（山梨正明 シリーズ編者） 研究社.
- 藤井正（1998）「授受動詞について」 東京大学国語研究室国語研究論集編集委員会 編『東京大学国語研究室 創設百周年記念 国語研究論集』 汲古書院 pp.161-169.
- 文化庁（1995）『国語に関する世論調査』 大蔵省印刷局.
- 文化庁（2001）『平成 12 年度 国語に関する世論調査（平成 13 年 1 月調査）：家庭や職場での言葉遣い』 財務省印刷局.
- 白同善（ベク・ドンソン、2003）「敬語成分の運用にみる規範と現実の隔たり：『お・ご～していただく（くださる）』構文の運用実態を中心に」『日本学報』 55 韓国日本学会 pp.79-89.
- 堀江薫（2008）「間主観化：文法の語用論的基盤のタイポロジーに向けて」『月刊言語』 37-5 大修館書店 pp.36-41.
- 堀江薫・プラシャント パルデシ（2009）『講座 認知言語学のフロンティア⑤言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ』（山梨正明 シリーズ編者） 研究社.
- 堀江薫・金延珉（キム・ジョンミン、2011）「日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化：機能主義的類型論の観点から」 高田博行・椎名美智・小野寺典子 編『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』 大修館書店 pp.194-207.
- 堀口純子（1983）「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』 52 日本語教育学会 pp.91-103.
- 堀口純子（1987a）「意志動詞と無意志動詞の意志に関する一考察：『クレル』を中心に」『文藝言語研究 言語篇』 12 筑波大学 pp.115-132.
- 堀口純子（1987b）「『～テクレル』『～テモラウ』の互換性とムード的意味」『日本語学』 6-4 明治書院 pp.59-72.
- ポリー ザトラウスキー（1993）『日本語の談話の構造分析：勧誘のストラテジー

- の考察』 くろしお出版.
- 彭飛 (ポン・フェイ、2005) 「第 1 章 『配慮表現』 (気配り表現) における『受益表現』の具体例をめぐって」 『日本語の「配慮表現」に関する研究：中国語との比較研究における諸問題』 和泉書院 pp.349-383.
- 朴錦女 (2012) 「日本語学習者の母語における授受表現の認識と日本語授受補助動詞の習得の関係について：中国人朝鮮語母語話者と韓国語母語話者を対象に」 『日本語研究』 32 首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会 pp.45-56.
- 前川喜久雄 編 (2013) 『講座日本語コーパス 1.コーパス入門』 朝倉書店.
- 前田富祺 (2001) 「『あげる』『くれる』成立の謎：『やる』『くださる』などとの関わりで」 『月刊言語』 30-5 大修館書店 pp.34-40.
- 牧野成一 (1996) 「第 7 章 授受動詞：共感ヒエラルキーのシンタックス」 『ウチとソトの言語文化学：文法を文化で切る』 アルク pp.70-79.
- 益岡隆志 (2001) 「日本語における授受動詞と恩恵性」 『月刊言語』 30-5 大修館書店 pp.26-32.
- 松浦とも子 (2003) 「『使役型てもら』構文の日中対照研究：中国語母語話者の授受表現における母語の影響」 『早稲田大学 日本語教育研究』 3 早稲田大学 pp.111-124.
- 松下大三郎 (1927) 『標準漢文法』 紀元社.
- 松下大三郎 (1930) 『改撰標準日本文法』 (昭和 5 年訂正版) 中文館書店.
- 南不二男 (1974) 「現代敬語の意味構造」 『国語学』 96 日本語学会 (国語学会) pp.86-104.
- 嶺岸玲子 (2009) 「日本語において省略を可能にするもの：授受表現を例として」 『言語教育研究』 2 盛岡大学言語教育研究委員会 pp.11-20.
- 宮岸哲也 (2012) 「シンハラ語母語学習者による日本語授受補助動詞文の使用状況」 『安田女子大学紀要』 40 安田女子大学 pp.7-17.
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の受益構文について」 『国語学』 186 日本語学会 (国語学会) pp.104-91.
- 三宅知宏 (2011) 「授受構文」「形態的有形性に関する日英語対照」 『日本語研究のインターフェイス』 くろしお出版 pp.143-159, pp.179-192.

- 三宅知宏・川瀬卓・吉田永弘・青木博史（2015）「日本語の構文と構文変化」『日本語学会 2015 年度春季大会 予稿集』 日本語学会 pp.203－220.
- 宮崎清孝・上野直樹（1985）『視点』 東京大学出版会.
- 宮下亜矢子（2008）「構文の発現と語用論的視点：談話語用論の視点から」『日本語用論学会大会発表論文集』 11 日本語用論学会 pp.233－236.
- 宮地裕（1965）「『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について」『国語学』 63 日本語学会（国語学会） pp.21－33.
- 宮地裕（1981）「敬語史論」『講座日本語学 9 敬語史』 明治書院 pp.1－25.
- 門和沙日娜（ムンケ・サリナ、2006）「日中対照研究 授受表現」『昭和女子大学大学院 言語教育・コミュニケーション研究』 1 昭和女子大学 pp.53－63.
- 牟恩英（モ・ウンヨン、2002）「日韓両語の授受表現の語用論的考察」『大正大学大学院研究論集』 26 大正大学 pp.228－218.
- 榎山洋介（2014）『日本語研究のための認知言語学』 研究社.
- 森雄一・高橋英光 編（2013）『認知言語学 基礎から最前線へ』 くろしお出版.
- 森勇太（2010）「行為指示表現の歴史的変遷：尊敬語と受益表現の相互関係の観点から」『日本語の研究』 6－2 日本語学会 pp.78－92.
- 森勇太（2014）「第 10 章 申し出表現の歴史的変遷：授受表現の運用史として」 金水敏・高田博行・椎名美智 編 『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』 ひつじ書房 pp.247－269.
- 森勇太（2016）『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』 ひつじ書房.
- 森田良行（2002）「第 13 章 受給表現の諸相」『日本語文法の発想』 ひつじ書房 pp.221－232.
- 森田良行（2006）『話者の視点がつくる日本語』 ひつじ書房.
- 森田良行（2008）「第一部 動詞編」「受給動詞」『動詞・形容詞・副詞の事典』 東京堂出版 pp.18－19, pp.128－133.
- 守屋三千代（2002）「日本語の授受動詞と受益性：対照的な観点から」『日本語日本文学』 12 創価大学 pp.1－22.
- 守屋三千代（2011）「広告における受益可能表現：＜事態把握＞の観点より」『日本語日本文学』 21 創価大学日本語日本文学会 pp.19－32.
- 森山新（2006）「視点についての認知言語学的考察」『認知言語学的観点を生かし

- た日本語教授法・教材開発研究 1 年次報告書』平成 17～19 年度科学研究費補助金研究 pp.28－32.
- 森山由紀子・鈴木亮子（2011）「日本語における聞き手敬語の起源」高田博行・椎名美智・小野寺典子 編 『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店 pp.175－191.
- 安本美典（2001）「『あげる』『くれる』表現と『甘えの構造』」『月刊言語』30－5 大修館書店 pp.74－79.
- 山岡政紀（1990）「授受補助動詞と依頼行為」『文藝言語研究 言語篇』17 筑波大学文芸・言語学系 pp.19－33.
- 山岡政紀（1993）「授受構文における動作主と受益者」小松英雄博士退官記念日本語学論集編集委員会 編 『日本語学論集』三省堂 pp.666－651.
- 山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能の研究』筑波大学博士学位論文.
- 山岡政紀（2008）「発話機能論の歴史」『日本語日本文学』18 創価大学日本語日本文学会 pp.49－64.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現』明治書院.
- 山口翼（2003）「0812 授受」『日本語大シソーラス』大修館書店 p.721.
- 山田敏弘（2002）「『もらう』と『くれる』はどうちがう？」『日本語学』21－14 明治書院 p.49.
- 山田敏弘（2004）『日本語のベネファクティブ：『てやる』『てくれる』『てもらう』の文法』明治書院.
- 山田敏弘（2009）「『してくれる』と『してもらう』」「ありがとう」『日本語のしくみ』白水社 pp.118－119, p.122.
- 山田敏弘（2012）「文法をどう教えるか：授受表現を中心に」『韓国日語教育学会第 22 回国際学術大会発表予稿集』韓国日語教育学会 pp.IV－VIII.
- 山田仁子（1997）「補助動詞やりもらい文における助詞について」『言語文化研究』4 徳島大学 pp.137－151.
- 山橋幸子（1999a）「受益表現『（～て）くれる』の機能と日本語教育」『比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要』4 札幌大学 pp.A79－A96.
- 山橋幸子（1999b）「『てくれる』の意味機能：『てあげる』との対比において」『日本語教育』103 日本語教育学会 pp.21－30.

- 山橋幸子 (2000) 「『てもらう』の機能と受益との関わり」『比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要』 6 札幌大学 pp.A55－A68.
- 山橋幸子 (2003a) 「『(て)やる/あげる』の構造：受け手の形式をめぐって」『比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要』 11 札幌大学 pp.A19－A35.
- 山橋幸子 (2003b) 「補助動詞『(て)やる/あげる』考」『比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要』 9 札幌大学 pp.A71－A85.
- 山本裕子 (2002a) 「『～テモラウ』の機能について：『～テクレル』と対比して」『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』 48 名古屋女子大学 pp.263－276.
- 山本裕子 (2002b) 「『～テクレル』の機能について：対人調節的な機能に注目して」『言葉と文化』 3 名古屋大学大学院 pp.127－144.
- 山本裕子 (2003a) 「『テアゲル』の対人的な機能についての一考察」『世界の日本語教育』 13 国際交流基金 pp.143－160.
- 山本裕子 (2003b) 「授受補助動詞の対人的機能について」『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』 49 名古屋女子大学 pp.269－283.
- 尹喜貞 (ユン・ヒジョン、2004) 「第二言語としての日本語の授受動詞習得研究概観：習得順序の結果と研究方法との対応に焦点をあてて」『言語文化と日本語教育』 増刊特集号 第二言語習得・教育の研究最前線 日本言語文化学会 pp.168－181.
- 尹喜貞 (ユン・ヒジョン、2006) 「第二言語としての日本語の授受動詞習得<研究構想>」『言語文化と日本語教育』 32 お茶の水女子大学日本言語文化学会 pp.62－65.
- 尹喜貞 (ユン・ヒジョン、2008) 「日本語の授受動詞における本動詞と補助動詞の習得について：JFL と JSL の韓国人学習者を対象に」『韓国日本語学会 学術発表大会論文集』 2008－4 韓国日本語学会 pp.17－20.
- 横倉真弥 (2011) 「ポライトネス理論における社会的制限の変化と表現選択の幅の拡大：日本語における行為の授受表現『～テイタダク』を例に」『名古屋言語研究』 5 名古屋大学 pp.53－66.
- 横山正幸 (1981) 「幼児の授受動詞の習得」『福岡教育大学紀要』 31－4 福岡教育大学 pp.203－210.
- 吉川正人・森下裕三・浅尾仁彦 (2014) 「構文研究の次なる四半世紀にむけて(ワ

- ークショップ)』『認知言語学会第15回大会ワークショップ』認知言語学会 p.1.
- 吉田弥生 (2010) 「授受動詞の変遷：中古から中世にかけて」『學苑』 831 昭和女子大学 pp.61-70.
- 米澤昌子 (1996) 「受給動詞の史的変遷」『同志社国文学』 45 同志社大学 pp.73-87.
- 米澤昌子 (2001) 「待遇表現としての使役形を伴う受給補助詞：『～(さ)せていただく』の用法の考察を中心に」『同志社大学留学生別科紀要』 1 同志社大学留学生別科 pp.105-117.
- 米澤昌子 (2012) 「受給動詞の用法の一考察：シナリオにおける用例の分析」『同志社大学日本語・日本文化研究』 10 同志社大学 pp.1-20.
- 米澤昌子 (2013) 「聞き手を意識した『ていただく』の使用：TVのトーク番組における用例の分析」『同志社大学日本語・日本文化研究』 11 同志社大学 pp.23-37.
- 李在鎬 (リ・ジェホ、2011) 『コーパス分析に基づく認知言語学的構文研究』 ひつじ書房.
- 李仙花 (2001) 「『てもらう』文の意味について」『言語科学論集』 5 東北大学 pp.97-108.
- 王燕 (ワン・ヤン、2008) 「『～テヤル』の派生的な意味機能について」『北陸大学紀要』 32 北陸大学 pp.193-210.

【英文著書・研究論文】

- Adele E. Goldberg (1995) *Constructions : a construction grammar approach to argument structure*, Chicago University Press, Chicago. [河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子 訳 (2001) 『構文文法論：英語構文への認知的アプローチ』 研究社]
- Austin J. L. (1962) *How to do things with words*, Oxford University Press, Oxford. [坂本百大 訳 (1978) 『言語と行為』 大修館書店]
- Brown P. & Levinson, S. (1987) *Politeness : Some universals in language usage*, Cambridge University Press, Cambridge. [田中典子 監訳 (2011) 『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』 研究社]
- Elizabeth Closs Traugott (1995) Subjectification in grammaticalisation, In : Dieter Stein

- and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and subjectivisation : Linguistic perspectives*, Cambridge University Press, Cambridge, pp.31 – 54.
- Elizabeth Closs Traugott and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford. [秋元実治 訳 (2015) 『日英語の文法化と構文化』 ひつじ書房]
- Geoffrey N. Leech (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman, London. [池上嘉彦・河上誓作 訳 (1987) 『語用論』 紀伊国屋書店]
- Kuno Susumu (1973) 9 Giving and Receiving Verbs, 26 The Reflexive Pronoun and Internal Feeling. *The Structure of the Japanese Language*, The MIT Press, Cambridge, pp.127 – 135, pp.309 – 323.
- Lakoff R. T. (1973) The logic of politeness; or, minding your p's and q's, In : C. Corum et al. (eds.) *Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, Chicago Linguistic Society, Chicago, pp.292 – 305.
- Michael Tomasello (2002) *The New Psychology of Language : Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, Psychology Press, Mahwah. [大堀壽夫・秋田喜美・古賀裕章・山泉実 訳 (2011) 『認知・機能言語学：言語構造への10のアプローチ』 研究社]
- Nicholas Allott (2010) *Key Terms in Pragmatics*, Continuum International Publishing Group, London, New York. [今井邦彦 監訳 (2014) 『語用論キーターム事典』 開拓社]
- Paul Grice (1975) Logic and conversation, In : P. Cole and J.L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3 Speech Acts*, Academic Press, New York, pp.41 – 58.
- Paul Grice (1991) *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge, Mass. [清塚邦彦 訳 (1998) 『論理と会話』 勁草書房]
- Ronald W. Langacker (1991) *Foundations of cognitive grammar 2*, Stanford University Press, Stanford.
- Ronald W. Langacker (1999) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Searle J.R. (1969) *Speech Acts*, Cambridge University Press, Cambridge. [坂本百大・土屋俊 訳 (1987) 『言語行為』 勁草書房]
- Shibatani Masayoshi (1994) Benefactive constructions : A Japanese-Korean comparative

perspective, In: Akatsuka Noriko (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 4*, Stanford University, Stanford, pp.39—74

【韓国語文著書・研究論文（가나다順）】

권승림 (クォン・スン림、2006) 「『してもらう』文의 意味：使役的意味를 中心으로」 『*Foreign Languages Education*』 13—4 韓國外國語教育學會 pp.325—337.

류시정 (リュウ・シジョン、1995) 「한국어 ‘~어 주다’ 구문에 대한 연구」 『언어학』 17 한국언어학회 pp.99—114. [류시정 (リュウ・シジョン、1995) 「韓國語 ‘~어 주다[~eo juda]’ 構文に対する研究」 『言語学』 17 韓國言語學會 pp.99—114]

張相彦 (チャン・サンオン、1988) 「경어와 문화의 상관성：일본어의 수수동사와 られる를 중심으로」 『일본학연보』 1 일본연구학회 pp.45—58. [張相彦 (チャン・サンオン、1988) 「敬語と文化の相関性：日本語の授受動詞と『られる』を中心に」 『日本学年報』 1 (韓國) 日本研究學會 pp.45—58]

황봉희 (ファン・ボンヒ、2008) 『국어 수여동사 구문 연구』 경희대학교 국어국문학과 석사학위논문. [황봉희 (ファン・ボンヒ、2008) 『国語 授与動詞 構文 研究』 慶熙大學 國語國文學科 修士學位論文]

参照したインターネット・サイト

例文収集および表記等に参照したインターネット・サイトについての情報（ウェブ・サイト名、URL、アクセス期間）を記す。

- ・ 韓国国立国語院「語文規定」の「ローマ字表記法規定」

http://www.korean.go.kr/09_new/dic/rule/rule_roman_0101.jsp

（アクセス期間：2012年9月～2013年9月）

- ・ 「韓国語/ローマ字変換機」（釜山大学情報コンピューター工学部人工知能研究室と（株）ナラ・インポテクの共同開発）

<http://roman.cs.pusan.ac.kr>

（アクセス期間：2012年9月～2016年9月）

- ・ 国立国語研究所 言語データベースとソフトウェア 全文検索システム「ひまわり」

<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php>

（アクセス期間：2012年4月～2016年10月）

- ・ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

（アクセス期間：2012年4月～2017年11月）

- ・ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』のオンライン検索システム（NLB-NINJAL FOR BCCWJ）

<http://nlb.ninjal.ac.jp>

（アクセス期間：2012年4月～2017年11月）

- ・ 国立国語研究所・情報通信研究機構・東京工業大学『日本語話し言葉コーパス』

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cs/

（アクセス期間：2012年4月～2014年4月）

- ・ 国立国語研究所「中納言」コーパス検索アプリケーション

<https://chunagon.ninjal.ac.jp>

（アクセス期間：2014年4月～2017年11月）

- ・ 国立国語研究所『名大会話コーパス』⁷⁵
<http://pj.ninjal.ac.jp/conversation/nuc.html>
(アクセス期間：2012年10月～2017年7月)
- ・ ジャパンナレッジ Lib
<http://japanknowledge.com/library/>
(アクセス期間：2012年4月～2015年12月)
- ・ 中国語ピンイン (pinyin) 変換サービス
<http://www.frelax.com/sc/service/pinyin/>
(アクセス期間：2016年5月～2017年2月)
- ・ 筑波大学『筑波ウェブコーパス』コーパス検索ツール (NINJAL-LWP for TWC)
<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>
(アクセス期間：2013年4月～2017年10月)
- ・ 東京外国語大学・コーパスに基づく言語学教育研究拠点「日本語学習者言語コーパス」(事業推進担当者：海野多枝)
<http://cbllc.tufs.ac.jp/llc/ja/index.php?menulang=ja>
(アクセス期間：2014年11月～2015年1月)
- ・ 秀丸エディタ (秀まるおのホームページ)
<http://hide.maruo.co.jp/software/hidemaru.html>
(アクセス期間：2012年4月～2017年10月)
- ・ 文化庁「国語に関する世論調査の結果について」
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/
(アクセス期間：2014年2月～2016年12月)
- ・ KH Coder (テキスト型データを統計的に分析するためのフリーソフトウェア)
<http://khc.sourceforge.net>
(アクセス期間：2015年4月～2017年11月)

⁷⁵ 『名大会話コーパス』は、198名の日本語母語話者による約100時間の雑談を文字化したデータで、教育・研究の目的で一般公開されている。「茶漉」を使い検索語彙のコロケーション関係が瞬時に把握でき、全文テキストファイルで公開されているため、「ひまわり」や「秀丸エディタ」等のツールを使い、原文の前後文脈も把握することが可能である。一時的に『日本語自然会話書き起こしコーパス』という名称で公開していたが、『名大会話コーパス』という名称に戻されている。

謝 辞

本論文は、筆者が筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程在学中に、同大学人文社会系教授 小野正樹先生のご指導のもとに執筆したものである。

本論文を執筆するに当たり、多くの方々に様々な形でご指導とご助力をいただいた。ここに感謝の意を記す。

主指導教官の小野正樹先生には、いつも温かいご指導とご助言をいただいた。研究を進める過程において問題設定や進め方はもちろん、文章の書き方に至るまでご指導をいただいた。常に叱咤激励をいただいたことは、自分にとって何にも変え難い貴重な財産となった。ここに深謝を表したい。また、対照研究と日本語教育研究の観点からの共同研究に参加する機会を頂戴し、授受補助動詞研究ばかり見ていた自分の視野を広げることができた。これから研究者としての道を歩むに当たり、研究者としての姿勢やインスピレーションについてのお話も伺い、人間としても成長することができたと思う。心より感謝申し上げます。

本論文を提出するに当たり、3名の先生に副査をお願いし、貴重なご指導をいただいた。

同大学人文社会系教授 矢澤真人先生には、有益なご指導と心温まる励ましをいただいた。特に、本研究で用いるアプローチの一つである発話機能の設定において、有益な示唆を頂戴いたした。さらに、中国、台湾、韓国など研究発表会の参加にご一緒させていただいた折、先生の研究者・教育者としての姿勢に感銘を受けた。今後も研究を続けようとするわたくしにとって貴重な機会であり、研究者としての心構えとなった。深謝申し上げます。

同大学人文社会系准教授 木戸光子先生には、御多忙の中、論文を何回も読んでいただき、アドバイスをいただいた。参考文献の紹介をはじめ、論文の書き方まで詳細かつ丁寧なご指導と常に温かいご声援をいただいた。特に、論文の記述において記号の使い方や接続詞の書き方のみならず、論理的な段落の構成と論文全体における論理構造の設定に至るまでご助言をいただいた。心より感謝申し上げます。

同大学人文社会系准教授 ブッシュネル ケード先生には、多くの御配慮とともにご指導とご助言をいただいた。特に、授業とゼミに参加させていただき、

英語文献の分析法や、会話データの収集法、会話分析のトレーニングであるデータ・セッションを学び、分析のスキルを身につけることができた。本論文の執筆にあたっては、用語の選択と概念の定義についてご指導をいただいた。深く御礼申し上げます。

また、本論文の構成を考える段階から、国際日本研究専攻の先生方に幅広い角度から様々なご助言をいただいた。ここに記して深謝の意を表する。

韓国での大学院在学時代からの恩師である高麗大学校文科大学教授 蔡盛植先生には、日本で研究を始めてからも様々な相談に乗っていただいた。心より感謝申し上げます。

創価大学文学部教授 山岡政紀先生、群馬大学国際センター准教授 牧原功先生、北京大学外国語学院副教授 李奇楠先生には、毎年開かれる「日本語コミュニケーション研究会」で常にご声援をいただき、前向きに研究を進めることができた。厚く御礼を申し上げます。

また、国立国語研究所所長 田窪行則先生には、2014年日本語学会春季大会で発表した折に、コメントを頂戴したほか、当時教授をなさっていた京都大学のコリアン・ラウンド・テーブル(旧称韓国語会話クラブ)にお招きいただき、研究に対するご指導とご助言をいただいた。深く御礼を申し上げます。

本論文の執筆・修正に当たり、折に触れて相談に乗ってくれた孫思琦さん、呉佩珣さんにも大変お世話になった。また、日本語添削でご協力いただいた君村千尋さん、片山奈緒美さんに心より御礼申し上げます。皆さんのご支援がなければ、この論文は完成させることができなかつたと思う。

大学院生活において、小野ゼミの皆さんにも大変お世話になった。多くの国から来日された素敵な皆さんとの出会いに恵まれたことをうれしく思っている。ゼミで様々な質問をして研究の視点に大いなる刺激を与えてくれた皆さんに大変助けられたと思う。伊藤秀明先生をはじめ、ゼミの先輩・同期・後輩の皆さんの今後のご活躍を心から祈念する。

また、韓国の大学院時代から研究生生活を応援していただいたメンターの梁美錫先生には、研究のことはもちろん、個人的なことまで相談に乗っていただき、大変お世話になった。深謝を表したい。それから、インターネット電話を通じ、韓国での勉強会にも参加させていただいたが、その折に孫東嬉さん、李殷和さん、金榮一さん、安河内明子さんにも研究についてご助言をいただいた。御礼

を申し上げる。

最後に、いつも励まし続けてくれた韓国にいる家族への感謝を述べたい。これまで私を温かく応援してくれた両親と義両親、私を明るく励ましてくれた夫朴榮載にも心から感謝の意を表する。韓国語で述べていることをご了承いただきたい。

하고 싶은 일을 마음껏 하도록 일본 유학을 허락해 주시고 지원해 주신 사랑하는 부모님과 존경하는 시부모님께 감사의 인사를 전하고자 합니다. 계절이 바뀔 때면 부모님의 사랑으로 짝 찬 우편물을 보내주셨는데 김치와 온갖 밀반찬, 그리고 좋아하는 간식까지 세세하게 챙겨주신 덕분에 잘 먹고 건강하게 지낼 수 있었습니다. 그리고 열심히 살라는 조언과 다 잘 될 것이라는 위안이 항상 큰 힘이 되었습니다.

유학 생활 중 가장 힘든 시기는 한국에 있는 가족이 건강하지 못할 때인데 특히 부모님께서 편찮으실 때였습니다. 실은 그럴 때마다 형제자매가 있어 든든했습니다. 사랑하는 내 동생 효주와 제부에게도 감사하며 재현, 재원, 고은이가 지금처럼 건강하게 잘 지냈으면 좋겠습니다. 그리고 나이 차이는 7 살이나 나지만 이제 친구같이 고민도 공유하는 사랑하는 내 동생 상환이에게도 감사하며 하루하루 행복하게 지내기를 바랍니다. 결혼하고 바로 일본에 오게 되어 함께 한 시간은 많지 않았지만 항상 응원해 주셨던 아주버님과 형님께도 감사의 마음을 전하고 싶습니다. 훌쩍 큰 경모와 소연이도 자주 얼굴 볼 수 있기를 희망하며 건강하게 성장하기를 바랍니다.

그리고 인고의 시간을 견디어 낼 수 있도록 옆에서 큰 힘이 되어 준 사랑하는 남편 박 영재 님에게도 감사의 마음을 전합니다. 학회 발표 준비와 논문 집필로 극도로 예민해진 시기에도 끼니를 잘 챙기고 수면을 잘 취할 수 있었던 것은 모두 남편 덕분이었습니다.

부족하지만 최선을 다한 이 논문을 사랑하는 우리 가족에게 바칩니다.

今後も大学院での経験を活かし、皆さんからいただいた御心配りを大切にし、これを新たな出発点として次の研究に取り組んでいきたいと思う。

2017年11月 つくばみらい市紫峰ヶ丘にて

朱 炫 姝

参 考 資 料

【参考資料1】形式シソーラスと定型表現（秀丸）の一覧

表1. 「～てあげる」系における形式シソーラス（thesaurus）一覧

| 「～てあげる」系 | | | |
|------------------|--------------------|-------------------------|---------|
| 基本形 | ～てやる | ～てあげる | ～てさしあげる |
| シソーラス (ひらがな) | ～てや [ら り る れ っ] | ～てあげ あげ[る よ] | ～てさしあげ |
| シソーラス (カタカナ) | ～テヤ [ラ リ ル レ ッ] | ～テアゲ ～テアゲ[ル ヨ] | ～テサシアゲ |
| シソーラス (漢字交じり) | ～て遣る | ～て上げる ～て挙げる ～て揚げる | ～て差し上げる |

表2. 「～てくれる」系における形式シソーラス（thesaurus）一覧

| 「～てくれる」系 | | |
|------------------|-----------------------|----------------------|
| 基本形 | ～てくれる | ～てくださる |
| シソーラス (ひらがな) | ～てくれ くれ[ら り る れ] | ～てくださ [ら り る れ っ] |
| シソーラス (カタカナ) | ～テクレ ～テクレ[ラ リ ル レ] | ～テクダサ [ラ リ ル レ ッ] |
| シソーラス (漢字交じり) | ～て呉れる | ～て下さる |

表 3. 「～てもらう」系における形式シソーラス (thesaurus) 一覧

| 「～てもらう」系 | | |
|------------------|-----------------------|------------------------|
| 基本形 | ～てもらう | ～ていただく |
| シソーラス (ひらがな) | ～てもら [わ い う え お っ] | ～ていただ [か き く け こ い] |
| シソーラス (カタカナ) | ～テモラ [ワ イ ウ エ オ ッ] | ～テイタダ [カ キ ク ケ コ イ] |
| シソーラス (漢字交じり) | ～て貰う | ～て頂く ～て戴く |

本研究では、以上のシソーラスを授受表現の形式とみてコーパス・データから抽出した。「～てくれろ」など一部の地域で見られる方言は研究の対象外とした。